

斬魔の妖精

ベジタブル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マグノリアの魔導士ギルド『妖精の尻尾』には火竜の他にもう一人、滅竜魔導士がいた。

目つきが悪く、無口で無表情。

しかし、誰よりも仲間を、家族を大切にする男だった。

使う魔法は「斬撃の滅竜魔法」

魔法すらも斬り刻むその姿からついた異名は斬魔の妖精、あるいは斬魔の死神。

そんな魔導士、トウヤ・グレイスが仲間たちと駆け抜ける物語。

▽

処女作ゆえ、駄文注意です。

また、無作法があるかもしれませんが。そんな場合は感想などで教えていただけると助かります。

タグについて

一人一殺展開の多い原作にオリ主をつっこむ都合上、結果的に活躍の場を奪ってしまうキャラがいる可能性がある、という事でアンチ・ヘイトをつけております。

原作既読推奨については、テンポをよくするため、はしよる部分はかなりあるからです。

また、オリ主を入れるに当たって、女の子とイチャつかせる事以外にも意味を持たせたく、できる限り味方サイドの生存率を上げようと考えました。という訳で原作死亡キャラ生存のタグも入っております。

す。

目次

プロローグ

1 話 「妖精の尻尾」 1

呪歌編

2 話 「最強チーム結成…？」 11

3 話 「斬魔」 20

幽鬼の支配者編

4 話 「最強の男」 34

5 話 「コツチの番だ」 47

6 話 「やるべき事」 59

7 話 「HOME」 73

8 話 「父」 84

間話①

9 話 「宴」 96

10 話 「流れ星一つ」 105

楽園の塔編

11 話 「アンラッキー」 116

12 話 「楽園の塔」 128

13 話 「楽園ゲーム」 141

14 話 「エーテリオン」 155

15 話 「鎧として」 170

16 話 「流れ星二つ」 186

間話②

17 話 「お風呂回です」 203

18 話 「穏やかな日々」 215

B o F 編

19話「祭りの始まり」

20話「魔人」

21話「弱さ」

22話「家族」

ニルヴァーナ編

23話「連合軍結成」

24話「恩人」

25話「起動」

26話「白銀の槍、黄金の剣」

27話「天空の巫女」

間話③

28話「宿命」

エドラス編

29話「異世界へ」

30話「リサーナ」

31話「5つ目の約束」

32話「エドラス戦記①」

33話「エドラス戦記②」

34話「魔法の時代が終わって」

天狼島編

35話「S級魔導士昇格試験……会議」

450

433

420

407

392

380

366

353

339

320

308

295

283

270

253

239

227

プロローグ

1話「妖精の尻尾」

▼三人称

ここはマグノリア。

イシユガル大陸西端に位置する永世中立国フィオーレ王国の東の端にある魔法も盛んな商業都市である。街の中心部にはフィオーレ王国三大教会の1つに数えられるカルディア大聖堂があるが、「この街の名物は？」と問われれば多くの人がこちらの名前を口にするだろう。

フェアリーテイル
『妖精の尻尾』

マグノリア唯一の魔導士ギルドである。

彼らの生き様は多くのマグノリア住民を魅了し、街の象徴としての有り様を確固たるものとしていた。

しかし、強すぎる光とは、時としてその眩しさ故に眉を顰めさせるものでもある。

「グレイ……密輸組織を検挙したまではないが、そのあとは街を全裸で徘徊、拳句の果てには干してあった下着を盗んで逃走」

建物2階の手すりの上に立った背丈の小さい老人が言う。それに対し、名指しされた黒髪の男は恥ずかしそうに「裸はまずいと思っただよ……」と的外れな弁解をしている。

「エルフマン！ 貴様は要人護衛のクエストを受けておきながら、その護衛対象に暴行」

「カナは経費と偽って大樽を15個も呑み干しおった。それも請求先は評議会」

「ロキ……評議員の娘に手を出し、他にもタレント事務所から損害賠償の要求がきておる」

元々小さかった老人の背丈は、まさに意気消沈といった様子で更に縮こまっていく。

「そしてナツ……」

ついには体の力が抜けきり、完全に下を向いてしまう。

「盗賊一家を壊滅させるも民家7軒も倒壊。チューリイの時計台にフリージアの教会、ルピナス城、ナズナ溪谷観測所、つい先ほどはハルジオンの港まで、どれもこれもブチ壊しおった」

アルザック、レビイ、リーダス、ウオーレン、ビスカ：と次々と名前を挙げていく老人に、呼ばれた面々はバツの悪そうな顔を晒している。

「貴様らア、ワシは評議員に怒られてばかりじゃぞ……苦情が入らんのなど、トウヤくらいのものじゃわい！」

小さな体には似つかわしくないような膨大な魔力が老人から渦巻き、それを見ていた金髪の少女は、今にも爆発するか、と身を強張らせる。

しかし、その魔力の発散は少女の想像より些か小規模な形で具現する事となった。

「だが」という言葉と共に、手に持った紙の束——おそらくギルド宛の苦情が山のように羅列されているモノ——を、老人が発火させたのである。

老人はその紙束を無造作に下階に投げ捨てる。その先にいた桜色の髪の青年は、あろうことか紙についた炎ごと喰らってしまった。

「評議員などクソくらえじゃ」と続けた老人が、自らの子どもたちへと、更に言葉を紡いでいく。

「理を超える力は、全て理の中から生まれる。魔法は奇跡の力なんかではない。我々の内にある気の流れと、自然界に流れる気の波長があわさり、はじめて具現化されるのじゃ。それは精神力と集中力を使う……いや、己が魂の全てを注ぎ込む事が魔法なのじゃ。上から覗いてる目ん玉を気にしてたら魔道は進めん。評議員のバカどもを恐れるな」

にやりと口許を歪めた老人——魔導士ギルド『妖精の尻尾』マスター、マカロフ・ドレアーは、その小さな両腕を大きく広げた。まるで、子どもたちを抱擁するかのよう。

「自分の信じた道を進めエい!! それが妖精の尻尾の魔導士じゃ!!」

その場にいた全員の歓声が轟く。
みな一様に笑っている。

その様子を見ていた金髪の少女——ルーシィ・ハートファイリアは、
とんでもないところに来てしまったと思いつつも、これから始まる己
の冒険譚を夢見て、これから家族なかもになる者たちと同じように笑みを浮
かべたのだった。

▼ルーシィ視点

「ここがいいのね?」

あたしの右手の甲を見て、カウンターの向こうから憧れのミラ
ジエーン・ストラウスさんが問いかけてくる。

ギルドに所属する魔導士は、その証として体のどこかにギルドの紋
章をかたどった魔法のスタンプを押しってもらうことになる。

もし『妖精の尻尾』に入れたら、紋章の位置は手の甲にするって早
い段階から決めてたんだ。決めてた、というより妄想してただけなん
だけどね。手の甲なら、文字を書くときも、ご飯を食べる時も、あた
しの魔法——星霊魔法の鍵を使う時だって目に入る。その度に憧れ
のギルドに入れたんだ、仲間の証あるんだって温かい気持ちになれる
と思ったから。

「見てみて、ナツ!ギルドのマーク入れてもらっちゃったあ!!」

あたしがその事を報告したのはナツ・ドラグニル。桜色の髪の青年
で、ハルジオンの港町では人身売買をする悪い魔導士から、結果的に
とはいえ助けてくれた。その上、この『妖精の尻尾』に入れるように
と、ここに連れてきてくれた大恩人でもある……

「おう、よかったなルーシィ」

んだけど、本人は食事に夢中で、あたしの事なんてどうでもいいみ
たい。名前、間違えられてるし。

「でも本当に不思議よね、炎が食べられるなんて」

ナツはとっても強い。あたしを悪の魔導士の手から助け出せるく
らいには。

その強さの理由でもある魔法、それが滅竜魔法だ。店売りの魔法じゃ絶対に出せないような破壊力を持つ強力な古代魔法らしいんだけど、それがもうメチャクチャなものだった。

強さは勿論だけど、それより何より火を食べられるというのだ。現に今も燃え盛るパスタにチキン、ドリンクなんかをガツガツと食らっている。

「あはは、私はもう見慣れちゃった。それに、滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーならウチにはもう一人いるしね」

「ええ!? あんな化け物がまだ他にもいるの!?!」

綺麗な白髪をかき上げたミラさんがサラリと出した言葉にあたしは驚愕を隠せなかった。

「ふふ、もう一人の食事はもつと凄いのよ。なんせ——ってあら、噂をすれば、ね」

「なんせ、何なんだろう……?」

そんな風に疑問に思っていると、あたしの隣の席に同年代くらいの男の子が座ってきた。

白を基調とした動きやすそうな服の上に大きな黒い羽織を纏っている。袖口が大きく、余った部分が下に垂れ下がっている。ああいう衣装の事を極東風って言うんだっかしたら。

髪はボサツとした灰色で、目つきは鋭く、表情も薄い。

顔の作りは悪くないのに、酷く不愛想なせいで格好よさより威圧感を先に覚えてしまう。その触れれば斬れそうな雰囲気は、衣装も相まって「劍豪」といった感じだ。

「ん……」

青年はミラさんの方を見ながら、わずかに声を漏らす。それだけなのにミラさんは「今日はいいいのが入ってるわよ」と、ドリンクの用意をしまった。

「えっ、まさかきつきのって注文なの!?!」

「!」

すると、青年はあたしの声に反応したように体をビクツと震わせ、こちらを一瞥する。

「ミラ……」

「ええ、この娘は新人さんなの、ルーシイっていうのよ」

さつきまでの話の流れからして、この人も『妖精の尻尾』の1人で、しかも滅竜魔導士なんだろう。よく見れば、うなじの部分に灰色の紋章が押されているし。

それにしてもミラさんはどうやって会話を成立させてるのかしら……

いけない！そんなことよりまずは挨拶しなくちゃ！

「初めまして、今日から妖精の尻尾フェアリーテイルに入ったルーシイ・ハートファイリアよ。よろしくね！」

「……トウヤ・グレイス。よろしく」

それだけ言うと、トウヤはまた視線を前に戻して、ミラさんの用意したドリンクをちびちびと呷り始める。

やっぱりこのギルドのメンバーはひと癖もふた癖もある面子ばかりみたい。こんなのであつし、この先やっていけるのかしら……

あたしが今後のことを少々不安に思っていると、こちらの方に羽根の生えたネコが飛んでくるのが見えた。ハッピーかとも思ったが、毛の色が異なっており、薄い桃色であり、白色のワンピースを着ている。ここ最近で2匹も見てるって事は、あたしが知らなかっただけで、2足歩行で喋るネコというのは思いのほか一般的なのかもしれない。いや、ないわね。

「こら、トウヤ！しっかり自己紹介してください！全く……」

「アルマ……」

ネコの癖に母親みたいな口ぶりでトウヤを叱った彼女——どうやらアルマというらしい——は、あたしの方を向いて「ごめんなさいね」と謝ってくる。

「この子、もの凄く口下手なんです。頭の中では色々と考えてるみたいなんです、それをうまく表現できないみたいで……それで、ルーシイさん、といましたか？」

「うん。でも、ルーシイでいいわよ」

「そうですね、ならルーシイ。私はアルマです。まあトウヤのお目付

け役というか、世話係みたいなものをしています」

「アルマったら凄いのよ、こんな小さいネコちゃんなのに家事がとつても得意なの」

「ミラには負けますよ。それに玉ねぎは調理できないし」

「なんだかともないネコちゃんね……」

「少なくともハッピーよりは頼りになりそう。」

「ん」

「あら、ありがとうございます。あんまり褒めても何も出ませんよ？」

「あ、この子もトウヤの言いたい事が分かるんだ……」

「そんな事より、ルーシィ。トウヤの事なんですけど、私かミラを挟めば会話できるから、そんなに不安にならないでくださいね。あと最近はカナも分かるようになってきたかしら」

「あら、レビィもなんとなく分かってきてるのよ？」

「分かったわ、アルマかミラか、カナ、レビィに通訳を頼めばいいのね」
同じ言葉を話してるのに通訳が必要ってどうなのかしら、とかツツコんじやダメなのかしら。

「それでその、トウヤはこんな感じだけど、ホントは優しい子なんですよ？誤解しないであげてくださいね？まあ、本来なら、誤解されずにすむようにトウヤの口下手を矯正するのが一番なんですけど……」

無理だったのね。

「そうだルーシィ、さっきマスターがウチに来た苦情を読み上げてたでしょう？その時に『苦情がなかったのはトウヤくらいだ』——って言うってたじゃない？」

「ミラさんの補足に『そういえば』と納得する。」

「だから、って言うると他のメンバーが危ないみたいになっちゃうけど、トウヤは寧ろウチの中では一番大人しい方なの」

「同じ滅竜魔導士でもナツとはえらい違いなのね……」

「だから怖がらないで——って普段なら言うんですが、その様子なら問題なさそうですね」

「少し不思議そうな顔で言うてくるアルマだが、不思議なのはこちらも一緒だ。」

「え？なんで怖がるの？確かに、何を言いたいのかはあたしには全然
分かんないし、顔も無表情だけど」

でもそれだけじゃない。

「ナツやミラさん、アルマや他の皆と同じ『目』をしてるもの。仲間
を大切にする、そんな人の『目』。だから怖くなんかないわ
！」

その言葉を聞いたミラさんとアルマは目を合わせて「ふふっ」と
笑った。

自分が話題の中心の癖に会話に入ってこなかった当の本人はあた
しの方を向いて、目を見開いている。

「あー今のはあたしでも分かった、驚いてるんでしょ！」

心なしか「してやられた」という表情に見えなくもないトウヤを
放って、あたしたち3人の笑い声が辺りに響くのだった。

▼トウヤ視点

「あー今のはあたしでも分かった、驚いてるんでしょ！」

あー、ルーシィちゃんは天使かな???

新入りに挨拶する度に最初は怖がられちゃうし、何なら今でも若干
ビビってる人もいる中でこの天使加減ですよ。さつき街ですれ違っ
た子どもに泣かれてできた心の傷が癒えていくんじゃないやあ。

「改めて、これからよろしくね」なんて言って握手まで求めてきてくれ
るし……

性格もいい子で、見た目もめちゃんこ可愛い上に、ハートファイリ
アってあれだろ？財閥だろ？流石に本家のお嬢様が魔導士ギルドに
は来ないだろうけど、親戚筋でも良家のお嬢には間違いないもん
なあ。とんでもない新人が来たもんだ。

心配なのはナツが連れてきたって事だよなあ。

いや、ナツは強いし、いい奴なのも間違いないんだが、ちよつと、
ちよつとだけおバカさんだからな……巻き込まれて大変な目に遭う
んだろうな、と思うと今から可哀想である。

「ふふ、よかったわね、トウヤ」

そう言つてミラが微笑みかけてくる。よく見ればアルマもニヤニヤしている。

全く、まつつつたくこのオカンコンビは……

世話焼きにも程があるだろうに。だがまあこの2人がいないとちやんとした生活は送れねえもんな。感謝しねえと。

今回の事も純粹に俺とルーシィの関係を心配しての事だったんだろうし、少しの恥ずかしさには目を瞑っておこう。

「まあ、うん」

と、玉虫色の返答をしていると依頼板（リクエストボード）の方で轟音が響いた。

どうやらナツがボードを壊して出ていったようだ。

ただキレたにしてはすげエ顔してたけど、何があったんだろうか。

「アイツ…マカオを助けに行く気だぜ」「これだからガキはよお……」

といった声が聞こえてくる。

マカオがどうかしたんだろうか。

そう言われて嗅覚に集中してみると、ギルドの外にマカオの息子であるロメオの匂いがある。それも泣きべそかいてる奴特有の匂いだ。

事情を探りにいったアルマが帰ってくる。

「どうやら、ハコベ山まで魔物退治に出たマカオが1週間帰ってきてないらしいです」

なるほど、そりゃあ心配だな。

それにしても、父親が子どもを置いて帰ってこない……か。

まあナツがああなっちゃうのも無理はねえな。

「ど、どうしちゃったの、アイツ…急に……」

「ナツもロメオくんと同じだからね……自分とだぶっちゃったのかもね」

ミラの顔が沈んでいく。

きつとミラも自分の『傷』に思いを巡らせているのだろう。

こちらをチラッと見てくるので、頷き返す。

ルーシィなら話しても構わないだろう。

「ナツのお父さん…トウヤのお父さんもそうだけど、出ていったきりまだ帰ってきてないのよ。て言っても育ての親なんだけどね」

「それもドラゴンだそうですね」

アルマの言葉にルーシイは椅子から転げ落ちてしまう。

そりや、ドラゴンに育てられたなんて聞いたらビックリするわな。

「小さい時…森で拾われた。…言葉、文化、そして魔法…色んな事を教えてもらった」

俺は右手を開いて視線を注ぐ。

そう、この滅竜魔法は父さん——セルバルドから授かった絆の証なのだ。

「でも、ある日そのドラゴンたちは突然姿を消したの」

「そつか…ナツがハルジオンで探してた火竜サラマンダーってそういう事か」

父さん…どこ行っちゃったんだよ、ホントに。

そんな俺を横目で見ながら、ミラは神妙に「私たちは…」と言葉を続ける。

その様子は酷く儂いものに見えてしまった。

妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士たちはみんな何かを抱えてるの…傷や、痛みや、悲しみ…私だって」

ミラ……

まだあの事を…いや、そりやそうだよな。当事者じゃなかった、いや当事者になれなかった俺ですら、完全に吹っ切れたとは言えないんだ。ミラやエルフマンが平気な訳ない。

4人して黙り込んでしまう。

新入りのルーシイですら「何かを抱えている」という言葉に心当たりがあったようだ。

しかし、その沈黙も長くは続かなかった。

「…よし、あたしも行ってくるー！」

辛気臭い雰囲気蹴散らすように気合を入れたルーシイが立ち上がり、ギルドを出ていき、ナツを追いかけて行ってしまふ。

ミラやアルマは呆氣にとられたと思うと少し笑って「案外いいコンビなのかもね、あの二人」などと言っている。

一頻り笑った後、アルマは俺の方に視線を向け、「それで？」と聞いてくる。

「トウヤは行かないの？心配なんでしょ？」

アルマの言葉を引き継いでミラもこちらに問いかけてくる。

そりゃ心配さ。

心配だが……

「ナツが行った」

だから大丈夫さ。

——数日後、いつも通りの『妖精の尻尾』に、ロメオの笑い声が響いていた。

呪歌編

2話「最強チーム結成…？」

▼トウヤ視点

「今日はここまで」

俺は現在、自宅の近くの山にて普段からしている修行を行っていた。

しかし、完全に普段通りという訳でもない。今日の鍛錬はカナ・アルベローナと2人で行っているのである。

2年ほど前、カナとはとある『約束』を交わしており、そこからお互いの時間が合えば俺がカナの戦闘訓練を見てやる、という関係になったのである。

「ハア…ハア…：まだまだあんたには敵わないねえ」

そう言うのと、カナは癖のある茶髪をガシガシとかき上げる。

「いや…」

「伸びてきてるって？…：そういつてくれるなら嬉しいけどね」

カナの魔法は所持系ホルダーで、特殊なカードを使って戦うものだ。的確な判断の元にそれらを扱う事が肝要になるため、俺が相手役となって兎に角ひたすら戦闘訓練を行い、経験値を増やしているところなのである。出力上昇も重要だが、正直に言ってしまうえば滅竜魔法のノウハウが他の魔法に応用できるとも思えないので、そちらに関しては本人の努力に丸投げしている。不甲斐ない師匠ですまない…

そして、その戦闘訓練は着実に実を結んでいると言えた。

「この調子なら…」

今年のS級昇格試験に合格するかもしれない。

「ああ、そうだね。今年こそは…！」

「ん」

「じゃあその為にも、次の修行に備えて、まずは酒を呑んでリフレッシュしないかねえ！」

…：…なんだか不安になってきた。

△ △ △ △ △

「今日こそ一緒に呑んでもらうからね」「やだ」「何でさ!？」などと会話をしながらギルドの前まで向かうと、何やら妙に騒がしい事に気が付いた。

そういえば今はマスターじいちゃんがクローバーで行われる定例会で不在のハズだが、それに関係しての事だろうか。

『妖精の尻尾』は基本的にどこまでも自由なギルドだが、マスターともなるとそうは言っていられないらしく、近隣の魔導士ギルドのマスターが多く集まる定例会なるものに出席しなくてはならないそうだ。魔導士ギルドでありながら法を無視して悪事を働く闇ギルドへの対策、そして正規ギルドの連携の為に必要なことらしい。

闇ギルドの奴らは本当におっかないのである。成り行きとはいえ、少なくとも数をつぶしてきた俺としては、ギルド建物内部で行われていた民間人への凄惨な仕打ちや、怪しげな実験などを思い出して身が震える思いである。ついでに、いつか報復されるのではないか、という意味でも戦々恐々としてしまう。

とはいえ、今回のこととそれらは関係なさそうだ。

覚えのある女性の匂いがギルドの中からしたのである。

「なんだいこりゃ?」

「ん……帰ってきてる」

「誰が?」

「エルザ」

「いい!？」

カナは心底ビビったというような声を上げるが、それが良くなかったのだろう。エルザがその声に反応してギルド入り口へ振り向いてしまう。

「カナ、今来たのか……まったく相変わらずの格好だな」

と早速お小言をこぼすエルザ。久しぶりに帰ってきてきて第一声がそれか、という思いはあるものの、言っていることについては全面的に

同意である。

何を隠そう、このカナという女、ローライズで7分丈のパンツを履いた下半身は兎も角、上半身はビキニのようなブラジャーのような、そんな布1枚なのである。

へそ出しどころか、ほぼ全出しなのである。

それも、めちやくちやスケベな身体をしているのである。

正直、目のやり場に困るのである。

戦闘訓練中も集中しきれない時があるのである。

もしそういった作戦であるならば、なかなかの策士なのである。

「おかえり」

「ああ、トウヤか。ただいま。今はギルドにいる時期なのだ。お眼鏡に叶う依頼が無かったのか？ つかお前がクエストを選ぶ時の規準を解き明かしたいものだが……」

あつ、いやそれは……

ぶつちやけ、目についた範囲の中で一番依頼料の高いものを選んでるだけです……

俺は基本的に面倒くさがりであり、そんなに多くの仕事をこなしたくないのである。その結果、一発大きな仕事をして大金を稼ぎ、貯金が尽きたらまた大きい仕事に行く、という生活サイクルが生み出された。しかし、貯金が減ってきた、という事情が分かるのは俺とアルマだけであり、あくまで「目についた範囲」から選んでいるだけなので他にも高額依頼があったりする上、受けた依頼の難易度がたまたまやたら高かったりするために、殆どのギルドメンバーにとある誤解をされているのである。

曰く、「トウヤの受けるクエストは、アイツの中の高い基準をクリアした質の高い依頼である」「そのような依頼ばかりをこなしたために実力が付き、S級に至ったのである」。

とんでもないデマだ。

結果的に難しい依頼ばかり解決することになったのは、単に俺の運が悪かっただけなのである。一見簡単に見えるクエストも、俺が行った途端に異常な難度になり替わるのだ。「何らかの魔物が街を荒らし

ているので調査・退治してください」という依頼を受けたハズなのに、
実際街に行つて頼まれたのは「街を牛耳る闇ギルド一つを壊滅させて
くれ」という事だった、などというのはザラである。こんな事故の予
兆が自分の中の規準で分かるというなら教えて欲しかったというも
のである。分かるかつ！

更に言えば、S級魔導士になれたのはマグノリアにいる間に積んだ
修行の成果である。それまでのクエスト中の様々な経験が自分の糧
になっていない、と言えばウソになるが、S級試験に受かったのは、そ
のような不運を実力で跳ね除けられるだけの実力を修行で身に着け
たからだと言えよう。

「そんなことより、トウヤからもカナに言ってやってくれ。この格好
はないだろう」

「分かってないねえ、エルザも。トウヤだって男なんだから喜んで
……」

「痴女」

「トウヤ!?!」

▼ルーシイ視点

トウヤでもあんな事言うんだ……

短くまとめられちゃった分、余計ダメージ大きそうかも……

トウヤの返答に満足そうにしているエルザさんは、マスターへのお
土産と言って持ってきた巨大な怪物の角から手を放し、腰に手をやる
と「トウヤがいるなら丁度良い」と前置いた上でナツ、グレイ、トウ
ヤを名指しし

「仕事先で少々厄介な話を耳にしましてな。マスターがいるなら
相談するのだが、早期解決が望ましいだろうとこちらで判断する事に
した……3人の力を貸して欲しい、ついてきてくれるな?」

そう口にした。

すると、ギルドの面々に緊張が走る。

「どういう事だ!?!あのエルザが誰かを誘うなんて……」

「一体なにが起きたって言うんだよ!」

などと口々に騒ぐ周囲とは対照的に、ミラさんは小さく震えていた。

「エルザとナツとグレイ…それにトウヤ…：今まで想像したこともなかったけど、これって妖精の尻尾最強のチームかも」

「ええ!? ホントですか!」

「うん…：ナツの強さは知ってるでしょ? グレイも同じくらいの使い手だし、トウヤとエルザなんてS級なのよ」

S級?

何度か耳にした単語だけど何のことなのかしら。

「ルーシィ、S級魔導士というのは、S級クエストを受けられるメンバ―の事を言うんですよ。年に1度行われる厳しいS級昇格試験と呼ばれる試験に合格した者のみが名乗れる称号です」

あたしにそう教えてくれたのはアルマだ。心なしか憂いに満ちた顔をしているように見える。

「その分S級のクエストは他の仕事と比べ物にならないくらい危険なの。だから、資格をもってるのはエルザとトウヤを含めてギルドに6人だけなのよ」

「逆に言えばそんな2人が出張らなければならない問題が発生したという事でもあります…：」

そっか…：そういう見方もできるわよね…：

ひいい、あのナツより強い人が2人も必要になる事態ってどんな恐ろしい状況なのかしら。

「大丈夫よアルマ、あの4人が負ける訳ないもの。それに…：そうだ! ルーシィも付いて行ったらどうかしら!」

「なんで!?!」

「ほら、ナツとトウヤは乗り物苦手だし、そのフォローが必要じゃない? それにルーシィもギルドでトップクラスの実力を持つ4人の仕事を見ることが出来るわよ?」

そのフォロー必要かしら…? :

というかトウヤも乗り物酔いが酷いのね。滅竜魔導士特有の問題

ドラゴンスレイヤー

なのかしら。

「確かに、名案かもしれませんが…グレイとナツはその、なんというか仲が悪いですし、そのフォローもお願いしましょう」

ええ…ホントに行くのお……？

▼トウヤ視点

一旦『妖精の尻尾』の女子寮であるフェアリーヒルズの自室に戻り出発の支度を整えるというエルザに付いていき、荷物を持つ手伝いをすることにした。

理由としては2つある。

まずエルザの荷物は異常に多いという事を知っていたからだ。エルザの膂力なら問題はないだろうが、早ければ早いほど良い状況であるのでエルザも承諾してくれた。勿論フェアリーヒルズには入っていないが。

そして、早いうちに今回の事情を聞いておきたかったからだ。二度手間になるかとは思ったが、エルザに指定された集合場所がマグノリア駅である事を考えると、グレイ達と一緒に聞くわけにはいかなかったのである。俺たち滅竜魔導士には極端に乗り物酔いに弱いという弱点がある（といっても今のところ実例が俺とナツしかないので確度は高くないが）。エルザが移動の間に説明する腹積もりなら、俺はその話を聞いていられないのである。

そんな訳で他の四人——ナツ、グレイ、ハッピー、ルーシー——に先んじてアルマと聞いた話によると、死神エリゴールを擁する暗殺系闇ギルドである『鉄の森』アイゼンウッドが「ララバイ」と呼ばれる強力な魔道具を用いて何らかの事件を引き起こすつもりであるらしい、とのことだ。

「それは確かに……大ごとですね」

「このまま私たちが鉄の森に乗り込むつもりだ。頼りにしているぞ、2人とも」

「ああ」

「はいー」

ちなみに、その後には4人と合流した時、どうやらルーシイとエルザが初対面だったようで挨拶をしていた。

していたのだが、エルザの聞いていた噂によると、ルーシイは「傭兵ゴリラを19頭なぎ倒した」らしい。

「こわ……」

「違うから!!!」

▼ルーシイ視点

マグノリア駅から列車に乗ったあたしたち5人+2匹だったが、乗り物酔いでグロッキーになっていたナツとトウヤに気を遣った(?)エルザが早々に2人を気絶させてしまい、3人+2匹+2体の屍というパーティーでの行程になってしまった。

初めて一緒に仕事をするという事で、エルザ、グレイと自分の魔法を紹介しあう事になったのだが、結局気絶しているトウヤの魔法がどんなものかは分からず仕舞いであつたのが残念である。

しかし、本当に問題だったのは、オニバス駅へ降りてすぐに未だグロッキーのトウヤが指摘した事の方だった。

「ナツは……? オエツ」

「あ!!」

気絶させたはいいが、ナツを列車に置き去りにしてしまったのである。トウヤの方はアルマが翼^{エーラ}を出して運んでいたのだが……

「何という事だ!?! これは私の落ち度だ……とりあえず私を殴ってくれ!!」

「んな事しても仕方ねえだろ! ひとまず列車を追うぞ、エルザ。ったく、手の焼ける野郎だな、あいつは」

グレイの発言の納得したエルザは「列車を止めて魔動四輪車を借りて追うぞ!」と方針を決めてしまった。

えっ、列車止めるの!?

△ △ △ △ △ △

緊急停止信号を受けて一旦停止したナツを乗せた列車を追って、あたしたちの魔動四輪が駆けていく。

有言実行とはいえ、列車を止めるのはやりすぎだと思っただけだなあ……

ちなみに、車に乗り換えた後もトウヤは車酔いでボロボロになっていた。今のところこんな部分しか見てないんだけど、ホントに凄い魔導士なのかしら。

「クソツ、また列車が動きだしちまったぞ！」

間に合わなかったかと悲嘆に暮れかける一同だったが、ガシヤンという列車の窓が割れる音と共に現れる影があった。ナツが飛び出してきたのである。

「ナツ！すまなかった、私がお前を忘れていったばかりに……」

「エルザ！そんな事よりあの列車追うぞ！」

「何？」

「あの列車でアイゼン……バルドとかいうギルドの奴と会った！トウヤが言ってた今回ぶっ飛ばしに行くってギルドの奴だろ!!」

「何だ?!?でかしたナツ!!今すぐ追うぞ、早く乗れ!!」

「えっ」

△ △ △ △ △ △

「うつぶ……目的は何も言っただけ……オエツ……けど、なんか髑髏のついた気持ちわりい笛持ってた……うっ」

再び乗り物に乗せられ絶望的な表情をしつつも証言したナツの言葉だった。

でも、それって……

子守歌^{ララバイ}……眠り……死……呪歌……

あんなの作り話よね……でも、もし本当なら大変なことになる!

あたしの体は最悪の想像によりガタガタと震えてしまっている。

「もしかしたら……その笛がララバイ、集団呪殺魔法^{ララバイ}、呪歌かもしれない

……!!」

集団呪殺という物騒な言葉に全員が顔を顰める中、トウヤが口を開く。

「俺も読んだ…オエツ…黒魔導士ゼレフの禁断の魔法…聞いた全員が死ぬ」

きつとあたしの読んだものと同じ本を読んだのだろう。禁忌、禁断という言葉が付きまとう忌まわしい魔法として紹介されていた。実際、聞いただけで人が死ぬだなんてふざけた魔法、あつていいはずがないわ!

大体、『鉄の森』とやらは、なんの目的があつてそんな物を持ち出すつていうのよ。

「なんだとっ!?!」

「本当にソレならマズい……」

極度の車酔いによつて元々悪かったトウヤの顔色が余計に蒼くなつていく。

「どういう事だトウヤ!」

そこでアルマも何か恐ろしい事に気づいたように顔を歪める。いや、実際にとんでもない事に気づいてしまったのだろう。怒りと恐怖で顔色が悪くなつていつているのが分かる。

「あの列車の行先にはオシバナ駅があります…あの駅は街の真ん中にありますし、何より」

そこまで言うと言とグレイも気づいたようで、焦りが伝染していく。

「大規模な放送施設がある!!奴ら呪歌^{ララバイ}を街中に放送するつもりか!?!」

3話「斬魔」

▼三人称視点

闇ギルド『鉄の森』アイゼンヴァルトの目的は放送機器で集団呪殺魔法・呪歌フラバイを流し、市民を無差別に虐殺することだと判明した。

義憤に駆られる一同は、『鉄の森』のメンバーであるカゲヤマ、そして彼が持つ呪歌を追って線路沿いを爆走していた。爆走とは言うっても、その実負担がかかっているのは、魔動四輪に限界以上の魔力を注ぎ込み異常な速度を生み出しているエルザのみであった。その甲斐あつてか、一行がオシバナ駅に到着したのは『鉄の森』が駅を占拠した直後のことであつた。しかし、そのための消耗は確実にエルザを蝕んでいた。

「ハア…ハア…何とか間に合つたか。まずは避難指示、それから……くっ」

想像以上の魔力消費に思わず膝をついてしまうエルザ。それを見たルーシイが心配そうに声を掛ける。

「エルザ、魔力を使いすぎよ！一旦休憩を……」
「そんな訳には……！」

悔しそうな表情を浮かべ、尚も食い下がろうとするエルザ。その顔にはもっと力があれば、といった感情がありありと滲んでいる。しかし、このスピードでオシバナ駅までたどり着けたのはエルザの類い稀な魔力量があつてこそである。その点だけなら、トウヤも負けていないだろうが、彼は乗り物の中では十全に力を発揮できない体質であるため、やはりエルザでなければこなせなかつた仕事であつたことに間違いはなかつた。

「そうだぜ、エルザ。ここまですげえスピードで連れてきてもらったんだ。ここからはオレたちに任せてくれ」

「エルザ」

「ええ、そうですね、トウヤ。エルザはここで駅員と市民の皆さんの避難誘導をして下さい。その間に魔力を回復し、余裕ができてから駅に突入して下さい。それも重要な仕事ですから」

そして、その事を見落とす仲間たちではなかった。焦燥感に駆られていたエルザの顔に納得の色が差し、観念した、といった様子で一度息を吐いた。

「…そうだな。外は任せてくれ。すぐに駆け付けるから、それまで頼むぞー!」

「おう!燃えてきたぞ!!」

△ △ △ △ △ △

「チツ、もうきやがったのか妖精どもがよオ!」

ホームに入るとすぐにこちらを睨んでくる集団を発見する。どいつもこいつもごろつき然とした大した事のなさそうな連中だったが、問題はその数であった。『妖精の尻尾』^{フェアリーテイル}が4人と2匹しかいないのに対し、『鉄の森』構成員は100近い人数を集めていた。

「てめえら、街の奴ら全員殺してどうするつもりだ!?!」

グレイの質問に答えるのは大鎌を持った銀髪上裸の偉丈夫。プカプカと宙に浮かびあがりながら、狂相を愉快気に歪めて口を開く。

「そんなとこまでバレてんのか…ったく、情報漏らしたのはどいつだア?...まあいい、それで、目的だったか?んなモン決まってるだろうがよ!」

そこまで言うのと更に愉しそうにニヤつき、宙に浮遊している体を上下逆さまにする。

「粛清だ」

再びタメを作りながら、トウヤ達を一人ひとり見まわし、更に嘲笑^えみを深める偉丈夫。

「権利を奪われた者の存在を知らずにいながら、権利を掲げて守られている愚か者共の罪をこの死神が裁いてやるのだ」

「死神…エリゴール……!」

「そんな事したって権利は戻ってこないのよ!?ただの八つ当たりじゃないっ!!」

トウヤは狂氣的に言葉を紡ぐ男の正体に気づき、ギリツと奥歯を噛

み締めた。ルーシイも正論をぶつけるが、それでも狂人の演説は終わらない。

「『権利』はそうかもなア…だがオレたちが欲するのは、もはや与えられた『権利』なんかではない。我々が手に入れんとしているのは『権力』だ！オレはこの呪歌ララバイで死を操り、全てを支配する『権力』を手にする!!」

「クソツ、ざっけんじゃねえぞ！そんな事させてたまるかよ！」

「やれるモンならやってみな…野郎ども！この妖精ハエどもに飛んじやいけねえ森があるつて事を教えてやれエ!!」

そこまで言ったエリゴールは中空の体を横向きに射出し、駅の窓を破りながら飛び出していく。「逃がすか！」と追いかける体勢に入ったナツを止めたのはアルマであった。

「待つてくださいナツ！」

「なんでだよアルマア！オレはあいつを追うぞ！」

「……アルマ」

「ええ、分かっています。ナツとハッピー、ルーシイはここに残ってください。私とトウヤ、グレイ、でエリゴールを追います。ナツはこの連中に対処、ルーシイとハッピーはナツをサポートしつつ、エルザが来たら状況を伝えてあげてください」

「わ、分かったわ…それはいいけど、よくあの一言でここまで伝わるわよね」

「ナツ、因縁はいいのか……？」

その一言にナツはハツとした顔になり、「そーだった、そーだった」と両手を打ち合わせて気合十分である。列車で出会ったカゲヤマという男に因縁がある事を思い出したのだ。普段ならひっくり返せないような力量差があるのだが、運転中の列車内という限定的な状況のせいでナツはカゲヤマにボコボコに殴られていたのである。

「妖精の尻尾…行くぞ」

「」「おう!!」「」

▼トウヤ視点

おかしい。

違和感のきつかけはエリゴールが外に逃げていったことだったが、それは拡声装置のある部屋に入った瞬間に爆発した。

誰もいなかったのである。

呪歌を街中に放送したいならこの部屋は何があっても抑えておかなければならない場所であるはずだ。

なのに誰もいない……いや

「別の目的……？」

訂正がある。

誰もいないのではなく、正しくは天井裏にたった一人張り付いて奇襲を狙っているだけ、であった。

眩いた瞬間、その男は硬質なテープのような武器をこちらに放ってくる。

俺が難なくそれを回避すると襲撃者は自分を天井に釣り上げていたテープを緩め降りてくる。

にやりと口を歪め、余裕綽々といった態度でこちらに話しかけてくる……

「オマエ……勘がよすぎrピギヤア?!?!」

ので、右手をかざし軽く振るう。すると男の体にはひとりでに裂傷が走っていく。

雑魚の処理に構わず思考を続ける。

この街が目的ではない……外に逃げた……

つまり、この先のどこかに何らかの目的があるという事。

「なんだこの魔法、武器も持ってねえのになぜ切り傷が!?!…いやこれはまさか、てめえ、ぎ、斬魔!?!」

「喧しい」

考え事をしている最中にピーピーと煩いので、片手間に右手を振るい斬り捨てる。

「アルマ……この先は？」

「たしか、クローバーの駅があるだけのはずですが」

クローバー…最近どこかで聞いた気がする地名だ。なんだ、どこで…
思い悩んでいると、アルマが何かに気づいたようで、勢いよく顔を上げる。

「定例会！マスター達の定例会の会場がクローバーだったはずですよ！！」

「それだ!!」
マスターが危ない…!!

▼ルーシー視点

トウヤ——実際に言ったのはアルマだったけど——にはサポートを頼まれたけど、結局あたしとハッピーが手を出す必要はなかった。いつも通りナツが大暴れして『鉄の森』を蹴散らしていくのを眺めているだけで済みそうだ。轟という爆音が響く度に敵の数が減っていくのを見ると、だんだん爽快感が湧いてくる気がする。

そんな風にしてナツが殆どの敵を倒してしまった頃、エルザが慌てた様子でホームに入ってきた。

「今どういう状況だ!？」

「え、えつと…グレイとトウヤが逃げていったエリゴールを追いかけて行って、残りの3人でここの敵を片付けてたところよ」

エルザのあまりの形相に思わずどもって答えてしまう。

「逃げたって、駅の中をか？それとも外へか!？」

「え、ええ…急にどうしたの？確か窓を割って外に出ていったと思うけど」

「クソ、やられた!!今すぐグレイとトウヤを探すぞ!」

一体どうしたというのだろうか、と疑問に思っているところに、明らかに不機嫌な様子のグレイが現れる。

「その必要はねえよ、オレはここだ、エルザ…オレもおかしいと思っただんでな、倒した奴らの一人を殴って吐かせたが…奴らの目的はじーさん達だそうだ」

え!? どういうこと!?

なんでいきなりここでマスター達が出てくる訳?

「あいつら、自分たちが闇ギルドに認定されたのをマスター達のせいだと思ひ込んでるんだよ!」

ハツピーの言葉が本当なら、ただの子どもの癩癩じゃない!

自分たちが法を破って活動していた自業自得なのに、そんなくだけない八つ当たりで呪歌なんて物騒なモノを持ち出して…!

なんて奴らなの…許せない!

「ふざけやがって! じつちゃんはやらせねえぞ!!」

そういつてナツがホームから外に向かって走って行く。

「ま、待てナツ! ……まったく、人の話を聞かん奴だ。ひとまずはトウヤを探すぞ。外は魔風壁という強力な風の結界が張られている。先ほど試したが、私でも破れなかった」

そんな…エルザでも破れないなんて、どうしようもないじゃない!

でも、確かにひとまず全員合流して魔風壁を何とかする方法を考えるべきかもしれないわね。

「なるほどな…それでトウヤか。まあアイツがいればそんな結界くらい何とかなるだろう」

んん? トウヤさえいれば何とかなるみたいなこと言ってるけど、エルザにどうにもできないものを簡単に破れる、なんて事ないわよね…?

「というかアイツは今何をしているのだ。去年なつたばかりとはいえ、ヤツもS級の魔導士だ。こんな事態に気づけない男ではないはずだが……ってまさか!」

「二人で先に行っちゃったのか!?!」

2人の驚愕の音がホームにこだまする。しかし、その直後、それより大きい叫び声が遠くから聞こえてきた。

「あのヤロー!!」

叫び声はナツの不満が爆発した結果のようで、それを耳にしたエルザとグレイが目を見合わせ「行くぞ」と駆け出してしまふ。置いてい

かれる訳にもいかなないので翼^{エーラ}を出したハッピーと並走して2人を追いかける。

そうしてホームを抜け、駅の外にたどり着いたあたしを出迎えたのは、どこまでも現実味のない光景だった。

風、風、風。

まさしく風の壁と言えるような、分厚い暴風が渦まいている。進もうとする何人をも弾き、切り刻まんとする風を見れば、エルザにだってどうしようもなかったという事が一目で分かってしまった。

しかし、いや、だからこそ、あたしが最も驚いた光景はその壁とは違う部分であった。

魔風壁に孔が——鋭く砥がれた剣によって刻まれた、斬撃のような孔が空いていたのである。

絶え間なく流れる狂風も、その斬撃痕だけは——まるで畏れるように——避けていく。そんじよそこらの魔法では決して再現できない異様さであった。

よく見れば、その孔の下あたりの床面には、これまた剣でつけられたような痕で文字が綴られており、その近くでナツが地団太を踏んでいる。

斬撃の文字はあたしたちにこう告げていた。

『先に行く』

あまりにも非現実的な光景を見てしまったせいから、一連の流れであたしが得た感想は「トウヤ、文字でも無口なんだ……」であった。

△ △ △ △ △ △

「そういえば、トウヤの魔法について話しそびれていたな……」

休憩している間に大分回復したから、と再び魔動四輪の運転役に名乗り出たエルザが、トウヤとエリゴールに追いつくために爆走しながら話しかけてくる。

車内に残っているのはあたし、エルザ、グレイの3人だけ。ナツは車にもう乗りたくないのと、こっちの方が速いから、という理由で

ハッピーに運んでもらう事にしたようで、あたし達より前を進んでいる。

「あの風の壁に孔があいてたのってトウヤの仕業なんですよ？一体どんな魔法なのよ……ミラさんから滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーだって事は聞いてるけど」

滅竜魔法でどうやったらあんなマネができるのか。

ナツの魔法も十分凄いものだが、どう考えてもあんな事ができるとは思えない。

「滅竜魔導士にはバリエーションがある、らしい。ナツなら火のドラゴンスレイヤー滅竜魔導士といった具合にな」

「トウヤの場合は斬撃、なんだとよ」

「斬撃!? って事は剣とか槍とか食べちゃうの!?!」

火を食べるのもやはりおかしいが、見た目にショッキングなのは金属をバリバリといくところかもしれない。

「そうなるな。厳密には金属限定ではなく、触れた結果切り傷が付くようなものなら何でも食べられるらしいぞ。不味いとは言っていたが、紙も食べられるらしい」

「紙!? あ、ああ……確かにいい紙のハジで指切ったりするもんね……」

「オレはアイツに氷で作った剣をよくねだられるぜ? エルザも刃こぼれした魔法剣引き取ってもらってるんじゃないやなかつたか?」

「数打ちのものだけだがな。まあ、業物を渡そうとすると遠慮されるからなんだが……そういうところが可愛らしいのだ」

フフと笑うエルザに、そうか? といった疑問顔のグレイ。

よ、よく分からない遠慮し所と萌えポイントよね…

それにしても斬撃で、魔風壁を破った、となると、まさかとは思うけど。

「魔法を斬った……?」

「ああ、さっきの魔風壁の事だな? そうだ、トウヤは魔法や魔力を斬ることで打ち消したり無効化する事ができる。他にも封印や結界の解呪も可能だ」

「それで付いた異名が『斬魔』だったか? ……大仰とは言えないのが恐

ろしい所だが」

斬魔……

魔導師の天敵よね。というか、あたしなんて相性最悪なんじゃないかしら。斬られた瞬間に星霊が強制送還とかないわよね……？

「だが、今回感嘆すべきはエリゴールの魔風壁の方だろうな。トウヤが斬った魔法は普通跡形も残らず霧散するのだ。しかし、今回は孔があいただけだった。相当な魔力の練り込まれた結界だったのだろう」
もう想像もつかない次元の話ではあるけれど、でもそれが本当なら今頃苦戦してるって事にならないかしら？

『斬魔』などと呼ばれるようなトウヤにも斬りきれない魔法の使い手なんて、どんな強さだていうのよ！

あたしなんか心配するのもおこがましいのかもしれないけど、やっぱり心配だよ……

「安心しろ、ルーシィ。アイツは負けねえよ。今回はじーさんの命もかかってる訳だしな。そういう時のトウヤは絶対負けない」

グレイがそう言うと、少し前を飛んでいるナツが叫んで訂正する。
「ちげえぞグレイ！トウヤだけじゃねえ、家族の命がかかってる時は、誰も負けねえ！妖精の尻尾の魔導師は負けねえんだ!!」

そう……だよ、絶対に負けられない。

それに、トウヤだって絶対大丈夫よ！こういう時は信じる事が大事なのよね！

「フフ、そうだな……おっと、ようやく追いついたようだが、もう終わってしまったか」

その言葉に勢いよく前を向く。

私の目に入ったのは、空中でエリゴールの顔面に右拳をめり込ませ、流星が夜空を斬り裂くが如きスピードでそのまま地面まで吹き飛ばすトウヤの姿だった。

「くそおおお、先越されたああああ!!」というナツの叫びが風のない空にこだましていた。

▼三人称視点

「追いついた」

背後から聞こえた声に、弾かれたように振り返るエリゴール。その顔には狼狽の色が強く染み出ている。

深い谷間に掛けられた長い橋には線路だけが通っている。オシバナ駅を占拠しているために列車の通ることのないその鉄橋にゆつくりと降り立ちながら、エリゴールは黒い羽織の男を睨みつけた。

「馬鹿なっ！早すぎる……!?なぜ貴様がここにいる!?魔風壁はどうした!?!」

「斬った」

矢継ぎ早に繰り出された質問に、これ以上ないほど端的に切り返すトウヤ。

それ以上はエリゴールの方を気にする様子もなく、アルマの頭を少し撫でて「ありがとうございます」などと言う。アルマも心得たように後ろに下がって「あとは任せました」と返すのみで、エリゴールの方には一瞥もくれず、やりきったという感情と少しの心配の混じった目でトウヤを見つめている。

そんな様子が余計に気に入らないのか、エリゴールの怒気はどんどん増していく。

「斬っただと……ふざけやがって……!つくづくどこまでも邪魔な妖精どもだ!!まあいい。そんなハツタリごと貴様を斬り裂いて、その首、じじいどもへの手土産にしてやるよ!!」

が、キレているのはトウヤも同じ事。

普段は少ない口数も、怒りが頂点に至れば自然と増えていく。

「妖精が飛んじやいけない森もある……だったか?ふん、確かに廃棄物の森では踊りたくないな……かかってこいよ、ゴ廃棄物」

右手を突き出し、手のひらを上向きにし、くいくいと四指を持ち上げる。

その挑発は見事にエリゴールの神経を逆なでし、その手に持った大きな鎌を振りかぶって突進してくる。

「貴様ア!!」

エリゴールの鎌は正確に振るわれ、トウヤの首を切り落とすコースに入る。

トウヤは疾風のスピードに反応できずにいる。

「獲った！」と勝利を確信するエリゴールだったが、その期待は驚愕の形で裏切られる事になる。

確かな角度、速度で首に直撃したはずの鎌がそれ以上先に進まないのである。

まるで鋼鉄に木の棒をぶつけたかのような鈍い感触の不可解さは、エリゴールの頭脳を停止させてしまう。

(な……なぜ斬れない!?)

その隙を見逃すトウヤではなかった。

鎌を振るった体勢のまま硬直してしまったエリゴールの身体、その顔面に向けて左上段蹴りが炸裂する。

その狙いすまされた一撃を受けて吹き飛ばされながら、エリゴールは悟る。先ほどの鎌の一撃には、反応できなかったのではない——反応しなかったのだと。

吹き飛ばされた勢いそのままに宙に浮かび、今度はその場でいくつもの鎌鼬を発生させる。

「畜生が……これでも食らいやがれ!!」

黒い羽織の男は鎌鼬を全く意に介さず、一步一步とこちらに歩み寄っていく。

直撃したどの鎌鼬も、男の肌に傷一つつけることができない。

常軌を逸した光景に無意識の内に気圧されたエリゴールは、トウヤの歩みにあわせて少しずつ後ずさってしまう。

「クソ、クソっ……どうなってやがる!?!」

戦々恐々とした表情を浮かべたエリゴールは、両手の指を2本立て、体の前でクロスさせる。その体勢で魔力を練り上げ、大技を放つ。

「これならどうだ！全てを切り刻む風翔魔法……翠緑迅！エメラパラム死ね、クソガキィ!!」

その掛け声とともに、指先に集まった魔力が爆発し、極大な緑の刃を生み出す。

狙いなどつけるまでもない大きさの刃はエリゴールの思惑通りに羽織の男に直撃する。

今度こそ忌々しいあの妖精ハエを消し飛ばせたか、と——半ば祈りに近い形で——考える。

しかし、エリゴールが目にしたのは、羽織の袖と灰色の髪を暴風になびかせながら、あろうことか翠緑迅を吸い込む姿だった。

「ふう……悪くない味だった」

余りにもあり得ないその様子を見て、開いた口が塞がらないエリゴール。

その脳裏にある異名が浮かぶ。

「斬魔……貴様！ 斬魔の妖精、斬撃の滅竜魔導士トウヤ・グレイスカ！？」

あらゆる魔法を一刀——この場合、トウヤは剣を持たないため、腕の一振り、とするのが正確だが——の元に斬り伏せる姿からついた異名が斬魔。

闇ギルドにとっては、この名前にはもう1つの意味がある。各地の闇ギルドを単身で壊滅させる化物、魔の闇を斬り払う死神を指す言葉である。

死神エリゴールにとっての死神、その顕現に、されどエリゴールはまだ絶望しなかった。

「ならば風の斬撃を選んだのが失敗だったただけだ！ やりようなどいくらでもある！」

そういうとまず高空に浮かび上がった。

「ここまで届く攻撃方法は持ってしまい！ そして……ストームメイ暴風衣！ これならば貴様の斬撃もこちらには通用しないぞ！」

全身に先ほどの魔風壁と似た極小の竜巻を纏い鎧とする技、暴風衣を発動した。これでお互いの斬撃を無効化した。が、エリゴールには鎌鼬以外にも純粋な暴風という攻撃方法が残っている。形成逆転である。

「はっはっは！ 死神はこのオレだ!!」

上空から勝ち誇ったような高笑いを響かせながら、左手で魔法のサ

インを描いていく。すると周囲に轟轟と暴風が集まってくる。確かに斬魔対策の上で繰り出される再度の大技であった。

「これで今度こそお終いだ。食らえ！ストームブリンガー暴風波!!」

エリゴールの腕の先から指向性を持った竜巻が降り注ぐ。

悪意を持った自然の猛威を前にして、軋む鉄橋。

しかし、それを前にしてもトウヤが揺らぐことはなく、「フム」とつぶやくと魔力を高めていく。

「斬魔ノ太刀 断の型・天爪」

その言葉と共に銀色に輝く魔力が収束していく。やがて限界を超えたエネルギーはバチバチと銀色の電撃としてトウヤの右腕に纏わりついた。その様は名工に鍛え抜かれた刀のようでもあった。

トウヤは徐に腰を落とし右足を一步引き、迫りくる竜巻に向けて、その刀を左上へと切り上げた。

「斬竜の刀牙」

凜という音がして、銀色のエネルギーが空を駆け上がる。

その斬撃は信じられない速度でもって竜巻へと迫り、暴風波を斬り捨て、そのままの勢いで暴風衣をも雲散霧消させた。

これにはさしものエリゴールも絶望に顔を歪めて脱力してしまう。

「馬……鹿な。あと少しなんだぞ……あと少しで忌々しいクソじじいどもへの報復が叶うんだぞ……ふざけるな！ふざけるな、この死神があああああ!!」

激昂し、効かないと分かっているにも拘らず、手当たり次第に鎌鼬を投げかけるエリゴール。

その怒りに反応し、トウヤも無表情だった顔の眉間に皺を寄せる。

「怒ってるのか……？奇遇だな、俺もだよ」

「斬心」とつぶやくと同時にエリゴールよりも高い位置に移動すトウヤ。

斬心、トウヤ自身の身体を刀身に見立て、空を斬り裂くことで高速移動する斬撃の滅竜魔導士流の歩法である。

「オマエ……こんなバカげた計画でも付き合ってくれる仲間がいたんじゃねえかよ……ならそいつら大事にしろよ！それで、権利が欲し

かったなら、みんなで協力して……正々堂々と俺たちを見返せるようなやり方を探せば良かったんだよ……そんなやり方じゃ妖精の尻尾には勝てねえぞ、死神!!」

再び刀身と化し、空を斬り裂いてエリゴールの方へと、流星の如く落下していくトウヤ。エリゴールも「クソオオオオオ」と叫んで暴風を飛ばすが焼け石に水。

落下速度の威力を重ねたトウヤの拳がエリゴールの腹部に突き刺さる。

「斬竜の斧肘!!」

鉄橋へと墜落するエリゴールを見ながら自分も重力に従って落下していく。

「お前らの八つ当たりには、俺の家族を巻き込むじゃねえよ……!」

空中でクルリと体の向きを変えて後ろを見ると、仲間たち——腕を組んで微笑むエルザ、なぜかパンツ一丁でこちらを見上げるグレイ、「先を越された」と地団太を踏むナツ、嬉しそうに手を振るルーシイとハッピー、そして翼を生やして迎えに来るアルマが見えた。

『妖精の尻尾』無傷の大勝利であった。

幽鬼の支配者編 4話「最強の男」

▼トウヤ視点

あの後、事件解決の為に奔走した俺たちは、被害者を出す事なく事件を終えられた安心から疲れがドツときて、後の処理を駆けつけてきた評議員や軍の連中に任せて早々に退散した。

ナツだけは「暴れたりねー！」と喧嘩を吹っかけようとしてきたが

……

アイツの体力はどうなってんだか。

参ったなあ、と思っていたところに入ったのはエルザからの助け舟だった。どうやら俺の知らない間に「手伝う代わりに事件が終わったら勝負する」という約束をナツがエルザに取り付けていたらしく、だからそれまで体力を温存しておけよ、と話を持って行ってくれたのだ。強くて機転も利いて、めっちゃ美人、うくん、エルザはホントにいい女だよなア。

今は新聞を流し読みしながら、件のエルザvsナツの勝負が始まるのを待っているところだ。

手元の新聞によると先の事件はギルドマスター定例会を狙ったテロ未遂事件として大ニュースとなっているようだ。大半のメンバーが逮捕されたという話だったが、あのエリゴールは拘束しようとした軍の奴らをぶっ飛ばして逃走してしまっただけらしい。

えっ、大問題じゃね…？

完全に主犯だし、実力的にも『鉄の森』アイゼンヴァールドでは間違いなくトップだった。思想的にもおそらくアイツが扇動したんだろう事は想像に難くない。

報復とか狙ってくるのだろうか。卑怯な手に走らず、タイマンでやろうってなら受けて立ってもいいんだがな。

そうして文字の海におぼれようとしていたところに、隣にいたカナが話しかけてくる。

「ねえ、あんたはナツとエルザ、どっちに賭けるんだい？」

え、なに？

みんな仲間同士の勝負で金賭けてんの？

酷くない？

いや、俺も参加するけど。

「ナツに10000ジユエル」

まあまだエルザの方が強いだろうが、ここぞという時のナツの爆発力は目を見張るものがあるしな。そこまで勝負にならないって事もないだろうと思う。

「あいよ、ナツに10000ね〜」

と、よく見るとカナが胴元だったらしく、俺から受け取った10000ジユエル札を足元の籠にポイっと入れ、後ろのボードに何か書き込んでいく。

「ナツに賭けたやつらは残念だったねえ！」

というカナの言葉に反応して、ギャラリーの男どもが吠える。

ナツに賭けていた奴は「そりやねえよ〜」とか「今日の昼飯代が〜」などと喚き、エルザに賭けていた奴は勝ち誇った顔で諸手をあげている。

……ひ、酷い反応だ。

俺の運のなさはクエスト中の不運な事故だけでなく、こういった賭け事にも適用されるらしく、俺はこの手のギャンブルで勝った事が無いのだ。

当然ギルドの奴らは皆その事を知っており、俺がどちらに賭けるかを聞くだけで結果が分かったような振る舞いをする、という訳である。

「悪いねえ、聞くの最後にしちまって。あんたが早いうちに賭けちまうと、商売になんないからさ」

本当に酷い言われようである。

次のカナとの修行はいつもよりキツイやつにしてやろうと密かに決めた。

「いい。当てるから……それより、服」

そう、服だ。

普段の痴女めいた格好ではなく、白いノースリーブを着ているのである。

それでもなんとなくセクシーなあたり、物凄い色気であると思うが。

「いや……これはその……あんたが……」

と、少し赤くなるカナ。

暑いのだろうか？

それなら普段の格好になればいいのに。

俺としてはドキドキしなくて済む分こちらの格好の方がありがたいのだが。

「？」

「あ、いや、だから……ああもう！あんたが痴女とか言ったからだろ！おバカ!!」

真つ赤な顔で怒鳴りつけられましても……

あの時のこと気にしてたのねカナさん。これは普段から思っていたとはいえ、軽率な発言だったかもしれない。申し訳ないことをした。

「す、すまん」

「もういいよお！それよりホラ、始まるよ！」

おお、本当だ、エルザとナツが準備運動をしている。

と、期待に胸を膨らませているとなぜかナツがこちらを睨みつけてくる。

「おいトウヤア！エルザを倒したあとはおめでとうだぞ！覚悟しとけよ！」

「うむ、それはいいな。私もトウヤには勝てた事がない。この辺でリベンジしておくのも悪くないだろう」

いやいやいや。

なに言ってるんですかね、このお2人。

手伝う条件で闘うってんだから、俺はエルザを手伝った側なんだからおかしな話になるでしょうよ。

それにエルザさんも……勝ったことないって、そりや相性的に剣が

効かないからそうなるのであって、むしろ徒手空拳でまあまあ勝負になる辺り、もう殆どそつちの勝ちでいいと思うんですけど???

2人には悪いけど断っておこう。

「え、あ、うん」

あ。

もうホント……口下手な自分の舌が恨めしい。

こちらナツくん、「燃えてきた」じゃないんだよ、俺は「萎えてきた」って言いたいんだよ！

めんどくさい事になっちまったなあ……誰か助けてくれ。

あ、少し離れたところでアルマが「呆れた」といった目でこっちを見ている。くそう……

「あんた今、完全に勢いで答えただろ？」

「うん……」

「あんたも大変だねえ……」

ホントにね。

まあでもひとまず切り替えて、この一戦を楽しむとしよう。

「さあ、お前の全てをぶつけてこい」

そう言ってエルザが換装したのは炎帝の鎧だ。炎に対する耐性が高く、ナツを相手取るならこれ以上ない選択だろう。エルザさん本気ですな。

しかし、ナツも然るもの。「なら全力が出せるな」と仲間に向けてはいけないような火力の炎を両腕に纏わせる。

マスターが「始めいっ！」と声を掛ける。

先手必勝、掛け声と同時に突進したナツが右上段から炎を纏った拳を振り下ろした。

しかし、そんながむしやらかな攻撃を見切れないエルザではなく、半身を引きながらカウンターの一闪を放つ。

が、それもまたナツには当たらない。

下にしゃがみながら避けたナツは、その際に接地させた両腕と左脚を軸に右の蹴り上げをエルザにぶつけようとする。

これまた華麗に身を躲したエルザはサツとしゃがみ、地面につけた

ナツの腕に足払いを掛ける。これによって転がったナツに追撃を仕掛けようとするエルザ。

すわ決着か、と寄せられた観客の期待は、ナツが寝ころびながら放った横なぎのブレスにかき消されてしまう。

迫りくる炎に対し、追撃の姿勢を一瞬で改め、後方宙返りの要領で回避してしまう。舞うような身のこなしは『妖精女王』^{テイターニア}の面目躍如である。

時間を稼いで起き上がったナツは、その勢いのまま右アッパーを繰り出す。一方のエルザも、着地と同時に翻り、その回転の勢いを利用して袈裟懸けに斬りかかる。

そして今、激突——
パアン。

という瞬間、手を叩く乾いた音が鳴り響く。

決闘を止められてしまったナツとエルザだけでなく、盛り上がり水を差された観客たちも、不満げに音の出どころを見つめる。

そこにいたのはカエルのような姿をした胡散臭い男であった。

「そこまでだ。全員その場を動くな。私は評議員の使者である」

そう言った使者殿は、エルザと俺の方を一瞥した後、手元の紙を読み上げる。

「先日の鉄の森テロ未遂事件において、器物損壊罪他7件、および呪歌（ララバイ）破壊の容疑でエルザ・スカーレット、トウヤ・グレイスを逮捕する」

おい、使者殿。

「誰か助けて」とは思ったが、代わりに更なる厄介事を持ってこいとは言っていない。

△ △ △ △ △ △

結局のところ、今回の逮捕は評議員の面目を保つための形だけのモノだったらしく、裁判も大した事は聞かれなかった。呪歌^{ララバイ}の件については少し強く問い詰められたが、「エリゴールを倒して一息ついたと

ところで、ヤツから笛を取り上げようとしたら何か紫色の煙を吹きだそうとしていた。危険かと思つたので、すぐに宙に放つて斬り捨てた」と主張すると、渋々といった様子ではあつたが納得してくれた。

あんなモノ、封印するよりいつそ廃棄してしまつた方がいいだろうに。とはいえ、一度「封印する」と決めたものを勝手に処分されては困る、という事なのだろう。お役所も大変だ。

氣になつた事があるとすれば、裁判の会場まで連れていかれる際、評議員のジーク何某という男の思念体がエルザと話し込んでいた事だ。なんだか険悪な雰囲気か漂っていたし、去り際に俺の方を警戒混じりに観察してきたし、なんとなく嫌な男だつた。イケメンだし。

と、そんな感じで小さなトラブルのみで終わり、俺たちはその日中に帰れる予定だつた——はずが、夜中になつてもまだ牢屋にぶち込まれていた。

なぜか、と言つても理由は簡単で、俺たちを心配して駆けつけてくれたナツが、あろうことか裁判に乱入してきたからである。

嬉しくはあつたが、これ以上に有難迷惑な事もない……

しかも当の本人は、この硬い石材性の牢屋で早々に眠つてしまつた。

そのおかげでエルザと2人つきりになれたので、氣になつていた事を聞いてしまおう。

「ジーククレイン……知り合いか？」

「ん……なんというか……いや、お前には関係のない事だ」

ふうん、そういう言い方するんだ……

こうなつたら何としても聞き出してやる！

と思つたが——

「……言いたくないか？」

「すまない……」

俯いているエルザを見ると、そんな気持ちも霧消してしまう。言えるようになったら聞こう。

そう思つた俺は、ナツと同様に横になり、そつと目を閉じた。

△ △ △ △ △ △

短い拘留期間を経て、無事ギルドに帰ってきた俺は、ミラに飲み物と廃棄予定の刀剣類を注文し、ガジガジとかじりながらシャバの空気を堪能していた。

すると、なぜか急に眠気が襲ってきた。

それは自分だけではなかったようで、唐突に倒れていくギルドの面々。

ははあん、これはアイツだな？

「斬魔」

気づいた俺はすぐに魔力を高め、略式で魔法無効化を発動する。

するとあれほど重たかった瞼がウソのように軽くなり、眠気も最初から無かったかのようになる。

やがて、起きている人間が俺とマスター——あとは2階にラクサスがいるか——だけになると、全身を黒衣で覆い、更には覆面に髪の毛を全て隠す帽子の完全防備に身を包んだ怪しげな男が現れる。

その男は依頼板クエストボードから適当なクエストを持ってきて、じいちゃんに「行ってくる」とだけ報告する。

まったく、シャイな男である。

あ、人の事言えない？

そーですね……

「ミストガン」

俺の声に振り返った男——ミストガンは少しだけ空気を緩めて近寄ってくる。

「……久しぶりだな」

「ああ」

俺たち2人はいつもあまり喋らないが、なんとなくその距離感が心地よく、こうしてたまにミストガンがギルドに現れた時には一言二言交わすようにしているのである。

ミストガンの持っている紙を盗み見ると、今回はモンスターの討伐依頼らしい。

と、こちらと同様に俺を観察していたミストガンが、俺の羽織のポケットに意識を向けているのが分かる。

「それは？」

という質問に、俺はポケットの中をまさぐり、中のものを見せて答える。

それは緑色の少し大きい宝石のようなもので、強い魔力を感じられる事から魔水晶ラクリマであると推測される。

「闇ギルドが持ってた」

確かルーシイがギルドに入る直前に受けたクエストで手に入れたモノだったはず。

あの時も例に漏れず、正体不明の魔物を倒す依頼が闇ギルド討伐に化けたのだ。

元々その街を牛耳っていた闇ギルドが、この魔水晶を裏オークションで競り落としたはいいが、誰が所有者になるかで揉め、街で潰しあいをはじめた。支配しているだけなら兎も角、街中で暴れられては困ると考えた住民だったが、如何せん普段からその闇ギルドに搾取されているものだから、闇ギルド討伐依頼の報酬など出せるはずもなかった。そこで、やむを得ず名目をモンスター討伐とし、闇ギルド討伐よりは幾ばくか安い報酬で魔導士を呼びつけようとしたのである。この事を聞いた俺はひとまず問題の闇ギルドを壊滅させ、住民の代表者に嚴重注意を行った上で、報酬は指名手配されていた闇ギルド構成員の賞金と、そこがため込んでいた財貨からもらうという事で納めたのであった。そこで押収したものの1つがこの魔水晶だったのである。

「用途は？」

「分からない……が、確か『竜の魔水晶』といていた気がする」

イマイチ使い方は分からなかったが、綺麗だからという理由でお守りとして持っている事にしたのである。

ミストガンは少し驚いた表情をした後、一つ頷き

「持っておくといい。いずれ必要な時がくるかもしれない」

それだけ言い残して、俺から離れていった。

「これっ！眠りの魔法を解かんか！」という言葉に反応して伍、四、参、

式、壺とカウントダウンを行い、「壺」と言うと同時に霧の向こうに消えてしまった。

ミストガンと入れ替わるようにギルドの面々の意識が覚醒していく。

▼ルーシー視点

「んんう……」

何だったの、今の？

急に眠くなっただと思っただけなのにまた目が覚めて……

周りの人たちもあたしと同様に目覚めはじめている。なぜかナツはまだ眠ってるけど。

起きた人たちはある人物の名前を口にして「さすがだ」とか、

「あんにやろオ」とか言っているようだ。

「ミストガン？」

聞いたことない名前だけど誰だろう？

「妖精の尻尾、最強の男候補の1人だよ」

そう言っただけの疑問に答えてくれたのは、週刊ソーサリー調べ、彼氏にしたい魔導士ランキング上位のイケメン、ロキだ。

あたしとしては他のギルドメンバー同様に喧嘩っ早いし、無駄にチャライしでナシかなあって。

まあ、あちらも星霊魔導士には何やら苦手意識があるらしく、誰の質問に答えたかに気づくと驚いた顔で逃げ出してしまったが。

あ、ロキがトウヤにぶつかつた。

「げええ！トウヤあ!？」

といって、あたしの時以上のスピードで走り去ってしまった。

どうして星霊魔導士でもないトウヤまで怖がるのかしら？実はトウヤも星霊が使えたりするのかしら……？

というか、逃げざまに「前門のルーシー、後門のトウヤか……」なんて呟いて、人の事を猛獣みたいに扱わないで欲しいわね、ロキだったら。「ていうか、最強候補って、こないだのチームが最強チームだったん

じゃないの!？」

ナツ、グレイ、エルザ、トウヤのチームが最強って聞いてて、確かに凄い強さだって納得してたのに。

「ああ？誰だ？そんな下んねえ事言ったの？」

「ミラさん」

そう言うときグレイはバツと振り返り、先ほどの発言を聞いてしまったらしく泣いてしまっているミラさんに「ごめんミラちゃん！」と謝る。

あーあ、泣かせちゃった。

「いやまあ……それでだな。まあ最強の女ならエルザで間違いないし、トウヤだって最強の男候補で間違いねえんだが、この話をするのに欠かせねえヤツがあと何人かいるんだよ」

「その1人がミストガン……」

「そういうことだ。と言っても、アイツは何故か誰にも姿を見られたくないらしくてな。たまにギルドに来ては全員を眠らせて、依頼だけ取ってさっさと帰っちゃうんだよ。だから俺含めて、誰もヤツがどんな男か知らねえんだ。例外はじーさんくらいか？」

そんな人もいるのね……

何か顔を見られたくない理由があるんでしょうけど、それにしてもメチャクチャよね……

姿を見られたくないからって、全員を眠らせてしまうというのもそうだけど、それを可能にしてしまう魔法の力量も。

その時、上の階、つまりS級魔導士専用のフロアから「いんや」という声が響く。

「オレは知ってっぞ。あとはトウヤもよく喋ってるよなア？」

「ん？……まあな」

柄の悪い金髪の男が嘲笑混じりの表情でこちらを見下ろしてくる。上階と下階で明確な格の違いがあるのだと示すような態度。

嫌なヤツ……

「あの人は？」

「もう1人の最強候補、ラクサスだ。じーさんの孫なんだが……それ

よりもトウヤがミストガンと喋った事あるって方が気になるんだが」
マスターの孫!?

あれが!?

全然似てないじゃない!

「ミストガンはシャイなんだよ…あまり詮索してやるんじゃない」

「静かだが…いい奴だぞ」

そんな雰囲気こそぐわなないズレた事を言っているトウヤに反応している人間は1人もいない。全員の視線がラクサスという男に注がれている。

「オレと勝負しろ、ラクサスー!!」

「エルザ」のときに勝てねえようじゃ勝負にならねえヨ」

ナツが食ってかかるも、一蹴されてしまう。

引き合いに出されたエルザも怒気を出しながら問い詰めようとする。

「それはどういう意味だ…?」

ゴゴゴという音が聞こえてきそうなエルザの一睨みにも動じた様子はなく、腕を広げて黒いマントをなびかせたラクサスが尚も挑発を続ける。

「オレが最強って事さ」

臆面もなく言い切った事でほとんどの面子はたじろいでしまう。

例外は、それでも睨み続けるエルザ、気にした様子もなくガジガジと剣の山を平らげているトウヤ、そして――

「降りてこいコノヤロウ!!」

とタンカを切るナツくらいだ。

「おまえが上がってこい」

2階で1人、ニヤつと笑う。

「上等だ!」と駆け出すナツだったが、その途中、魔法でその部分だけ巨大化したマスターの腕に叩きつぶされてしまう。

「まだ2階に上がってはならん。ラクサスもよさんか」

悔しそうなナツ、懲りた様子のないラクサス。

「妖精の尻尾最強の座は誰にも渡さねえよ。エルザにも、トウヤにも、

ミストガンにも…あのオヤジにもな…オレが最強だ!!」

▼トウヤ視点

白けた空気は結局元に戻らず、1人、また1人と帰ってしまい、最後まで嫌な雰囲気だった。

はー、まったくラクサスは…

何をイキがってるんですかねえ。

いくら何でもまだ師匠には勝てないだろうに、あの人のいないギルドで何言っても仕方ないと思うんだけどなあ。

昔から気難しいヤツだとは思っちゃいたが、あそこまでヤな感じだったかなあ？

何か馬鹿な事しでかさなきやいいけど…

ま、その時は俺が何とかすりやいいだけか。

俺自身、ギルド最強なんかに興味はない。ないが、だからって今のラクサスに負けるとも思わねえ。

何があっても家族を守るだけの力を。

もうセルバルドが消えた時の、何もできなかった俺じゃねえ。

間に合わなかったあの時の、力の足りない俺でもねえ。

父さん(セルバルド)との絆の証であるこの魔法で、家族を守りきつてみせる。

っと、熱くなっちゃった。

明日からは久しぶりの仕事だ。

そんなに遠くに行くわけではないが、今日は早めに寝てしまおう。

この時の俺は、クエストに行っている間に、あんな事が起きるなんて、露とも思っていなかったのだ。

△ △ △ △ △

今回の依頼も結局面倒な事になっちゃうんだもんなあ。

まさか、途中であんな巨大モンスターが乱入してくるなんて…

ようやく帰ってこれた訳だが、こちらでも事件が起こったらしい。またナツが何かやらかしまったそうさ。

ラクサスに触発されて勝手にS級クエストに行っちゃったとかないんとか。

そちらはエルザが回収に向かったみたいだから何とかなかったのだろうが、除名とか、そんな面倒な事にならないといいなあ。

喧しいヤツだけど、ギルドにいないとやっぱ寂しいし、それにルーシイも巻き込まれたらしいし……

あの子は凄くいい子だ。もし危なかったら、少し面倒だが弁護を買って出よう。

あ、でも俺の無口さじゃ、むしろ足手まとい……？

それにしてもガルナ島か。

依頼料が大した事なかったから興味なかったけど、どんな仕事だったんだろうな、今度アイツらに聞いてみるか。

「アレ？あそこにいるのはナツたちではありませんか？」

翼^{エーラ}を出して飛んでいるために俺より視点の高いアルマが、俺より先に4人＋1匹の姿を見つける。

「ああ……」

ホントだ。

でも何で立ち尽くしてるんだろ？

ん？

気のせいかな、周りのマグノリアの人たちもヒソヒソと何か話しているような。

「つて、何ですかコレ……!?!」

その理由は簡単だった。

簡単だったが、それを飲み込むのは並大抵の事ではなかった。

ナツたちの先、そこにあつて、いつも通り俺たちを出迎えてくれるハズの、俺たちのギルドは――

巨大な鉄の杭によって、ボロボロに壊されていた。

5話 「コツチの番だ」

▼三人称視点

魔法評議会会場E R A、その執務室の1つに黒い笑みを浮かべるひと組の男女がいた。

「なかなかやるようだな、フェアリーテイル妖精の尻尾」

椅子に座ったまま呟く、顔に入れ墨の入った男。

その男にカツカツとヒールを鳴らしながら近づく女。

青髪その男は、厳めしい入れ墨があっても尚、美しいと感じざるを得ない程整った貌をしている。女の方もそれに負けず劣らずで、艶のある黒髪にぼつとりとした唇、切れ長の瞳がこの世のモノとは思えない色香を演出している。

「ええ、私は半分も実力を出していなかったけれど、最後の1撃は見事と言わざるを得なかった。まだまだ強くなるわよ、ナツ・ドラグニル」
「それに今回、ヤツはガルナ島に来ていなかった。前回見た時は思念体越しても分かるような見事な魔力を放っていた……」

「トウヤ・グレイスね……彼は厄介だわ、単純な力としても、能力としても」

「名前の売れただけの雑魚とはいえ、死神を一蹴、ゼレフの作りたもうし呪歌を粉碎……か。欲を言えばガルナ島で真の実力を見ておきたかったところだが……まあいい、ヤツらが動き出している。そこでヤツの戦闘を見る事ができるだろう」

黒髪の女が「ふふ」と笑う。

「楽しそうね、ジークレイン様」

「楽しいとも。障害は大きいほど良い。目的を達成したときの快感が増すというものだ。ゲームというのはそういうモノだろう、ウルティア?」

ジークレインは徐に立ち上がり、執務室の大きな窓の方へ歩いていく。

窓際までたどり着くと、一度遠くを見るような表情になり、その後で心底愉しそうに、それでいて、何か大きな目標への野望を前にした

ような顔をして笑う。

「待っている、エルザ。オレの理想^{ゆめ}の為に散るその時をな……」

▼ルーシー視点

ガルナ島に行っていたあたし達4人+1匹は私の部屋に集まっていた。

集まっていた、というか、勝手に上がられていただけけど……

ギルドがボロボロにされていたのは『幽鬼^{ファントム}の支配者』というギルドの作業らしい。元々『妖精の尻尾』とは敵対していたというか、あつちが目の敵にできていたみたいなんだけど、急にこんな強硬手段に出るなんて。何があつたつていうのかしら。

ううん、どんな理由があつたつて許すことなんてできない。

あたし達の大切なギルドをあんな穴だらけにして……！

でも、マスターはこの事についてファントムに追及するつもりはないみたい。

今回の襲撃は誰もいない夜中に行われたモノだったらしく、ケガ人は0。であるならば、評議員で禁止されているギルド間武力抗争を起こすまでもない、というのがマスターの考えらしい。

正直に言ってしまうば、凄く悔しいよ。このまま泣き寝入りなんて。

でも……悔しいのは皆一緒。当然マスターだって。

大事なものは、この先の事だ。きつとファントムはこれからも攻撃を仕掛けてくるだろう。その時に仲間が誰もケガをしないよう対策をとることこそが今できる最大の反抗だ。

私の部屋にみんなが集まっているのもその一環だ。襲撃に備えて、できるだけ1人になる時間を減らすための措置だそうだ。

だからって、無断であたしの部屋にしなくても……ホントあたしのプライバシー権って弱いよね。

ピンポン

と、ここで不意に家のチャイムが鳴る。

珍しいわね、ここに入居してから殆ど使われたことがないのに。
勝手に開けようとしているナツを手で制し、「はーい」と声を掛けて
玄関扉を開ける。

すると、そこに立っていたのはいつも通り無表情のトウヤと、ギルドの事を引きずっているのか、些か沈んでいる様子のアルマだった。
「邪魔してもいいか？」

「ごめんなさい、一部屋に5人は多いと思ったんですが、私たちもここがいいわ、とミラに押し切られてしまいました。ご迷惑じゃなかったですか？」

私は今猛烈に感動している。

まさか、『妖精の尻尾』にこんなマトモな人が残っていたなんて……
凄く無口だし、剣や槍をバリバリと齧る変わった人だと思っただけ
ど、よくよく考えたら一番普通なんじゃないかしら？

「もちろん！むしろ、他のおバカさん達のせいで窮屈な思いをさせ
ちやうかもしれないけど、許してね？」

「ええと……それはありがたいのですが、なぜ泣いていらつしやるん
ですか？」

あら、いけない、あたしってば泣いちゃってみたい。

「ううん、なんでもないの！」

「さ、上がって」と言い、2人を部屋へと案内する。

私の涙に動揺したのか、トウヤは凄くオロオロしていた。

ふふ、可愛いトコあるのね。

「おまえも来たのか、トウヤ」

「これは丁度いいな、おまえも私と一緒に風呂に入らないか？」

手を挙げて声を掛けるグレイと、トンチンカンな事を言い出すエル
ザ。

ナツにグレイとも入った事があるみたいだし、ホントどんな関係な
のかしら……

「!?……せ、せまいだろ」

そういう問題!?

「エルザ……あなたももう立派な女性なんですから、もう少し慎みを

持つてください」

いいわよ、アルマ、もつと言っておあげなさい！

というか、トウヤが他の『妖精の尻尾』メンバーに比べてマトモなのって、十中八九アルマのおかげよね。流石はミラさんと並ぶ『妖精の尻尾』2大オカン。

「むっ・そ、そういうものか……っ？」

凄いい、あのエルザがやり込められてる。

こうしてトウヤ、アルマを加えたあたし達は、順番にお風呂に入ったり、今回の襲撃について話し合ったりしながら夜を更かしていた。

目ぼしい情報としては、『幽鬼の支配者』のマスター、ジョゼはウチのマスターと同じ聖せい十大魔道たいまどうという凄い魔導士らしい、という事が1つ。他にも、厄介な魔導士として名前が挙げられた、向こうでのS級にあたるエレメント4や、今回のギルド襲撃の実行犯と目される鉄竜くろがねのガジルの情報がもう1つ、といったところか。

特に危険なのはガジルという男だろう。なんと、そいつもナツやトウヤと同じ滅竜魔導士らしい。

今までで一番強大な敵だ。

だけど、あたし達は絶対に負けないわ！

いやまあ、私にどれだけの事ができるかは分かんないけど。

話合いも一段落つき、あたしが最後にお風呂に入る事になった。んだけど、お風呂から上がると、トウヤがなんだかひどく見覚えのある紙束を無表情に読み込んでいる場面を目撃した。

——そ、それ私の書いた小説!?

まだレヴィちゃんにくらいしか見せる約束してないのに！

ていうか、すっごい無表情なんだけど!?

「ちよ、ちよっと！何勝手に読んでるの!?!」

走り寄ってひったくろうとするも、後ろに目でもついてるのかと思うくらいの確に避けてしまうトウヤ。

「すまない……面白くて、っ」

え、今「面白い」って？

それならもつと面白がつてる表情をして欲しいものだわ……

「そ、そう……う？で、でもまだそれ未完成だから」

「そこまで言う」と「そうか……」と言って原稿を返してくれるトウヤ。

「俺は……たまに本を読む」

そう言われれば、ギルドなんかで小説を読む姿を何度か見たことがある気がする。『妖精の尻尾』の男子としては珍しいな、と思って覚えていた。

それにしても今日はよく喋るわね？

何の話かはよく分かんないけど。

「その上で、だが……あると思う……」

「何が……？」

「才能」

「！」

そんな事言われたの初めてだ。

そりゃあ、誰にも読ませた事ないんだから当然なのだが。

「展開はチープだ……けど、その分、心理描写が映えてる」

ちよ、ちよつとそんな……照れちゃうじゃない！

「俺は……好きだ」

「ええ!？」

言い方つてもものがあるでしょう!？」

あ、ダメだ、うれしさと恥ずかしさで顔が熱い……今、絶対真っ赤だあたし。

我ながらチヨロすぎないかしら……

い、いやこれはその、うん、あれだ、ギャップよ!

普段ロキとは対極にいるようなトウヤに言われたからだ、うん。

「完成したら……読んでいいか？」

「あ……う、うん。でも読者第1号はレビィちゃんって約束してるから」

その言葉にトウヤにしては珍しく、目を丸くしたと思ったら薄く微笑んで、「約束、か……良い事だ」と口にした。

こ、こんな表情もするんだ、トウヤ……

て、やだ、なんでドキドキしてるのよ、あたし。

「じゃあ……読者第2号だ」

「う、うんー」

今日はとつても嫌な事があつたけど、1日の最後には少しだけ嬉しいことがあつた。

きつと今晚はいい夢が見られそう。

明日から、フアントムに屈しないように頑張るんだからっ！

そんな私の高揚は次の日の朝、脆くも砕け散る事になる。

▼三人称視点

マグノリアの街、南口公園。

中心に大樹が聳え、いくつかの遊具が設置されているこの公園は、子ども達やマグノリア住民の憩いの場として愛される場所である。

しかし、今この場にできている人ばかりは、憩いという言葉とはまったくもってかけ離れた雰囲気醸し出していた。

ざわざわとして一点を見上げる人々。

その視線の先には血を流し、ボロボロになつて気を失つた上で、公園のシンボルでもある大樹に磔にされている3人組の姿があつた。

3人組の正体は『妖精の尻尾』中堅チーム、シャドウ・ギア、その構成員であるレビイ、ジェット、ドロイであつた。

レビイのむき出しにされている腹には『幽鬼の支配者』のギルドマークが捺されている。

公園に集まつた人々の心を支配する感情は、驚愕、恐怖、悲しみ、そして

——怒りであつた。

「ボロ酒場までならガマンできたんじやがな…」

小さな老人が杖を突きながら人波を割って大樹に——いや、そこに磔られている3人に歩み寄っていく。

「ガキの血を見て黙ってる親はいねえんだよ…」

あまりの怒りに、杖を握る手に力を込めてしまう老人。ついには杖の限界を超える力がかかり、バキリと音を立てて折れてしまう。

普段の好々爺然とした表情は完全になりを潜め、鬼のような形相をしている老人——『妖精の尻尾』マスター、マカロフ・ドレアーが叫ぶ。

「戦争じゃ!!」

その声に反応して動きだす影がいくつか。

涙を流しながら3人を樹から降ろそうとする者、マスターの言葉に従ってカチコミを仕掛けるため、覚悟を決めた表情で1度——ボロボロにされた——ギルドに向かう者、今にも爆発せんとする怒りを必死に抑える者、そして……

そして、最も早くマスターの言葉に反応し、駆け出した者。

▼トウヤ視点

くそツ……くそ、くそ、くそツ!!

何が……何が「家族を守るだけの力を」だ。

何が「何もできなかったあの頃の俺じゃない」だ!

また……また間に合わなかったじゃねえかツ!!

「ファントム幽鬼の……ロード支配者オオオオオ!!」

駆ける。

地を走る獣より速く、空を往く鳥よりも疾く。

元々は仲間のどんなピンチにだって駆けつける為に鍛えた足と、魔法の使い方で街を、街道を駆ける。

斬心の連続使用によって魔力はどんどん減っていつているが、そんな事は心底どうでもよかった。

今は一刻も早くファントムのギルドがある街へ。

本部だろうが、支部だろうがなんでもいい。

関わる人間はその全てを血祭りにあげる。

「見つけた……」

レビイの腹に刻まれたあの忌々しいあの印だ。

俺はまず、右腕を大きくアッパーカットで振り上げる。その後、今度は左手を横なぎに振るう。

「斬竜の刀牙ア!!」

それだけでファントムギルド支部に大きな十字傷が刻まれ、トランプタワーの如く崩れ落ちた。

運よくそれでくれたばらなかつたファントム構成員が「何事だ」とガレキの山から這いずり出てくる。

「て、テメエは妖精の…斬魔の死神か!?!」

悠長に話しかけてくる男に一步で接近し、その右腕に手刀を当て切り落とす。その余波を利用してその男の後ろにいた男の腹に大きな縦穴をあける。

地面に手の平を強くたたきつけると、地面に大きな爪で抉られたような5条の亀裂が走る。未だ何が起きているか理解できていないファントムの男たちがその斬痕に落ちていく。

「イカれてやがる…お、お前、ギルド間武力抗争禁止条とかしらねえのか!?!」

これはおかしなことを聞くものだ。

「…先に法を破ったのは貴様らだ。つまりお前たちは闇ギルドだろう?…俺は得意なんだ。そういうゴミをすり潰すの!」

この回答に信じられないという顔をしている男の方に飛び、縦に1回転し、その勢いでかかと落としを食らわせる。

「斬竜の鋭爪」

男の顔面は石製の床面にめり込み、全身には裂傷が走った。

支部にいた全員を斬り捨てた事を確認した俺は、別のファントム関連施設に向けて駆け出した。

▼三人称視点

トウヤが各地のファントム支部を攻撃している間に行われた、ファントム主要人物が集まっていると目された支部への、『妖精の尻尾』の襲撃は——失敗に終わった。

平構成員の多くには深手を与えたものの、エレメント4、鉄竜くろがねのガ
ジルは健在、ジヨゼに至つてはその支部にはおらず、逆に『妖精の尻
尾』はギルドの精神的支柱にして最高戦力であるマスター・マカロフ
が倒れる結果となつてしまった。

ファントムが『妖精の尻尾』迎撃と同時進行で決行していた作戦で
誘拐していたルーシイ・ハートフィリア、その映像を見せる事でマカ
ロフに隙を生じさせ、エレメント4の1人、大空のアリアが魔法に
よつて魔力を空にしたのである。

卑劣な罠に掛けられた『妖精の尻尾』は、エルザが士気の低下を悟つ
て下した判断によつて撤退を決定した。

ナツの活躍により、ジヨゼの目的の1つであつたハートフィリア財
閥の令嬢、ルーシイの奪還にこそ成功したが、ボロボロのギルドに
戻つてきた今になつても、『妖精の尻尾』には暗い雰囲気きんぐうきが漂つてい
た。

そこに響く轟音。

その地響きは『妖精の尻尾』に更なる苦難が襲いかかろうとしてい
る事を示していた。

▼カナ視点

「なんだい、アレ……!?!」

ファントムのギルド支部から逃げ帰り、これまたファントムのせい
で見る影もなくなつたギルドに戻つた私たち。

私とミラは今この場ばにいないS級魔導士たちと連絡をつけよう
とした。

しかし、結果は振るわなかつた。

ラクサスは「自分には関係ない」とばかりで論外、ミストガンもト
ウヤもつながらない、あの男も今何をしているかさっぱり分からな
い。

アルマが「トウヤを探してきます」と出ていったが、見つかるかど
うか……

この状況を打開するための方法を考え、カードでの占いまで試す私だったが、何か巨大なものが動くようなズン、ズンという地響きが聞こえ、大きな揺れを感じ、その手を止めてしまう。

何事かと、取る物も取り敢えず外に出てみると、目に映ったのは6本脚で歩行し、湖を渡ってくる巨大な建物だった。

よく見るとところどころにファントムのギルドマークが彫られている。

まさか、アレが『幽鬼の支配者』のギルド本部とでもいうのかい!? 「あんなモノどうしろってんだい……」

しかも最悪なことに、ギルドの玄関部分と思われるところから、細長い巨大な砲身がせり出してくるのである。

アレは……魔導収束砲ジュピター!?
ギルドごと私たちを皆殺しにする気っ!?

『ルーシィ・ハートフィリアを渡せ……今すぐだ』
そこにジョゼによる放送が入る。

けど……論外だ。

「ふざけんじゃねえ!」

「誰が渡すか!!」

「仲間を敵に差し出すギルドがどこにある!」

その通り、ルーシィを渡すわけにはいかない。

あの子は私たちのかけがえのない仲間だ。

ハートフィリア財閥の娘だとか、渡せば今この場では助かるとか、そんな事関係ない!

「仲間を売るくらいなら死んだ方がマシだっ!!」
というエルザの魂の叫びが轟く。

しかし、その思いは当然ジョゼに届くことはない。

『ならば死ねえ!!』

そんな無慈悲な言葉と同時に魔力の充填を開始するジュピター。
ルーシィごとやるつもりなのか……!?

実際に魔力が溜まっていく様子を見て思う。あまりにも膨大な魔力はもはや人智を超えていると思わせる域だ。

アレを個人の力でどうにかするなんてこと……

刻一刻と溜まっていく魔力、絶望までのカウントダウンが着々と進められていく。

威勢よく啖呵を切ったところまでは良かったが、実際問題、アレをどうにかしない分には私達に勝ちの目どころか生き残る可能性すらないだろう。

どうする……

「全員伏せて私の後ろに回れエエエ!!」

そう言つて最硬の鎧である金剛の鎧に換装するエルザ。

「受け止める気かい!」

そんな事したらあんたが……!?

どうする……どうすればいい?

魔力の収束が終わつたららしいジュピター。

終末の光が今、放たれた。

轟ッ!!

ここまでなのか……?

そもそも、そもそもなんで……こんな時に……

「こんな時に何してるんだよ!?!トウヤアア!!」

泣きながら口走つたその言葉に答える声が1つ。

「呼んだか、カナ?」

迫る光に躍り出る黒い影。

「斬魔ノ太刀 断の型・天爪」

黒い羽織に灰色の髪、背中に薄桃色の猫を乗せ、翼を生やして文字通りに飛び出していった男は、とうとうエルザのいた位置を超えて最前へとたどり着く。

「斬竜の……刀牙アアア!!」

男は空中で力いっぱい右腕を振り上げる。

そこから生じた銀色の斬撃は、ジュピターの閃光に負けなくらいに眩かった。

銀の光は、一瞬の拮抗をも許さず、破壊の極光を削り取りながら進み、終いにはジュピターの砲身を縦に真っ二つにしてしまう。

絶望的な状況を一瞬にしてひっくり返したその男が、ゆっくりと地面に降り立つ。

周りにいた誰もが、その背中に声を掛け、名を呼ぶ。

それはジュピターを放った当人であるジョゼとて例外ではなかった。

『貴様ア……！トウヤ・グレイス……！！』

勿論、私だって。

「遅いよ、バカ………トウヤ!!」

しかし、そのトウヤは皆の呼びかけに振り返る事はなかった。

まるで刀を向けるように——ジュピターを失った——フアントム
のギルドの方へ腕を伸ばし、指さし……

「もう……もう誰も、俺の家族は誰もやらせない。覚悟しろ幽鬼の支配者……次は妖精^{コッ}の尻尾^チの番だ!!」

そう言い放った。

6話「やるべき事」

▼トウヤ視点

次…次の支部はどこだ……？

あといくつ残ってる……？

ここまですくつ壊した？

まだ足りねえ、もつと、もつとだ。

レビイ達が受けた苦しみをヤツらにも味わわせてやるんだ。

後ろに感じた気配に振り返ると、地割れが長く長く続いているのが目に入った。斬心を使った、身体を斬撃と化しながらの移動は、俺よりも先に街道の方に悲鳴をあげさせていたようだ。

「何の用だ、ミストガン……いま俺は忙しい」

俺の後ろに立っていたのは全身を黒い服で覆った影のような男、ミストガンであった。

「忙しい？憂さ晴らしにか？」

「……あ？何が言いたい？」

普段は落ち着く雰囲気を出してくれるコイツも、今ばかりは癩に障った。

憂さ晴らし？

ああ、そうだろうよ。

所詮これは復讐だ。やり遂げたところでレビイ達に付けられた傷が癒えることは無い。

「こんなものは復讐ですらない。家族を守り切れなかった自分への行き場のない怒りを、丁度良い対象にぶつけているだけだろう」

そ…それは……

だが、他にどうしろって言うんだ!?

守れなかった、その結果はもう変わらないだろう。

「お前が本当にやるべき事はなんだ？まだ何も終わっていないぞ？」
はあ？

終わってないって、今頃マスター達がフロントムの本部に乗り込んで、それでヤツらをボコボコにして終わってるトコだろうがよ。

「マスターがやられた」

「な!？」

あり得ねえ、あのじいちゃんだぞ!?

せいてんだいませう
聖十大魔道で、滅茶苦茶強くて、俺たちのためならいくらでも強くなるじいちゃんだぞ、やられる訳ない!!

「敵の罠にかかったらしい。魔力を根こそぎ奪われたようだ。そして敵の狙いはルーシイ・ハートフィリアだ。ハートフィリア財閥のトツプであるルーシイの父親が、彼女の身柄の拘束をファントムに依頼したのだ」

そんな…じいちゃん…大丈夫なのか？

クソっ…また俺は…

それにルーシイも…

ハートフィリア財閥の関係者だろうとは思っていたが、まさか本家のお嬢様だったとはな。

なるほど、こんな直接的な行動に出てくるとはどうした事かと疑問だったが、決定的な依頼が入って、そのついについて事かよ。

「今は皆一度ギルドまで撤退して現状打破のための策を練っているとこらだ…お前のやるべき事、分かったか？」

ああ、本当に…俺の目は曇ってばかりだ。

熱くなると大事なものをすぐに見失ってしまう。

「今無事でいる仲間たちを守るために闘う事、その為にそいつらのそばに在る事だ」

「フ…もう心配ないようだな。安心しろ、ここから先の支部は全て潰してきた」

けっ、お前も色々やってるんじゃないか。

相変わらずの覆面姿で、どんな顔をしているのかは分からないが、きつと今はニヒルな笑みを浮かべているのだろう。

と、そこに何かが飛来しているのが視界に映る。

滅竜魔導士の類い稀な嗅覚で、匂いを嗅いでみると、それがアルマだという事が分かるが、同時に得た視覚情報から、何か大変な事が起きた、という事も理解できる。

いつもぼややんとしているアルマの顔が、見た事のないほど必死の形相になつているのだ。

「トウヤ！ようやく…ハア、ハア…見つけました！」

「何があつたんだ？」

「それはごつちのセリフです！何も言わずにいなくなつて、大事な時に影も形もない！…心配しました！あなたの身も！あなたがいないせいで誰かがケガをしてしまう事も！その事を、自分がいなかったせいだつて落ち込むあなたの心の事も！このままいなくなつてしまふんじゃないかつて事も！全部です！」

俺は本当に…本当に救いようのない馬鹿だなア。

アルマにここまで言わせちゃうなんて、本当に情けない男だ。

「ごめん…勝手にいなくなつて」

「はい、いいんです、許しました。今、ここにいてくれたから…それより、フアントムの本部ギルドが6本の脚を生やして、妖精の尻尾の方へ侵攻しているのを見かけました！嫌な予感がするんです、早く向かいましょう」

「6本脚い！」

「何!?!…急げトウヤ、マスターの方はこちらで回復させる手立てを整えたところだ、心配しないでいい。だから行くんだ！」

なるほどな…

ミストガンが任せろつて言つてんだ、これ以上頼りになる事もない。

なら俺は俺でやる事やらなくちやな。

「わかった。そつちは頼んだ」

隣を見ると「え、誰ですか？まさかミストガン!?!」とアルマが驚いたような声を出しているが、そんな事はどうだっていい。

それより――

「行くぞ、アルマ」

「は、はい!!」

△ △ △ △ △ △

「もう……もう誰も、俺の家族は誰もやらせない。覚悟しろ幽鬼の支配者……次は妖精の尻尾の番だ!!」

ふう……言いたい事は言っちゃった。

さて、こつからどうするか、だが。

と、思案しようとした時だった。

ファントムメのギルドがゆっくりと立ち上がり、体勢を縦向きへと変えていくのだ。様々なパーツが変形、連結し、最後に大きな顔がせり上がる。

『クソガキがあ……この私をコケにしやがって……後悔しろ!これが我がギルドの最強兵器、超魔導巨人ファントムMkⅡだ!!』

その名の通り、俺たちの目の前には鋼鉄の巨人が立っていた。しかもその巨大な魔導士は、複雑な魔法陣を描き始めている。

これは……四元素魔法の禁忌、煉獄砕破か。

このサイズだとマグノリア街ごと吹っ飛ばすぞ!?

更にはジョゼが生み出した幽兵^{シエイド}まで現れる。

上等オだ……

敵は6人と雑魚数十匹、アレが完成するまでに全員ぶっ飛ばしてやるよ……!

『選ばせてやるよ……俺の兵隊に殺されるか、煉獄砕破^{アビスブレイク}で消し飛ばされるかをなア!ルーシー以外は皆殺しだア、フハハハハハ!』

うるせえよ、俺たちが選ぶのはお前らの全滅だ。

「俺、エルザ、ナツ、グレイ……あとは、そうだな……エルフマン、闘えるな?」

「お、おう……ここでやらなきゃ漢じゃねエ!!」

「ならこの5人で敵ギルド内に侵入する。まずはエレメント4と鉄竜^{くろがね}のガジルを叩く、その後5人全員でジョゼをやるぞ、いいな!？」

「ああ!」

「燃えてきたぞ!!」

「任せろ!」

「漢オ!!」

ビシツとそろろ4人の返事。

あの件以降上手く戦えないエルフマンが少し心配ではあるが、あいつはきつとここぞというところになればやってくれるはずだ。アイツの努力を俺は信じる事にする。

あとは、この指揮官だが、そんなのは決まっている。

「カナ、ここは任せる」

そう呼びかけると、驚いたような顔になるカナ。

そんなに意外かな？

だが、すぐに嬉しそうな顔になり、最終的には気合の入ったいい顔になる。

「ああ、あんたに言われたんじや頑張らない訳にはいかないね！」

さあ、全員気合十分だ。

おっと、最後に相棒にも声を掛けなくちやな。

「アルマ」

「ええ、行きましょう、トウヤ」

▼三人称視点

こうして始まったファントムMkII侵攻作戦。

各々の方法で鉄の巨人の中に入り込んだ面々は、それぞれの闘いに向かっていた。

自らが叩き斬ったジュピターの砲口からその動力室にまで入り込んだトウヤはエレメント4の1人、大火の兎兎丸ととまると対峙していた。

「私は火のエレメントを操りし、大火の兎兎丸だ。先ほどの一撃には面食らったが、あれだけの大技だ。もう魔力は残っていないだろう。速やかに料理して、別の侵入者のところへと向かうとしよう」

「すっからかんかどうか、試してみろよ……！」

▽▽▽

いくつか開いた窓から飛び込んだエルザはエレメント4のリーダーと。

「我が名は大空のエリア……エレメント4の頂点なり」

「貴様がマスターを……!」

▽▽▽

氷で作った階段を上って巨人の肩に降り立ったグレイはエレメント4の紅一点、大海のジュビアと。

「ジュビアはエレメント4の1人にして雨女……しんしんと」

その言葉に反応するかのようには、空から雨が落ちてくる。ポツリポツリと始まった雨は、瞬く間に豪雨に変わり、グレイの身体を濡らす。「悪いけど女子どもだろうが、仲間を傷つける奴には容赦しねえぞ」

▽▽▽

巨人の脚をよじ登ってきたエルフマンは大地のソルと。

「私の名はソル。ムツシュ・ソルとお呼びください」

「そつちから出向いてくれるとはなあ…探す手間が省けた」

▽▽▽

そしてナツは……

「どこだー!鉄クズ野郎ー!!」

まだ誰とも出会えずにいた。

「クツソーー!見つかんねえ!!……そーだ、いい事思いついた!耳貸せハッピー!」

ごによごによと耳打ちするナツ。それを聞いて顔を青ざめさせるハッピー。

「えええー!?」

▼トウヤ視点

「すっからかんかどうか、試してみろよ……!」

「ふん、ハツタリだな……行くぞ、ブルーファイア青い炎!!」

言いながら右腕を振り下ろしてくる兎兎丸。するとその腕の先から青い炎が迸る。

俺は両手をクロスさせて身を守りながらその炎に突っ込む。

僅かな火傷を覚悟しての行動だったが、思っていた熱はこない。むしろ、冷たいような――

腕に霜が張ってきたのを見て危険を感じ、急いで炎を抜ける。

炎に飛び込んでくるとは思わなかったのか、驚いた顔をしている兎丸に対して左の回し蹴りを放つが、大ぶりの攻撃は流石に当たらず、スウエーバックで躲かれてしまう。

「炎の性質変化……」

「ほう、さすがだな、一度で見抜くか。その通りだ、オレは7色の炎を操る男」

7色……厄介だな。

まずはあと6色がどういった効果か見極めるところからか。

そもそも7がブラフという可能性もあるが、ここはひとまず7で考えておこう。

7色と言えば思いつくのは虹の色だ。

赤、橙、黄、緑、青、藍、紫だったか。

青はさっきの冷却の炎。赤はおそらく通常の炎、もしくはそれを強化したものだろう。だが、後の5色は何だ……？

もし黄が雷速の炎なんかだったらかなり厄介だぞ。

「だが見抜いたのはこちらと同じこと……貴様、やはり魔力が残っていないな？ 炎に突っ込んできたのには驚かされたが、防御にも攻撃にも魔法を使わずに肉弾戦を仕掛けたのがその証拠だ。滑稽だな、斬魔よ」

「くっ」

「魔法の打ち消せない斬魔など恐れるに足りん、討ち取つたり！」

「――」

相手に聞こえない大きさの声でぼそり呟く。

案の定気づいた様子のない兎丸丸は、にやりと笑って左手をこちらに翳してくる。

「食らえ、イエローファイア黄の炎！」

黄色い炎がビームとなって迫ってくる。

が、危惧していたほどの速度ではない。身をねじって避けて1歩相手の方に踏み込む。

「赤い炎！」

「くっ」

通常のモノより色の濃い炎が敵の右手から噴出する。俺が移動したところへの確に追撃を仕掛けてくるが、それはこちらも読んでいた事だ。即座に飛びあがり、上から兎兎丸に強襲を仕掛ける。

「かかったな！空中では避けられまい、紫の炎！」
パルフラアアア

「くっくっ」

掛け声の後に口から紫の炎が吐き出される。

匂いから判断するに、浴びせられれば毒に侵される炎だろう。これを浴びる訳にはいかない。

それに丁度いい。

「くっくっくっ」

俺は下から迫りくる紫の炎に向けて左腕を振り下ろし、斬り裂いてしまう。

炎は霧散し、目に映るのは無防備な兎兎丸だけだ。

「おのれ、騙したな!」

腕を振った勢いに任せてその場で縦一回転、右足を大きく突き出し、相手の頭部に踵落としを浴びせかける。

「斬竜の鋭爪!」

兎兎丸の顔面が床に大きくめり込み、全身にいくつもの裂傷が走る。

「……魔力はまだ余裕だ」

小さく呟いていたのは「斬魔ノ太刀 纏の型・風牙」、1分ほどの間、あらゆる攻撃に魔法打ち消しの効果を乗せる技だ。天爪より格段に威力が落ちるが、それでも十分な程度の火力だった。

魔力が無いな!などと言いだすから咄嗟に演技をしたが、まんまと引つかかってくれたおかげで途中から笑いが止まらなかった。

危険な効果の炎も最後の紫くらいのもだったし、警戒するほどの相手でもなかったな。

さて、次はジョゼか……

「行くぞ、アルマ」

▼三人称視点

因縁のある相手、ガジルを見つけられなかったナツは、それならいつそ、とマスター・ジヨゼを探すことに決めた。

偉そうなやつがいるのは大体上の方！という大雑把な推測の元にフロントムMkIIを登っていくナツ。

幸いな事に、というべきか、色んな意味で残念な事に、というべきか、ナツの予想は当たっており、それらしきフロアにそれらしき部屋を発見するに至る。

しかし、問題だったのはそこから漏れる匂いだった。

嫌な感じのする香水の匂い——これがおそらくジヨゼだ——、元々探していた因縁深い鉄の匂い。

ここまでは良い。むしろ、ムカつく奴らをいつぺんにぶっ飛ばせると喜んだ。

他の有象無象の匂いに混じって嗅ぎなれた安心感を与える清涼な匂いが混ざっている。

「なんでルーシイがそこにいる……?!」

ルーシイが再び囚われ、地面に寝転がされていた。

ナツの声に反応しない辺り、気絶しているのだろう。

その疑問に答えたのはギルドを壊し、レヴィ達を襲った下手人たるにつつき鉄竜。

「ギヒ、来たか火竜……サラマンダー……なぜも何もオレがご招待してやったのさ。お仲間を置いてトンズラこころとしてたんでなア、どうせならウチにつてな！安心しろ。一緒にいたデブの方は知らねえがよ、こっちは大事な商品だ、殺しちゃいねえよ……」

醜悪な笑みを浮かべ後ろに引くガジル。

ナツが制止の声を上げる前に「ホラな」とルーシイの腹を蹴り上げる。

その一撃で意識を取り戻したららしいルーシイが、ゲホツゲホツとせき込んでしまう。

「デメエ……!!」

炎の塊となったナツは他のモノに目も向けず、ルーシイ奪還の為に走り出すが……

「鉄竜棍！」

「ぐはっ……！」

長大な鉄の杭へと変わったナツは他のモノに目も向けず、ルーシイ奪還の為に走り出すが……

自分でも開けた穴から悠々とナツの元まで歩み寄ってきたガジルが、悲しそうな——見え見えの演技をしながらナツを煽る。

「オレを無視するたア、寂しいじゃねえかヨ、サラマンダー火竜」

「まずはテメエからぶちのめしてやるよ……鉄竜くろがねのガジル！」

「そりゃこつちのセリフだけ……この空に竜は1頭でいい。2頭も3頭もいられたんじや窮屈でしかたねエ。お前をやったら次は斬竜だ……ソツコーで墮としてやるよ、サラマンダー火竜のナツ」

▼ルーシイ視点

「ゲホッ、ゴホッ……！」

ここは……ファントムのギルド？

腕と足に枷が嵌められていて上手く動く事ができない。

そうだ、あたし、みんなの勧めでギルドの隠れ家にリーダーと一緒に向かって……その途中でガジルに襲われたんだ。

リーダーは、リーダーは無事なの！

あたしを守ろうとして、ガジルに痛めつけられた。

一緒に闘おうって、あたしも抵抗しようとしたけど、星霊の鍵を奪われてどこかに捨てられて、手も足も出なかった。

あたしのせいだ……でも、だめ。

くじけちゃダメだ。みんなまだ闘ってる。ギルドの為に、あたしのために。

だから、あたしがあきらめちゃダメ、みんなを信じるんだ。

「起き上がったか、ハートフィリアの小娘……先ほどはよくもやってくれましたねえ」

顔を上げると、吐き気のするほど邪悪な魔力をまき散らす、ファン
トムのマスター・ジヨゼの姿があった。

冷静な風を装っているが、あたしや、どこまでも抵抗を続ける『妖
精の尻尾』への怒りが隠しきれていない。

きつと、最初に捕まっている間にかました金的がよほど効いたのね
！

正直、怖い、凄く怖い。

こんな小物、怖くない……怖くないわ！

「ホラ、その穴をサラマンダーご覧なさい。火竜のガキがガジルにブチ殺される
ところが見られますよ……良い余興でしょう？ハートフィリアのお
嬢様にも気に入っていただけかと思ひましてねえ」

言われた通り、地に伏せたままその穴を覗こうとするが、角度的に
見ることができない。

「おや、そこからでは見えませんでしたか……これは失敬、フン！」

慇懃無礼な物言いをするジヨゼによって、私のお腹が蹴り上げら
れ、移動させられる。

「うう……！」

痛い…痛くない！

そうして場所を移らされたおかげでナツの鬨がよく見える。

ナツの拳は躲され、ガジルの蹴りは突き刺さる。

今度は当たった、と思っても鋼鉄の鱗に威力をそがれ、むしろナツ
の拳にダメージが入ってしまう。

確かに今は劣勢のようだ……でも。

「ナツは負けない！ナツだけじゃない！妖精の尻尾フェアリーテイルは誰もアンタ達な
んかには負けないんだから！」

そう言っただけで睨みつけてやるんだ。

アンタなんか怖くないって！

「本当に貴様は癪に障る目をしやがる……テメエが大事な商品じゃな
かったら真っ先に殺してるところだ……このっ！このっ！！」

執拗にあたしを踏みつけるジヨゼ。

痛い、痛くない。痛いよ……痛くない！

声も漏らさないあたしに痺れを切らしたのか、あたしの首をうなじ側から握りしめて持ち上げ、部屋に備え付けられた大きな窓の前まで乱暴に運ぶ

「何が負けないだー……ようく見ろ！貴様らのゴミ団員どもが私の兵隊に蹂躪されるところをな！」

窓の下に広がる光景に息をのんだ。

かろうじてギルドの建物こそ倒れていないが、そこを守る面々で大きなケガをしていない人は誰もいない。幾人もが地に伏しており、立っている人もなぜ倒れていないのか分からない程のダメージを負っている。

「ハッ、所詮貴様らのようなゴミなどこの程度なんだよ！家族ごっこなんかしやがって、胸クソ悪い。どうです？あなたが本当の家族の元にさっさと帰らないから、偽りの家族とやらが死んでいくのだ……！」

違う、違う違う！

偽りなんかじゃない、あの人なんかより、お父様なんかより、よっぽど確かな温もりをくれるギルドのみんなが偽りなんかであるはずがない！

カナ、ロメオ、ワカバ、アルザック、ビスカ、ウオーレン、ビジター、ラキ、マックス、ナブ……みんな……みんな、負けないで。

その祈りに応えるように倒れていた人が1人、また1人と徐に立ち上がっていく。

だから、あたしは泣いちゃいけない。

必死に唇を噛み締めた。

「まけ……ない……あたしたちはぜったい、あんたたちなんか……」

ジョゼがギリツと歯ぎしりする音が聞こえたかと思えば、すぐにあたしの体は左側の壁の方に投げ捨てられ、叩きつけられる。

顔に怒りを滲ませたジョゼが気持ちの悪い魔力を噴出させながら近づいてくる。

その魔力を感じて、あたしだけでなく、周りであたし達のやり取りを見ていたファントムの連中まで震えあがっている。

「まだ言うか…本当に気に入らない女だ！クライアントが求めているのは、貴様に跡継ぎを産ませることだ…殺す訳にはいかんが、死んでさえいなければ、手足をもいでダルマにしてやってもいいんだぞ！！」

空気が一変する。今までのただ漏れていただけの魔力ではなく、明確にあたしを害すために放出された魔力が部屋中を侵す。

脅すジョゼの後ろに、黒い悪魔を幻視する。

どす黒い悪意、その波動が部屋を満たし、この男に殺されてきた人間たちの怨嗟の声さえ聞こえてくる。

その圧倒的なまでの力に、あたしのちっぽけな反抗心はあっさりと飲み込まれて、体の芯からガタガタと震えだしてしまう。

ようやく恐怖を表に出したあたしを見て悦樂を覚えたジョゼがニタリと笑い、拘束されたままのあたしの腕をつかむ。

「いやあ…いや、嫌っ、イヤー！」

嫌、怖い！！

誰か、誰か助けて！

ナツ、エルザ、グレイ…トウヤ！

「助けを呼んでも誰も来ませんよ…今頃あのクズどもはエレメント4に無残に殺されているところでしよう、くくく」

ジョゼが魔力で作った刃を右腕に宿らせ、私に向けて振り上げる。

両腕との別れを覚悟して目を閉じかけるあたしだったが、その時ダッという爆音が響く。

あたしもジョゼも驚きで動きが止まり、音のした方…床の下に視線を向ける――

「なん——ゴハア!？」

より先に、銀色の弾丸…いや、剣閃が地面を突き破り、ジョゼの顔面にぶち当たる。

ジョゼを空中に吹き飛ばし、あたしを救った銀光の正体は、トウヤの拳だった。

「聞こえた…助けを呼ぶ声…ルーシイ、もう、大丈夫だ」

言いながら振り向いて、あたしの頭に1度手を置いた後、頬に流れ

た涙をぬぐった。

もう泣かなくていい、そんなトウヤの心の声が聞こえてくるのに、あたしの涙は止まらなかった。

7話「HOME」

▼トウヤ視点

兎兎丸ととまるを降した後、突入班の他のメンバーとの合流を目標に、ファントムMkII内を奔走していた俺だったが、終ぞ誰とも出会う事ができなかった。

鉄錆の香りや、細かい機械の駆動する音で、広範囲に知覚を伸ばす事もできない。

で、あるならば、ひとまず目標をマスター・ジョゼに変更し、ファントムMkIIの制御室があると思わしき、上層に向けて移動する事にしたのだ。

どの部屋に入っても、いるのは十把一絡げの雑魚ばかり。

どこだどこだ、と這いずり回りながらも、辛うじて耳に入った轟音を頼りに駆け出す。

鉄のような硬い物を打ち付ける音、おそらくは鉄竜くろがねのガジルが戦闘に入ったのだろう。その近くにジョゼがいるかは定かではないが、少なくともガジルを相手している味方とは合流できるし、2対1で仕留めてから、再びジョゼを探せばいい。

……ナツとかエルフマンとか、2対1嫌がるだろうなあ、という事は置いておいて。

音の距離的におそらく戦闘が行われているのは1つ上の階。その程度であれば階段を探すより、天井をぶち抜いた方が早いと判断し、時には壁すら破壊しながら、音のする方へ向かう。

そして、目的の部屋の直下の部屋の隣に入ったその時だった。

「いやあー……いや、嫌っ、イヤー！」

という悲鳴が聞こえてきたのだ。

この声は――

ここにいるはずがないが、家族の声を聞き間違えるハズもない、ルーシイだ。

何故ここに、などという当然の問いすら浮かんでくる事はなく、俺の体がカツと熱くなる。

すぐに聴覚に集中すると、周囲のファントム構成員の動揺、ジヨゼの下卑た声、そしてルーシイの「助けて」という心の声まで聞こえてくる。

滅竜魔導士の常人をはるかに超越した聴覚は、ルーシイの両腕を切り落とさんと迫る魔力製の凶刃すらも捉える。

——ルーシイの腕を落とそうっていうのか？

不愛想で、目つきが悪くて、無口で……すれ違った子どもに泣かれる事すらある俺に、初対面から握手を求めてきてくれたあの手を？

不器用だけど、温かさに満ちたどこまでも優しい、繊細な人の心情描写を紡ぎ、才能を感じさせる物語を綴るあの手を？

「いつもありがとう」なんて言っただけで、自身の星霊の鍵を手入れするあの手を？

たまに見つめては「仲間のしるしなんだもんね」って優しくなでている、ギルドの紋章が入ったあの手を？

「つぎけんじやねえ……！」

ダンツと床を蹴り飛び上がる。

狙うはジヨゼの顔面だ。

天井を突き抜け、上階に突入、その勢いを乗せた拳をジヨゼにぶちかましてやった。

今度こそ、俺は家族の危機に間に合った。

△ △ △ △ △ △

「トウヤア……トウヤ、トウヤ！」

ルーシイに滅茶苦茶泣きつかれているでござる。

安心感からの涙だという事は流石に分かるが、それでも抱き着かれた上で、力いっぱい泣かれては心臓に悪いというものである。

「大丈夫だ、大丈夫だから」と幼子をあやすようにルーシイの頭をなでている間に、俺の空けた穴からアルマが上がってきた。俺たちの状況を見て少しジト目になるが、今回は仕方ないと思ったのか、1つ溜息をつかれただけでそれ以上は何も言われなかった。

ジョゼの方も、せいてんだいまどう聖十大魔道がアレでお終いつて事は流石になかった
ようで、吹き飛んでいった先の地面でのそりと起き上がってこちらを
睨みつけてくる。

目だけで人が殺せそうな勢いである。

さて、こちらでもやる事やらないとな。

「ルーシイ、アルマと一緒に下がってろ……アルマ」

「分かっています。ここで他の皆が合流するのを待ちます。ナツの方
も終わり次第回収しておきます」

さすがアルマだ。

ナツの方もじきに決着がつくだろう。

それまで持ちこたえて、他の4人と総攻撃で仕留めるのがベストだ
ろう。

ルーシイもこのままここには危ないと思ったのか、不承不承と
いった体で俺から離れていった。

「また……また貴様か、トウヤ・グレイス！ 貴様はこの手で、直々に……
塵も残さず消し飛ばしてやろう……！」

▼三人称視点

どす黒い魔力が渦巻いていく。

対抗するように銀色の光が迸る。

「風牙」

斬魔の力を全身に纏わせたトウヤが相手の方へ走り出す。

対するジョゼは手のひらを翳すだけで雷を呼び起こしてしまう。
駆け出したトウヤに向かって1条、2条と迫りくる電撃。鞭のように
撓り、大地を抉る。

右、左と体重を移動させながら避けるトウヤ。

しかし、そこに3本目の雷が空間を切り裂いて襲い来る。

先ほどの2回の攻撃は陽動。それらとは比べ物にならない速度で
迫るソレを見て、ペースが崩されたトウヤでは避ける事はできない。
しかし、そのために自分に掛けた風牙だ。咄嗟に左腕を横に薙ぎ、

雷撃をかき消してしまおう。

そのまま直進して一撃、と思った時には、逆にジョゼが間合に入ってきていた。

拳を振りぬいてくるジョゼを見て、当たるとそう確信したトウヤは急ブレーキをかける。相手の打撃に合わせて後ろに下がる事で勢いを殺ごうとするも、想定よりも遥かに速い速度で打ち込まれた拳にダメージを受けてしまう。

「くっ……」

後ろ向きに倒れながら床に手を当て、バク転して両手両足で着地、姿勢を低くして、ジョゼの追撃に備える。

ジョゼが今度は横薙ぎに手のひらを振るう。

すると、地面から天へ向かって雷が立ち上る。

それに対してトウヤが選んだのは前進だった。後ろに下がって雷の壁でジョゼの姿を見失う訳にはいかないと考えたのだ。

四肢を地面につけたまま、低い姿勢で獣のように驀進する。

迎撃のため、左手を向けて風の砲撃を放つジョゼ。

エリゴールのそれとは比にならない威力のそれを見て、風牙では突破できないと感じたトウヤは両腕を剣に見立てていなしながら、砲撃の左下を通るようにして前進を続ける。

そこでダンと左脚で踏切り、空を斬り裂く剣閃と化す。

「斬竜の槍拳!!」

渾身の右ストレートを放つも、ギリギリで身を捻ったジョゼに躲される。

が。

「ぐっ」

ザツとその胸に裂傷が走るのを見て、ニヤリと笑うトウヤ。

槍拳は貫通力を高めた拳による攻撃ではあるが、拳の周囲にも斬撃を発生させている。不可視の範囲攻撃も斬撃の滅竜魔法の売りの1つなのである。

トウヤと対称的に屈辱に顔を歪めたジョゼは1段ギアを上げて、指先から魔力弾を連発する。

先ほどの雷撃よりも更に早くなったその攻撃に対し、両手どころか脚まで使って舞うようにそれらを打ち消していく。しかし、数十発と迫る魔力弾に反応しきれず、最後の1発によって腹に小さな穴をあけられてしまう。

「うあつ」

小さく呻いた隙を見逃さず駆けつけたジョゼがトウヤに接近、先ほどあいた穴に蹴りを当てる。

たまらず吹き飛ぶトウヤ。

着地の体勢もとれていないところへ、ジョゼの放った電撃が突き刺さる。

「ぐあああああつー！」

あまりの痛みに立ち上がる事もできないでいると、ジョゼはトドメとばかりに、天に翳した右手へ特大の魔力を練り上げていく。

「これで終わりだ……デッドウエイ……なんだ？」

その一撃が放たれる直前、ゴゴゴという大きな揺れが発生する。

トウヤとジョゼが闘っていた部屋の隣から大きな亀裂が走り、そこから向こう側の建物が完全に崩壊してしまった。

「ナツ……」

それは『妖精の尻尾』の魔導士、ナツ・ドラグニルによって引き起こされたものだ。と直観的に気づいたトウヤが薄く笑みを浮かべる。

——偶然とはいえ助けられちゃったな。

▼トウヤ視点

まったく、やってくれるな、ナツの奴。

こんな派手な倒し方じゃなくてもいいだろうに……それに助けられた俺のいうこつちやねえか。

それにしてもどうするかなあ。分かってはいたけど、半端なく強いぞ、このおっさん。

マスター（じいちゃん）ほどではないにせよ、こいつも聖十大魔道の1人なんだもんなあ、そりゃ強いかな。

「いやはや全く……妖精の尻尾の魔導士、大したものだ……」

あ？なんだいきなり褒めだして……

「ファントムMkⅡを半壊せしめた火竜もそうだが、妖精女王エルザ、ラクサス、ミストガンにギルダーツ……そして斬魔。まさか一介の魔導士相手にこの私が傷を負うとは思いませんでした」

「そりやどーも……」

「いやはや本当に……本当に嫌になる……!」

回顧しつつ、嫌な事を思い出したとばかりに顔を手で覆う。

「元々幽鬼の支配者は1番のギルドだった。この国1番の魔力、人材、金!全てにおいてトップを走るギルドだったのだ。が、ここ数年で急激に力をつけたギルドがあった。それが君たちだよ、妖精の尻尾ウ……!」

まさか……まさかコイツ……

「突如現れたS級魔導士、それ以外にも粒ぞろいだ……この国を代表する魔導士ギルドは幽鬼の支配者と妖精の尻尾の2大ギルドだ、などと言う輩まで現れる始末。気に入らん……気に入らんだよ、貴様らの全てが!元々クソみてーに弱つちいギルドだったくせに!!」

そんな下らないことの為にこんな事を起こしたっていうのかよ……

!?

折れかけていた闘志に再び火が入り、無理やりに体を起こす。

「んな事の為に戦争を起こしたのか……!?!」

「いやいや、根底はそうだがね?きっかけは違う。ルーシィ・ハートフィリアだよ……この国有数の資産家の娘を引き入れるなど……貴様らはどこまで大きくなれば気が済むんだ!ハートフィリアの財力を手に入れられでもしてみろ、間違いなく貴様らは我々よりも強大になる……そんな事、許してなるものか!」

そう叫んで再び雷撃を投げつけてくるジョゼ。

こちらに避ける体力はもう残っていない。

「ぐおおおおおっ!」

でも、ここは耐える。

何としてでも耐える。

そうすれば……そうすればきつともうすぐ……

「お前……何もわかってねえよ」

「何？」

「ルーシイの今住んでる部屋に行った。俺の家より小さかった……あの子の寝床は部屋に備え付けられてる固いベッドだった……」

足音は聞こえている。

時間を稼げ、話の間を作れ。

「あの子の口から財閥の話なんて一度も聞いたことがない。誰もルーシイの家の事なんて知らないよ……」

だけど、だけどそれでも大事なんだ。

家がどうか関係ない。金なんでもつと関係ない。

ギルドの紋章をつけてあそこにいる、それだけでかけがえのない仲間で、家族なんだ。

それにあの子はとても優しい。

星霊を大事にする子だ。仲間を大事にする子だ。人の心を大事にできる子だ。

例えば、ギルドの仲間じゃなくなつて、命を懸けて守るに値する子だよ。

「俺たちと同じ飯を食って……同じ話で笑って……あそこにいるのはハートフィリアのルーシイなんかじゃない。ただのルーシイだ。妖精の尻尾のルーシイだ！お前らなんかに渡してたまるか!!」

今にも意識を失ってしまいそうな体に鞭打って、殆ど気合だけで立つ。

ジョゼは「下らん！」と吐き捨て、建物の崩壊によって不発に終わったあの技をもう1度発動させる体勢に入る。

「もういい、死ねっ！デッドウェイブ!!」

魔力の漲る右手で地面を叩くと、そこから怨嗟の魔力が噴き出て、床を割りながら俺の命を奪わんと迸る。

——だが、間に合った。

「斬魔ノ太刀 断の型・天爪……斬竜の……刀牙！」

その一撃を叩き斬って力いっぱい空中に飛び出す。

「な!?まだそのような魔力を残していたのか!?!」

残つてねえよ、気合で捻り出してんだよ。

それより良いのか?

そこに居ると切られちまうぜ?

「天輪・繚乱の剣!!」
ブルーメンブラット

ジョゼの後ろの位置にあつた扉から白い影が踊りだし、数多の剣による斬撃を繰り出す。

無数の剣を後光のように背に負う白い鎧、天輪の鎧を纏ったエルザだ。

エルザだけではない。次々と扉から突入してくる妖精の尻尾の魔導士たち。

「アイスメイク ッハンマー
大槌兵!!」

「漢オオオオオオオオ!!」

空中から氷で出来たハンマーを落とす、なぜか半裸のグレイ。

謎の掛け声とともに殴りかかるエルフマン。全身が魔物のように変質しているのを見るに全身接テイクオーバー 収の制御に成功したのだろう。1つ壁を超えたな……

他にも、攻撃には参加しないまでも応援に駆けつけてくれたハツピー、アルマ、ルーシイ、なぜかミラまで見える。

不意にルーシイと目が合う。

「勝つて、トウヤー!」

——任せろ、ルーシイ。

空中で回転し、ジョゼに向けて右足を伸ばす姿勢になる。

「エレメント4が貴様らクス相手に全滅したというのか!?!」

そう驚愕しながらも、何とかエルザの剣を躲し、グレイのハンマーを壊し、エルフマンの突進をいなす。

その身のこなしは見事の一言だが、しかし、最も気をつけなければならぬ男からは目を切ってしまったていた。

残り少ない魔力を全開放、銀に光る斬撃と化しながらジョゼの元に落下する。

「滅竜奥義…:斬覇撃竜槍!!」
ざんぱげきりゆうそう

裂帛の気合と共に放たれた、竜をも貫く槍の如き蹴りはジョゼの腹へと突き刺さった。

▼三人称視点

「ハア…ハア…」

満身創痕という体で息を吐き、地面に倒れ伏すトウヤ。

そこに駆け寄るルーシイとアルマ。

「ちよ、大丈夫、トウヤ!？」

「大丈夫ですか!？」

大袈裟に心配するもんだ、と感じたトウヤは「フフ」と笑ってしまふ。

「気が抜けただけだ…」

大袈裟とトウヤは思っているが、いくつかの打撃痕に、雷撃よって全身に負った火傷、腹には穴があいており、血まみれであることを考えれば、まごう事なき重傷である。

「…みんなもよく来てくれた」

「当たり前だ。というか、お前が独断専行して突っ走ったんだろう。本来はここで合流の予定だった」

「つーかくつつちゃべってる場合じゃねえだろ。ここもじき崩れる、さっさと行こうぜ?」

「ならオレがトウヤを運んでいくぞ」

「オイラはナツを回収してくるよ!」

そうして今後の方針が決まっていこうとしていた時、ガタリという音がして、ジョゼが吹き飛んでできた瓦礫の山が動く。

全員の視線が向かうが、そこには全身から血を流して、息も絶え絶えに立っているジョゼがいた。

「ハア…ゼエ…まだだ…まだ終わっちゃいねえぞ…」

星霊の鍵を失っている状態のルーシイや、満身創痕のトウヤ、そもそも攻撃力のない猫たちを除けば、誰でもトドメを刺せる状態であるにも拘らず、あまりのその迫力にたじろいでしまうエルザ達。

「貴様…まだ動けて……」

いち早くその空気から抜け出し、再び鎧を纏おうとエルザが1歩踏み出した時、それを止めるかのように声を出す人影があった。

「いいや、終わりじゃよ」

それは小さい体に収まりきらない威圧感を纏う『妖精の尻尾』マスター、マカロフ・ドレアーであった。

「じーさん!?!」

「何でここに!?!」

エルフマンとグレイが驚きの声を上げる。

「みな、よくやってくれた。ワシやあ情けないわい……ガキどもの力だけでファントムをここまで追いつめてるって時に寝てただけはもう」

1歩また1歩と進むマカロフ。

余人に発言する間を与えない凄みを放っている。

「ジョゼ・ポーラ…貴様が正しい事にその魔力を使っていれば魔法界の発展にもつながっていたであろうに……」

「説教のつもりか!?!」

魔法によって徐々に巨大化していくマカロフの体。

ただ静かに言葉を続ける。

「妖精の尻尾、審判のしきたりにより、貴様に三つ数えるまでの猶予を与える……」

怒れる神の如き形相でジョゼを睨みつけた。

「ひざまずけ!」

「は?」と不可解そうな声を出すジョゼ。

その眼にはいまだに闘志が消えていない。

「一つ」

「ひざまずけど……この私に……?」

マカロフは手のひらと手のひらの間に莫大な魔力を集中させていく。

「二つ」

「幽鬼の支配者だぞ?!?王国一のギルドだぞ!!?どうして貴様ら……とき

にどうして屈さねばならぬ!？」

余りの興奮に頭からピユツと血を吹き出すジヨゼ。

巨大な手の平の間での魔力の収束は未だ止む気配がない。

「三つ」

「これで勝ち誇ったつもりか、妖精の尻尾フエアリーテイルウウウウウウウウウウ!!!」

手のひらを合掌の形で組んだマカロフは、躊躇うことなく手元の魔力を解放させる。

「そこまで」

瞬間、マカロフの周囲から魔力の光があふれ出す。

「妖精の法律、発動」

その言葉と共にマグノリアは閃光に包まれた。

その眩さは、ジヨゼにある一言を連想させた。

「裁き」

しかし、『妖精の尻尾』、並びにマグノリア住民でそのような事を感じる者は1人もいなかったことだろう。

温かい光。

優しい光。

父の抱擁のような熱が、あらゆる人の体を包み込んだ。

——『妖精の尻尾』に敵対した人物を除いて。

術者が敵と認識した者だけを討つ超魔法、妖精の法律フエアリーロウ。

これにより、ジヨゼが生み出した幽兵シユイドは1体残らず塵となり、ジヨゼは真っ白な灰になって燃え尽きた。

普段通りの大きさに戻ったマカロフは、その場にいた子どもたちの方へ振り返り、いつも通りの人好きのする笑顔を浮かべた。

「さあ、ワシらの家へ帰ろう」

8話「父」

▼トウヤ視点

その後の話。

じいちゃんの妖精フェアリーロウの法律を見た後、間もなく気絶してしまった俺は、そのまま病院へと運ばれ、治療を受けた。

まだ身体が痛いというのに呼び出されたと思ったら評議員の部隊がいて、取り調べされる事になった時は若干殺意が湧いた。

とはいえ必要な事ではあるので大人しく従い、あちらから手を出してきたのだという事を強調しつつ、今回の件での俺の行動を説明した。

フロントムの支部の半分を文字通りにぶっ潰したその足でジュピターを受けとめ、ジョゼと喧嘩をした、と言ったら大分引かれてしまったが……

そうこうする間に1週間、やっと一息つけたところだ。

結局ギルドは建て替える事になった。

幽兵シエイクの侵攻からは守れたものの、そもそもの老朽化に、ガジルにやられた傷の深さを鑑みると、補修工事を繰り返すより、いつその事建て替えた方が早いという結論に達したようだ。

死ぬ気でギルドを守り抜いたカナ達としては、守った場所を自分たちで解体工事する、という事に大分複雑そうな表情をしていた。しかし、幽兵に好き勝手されなかつたおかげで無事に残った柱を新しい建物にも流用する事や、マスターじいちゃんの言葉を聞いて納得したようだ。

「確かに建物は大切じゃが、形あるものはいずれ朽ちる定め。本当に大事なものは全員無事だったんじゃ、この際、みながより快適に過ごせる環境作りに勤しむのもよかろう。なに、建物との思い出は心に残っておる」だそうだ。

じいちゃんがそのままノリノリで書いた新ギルドの図面が、まったくもってあてにならない下手さだった事はご愛嬌だろう。

今はギルド一丸となって土木工事に従事しているところだ。

俺もケガが治り次第に木材の斬り出しなどで役に立つつもりだ。

他に特筆すべき事と言えばロキが死にそうな顔になりながら、街中からルーシイの紛失した鍵を探しているという事と、ナツがガジルを降した後に聞きだしたドラゴンについての情報を教えてもらった事だろうか。

前者は、隠れ家に避難している最中にルーシイが襲われたという事実に責任を感じての事みたいだ。個人的な理由で避けていたからって。

後者については、ナツのイグニール探しの一環だ。勿論俺だってセルバルドを探している。それで、聞けた話によると、ガジルもドラゴンに滅竜魔法を教わったという事らしい。そして、ガジルのところのドラゴン、メタリカーナも、イグニールやセルバルドと同じ、7年前、777年7月7日に消えてしまったそうさ。その日に一体何が起きたというのだろうか。

あとは、最後に残されたやるべき事の為に依頼した調査の結果が今朝到着した事くらいだろう。

これを読みこんで、用事を終わらせに行ったら皆と一緒に新ギルド作りをしよう。

▼ルーシイ視点

あの戦争から1週間が経った。

事件後のごたごたで忙しくなり、結局うやむやになっていたことを片付けようと思う。

凄く怖いけれど、今なら向かい合えると思うんだ。きっと、帰るべき場所ができたからなんだろう。

ね、ママ。

あたし、言いたいこと言ってくるよ。

ギルドの誰にも告げずに乗った列車の中で決意を固めたその時、目的の駅にたどり着いた。

最小限の荷物しか持っていなかったあたしはすぐに降りて、ホームを抜けてしまう。

見つけた道を歩く。

旅に出た時——家出した時は、この道を逆向きに歩いたんだよね。つて、当たり前か……

でも、そんな事まで感慨深く感じてしまう。

きつと、この家はそれだけ——それこそ見た目の大きさ以上に——私の中で大きい存在なのだろう。

大きな屋敷の大きな庭に足を踏み入れる。

あはは、ホントに……今の家とは全然大きさが違うなあ、笑っちゃう。

「お、おおお、お嬢様——っ!?!」

敷地に入った途端、大声を上げてスペットさんが駆けつけてくれる。

大泣きしながらあたしに抱き着いてくれる。

庭中から、従者小屋から、屋敷の中から、本当に沢山の人が現れる。

リボンさん、エイドさん、ベロ爺にコネル君、トミーさん……みんなみんな「おかえりなさい」と言ってくれる。

ああ、ここにだつて、こんなにもたくさんの方々がいたんだ……

やっぱりあたしはもう大丈夫だ。

こんな優しい人たちと別れるのは辛いけど、沢山の勇気をもらった。

と、改めて覚悟を決めていたところに、スペットさんがおずおずと、涙をぬぐいながら「あ、あの……お嬢様？」と声を掛けてくる。

すると、あたしの周りに集まっていた皆が何か思い出したような顔になり、急に空気が不穏になる。

「あのお……先ほど、お嬢様の家族、と名乗るお客様がこの家にやつてこられました……今、旦那様とお話をなさっているのですが、どんなご関係でいらつしやるんでしょうか、お嬢様?……まさか私たちの知らない間にご結婚を……!?!」

はあ!?!?

ど、どういう事!?

か、家族つて事はギルドの誰かよね?

こんな暴走をするのはナツね!

「そ、それってまさか桜色の髪の毛の……？」

「え？い、いえ、灰色の髪の毛の寡黙な方でしたが……あ、一緒にいらつしやった猫様は桜色の見事な毛並みをしていらつしやいました」

「ちなみに、今は従者小屋の方でお魚をお召し上がりになっておられます」

ちよ、それアルマでしょ!?

灰色の髪で寡黙って……

何してんのトウヤ!?

こうしちやいられない、すぐに話してるところまでいかなきゃ!

△ △ △ △ △ △

「あなたの事、調べました」

その場にいた皆と、急いでお父様の書斎の前までやってきた。

しかし、なんとなく乱入する気にはなれず、どんな事を話しているのか気になってしまったあたし達は、全員で書斎のドアに耳を当てて盗み聞きする事にしたのだ。

「始まりは商業ギルドLOVE & a m p LUCKY、そこで行っていた事業が軌道に乗り、当時付き合っていたレイラ・ハートフィリアと共に独立……元々良家であったハートフィリア家に婿入りする形で結婚。いくつもの事業での成功で得た金と、家の資産を用いてハートフィリア鉄道を興し、1代でハートフィリア家を財閥と呼ばれるまでに押し上げた」

お父様、婿入りだったんだ……

あたし、本当にお父様の事何も知らないんだなあ。

「何が言いたい？」

「LOVE & a m p LUCKYに居た頃の話だが、当時のあなたの仕事の仕方は、まず地元の関係者との信頼関係を築くことから始まるという。人に密着した事業で、奥様と二人三脚で大きくなっていった」

「古臭いやり方だ……あの頃は若かったのだよ」

あのお父様がそんな事してた時代があったんだ。
ていうか、今日のトウヤめちやくちや喋るわね。

「トウヤは怒っている時と、長い時間をかけて話す事を決めている時はよく喋りますよ。今回はここまでの道中ずっと考えてたみたいで
す」

そうコソコソと教えてくれたのはアルマだ。

あたしが屋敷に入ってきたのを従者小屋から見て、追いかけてきた
のかもしれない。

「そーなんだ」

「あとは酔っている時も饒舌です」

え、酔わせてみたいかも……

そういえば普段飲んでるのも、お酒じゃなくてフルーツのジュース
らしいもんね。

おっと、トウヤが続きを話し始めたみたい。

「独立、結婚してからも、規模が大きくなった分取りこぼしは増えただ
ろうが、当初は基本方針そのままに営業していた。しかし、あなたは
次第に金の魔力に取りつかれ、徐々に周りを顧みないビジネスを行う
ようになった」

「さつきから何なんだ貴様は!?! つまみだされたいのか!?! ルーシイの事
で話があるというから聞いてやっているのだぞ!!」

激昂するお父様。

今となっては、星霊を使える私の方が力は強いつて分かっているの
に、それでも凄く怖いと感じてしまう。

「あなた方では俺を排除できません……続きです。その方針が決定的
になったのは奥様が亡くなった事です。その頃から、どんな人間も道
具としてしか見なくなりました。自分の娘すらも」

「だから貴様は結局何が言いたいんだ!?! さつきからくどくどと人の家
の事にとにかく言いおって! 貴様には関係ないことだろう!!」

「そんなことない。家族の家族の事だ!」

家族の家族、か……

トウヤってホントにギルドの皆の事を大事にしてるよね。

なんだか、その優しさが今、あたしだけに向いてると思うと、凄く心がぽかぽかしてくる。

「何が言いたいのか、と言えば……人の心を蔑ろにする人は、人の心に足をすくわれるぞ、という事だ」

「何……？」

「あなた、凄く恨みを買ってる。今、サザーラント商会の方で、ハートフィリア鉄道買収の動きがある。私財まで担保に出しているでしょう？……このままだと破滅します」

「な、なんだと!?!」

バサツと紙をひったくるような音が聞こえる。おそらくトウヤの持っていた資料が何かを取ったのだろう。

この言葉には使用人の皆もざわついている。

「こんな事が……ふざけている……!」

「今回の事もそうだ……ファントムが俺たちにどんな感情を持っているか、ろくに調べずに依頼しましたね？ ジョゼは『子どもを産める体ならいい』とルーシイの四肢を腕ごととしていた」

「なに!?!……そ、そんな事は頼んでいない!!」

よかった……

そうだよね、自分の娘の腕を切っても良い、なんて流石に言わないよね、お父様でも。

「あなたは……もう一度目を開くべきだ。悲しみから逃げているだけでは、もう一度失う」

その言葉に、お父様が息を呑む音が聞こえる。

「目を開いて人の心を見れば、ルーシイが持つ価値が分かる。あの子の価値はハートフィリア家の一人娘だ、なんて事だけじゃない……あの子はとつても優しい子だ。滅茶苦茶やってばかりの俺たちを大事にしてくれる。奴隷のように扱う魔導士すらいる中で、星霊を友のように扱う。目つきが悪くて、無愛想な俺に初対面からよろしくって握手までしてくれた」

「人の痛みが分かる子だ。苦しむ誰かを見て涙を流せる子だ。父が帰ってこないと泣く子どもの為に立ち上がった子だ」

「目を開いてあの子を見て、あなたはまだ、ルーシイをただの馬鹿だと、小娘だと笑えますか？……人の心は、別の誰かの心を動かす。少なくとも今回、俺を動かした。ファントムからルーシイを守るために、ギルドの皆が動いた。この力を笑いますか？」

「俺はあなたの事を、諜報ギルドに調べてもらった資料の文面でしか知りません……だから、これはただの憶測ですが、あなたが奥様に惹かれたのは、そういうところだったんじゃないですか？……少なくとも、ハートファイリア家の娘だったからじゃない！」

あれ…何か、頬が濡れてるや……

この人は……あたしを見てくれてるんだ。

ギルドのみんなはあたしという人格を愛してくれる。

こんなに嬉しい事はない。

「もし……あなたが、もう1度ただのルーシイを見つめてくれるなら、俺は……俺は、1度2人で話してみたいと思う」

あたし、もうお父様と話す事なんてないと思ってた。

だけど、もし、もしやり直せる目が少しでもあるなら……

「俺は……血のつながった父や母の顔を知りません。育ててくれた父も今はどこにいるか分かりません。でもあなた達はそうじゃない。お互いが今どこにいるか分かっているでしょう。だから……」

泣きそうな声で語るトウヤ。

「父」という言葉は、トウヤにとってもとても重いものだったのだろう。

ゴシゴシと目元を拭う音が聞こえた後、毅然とした声を取り戻す。

「もし、それでもあなたがルーシイを狙うというなら、ギルドを抜けて、犯罪者になっても、俺があなたを潰します……」

すうーはあーと息を吸う音が、広い部屋にこだまする。

「ルーシイは俺が守る」

その言葉にあたしの胸がきゅうと締め付けられる。

え、なにこれ、やばい、すごい……うあああ、顔が熱い！

ダメだ、全然話が頭に入ってこない！

長い沈黙が広がる書齋とは裏腹に、あたしの心臓は破裂しそうなくらいうるさく鳴っている。

「……………出ていけ」

「あなたは……………」

顔の火照りを抑える為に手で顔を仰ぐ。

周りの皆もめちやめちやニヤニヤしている。

アルマだけは「まったく……………」という顔をしているが。

「勘違いするな。娘と……………話をするためだ」

「は!?!」

「入ってきなさい、ルーシィ」

と、何か声を掛けられた。

え!?!は!?!バレてたの!?!

どういう話の流れ!?!聞いてなかった…………

と、兎に角入らなくちゃ…………!

「え、えと……………ただいま帰りました、お父様」

おずおずと扉を開けて書齋に入るあたし。

すると、聞かれているとは思っていなかったらしいトウヤの顔が、トマトのように真っ赤になっていく。

次の瞬間には「し、失礼します!」と言って走り去ってしまった。

「何も告げず家を出て申し訳ありませんでした。それについては……………」

無断の家出という形をとった事を反省しているのは本当のことだ。

もつと他のやり方もあったのではないか、と思う。

だって、それは逃げたのと同じことだもの。

しかし、お父様はその言葉を遮るように言葉を紡ぐ。

「お前を連れ戻そうとしたのは、縁談がまとまったからだ」

縁談……………政略結婚って事だよな。

「ジュレネール家のサワルー侯爵だ。この婚姻でハートファイリア鉄道は南方進出に踏み出す事になる」

サワルー侯爵。

あの、あたしを見る目つきも、何かと動く手つきもいやらしい感じの人だ。

正直、凄く苦手な相手。

「だが……やめだ」

「！」

「悔しいが、あの男が持ってきた資料は本物だ。遠くない内にハートフィリア鉄道は買収されるだろう。当然、阻止するために動きはするが、買収されるかもしれない事業を拡大する馬鹿はどこにもいない」
立っていたところから執務机の椅子まで歩き、ドスツと座り込んでしまう。

膝に肘をつき、手のひらを組み合わせて、下を向きながら訥々と話を続けるお父様。

「あの男の話を聞いて……レイラと出会った時のことを思い出した。あの頃のアイツとそっくりだよ、お前は。フ……そんな事も忘れていたか、私は」

「いや、違うな……お前の顔すら見ようとしていなかったのだろう」
じゃあ、今ならあたしを見てくれるの？

あたしの誕生日を覚える事もせず、口を開けばハートフィリアの跡取りの事しか言わなかったあなたは違うの？

「あたしは……あたしはあなたを許せません。あなたはあたしの仲間を傷つけすぎた」

「そう……だろうな」

だから、さよなら。

そう思ってた、マグノリアを出た時は。

「でもそれは、今この瞬間の話です」

「！」

お父様が弾かれたように顔を上げる。

「あたしにとって今一番大切なのは、あたしという人格を認めてくれる場所。そして、そこに居る仲間たちです。だから……仲間のお願いは聞いてあげたい」

「それに、あたし自身、ママが愛したあなたがどこかに残っているとい

うなら、会ってみたいんです」

だから……

「あたしはあたしの道を行います。もしママが生きていたら、『あなたの好きなことをやりなさい』って言って言ってくれると思うから」

きつと、そう。

ママと一緒に居られたのは本当に短い間だったけど、ここで過ごしたその時間は、今でもあたしの、かけがえのない宝物。

「だから、あなたの道が、再びわたしの道と交わるというなら……」

「ああ、今度は私自身が会いに行くよ……約束する」

今はここまで。

お父様はまだ一言も謝ってくれなかったけど、きつと時間の問題だ。

いずれにせよ、もうあんな事はしないだろう。

甘いかもしれないけど、トウヤの言葉を聞いたなら、確かにそこに居る父親と、さよならするなんて悲しい事できなくなっちゃった。

「話は終わりだ。これから忙しくなる……なにせ、私は全てを見直さなきゃならない。事業も、私自身の事も、な」

そう言ってお父様は薄く笑う。

初めて見るような優しい——なんとなくママとだぶる——笑顔だが、その顔がすぐに曇ってしまい、申し訳なさそうに、緊張しながらこちらを伺う視線に変わる。

どうしたんだろう？

「あ、あのだな……最後に質問なんだが……さっきの彼とはどんな関係だ……？」

ちよっ、デリカシー!?

ちよつと和解の目が出てきたからって、すぐ父親面しないでよ!!
……でも、そう、この質問の答えは決まっている。

これも今はまだ、だけど。

「大切な……とっても大切な家族なかま、だよ!」

あたしは、満面の笑みでそう言った。

▼トウヤ視点

やあっちまったくくく!!!

はっず、うわはっず!!

本人の前で「あの子は優しい子だ! (キリッ)」とかやってたのか俺エ!?

思わず逃げ出してきたけど、その時目が合った使用人の皆さんに全力でサムズアップされたし。

めっちゃニヤニヤしてたなあの人ら……

緊張しまくりで嗅覚も聴覚も全然機能してなかったもんねえ。あんなに大勢に盗み聞きされてたら、普段なら気づくのかなあ。

でも仕方ないんだよ……ルーシイパパすっごい怖かったんだもん。

やっぱ財閥の長とか、威厳が違うよね、威厳が。

殴ってお終いって世界に生きてない人を相手にするのは俺には荷が重みたいだ。

この後ルーシイに会うの滅茶苦茶恥ずかしいよなあ。

でも、アルマを置いていく訳にもいかないし、と、やたら広大なお庭の隅で縮こまっている事にした。

「あつ、こんなところにいた!」

「大丈夫ですか、トウヤ?」

どうやらルーシイとアルマに見つかってしまったようだ。

……正直、もう少し放っておいて欲しかった。

合わせる顔がないので、まだ顔は上げない。

「その、さ……ありがとね、トウヤ。あたしの事、よく見てくれてるって分かって、すっごく嬉しかった」

ありがとうって言うってくれるのか?

余計な事してんじやねえよ、普段暗い癖に熱弁しちゃってプギヤードかじゃなくて?

えっ、ホント優しい。ルーちゃんホント優しい。す……

「あたしの事守るって言うってくれた時、カッコよかったよ」

うあああ、顔が熱い!

カッコいいとか言われた事ねえよ！

「も、もう……こっち向いて？」

両手で俺の顔を挟み、無理やり上げさせたルーシイの顔は予想より遙かに近く。

うわあ、やっぱ凄く可愛いよな……まつ毛とかめっちゃ長い。あと、凄く良い匂いする。花みたいな。

そうしてルーシイに見蕩れていると、その形の良い唇から、さらに言葉が紡がれる。

「これは、その……お礼！」

そう言ったルーシイは、グイツと顔を近づけ、最後には距離をゼロにする。

俺の頬から「ちゅっ」という音がした。

そこから先の記憶はない。

呆然としながらも、ルーシイママのお墓参りに行き、いつの間にか合流したナツ達と一緒に、帰りの列車に乗った時、乗り物酔いの気持ち悪さでようやく意識を取り戻したくらいだ。

ちなみに、ハツとして辺りを見回した時に目があったルーシイの顔は真っ赤だった。

……そんな反則やん。

間話①

9話「宴」

▼トウヤ視点

ルーシイ事変（俺の中のみ呼称）から数日が経った。

評議院にマスターじいちやんが呼び出され、今回の戦争についての裁判が行われたが、『幽鬼フアントムの支配者』は解散、ジョゼは聖十大魔道の称号剥奪が決まった。肝心の『妖精の尻尾』の判決だが、なんとまさかのお咎めナシとなった。評議員きつての『妖精の尻尾』擁護派であるヤジマさんを中心に行われた弁護の結果だそう。本当にヤジマさんにはお世話になりっぱなしで、足を向けて寝られない。

特に今回の件では、フロントム支部を回る移動中に全力を出したせいで街道に亀裂を走らせまくった事や、各地の支部にいたフロントム構成員への報復の過激さ（体に風穴をあけたり、四肢を斬り離したり）について俺への嚴重注意が出ていたらしく、その点の弁護がかなり面倒だったらしい……

裁判から帰ってきたじいちゃんはヤジマさんからの伝言を預かっていたが、曰く「普段の手のかからなさで帳消しだ」だそう。

俺はクエスト中にこちらが一方的に悪いようなトラブルを起こす事は少なく、『妖精の尻尾』イチの穏健派という評価を受けているのだが（その反面「地味」と言われて週刊ソーサラーなどで取り上げられる事も少ない）、それがいい方に運んだようだ。元々は、対処が面倒だから、とできるだけ穏便に済ます努力をしていただけなのだが、これからは一層面倒事を減らせるように注意しよう。

ギルドの建て替えも大分進んできた。

当然俺も建築に協力し、もう木材は見たくない、という程に樹を切り倒し、凶面通りの形に製材したものだ。その成果か、早くも1階部分の骨組みが完成した。

また、仮設ではあるがカウンターも作られ、クエストの受注が再開されている。

現金なもので、普段は酒を呑んでいばかりいる連中まで依頼板クエストボードに群がっていた。ギルドの形が無くなってしまうたせいで「ギルドらしい」事に飢えていたのかもしれない。

さあ今日も元気に土木工事だ！と意気込み、アルマと共にギルドまで来た俺は今、なぜかカナに迫られていた。

「今日こそ、私の酒に付き合ってもらおうよ！」

ええ…なんでえ…？

ギルド作ろうよ……

俺は酒に弱いのである。

それはもう、少し飲んだだけで記憶が飛んでしまうレベルな訳だが、アルマからは「酷い有様でした」と言われた事がある程だ。

フィオーレ王国では16歳から飲酒が可能になる（ちなみにカナは13の時には既に呑んでいた）ため、誕生日が分からないなりにカナが16になる年、つまり2年前の7月7日を16の誕生日だと勝手に定め、酒宴を行ったのである。そこで俺が酒に弱い事が発覚した訳なのだが、俺は記憶がないし、何があつたのか聞いてもどうにも皆歯切れが悪い。色んな人に「聞かない方がいい……」とはぐらかされ、終いにはアルマ（当時4歳）にまでも「トウヤはできるだけ呑まない方がいいです」と言われる始末であつた。イメージがどうか言つていたが、一体俺は何をしてしまったのだろうか。

結局俺はアルマの言いつけを守り、それ以来1度も飲酒していない。しかし、その事件から少し経つたある時、確か1度目に受けたS級試験に落ちて、とある「約束」をカナと交わした後あたりから、カナはしきりに酒に誘うようになったのである。

いつものように「俺と呑んでも楽しくないだろう」と躲そうとしていたのだが、少し離れたところで聞いていたらしいエルザの「ほう、それはいいな」という鶴の一言によって、瞬く間に包囲網が形成されてしまった。

ここが年貢の納め時か、と1度溜息を吐く。

「分かつたよ……」

そう答えると、カナは花が開いたような笑顔になり「本当かい!？」と

何度も確認してくる。周りの連中も「今夜は宴だー！」と盛り上がる他、「トウヤが呑むらしいぞ！」と伝言しに行っている奴までいる。事態を呑み込めずポカーンとしているのは、ルーシイを含む、2年前にはギルドにいなかった新参メンバーだけだ。

「はあ……」

もう1度溜息を吐く。

俺が？ んでるところなんか見て何が楽しいのかねえ。

俺としては、次の日に頭痛で何も手がつかなくなるから嫌なんだけどなあ。

▼三人称視点

トウヤが呑んだ時の事を惨劇だったと捉えているのは、実を言うところアルマだけであった。

他の連中は逆に「面白いものを見た」という感情を抱えているほどだったのだ。

ではなぜトウヤはそれを惨劇として捉えてしまっているのか。それはアルマによる善意の言いつけと、皆のちよつとした悪意の示し合わせが原因であった。

酒を呑むと、少し恥ずかしい姿を晒してしまうトウヤだが、どうやらその間の記憶を失ってしまいうらしい。その事に気づいた瞬間、『妖精の尻尾』の団員には暗黙の了解が生まれた。もう一度あの姿を見たいが、どうなるかをトウヤに言ってしまうえば、おそらくもう二度とトウヤは酒を呑まないだろう。ここは一旦はぐらかしておいて、次回の酒宴を狙おう、という訳である。

逆に、素直にトウヤのイメージを心配したアルマだけが「もう呑むな」と言った訳だが、他の連中はボカすだけで呑めとも呑むなど言わなかったのだ。また、アルマもトウヤがショックを受けることを危惧して、酔ったらどうなるかを教えられずにいた。

その結果、「俺は呑むと皆が口を閉ざすほどの惨状を引き起こす」という勘違いをトウヤに産んだのである。

では、酔ったトウヤがどうなるかというところ……

「大体お前はだなく、格好がえつちすぎるんだよなあ……ヒツク！聞いてんのか？カナ！」

心の声が駄々洩れになってしまうのである。

ちなみに、「俺もグレイのマネすりゆく」と言つて、既に上半身は裸であつた。

その鍛え上げられた肉体を見たルーシイなどは酒以外の理由で赤くなつてしまつている。

「おい！ロキ!!お前なんで俺のこと避けるんだよおく?」

次に標的になつたのはロキであつた。

一方的にロキがトウヤを避けているために、この絡みは珍しいと盛り上がる一同。

呼ばれたロキはと言えば、肩に手を回された状態で若干ビビリながらオロオロとしている。

「い、いや……僕にも事情があつてね……本当に申し訳ない」

「なんだよおくヒツク、俺はこんなにお前の事尊敬してるのにさあ……！」

そう言いながらロキの胸に指でのの字を書くトウヤ。

気持ちの悪い仕草に困惑すればいいのか、意外な本音に興味を示せばいいのか分からずにいるロキ。

「おれはさう……こんなさう?口下手だからよおく……お前みたいに女のこを楽しませられる話芸?みたいな凄いなあ……つてよおおお……俺もモテてえなあああ……」

思いのほかしようもなく、かつ切実な願いに笑う一同。

「イケメンと言えましょう!お前だグレイ!!お前も男前だな!ヒツク……」

いきなりキレ気味に褒められて困惑するグレイ。

いつの間にかロキに巻き付いていた腕を解き、グレイの隣にやつてきている。

「お前なあ……!お前が脱いでも許されてるの、男前だからだぞ!俺がやったら犯罪だからな!つたくよおく」

「いや、グレイがやっても犯罪だから！」

と突っ込むルーシイの声に反応するのは外野ばかりで、己の言いたいことを気持ちよく言っているトウヤには届かない。

「ナツ!!」

「おう!なんだ!?!」

全力で呼ばれたナツは、同じく全力で答える。

「ガジルぶっ飛ばして、少しだけセルバルド達に近づいたな……絶対、絶対見つけようなア！」

「当たり前だア！」

肩を組みながら、「ナツ!」「トウヤ!」と叫び合う滅竜魔導士ズ。

「次は……エルフマンだ!」

「お、オレか!?!」

いつの間に順番制になったのか。

「お前よかったなあ……全身接収^{テイクオーバー}、制御成功したな! ホントよくやったよお前え〜!」

と、自分よりも身長が高いエルフマンに対し、弟に接するように頭をなでる。

「お、おう……!」

よく分からない流れでいい感じの話がぶち込まれ、テンションの高低差に複雑な気持ちを抱きつつも、褒められたことを素直に喜ぶエルフマン。

「でも『漢』ってのはよくわかんねエ!!」

しかし、次の瞬間には雑に斬って捨てられるのだった。

「レビイ!レビイはいるか!?!」

「ふえっ何々!?!」

ほろ酔いでボーっとしてきていたレビイが、話しかけられた事で覚醒する。

「お前もなあ……ホント良かった。傷が残らなくてき……ヒック、お前すっごいかわいいんだから、そんな事になったら、もう俺あ耐えられないね!」

「トウヤ……」

少し感動的な表情になるレビイとは対照的に「かわいい」という言葉に強く反応を示す女性陣が数名。

「ねえねえ、トウヤ！私の事はどう思ってるの？」

そう切り込むのは真っ白な肌を、酔いで少し赤く染めているミラジエーンだ。

「ミラはなあ…ヒック、うい……」

溜めを作りがてら手元のジヨツキを傾けるトウヤ。

「お前はいい奥さんになるよなあ……昔の気の強いミラも好きだったけどよ、今のお前はもう嫁さんだよ、嫁…将来の旦那さんが羨ましいよお……」

「あら、嬉しい事言ってくれるのね……ふふ、まだ旦那さん候補は空いてるわよ？」

「ええくじやあ立候補しちゃいます！」

その言葉は流石に捨て置けなかったのか、周りのおっさんどもが「オレもオレも〜！」と手を挙げていく。

「むむむ」と嫉妬しつつも、自分から聞き出す流れを作ってくれた事に感謝もするルーシイやカナ。

「では私はどうだ？」

自信満々で質問したのはエルザだ。

「何話しかけてんだテメエ!!」

「な、なに?!?!」

まさかの返答に、エルザは割りと真剣にシヨツクを受ける。

周りも流石に「どうしたどうした」とざわついてしまうが……

「好きになるだろ?!?!」

安定の酔いトウヤ品質であった。

「普段お硬い鎧ばっか着てるくせによお…実はかわいい服にも換装できるとかギャップの塊かよ…いつもの凜とした表情もいいけどよう、ヒック……ふとした時に柔和に笑うのとか、お前アレだぞ、妖精の法律かソレかってぐらいの破壊力だぞ……?好きになるだろ?!?!」

「え、お、おあ……お、おう」

このストレートな言い様には、さしものエルザも目を泳がせてしま
う。

「はいはい！私はどうなんだい？」

と、その流れを断ち切ろうと、なぜか若干のセクシーポーズをしな
がら問うカナ。

「好きになるだろ?!？」

「ふえ…?」

デジャブであった。

違いがあるとすれば、エルザに比べて遥かに速く、遥かに赤くなっ
てしまった点だろう。

質問しに行った時の勢いはどこへやら、である。

「姉御肌のクセして実はちよつと打たれ弱いとか、可愛いかよ！守り
たくなるだろ!？」

「んう……!」

「普段酒飲んでばっかで不真面目な感じなのに、ギルドの事になると
凄く一生懸命なのとか！応援したくなるだろ!！」

「はう……!」

「エロいカツコして経験豊富ぶってるクセに彼氏いたことないとか舐
めてんのか!?!俺のものにしたくなっちゃうだろ!?!」

「も、もういい！もう分かったから!！」

カナ撃沈である。

真つ赤になった顔を隠すように机に突っ伏してしまふ。

酒の席でぶつ倒れるカナを見たのはいつぶりか、と周囲の驚きよう
は半端なものではない。

ロキは別の意味で戦慄していた。

「あ、あの…トウヤ…その、あたし…は?」

ルーシイ参戦である。

指をもじもじと絡ませ、上目遣いにトウヤを見つめる。

心を占めるのは「あたしもあんな事言われちゃうのかな?」という
事ばかりである。

「ルーシイ…ルーシイはなあ……!」

(好きになるの？好きになっちゃうの!?)

と、そこでジヨツキを再度傾け、残っていた酒を呑み干してしまうトウヤ。

んくつ、んくつと喉を鳴らして勢いよくジヨツキを机に叩きつけたと思うと、何かを思い出したという顔をした。

すると、みるみる内に、元から赤かった顔が更に赤くなっていく。

むしろ、赤を通り越して青くなり――

ばたんきゅー。

倒れてしまうトウヤであった。

勝者、ルーシイ。

「トウヤー！ちよ、トウヤ!？」

否、唯一の敗者であった。

▼トウヤ視点

次の朝……いや、時間的にはもはや昼か。

頭痛と共に目が覚めた。

自力で家に帰った記憶どころか、2杯目に入った辺りから覚えていないが、おそらく誰かが運んでくれたのだろう。目覚めた場所は自宅のベッドであった。

後でお礼を言っておかなければ。

「起きたんですか、トウヤ。おそようございます」

皮肉混じりに声を掛けてきたのはアルマだ。

「んんん……おはよう」

「まったく、あれほど呑みすぎるなど言ったのに、あんなに呑んでしまうんですから……まあ、普段は言いつけを守っているので良しとしますが」

猫に説教される朝。

割と情けなさが漂う字面である。

「ところで……その……トウヤは私の事、どう思っているのですか？」
ん？

いきなり何の話だろうか。

とはいえ、普段から思っている事の全てはこの一言に集約するだろう。

「いつも……感謝してる」

「ふふ、そうですか……玉子粥を温め直しますから、食卓まで来てください。あと、水もすっかり飲んでくださいね」

やたら嬉しそうなアルマを不思議に思いながら、やたらと重い体をベッドから引きずり出した。

（「本音」として、感謝を言われたのは私だけでしたね……）

△ △ △ △ △ △

しばらく家で休んだ後、何もできないだろうな、と思いつつもなんとなくギルドまで顔を出した。

微妙によそよそしい女性陣に傷ついたり、明らかに不機嫌なルーシイに「しらないっ」と言われ、これまた傷ついたり。

言い出しつぺのカナにすら「しばらく……3回目はいいかな」と遠い目をされたので、やはり禁酒しようかと心に決めたのであった。

なぜかロキや一部の男性陣からは勇者を見るような目で見られたが。

ホント……なにしちゃったんだろうな、俺。

10話「流れ星一つ」

▼トウヤ視点

俺は今、マグノリアの少し西に位置する、鳳仙花村というところの温泉旅館に来ていた。

東洋建築が居並ぶ風情ある場所で、観光地でありながら落ち着く雰囲気（トウヤ視点）の小さな村だ。

セルバルドが消えて、1人ぼっちになってしまった俺は、修行をしながら旅をしていた。当初こそ、人里にたどり着く事を目標としていた訳だが、最初に訪れた村で、ドラゴンがいるなどと嘯き、奇妙な魔法——ナツのような火の魔法ならまだしも、腕を振るだけで大きな斬り傷が生まれる魔法など、本当に理解不能だったろう——を使う悪魔の子として迫害を受けてからは、定住の地を作る事を諦めてしまった。それからの俺は、セルバルドとの繋がりを滅竜魔法に見出し、鍛錬を積みながら各地を巡ったのだ。当時の楽しみといえば、これまたセルバルドが消える直前に言い残した鍛錬方法を忠実にこなす事で、着実に伸びていく力を実感する事だけであつた。我ながら、思い返すと灰色の幼少期である。

途中、まだ卵だつたアルマを拾い、その卵が孵つてからは2人旅となり、やがて『妖精の尻尾』（フェアリーテイル）に辿り着く訳だ。

そしてその旅の中で——確かあれはアルマを拾う少し前だつたと思うが——ココとは別の東洋風の村に立ち寄つた事がある。そこで、東洋文化の粹である刀の味（切れ味ではなく、文字通りの“味”である）を知る事になったのだが、俺はその時に東洋文化フリークとなつたのだ。

『妖精の尻尾』所属になつた後も、暇を見つけてはちよくちよくとこの鳳仙花村に来ては温泉に入ったり、小物を漁つたり、刀を買つて味わつたりしている。何を隠そう、俺の着ている羽織も全て、ここ、鳳仙花村で購入しているのである。

では、今この村に来ているのも、普段通りに遊びに来ているのかという、若干事情が異なる。

今回は仕事で来ているのである。

厳密に言う、仕事でやってきたのは近くにある砦で、そこを根城にしていた盗賊を討伐してきたのだ。

しかも、ナツ、ハツピー、グレイ、エルザ、ルーシイと一緒に、である。

何かとアルマと2人で行動しがちな俺ではあるが、ファントムを倒してからは、ルーシイなどに何かと誘われるようになり、この5人＋2匹で行動する事が増えた。

これまでも1度、一緒にクエストをこなしたが、その時に行ったのはなんと演劇。依頼文では、魔法による特殊効果の演出を求められていただけだったのだが、余りに不評が続いたせいで、役者が逃げ出してしまったという事実が分かると、ノリノリのエルザが役者もこなすと言い出したのだ。やりたかったのね。……ちなみに、俺もやりたかったのだが、あの微妙に失礼な物言いの監督に「キミ、顔怖いし、喋れないから使えないね」と言われ、問答無用で裏方に回らされた。これでもかというくらい大道具を作成してやつても「まあまあ使えるな」としかいわれなかった……

そんなこんなで、一仕事を終えた俺たちは、エルザの提案の元、鳳仙花村で一泊していく事にしたのである。

ちなみに、先ほど見かけて話したが、ロキも仕事でこちらに来ているようだ。

俺やルーシイを避ける時のアイツはいつも妙な挙動になっているが、最近は輪をかけて奇妙であり、ふとした瞬間に何かに思い悩んでいる様子を見せている。

避けられている俺では力になれないかもしれないが、心配である。

「ね、ねえトウヤ。もしよかつたら一緒に、村を歩かない？」

ロキについて考えていた俺にそう聞いてきたのは、浴衣姿のルーシイだった。

昼飯を食べ、クエストをこなした疲れを温泉で癒し……いや、盗賊相手にエルザ、ナツとそろった時点で過剰火力なので疲れてはいないが、兎に角、1度汗を流したとはいえ、まだ昼過ぎ。旅館での夕飯は

まだ先だし、いろいろと店を物色するにはいい時間だろう。

こちらとしても断る理由が無いので快諾した。

それにしても……その、もうちょっと胸元を締めた方がいいと思う。

今にもこぼれそうで目のやり場に困る。

▼ルーシイ視点

「あ、コレかわいい！」

小物屋の店頭に飾ってある簪を手にとり、髪にあててみる。

「どう？」と聞くと目を泳がせながら「……良いと思う」と答えるトウヤ。

相変わらず無表情だし、言ってる事もなんの捻りもない言葉だけど、本心から言ってくれてるんだなあ、というのが不思議と分かる。だから少しニヤニヤしちゃう。

ナツやグレイにも話を聞かしたし、普段から東洋風の羽織を着ていることから考えても、トウヤが東洋文化を好んでいるというのは間違いないはず。

浴衣+簪という組み合わせも効果があるに違いない。

あたしはママ譲りの——我ながら——綺麗な金髪だから、コスプレっぽくなっちゃうのが玉に瑕だけど、そこは色気でカバーよ！

現に、トウヤは少し大胆目を開けたあたしの胸元をさつきからチラチラと見ているもの。ちよつと、ううん、結構恥ずかしいけど、普段のカナの格好よりは肌面積小さいから、大丈夫、大丈夫。

「これは……？」

そう言っただけでトウヤが渡してきたのは、花の意匠が可愛らしい、淡い色の中着だ。特有の布で作られており、肌触りが滑らか。サイズ的にも、普段ちよつとしたものを入れてカバンにしまっておくのに丁度いいだろう。トウヤのススメという事もあり、ぜひ買いたいのだが……ちよつと高いなあ……

今月も家賃ギリギリなんだよねえ。元々この店に入ったのもウイ

ンドウシヨツピングのつもりだったし。

「ああ、それも可愛い！色々あるなあ……あ、じゃあじゃあコレは？」
と言って別の小物を取る。

ちよつと誤魔化し方下手だったかな？大丈夫だろうか？

残念だけど、ここは我慢だ。

△ △ △ △ △ △

その後も色んなところを回った。

ただ静かに石畳の道を歩いたり。途中にいた居たお地蔵様に手を合わせてみたり、そのお地蔵様になぜか動物みたいな耳がついてるねって笑ったり。

木で組まれた橋の上から川の流れを眺めたり。どこから貰ってきたのか、その川にいる鯉のエサをやったり。

小腹が空いたって言いながら、刃物屋に入って刀を買ってきたトウヤが、軽食のノリでバリバリ齧りだすものだから、我慢できずに笑っちゃったり。

相変わらずトウヤの口数は少なくて沈黙の時間も多かったけど、それはそれで居心地が良いんだって事に気づいたりもした。

楽しい時間は早く過ぎてしまうもので、あつという間に辺りが暗くなり、もうすぐ夕飯の時間だ。

「そろそろ旅館、戻ろっか？」

最後にちよつと勇氣を出して欲張ってみようかな……！

て、手をつないでみたりして……

そう思い、ゆっくり、ゆっくりとトウヤの手に自分の手を伸ばしていく。

しかし、その手が繋がれる事はなかった。

「あ」と1度声を出したトウヤが、「忘れ物した」と言って、来た道を走って行ってしまったからだ。

「え、ちよ、トウヤ？」

曲がり角を曲がって姿が見えなくなってしまう。

お、置いてきぼり……？

……酷くない？

ここで待ってればいいのかなあ。

手を繋げなかった落胆も混じった溜息を吐きながら、近場で座れそうなのを探す。

そこに後ろから男の人の声がかかる。

あれ、トウヤ早かったなあと思い振り返ると、そこに居たのはトウヤとは似ても似つかない、見るからにチャラそうな2人組の男たちだった。

「お嬢さん1人？」

「浴衣似合ってるね〜？観光？」

うわ、ナンパだ。

それも古典的な。

「オレたちオシバナから来てんだけどっサ、いい店知ってるんだよね。

一緒に呑み行かない？」

「悪いけど、ツレを待つてるトコだから」

あくまで軽い感じで流すあたしだが、2人はそれでは引き下がってくれないみたい。

「君みたいなかわいい子、待たせるカレシなんてほつとこうよ〜」

「そうそ、3人でファンキーな夜にしようぜ」

そう言っただけの後ろから肩や腰に手を回してくる男たち。

さすがにこれは、と思っただけ無理やりにも手を解くために動こうとした瞬間、違和感に気づく。

——あれ、体が動かない!?

この2人、魔導士か!と、勘づくも時すでに遅し。

術中にはまって抜け出す事ができない。

(ヤバ……)

「遅くなった」

と、そこに帰ってきたトウヤの声が響いた。

あたしは、辛うじて動く首を何とか回して後ろを向く。

男たちの後ろから声を掛けながら、2人の間の位置に立つ。肩に手

刀の形で1度触った後、それを倒すようにして肩を掴み、強引に人壁を割る……いや、斬り裂く。

「トウヤー！」

空いた隙間からトウヤの方に走って、そのまま飛びつく。

目を丸くしながらも受け止めてくれたトウヤの温もりに、先ほどまで不安で凍っていた心が溶けていく。

「な、何で……!?!」

「何しやがったテメエ!?!」

2人組の瞠目した様子を見て、心だけでなく、動きを阻害していた魔法までも氷解している、と気づく。

あ、そっか、手刀を肩に置いた時に、アイツらの魔法を斬ってたんだ。

また、守られちゃった。

あの……「俺が守る」って本気なのかな？

「行くぞー！」

それを合図に駆け出すあたし達。

逃げ出すとは思っていなかった男達は初動が遅れたせいで追いつけない。

何度もこの村に来ているらしいトウヤの土地勘も相まって、いくつかの角を曲がった時には、追手の影は消えてしまっていた。

息を整えながら、旅館までの道を歩いていく。

「あっ」

手、繋いじやってる。

駆けだした時に、トウヤが掴んでくれたのだろう。

「す、すまない……」

あたしの視線がつながった手の平に向かっていているのに気づいたのだろう、トウヤが謝って手を放そうとしてくる。

「ううん……旅館まであと少しだから」

そんなの勿体ないよね。

いざ繋いでしまえば勇気が湧き出てきて、あたしはトウヤの手を掴む力を強める。

トウヤは1度周りを見回す素振りをした後、「そ、そうか」と言っ
て、ぎゅつと掴み返してくれた。

「あの、これ……」

心なしか顔を赤くしてくれている彼が、繋いでない方の手を懐に入
れて小さな袋を取り出し、そのまま差し出して来る。

「え？なに、これ？開けていい？」

頷くのを確認した後、トウヤの持っている袋に手を突っ込んで中身
を取り出す。

それは最初に行った店で見た巾着袋だった。

「欲しそうに見てたから」

も、もう……こんな反則だよ。

「大事にするね……！」

巾着をしつかりと抱え、反対側でもう一度ぎゅつとトウヤの手を握
る。

その後、旅館に入るまでの間、2人は一言も話さなかった。

▼トウヤ視点

「始めんぞー……っ!!」

と言って枕を掲げるナツとハッピー。

ルーシイと旅館に戻ってきてすぐに夕飯を食べ、ひとまず一服……
と思っていたが、枕投げが始まるようだ。

正直さつきまでのルーシイとの空気を引きずっていたので、気分を
変えるにはよさそう。

あの、さつきまでののは、その……デートでいいんだよな？

初めての経験で緊張しっぱなしだった……

「ふふ、質の良い枕は私が押さえている……この勝負、私が貰った」
相変わらず、妙なところでノリノリなエルザだ。

両手に5つもの枕を抱えている。

「俺はエルザに勝——っ!!」

先手必勝とばかりにナツが投げた枕の狙いはエルザだったが、彼女

は飛び上がり逃れてしまう。ぶつかる先を失った枕はそのまま飛んでいき、寝る体勢に入っていたグレイの顔面に突き刺さってしまう。最初はやる気のなかったグレイだったが、こうなると黙っていない。

「ナツてめエ!!」

俺はと言えば、エルザの着地のタイミングを狙って枕を放る。

しかしエルザはこれにも反応。

手に持っていた枕で飛んできた枕を弾き、ナツの方へ飛ばす。

「甘い!」

「ほげ!」

こうして戦いは乱戦へともつれ込む。

ちなみに、ルーシイは流れ弾に吹き飛ばされて早々に場外となり、ハッピー、アルマと共に旅館の外へ避難してしまった。

△ △ △ △ △ △

「んん……」

結局枕投げの勝者は、男子3人の意識を刈り取ったエルザとなった。

俺も何とか最後にまで残ったが、魔蔵まくらの鎧の纏ったエルザのマシンガン枕の前に成すすべなく気絶してしまった。

いや待て、魔蔵の鎧ってなんだ?

夢と現実がごちゃ混ぜになつてないか……??

まあいいや。

そんな訳で一時気を失っていた俺だが、他の2人よりは先に目が覚めたようだ。

ついでに布団を敷いて、グレイとナツを寝かせておこう。

ちなみに、ルーシイ&猫ズはまだ戻っていないようだ。

「ん、起きたかトウヤ」

そうやって男2人の世話を焼いていると、縁側で涼んでいたらしいエルザに声を掛けられる。

ささつと目的を済ませてしまい、俺もエルザの隣に腰掛ける。

「ふふ、久しぶりにお前に勝てた気がするぞ、トウヤ」

「参った」

魔法込みの勝負だと、エルザの得物全てを封じてしまう俺に軍配が上がりやすくなる。しかし、素の身体能力では一步劣ってしまうようだ。それに、いざとなったら、素手でも魔法込みの俺に勝ってしまいそうなのがエルザという女だ。

まったく、嫌になるね。一応滅竜魔法つてのは、肉体自体を変質させて、戦闘に特化したモノに作り替える効果も持つはずなんだがな。それが素の力で負けるって、どんな化け物だって話だ。

エルザと俺はナツやグレイの顔を見て、少しの思い出話に浸る。

あの時はこうだった、実はそうだった、などと笑いあう。

この4人の中では『妖精の尻尾』に入ったのが一番遅かったのは俺なので、3人にまつわる俺の知らない話も飛び出してきた。

やがて話の種も尽き、少しの沈黙が降りる。

すると、ふと月を見たエルザの横顔、その左目が揺れているのに気づく。

「こうして静かになると……急に不安になる事があるんだ」

「エルザでも?」

「茶化さないでくれ」

一度こちらを見てから、ゆっくりと視線を地面に落とす。

「私は……本当は凄く弱い女だ」

それは……どうだろうな。

正直俺には分からない。

『妖精の尻尾』にいるエルザはいつだって強い女ひとだった。

それがただの鎧だったなら、中かこの彼女がどんな人か、俺は知らないという事になるのだろう。

「鎧で自分の身を固めていないと、怖くて前に進めなくなる」

でも、それでもいいのだと思っている。

全てを知らなくても、今を知っている。

隠している事があっても、喋れるようになるまで待てばいい。

それが仲間の仕事なんじゃないだろうか。

「詳しい事は言えないが、私には…そうだな…置いてきてしまったモノがあるんだ」

「……そうか」

「それを取りに帰るには強さが足りない。でも、安穩と生きていくにも、置いてきたモノがあまりに大きかった…どっちつかずだ。私は本当に弱いな」

その何が悪い。

1人でなんでもできる程強いというなら、仲間なんていらぬ。

ギルドなんて必要なくなる。

「いいよ、弱くて……」

「いや、それでは……」

そうじゃないよ、エルザ。

「置いてきたモノ、取りに行こう」

「！」

「それがどこにあるのか知らないけど…厚い壁があるならナツが砕いてくれる。高いところにあるなら、アルマとハッピーが翼になってくれる。地中深くにあるなら、ルーシイが星霊を呼んで掘り進めてくれる。鍵のかかった部屋にあるなら、グレイがカギを作ってくれる」
「そうやって進んでいけばいい。」

「鎧を脱ぎたいのに、怖くて脱げないと言うのなら…俺が代わりになるよ」

知っているだろうか？

この鎧はジュピターですら壊せないんだぞ。

「だからエルザは、俺たちが茨に囚われた時、それを斬り裂く剣になって助けてくれ」

「お前が鎧で、私が剣、か……」

「面白くていい……」

「そうかもしれないな」

俺は夜空を見上げる。

エルザもつられて顔を上げる。

そこでは、いろんな星がいろんな色の光を放って、一つの夜空を作っていた。

「たった1人で進んでいける強い人なんていなくていいんだ」
夜空からエルザへと視線を移した。

「お前は1人じゃないんだぞ」

エルザの左頬に一筋の光が流れる。

「私は……本当に良い仲間を持ったな」

その時、夜空で星が1つ流れた。

その光は、エルザの涙を流せない右の義眼に映り込み、涙のような煌めきを作った。

楽園の塔編

11話「アンラツキー」

▼トウヤ視点

鳳仙花村からギルドに戻ってから数日、とんでもない話を聞くことになった。

「星霊!？」

最近なんだか元気がないと思っていたロキが、自分の正体は星霊だとカミングアウトしたのである。

ええ……人間だと思ってた。

というか、人間じゃないなんて普通想像しないでしょ。

星霊魔導士の魔力無し、慣れない人間界という非常に悪い条件下で長時間、気合だけで現界し続けたというのだから半端じゃない根性だ。

黄道十二宮おうどうつてすげえ。というか、この場合はロキ、もとい、獅子宮のレオが凄まじいのだろうな。

ちなみに、元気がなかったのは、いよいよ生命力の限界が近づいてきたかららしい。そこを我らがルーシイによって助けられたよ。うだ。星霊王とやらと口喧嘩したとかなんとか。

ロキが俺を避けていたのも、星霊だったからだそうだ。星霊界に帰れない状態の星霊が、俺の斬魔の力を浴びれた時にどうなってしまうのか分からず、ついつい避けてしまったそうさ。

気持ちには分かるが、少し傷ついた……

仲間に斬りかかったりしないよ？

今後は星霊界と人間界を行き来しながら、ルーシイのピンチに颯爽と現れる王子様役をするそうさ。王子様、という部分で、ルーシイは若干迷惑がついていた気もするが。

つまりはルーシイを所有者オーナーとする星霊になったというので、この際だからと、ルーシイが今何本、黄道十二宮の鍵を持っているのか聞いてみた。

金牛宮、巨蟹宮、獅子宮、処女宮、人馬宮、宝瓶宮でなんと6本も持っているらしい。

世界に12本しかない鍵の半分を持つてやばくない？

ファントムみたいなんじゃないけど、ルーシーを狙う輩が現れておかしくない。ロキじゃないけど、やっぱり一緒に居られる時はできる限り気を付けておこう。

「それでね、コレ、あげるよ」

ロキがコートのポケットから数枚のチケットを取り出した。

よく見たらアカネビーチ沿岸にあるリゾートホテルのチケットじゃねえか!!

「君たちには何かと世話になったからね、そのお礼。トウヤに関して、避けちゃってたお詫びも含むかな？」

わあああああ！

そんなの許す許す！

金額的には手が届かない訳じゃないとはいえ、抽選が必要なほどの人気を持つこのチケットはこういう機会じゃないと手に入らないので、ありがたい事この上ない。

抽選とか、懸賞とか当たった試しがないもんな。

隣を見れば、ルーシーだけでなく、こういうのに疎そうなグレイやナツまで喜んでる。エルザなど、既に荷造り（例の如く特大量）を行っている。

エルザは流星に気が早すぎると思うが、俺も凄く楽しみだ。

……なんか最近、観光地に行つてばっかりだな。

△ △ △ △ △ △

そんな訳で、来ましたアカネビーチ!!

青い空、白い雲！

透き通った海に、サラサラの砂浜。後ろを見れば、城のようなりゾートホテル（これに泊まる）が聳え、前を向けばエルザとルーシーのボインがそびえ……ゲフンゲフン。

更に、横を見たら 그레이が全裸で……!?

「 그레이! 水着!!」

「うお!? 履き忘れた!!」

そんなほぼいつも通りのハプニングはあったものの、楽しく時間が過ぎていく。

スイカ割り、ウォータースキー、ビーチバレーに沖までの競争。

今回の旅行は3部屋分のチケットで来ており、1部屋が女子部屋、他2つを男子で分ける事になった都合上、1人部屋が1つ生まれる事になるのだ(ただし、俺とアルマ、ナツとハッピーはセットで1人換算)。じゃんけんなどの運要素がある勝負では勝てる気がしなかった俺の提案で、その権利をかけて行う事になった水泳競争は熾烈を極めた。勢いあまって、他のお客さんを跳ね飛ばしてしまっただが、後で苦情が来ないよう祈っておこう。

そうして夕方までしつかり遊んだ俺たちは、これまた豪華な夕食をホテルで取った。非常に美味であった。刀剣類も好きだが、普通の高級料理もやはり良いものだ。

その後、一休みするという女性陣を置いて、男子3人+2匹でカジノへとやってきた。俺は滅茶苦茶止めてくるアルマを無視して、何となくルーシイの家賃の10倍である、70万ジュエルをチップに換金した。蓄えならあるのだ。

と、そこであまりにも意外な人物と出会う事になる。

「ん? エレメント4?」

そう、光沢のある黒いドレスに身を包んだエレメント4、大海のジュビアが立っていたのだ。

いや、今はもうファントムは解散されたから、エレメント4じゃないくて、ただのジュビア・ロクサーか。

こちらとしては、あちらが何か言い出さない限り、特に言う事も無いので、知らんぷりしておこう。

と思ったのだが、俺が迂闊なことを言ってしまったが為にこちらに気づいたらしく、目が合ってしまう。

「あ、あなたは！」

ああ、面倒な事になっちゃうかなあ……

「死神!？」

いや、ホント、死神はよしてくれない？

エリゴールと被ってるし。

「えつと、ども」

「あ、はい、あの……こんばんは」

気まずい沈黙が2人の間を包む。

そこでふと気づいたが、なぜか彼女、胸元に『妖精の尻尾』の紋章のペンダントを付けている。

「どうした?」

自分の胸元をトントンと叩きながら問う。

「あ、あの……これはその、ジュビア、妖精の尻尾フェアリーテイルに入りたいです」

え、それはまた……お互い気まずいだろうに。

「何で?」

「それは……」

と、顔をあらぬ方向に動かすジュビア。その視線の先にはグレイがいる。

「グレイ様のいるギルドに入りたくて」

はっはーん。

なるほどね。

確か、ファントムとの一件で、グレイはこの子と闘ったって話だったし、その時に何かあったのか、はたまた一目惚れか。

どっちにしてもお兄さん、応援しちゃうぞお?

なんか、エレメント4を資料で見た時より、可愛いなと思ったんだよね。キラキラしてるというか。

恋しちやつてるんだなあ……!

……ちよつとノリがおっさん臭すぎるな。

「応援する……な?」

と、隣のアルマに話を振る。

コイツもコイツでニヤニヤしている。

「ええ、もちろんです。交渉が難航するようでしたら、私からマスターに掛け合いますし、なんでも相談に乗りますよ」

「あ、ありがとうございます！……死神って聞いてたから怖い人だと勘違いしていました。もし、妖精フェアリーテイルの尻尾に入れたら、その時はよろしくお願いします、トウヤさん、アルマさん」

「ああ……それより」

「はい……それより」

俺とアルマの声が揃う。

「あっち行け」「あちらに行かれては？」

と、グレイの方を指さす。

「は、はい！頑張ってください！」

いやあ、すっかりおしやべりして欲しいね。

さて、ジュビアも行ってしまったし、俺も勝負しますかね！

△ △ △ △ △ △

夜のアカネビーチなう。

ルーレット、ポーカー、ブラックジャック、いくつかと試してみたが、ものの30分で70万ジュエルが水の泡と消えた。ジュビアの魔法みたいだあ。

なんと、その30分の間、一度も所持金が増える事はなかった。

10回連続でルーレットの赤と黒を外し続けるってどういう事なんだ……

流星のディーラーさんも引いてたぞ。

そんな逆偉業も、アルマにとつては予想の範疇だったらしく、いわんこつちやない、という顔をしていた。悔しい。

そんな訳で、大金を溶かした俺は、さつさとカジノから退散し、アルマと2人、夜の浜辺へと繰り出したのである。

ちなみに、カジノを出る時、妙に着飾ったエルザと、普段より少しだけ開放感のあるラフな格好のルーシィとすれ違ったが、俺の死んだ目を見て事態を察したのか、特に何も言っってこなかった。悔しい。

それにしても、日中の楽し気な雰囲気ビーチは当然良かったが、冷たい夜風が吹き、静かな中にザーという波の音だけが響く夜の浜辺も乙なものである。

ホテルの明かりと、月の光が映り込んで幻想的だ。

アルマも隣で「綺麗ですね……」と声を漏らしている。

「ん？」

そこで、あることに気づく。

おそらく、滅竜魔導士特有の鋭敏な五感が無ければ見えなような離れた場所の浜にだが、少し大きめの船が泊まっているのである。

もう夜も遅いが、どういう事だろうか。

1度戻ってホテルマンに何の船か聞いている事にしよう。

少し、嫌な予感がする。

△ △ △ △ △ △

「そうですか……」

ホテルの従業員から話を聞いてきたアルマが戻ってくる。

その表情は芳しくない。

「ホテルの方でも事情を把握していないようです。話を聞きに行く、とは言ってくださいでしたが、ただのホテルマンでは危険かもしれないですね……」

「そうか……」

いよいよキナ臭くなってきたか。

万が一という事もある、ひとまずはカジノに戻りエルザ達と合流して、全員で船を調べに行くのが得策だろう。

「アルマ」

「はい、私も同意見です。カジノに戻りましょう」

という訳で地下のカジノまで続く階段までやってきたのだが……

——おかしい

どういう訳かカジノから聞こえてくる音が、非常に静かなのであ

る。

スロットや機械類の音は聞こえているのだが、1度目にこの階段を降りた時には耳に入った人々の喧騒、ディーラーがカードを切る音、チップが動くジャラジャラという響き、そのどれもが耳に入っていない。

まるでそこに誰もいないかのような……

「急ぐぞー！」

「ど、どうしたんですか!？」

短く言うとアルマを置いて走り出す。

すぐにアルマも翼^{エーラ}を生やして追いかけてくる。ただ、滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}の鋭い聴覚で捉えた事実だけに、イマイチ事情が呑み込めないという顔をしているが。

走り出してすぐにカジノへたどり着くが、そこには案の定誰もいなかった。

それどころか、いくつもの椅子が倒れて散乱し、カジノ内のバーなどは瓦礫の山になっている。

「なに!？」

ルーレット台直上の天井から吊られていた案内板代わりの飾りが粉碎されているが、これに燃えたような跡がある事や、バーの近くが不自然に濡れている事から、エルザ達が何者かと交戦したのは間違いないだろう。前者はナツ、後者はグレイかジュビアの魔法によるものだ^{と推測できる}。

つまり、敵は魔法を使わなければなかった相手だったという事。おそらくは魔導士なのだろう。

しかし、まさかアイツらがやられる事こそないだろうが、ここに誰もいないのは不可解……!

いや、違う、少し離れていた通路からは聞こえなかった程のかすかなモノだが、どこかから声が聞こえる。

「トウヤ、これ……!？」

アルマがその声の主を発見したようだ。

が、そこにはカードが沢山落ちて……ってなんだ!?

カードの中の人型の凶柄が動いていて、まるで部屋の中から叫んでいるような、小さなくぐもった声で助けを求めている。

これは特殊な封印魔法か……？

だとしたら厄介な魔法を使う相手だ……！

兎に角、アイツらのカードがないか探しながら、封印を斬つていこう。今のところ封印の中に何か仕込まれているという様子は見られないが、さすがに捨て置くわけにはいかない。

「斬魔」

軽い魔法ではありそうなので、弱めの出力でいいだろう。

「トウヤ、私は今の内にホテルの方を呼んできます。ひとまず封印の解除に集中してください」

そう言つてアルマが飛んで行ってしまった。

え、お前いないと、この人達と話す時、俺1人になつちやうんど……？

ま、まあいい。今は封印を解くことに集中だ。

このテの封印は、下手な斬り方をすれば中の人間まで傷つけてしまう可能性がある。解除には繊細な作業が必要だ。

そうして黙々と仕事をこなすこと数分、ようやく全員を無事に脱出させる事ができた。

しかし、ナツ達のカードは見当たらない……まさかとは思うが、カードにされて連れ去られたのか？

家族や友人の無事を喜びながら、俺に礼を言ってくれている人の中から1人捕まえて話を聞いてみる。

「何があつた？」

「なんか、変なディーラーが出てきたと思ったら、紅い髪の美人さんと話し始めて……今思えば知り合いだったのかな？それで、何の話をしてるんだろうと思つてたら、急にカジノ全体が真っ暗になって、気が付いた時にはカードの中だったんだよ」

紅い髪の美人……まあエルザだろうな。

その知り合いってのが犯人だとしたら、エルザが意表を突かれたのも分からなくもないが、アイツがその程度で後れを取るだろうか……

？

いや、まさか…鳳仙花村で言っていた落とし物ってヤツの可能性もあるのか？

「その紅髪の女と、金髪の女、桜髪の男、裸の男…あと、水色で巻き毛の髪の女はどうなった？」

「どうなったって聞かれてもなあ…：カードの中からは上の方しか見えなかったから、あんまり詳しい事はわかってねえんだ。でも、金髪のコなら助けたよ！」

「助けた？」

「カードから出ることはできなかったんだけど、カードと接しているものには干渉できたみたいで、その子を縛ってた縄をコレで切ったんだ」

言いながらポケットから取り出したナイフを見せてくれる。

ロープ、という事はカードにはされてなかったという事だな。

「その後は見えない位置に行っちゃったからよく分かんないよ」

「分かった」

そこまで話したところでアルマがホテルスタッフを連れてきたので、アフターケアは任せて、アルマに今の話をしておく。

「…：…だそうだ」

「なるほど。だとすると、縄から解放されたルーシイがどこに行ったのかが気になりますね。よっぽどの事が無ければカードにされた人たちが助けようとするでしょうし」

なら、むしろ俺を探して入れ違いになっているという事もあり得るか。

「1度部屋に戻ってみませんか？皆を探すには手掛かりが少ないですし、可能性のある近場を当たっておくのは悪くないと思います」

今のところ、不審船があったことから考えて、1番可能性が高いのは海という事になるが、それこそ部屋に戻って準備をする必要が出てくるだろう。

俺たち2人で海に出るなら、泳ぎと翼エーラの併用しか方法はない訳だし。ボートを借りても、アルマじゃ力が足りないし、俺じゃ酔ってて

漕げない。

ひとまず四人の部屋を見に行こう。

急いで向かったものの、残念ながらどちらの部屋ももぬけの空で、書置きなどもなかった事から、戻ってきていないと考えて差支えないだろう。

どうするか……と思いつつも、この後の方針を話し合うために、一旦自分たちの部屋へ戻ったのだが……

「ん？」

部屋に備え付けられた品の良いテーブルの上に、見覚えのない手紙が置いてある事に気づいた。

今回の事に関係のあるモノかと期待しながら洋封筒を開く。

するとその中に書いてあったのは、想像以上にこの事件の核心に迫るモノで――

「な!？」

読み終えた俺は、今日一番のアンラッキーは、襲撃が起きた時にカジノに居られなかった事だったな、とテーブルに己の拳を叩きつけた。

▼ルーシー視点

あたし達はアカネビーチ、リゾートホテル地下カジノで謎の魔導士集団からの襲撃を受けた。

妙に顔が角ばった男、顎に金属製のフェイスガードを付け、ターバン、眼帯を巻いた男、褐色ですこしナヨっとした雰囲気イケメン、猫耳を付け、頬にひげのような文様を描いた女の子の4人組だ。

エルザの事を「姉さん」と呼んだり、「連れ戻しにきた」と言っていたことから、おそらくはエルザの知り合い――それも『妖精の尻尾』加入前の――なのだろう。

グレイとジュビアはフェイスガードの男に、ナツはカクカク男にやられてしまい、あたしは猫娘に魔法の発動を阻害するロープで拘束さ

れてしまった。残るエルザも、昔の知り合いという事で動揺していた上に、あたしが人質にされたせいで隙をつかれ、睡眠弾で眠らされた。そして、全員が行動不能の間にフェイスガードがエルザを、猫娘がハッピーを連れ去ってしまったのである。

完全に不覚をとってしまった……

少し経った後、グレイは機転をきかせたジュビアのおかげで無事だったことが判明し、あたしの方も何とかロープを切る事ができた。

最後に目覚めたナツは、カクカク男へのリベンジに燃えて駆け出してしまったので、あたし達も追いかける事にしたのだが、その歩みはビーチで止まってしまいう事になる。

襲撃犯と2人を乗せた船が遠くの海を行っていると場所を見つけたからだ。

ナツの嗅覚が2人を捉えられなくなる前に、と浜辺に置かれていた小舟を拝借し、急いで沖へとやってきたのがたった今。

例の如く船酔いでグロツキーなナツの誘導の元、あたし、ジュビア、グレイの3人で舟を漕いでいると、海の彼方に巨大な塔が見えてきた。

「あれが……楽園の塔!!」

襲撃犯たちがそのように言っていたな、と思い出しながら呟く。

きつと、あそこにハッピーとエルザが捕らえられている。

——今、助けに行くからね!

はあ……ハッピーやアルマが居たら、すぐにでもあの塔へ飛んでいけるのに……

肝心のハッピーは捕まっちゃってるし、アルマはいないし……アルマがいない?

ここに居るのはナツ、グレイ、ジュビア、あたし。

ナツ。グレイ。ジュビア。あたし。

たたり、と冷や汗が流れる。

「ねえ、凄く今更なんだけど……あたし大変な事に気づいちゃった」

「ああ……オレも少し前に気づいてな。言うか言わないでおくか迷ってたんだが……」

「運命ですね、グレイ様。ジユビアも多分同じ事を考えています」
それを言うなら「奇遇」でしょ。

てかそれだとあたしも巻き込まれない？

いや、それより……

「ねえ、せーので言わない？」

「ああ」

「はい」

せーの。

「トウヤ(さん)達、忘れてき(まし)た!!?」「」

12話 「楽園の塔」

▼ルーシー視点

トウヤとアルマがいないという事実気づくも、現実的にもうどうする事もできない。

エルザのピンチに駆け付けられなかったって凄く自分を責めるんだろうけど、こればかりは仕方ないからなあ……

蚊帳の外にしてごめんねって謝らないとね、勿論、エルザとハッピーも連れて！

どうしようもない事でうだうだ考えても仕方ないから、と海の中から地下の入り口を見つけたジュビアの手引きで塔へ侵入した。

そこで見張りの兵士に見つかってしまい、交戦するハメになったが

……

「火竜の鉄拳！」

「キャンサー、お願い！」

「ウォータースライサー」

「水流斬破！」

「アイスメイク 〴〵大槌兵〴〵！」

魔法の使える人はいなかったみたいで、そうなるにあたし達の敵ではない。

対して、この塔の主——襲撃犯たちはジェラールと呼んでいたが——は一筋縄ではいかない人物らしい。

あたし達が最後の見張りを片付けたのと丁度同じタイミングで、塔内部へ上る梯子の先の扉が開かれたのだ。

ジュビアの見立てでは魔法で遠隔操作しているとの事だが、つまりは塔内部の事を完全に把握していて、しかも 〴〵上ってこい〴〵と挑発する余裕まである、という事だろう。

「そんなの関係ねえ！ハッピーの匂いはあっちだー！！」

「ちよ、ナツ!？」

しかし、そんなジェラールの不気味な態度もナツには効果がなかったらしく、「待ってるハッピー！四角野郎ー！！」と駆け出す。

「あんのバカ炎が……！！」

と、グレイが顔を覆って嘆息する。

しかも、その大声が悪かったのか、ナツが走り去った通路とは別のところから衛兵が駆けつけてきた。

「キリがないですね……」

とジユビアが手を構えたその瞬間、ズババツという音がして、なぜか兵士たちが倒れてしまう。

何事かと身構えたあたし達の前に、兵士たちの隙間を縫って現れたのは緋色の髪の女騎士だった。

「エルザ!? 無事だったんだ!!」

「お前たち、なぜここに……!?!」

驚いているのはコチラだけじゃなかったらしい。

でも、エルザがあたし達の登場にビツクリするのはおかしいと思うな。

「なんでって……当たり前でしょ! 目の前で攫われたエルザを放っておける訳ないよ!」

「そ……それは……」

あたしの言葉にエルザの整った顔が、悲痛そうに歪む。

「そうだぞ、エルザ。んなつまんねえ事聞いてんじゃねえよ」

「ジユビアも……その……」

その声を聞いてようやくジユビアに気づいたのか、苦しそうだった顔を、意外なものを見た、という顔に変えるエルザ。

そして、更に何かに気づいたように辺りを見回す。

「そういえば、3人だけか?」

「いや、トウヤとアルマはホテルだ。ナツが匂いを追える内にと思っ
て焦って出てきたからな、連絡しそびれた」

「ではナツとハッピーは?」

「ハッピーさんはエルザさんと一緒に攫われています。それで、ナツ
さんはこのフロアに入った途端にハッピーさんの匂いのする方へ
走って行ってしまいました……」

ナツがない理由を聞くと、「くっ」と焦ったような顔になる。

「だからエルザ、ナツとハッピーに早く合流して、すぐにこの塔から出

よう?。」

あたしの提案を聞くと、エルザはあたし達に背を向けてしまった。

「それはできない……」

「なんで!？」

「この塔は危険なものだ。私はこの塔の頂上で待つジエラールを止めねばならない」

危険……?」

ただの塔じゃないって事?

「何が危険なの?それに、ジエラールって誰なの……?」

「これ以上は話せない……これは私の問題だ。ナツとハッピーは私が必ず連れ帰る。だからお前たちはここから離れていてくれ」

何言ってるのエルザ?

そんなの出来っこないよ!

「エルザ、これはお前の問題なんだな?」

グレイ!？」

まさか、こんなエルザを放って帰ろうっていうんじゃないよね!？」

「ああ、そうだ」

「そうか……なら、オレたちの問題でもある」

「!」

そうだよ……そうだよね、グレイ!

「どんな危険があるのか分かんないけどさ、力になるよ、絶対」

フアントムの時は助けられてばかりだった。

でも、あの時とは違う。変わってみせる。

「今度はあたしがエルザを助けるよ!」

隣でジュビアが頷いているのが見える。

まだ『妖精の尻尾』に入った訳じゃないけど、きつと、こんなエルザをほっとけないって気持ちはあたし達と同じなんだろう。そういう意味では、今のジュビアなら、『妖精の尻尾』でも絶対上手くやっていけると思うな。

ぎゅつと拳を握ったまま、こちらを振り返らないエルザの肩が震え始める。

「……私は1人じゃない、か」と、そう呟くと、身体をもう1度反転させる。

その左目には、煌めく粒が浮かんでいた。

「助けて欲しい。私に力を貸してくれるか……？」

そう言ったエルザの表情は、今までに見た事もない程儂いもので、風が吹けば消えてしまうんじゃないかと思う程だ。

こんな……こんな表情をエルザにさせる何かが、この塔に、ジエラルってヤツにあるとするなら、あたしは絶対許せない！

「当たり前だよ！」

エルザの泣き顔に一瞬動揺したグレイも、「おう」と口角を上げる。

「で、具体的にこの塔は何なんだ？」

「そうだな……協力を頼む以上、話しておかねばならない……」

▼トウヤ視点

斬魔の妖精 トウヤ・グレイス。

単刀直入に言う、お前の力が借りたい。

いきなりの手紙で何事かと思っただろうが、まずはオレたちの話をしておこう。

オレの名はシモン、とある島で楽園の塔と呼ばれる、死者を蘇らせる魔法の塔を建設するために、黒魔術を信仰する教団によって買われた奴隷だった男だ。

その塔では老若男女問わず、多くの奴隷が働かされていた。

その中にオレ、そして幼き日のエルザがいたのだ。

オレとエルザ、ミアアーナやウオーリー、シヨウ、そしてジエラルという6人の年少奴隷達は、毎日毎日教団員に体罰を受けながらも、負けてなるものか、と互いを励ましながら兄弟のように育ってきた。

そんなある日、6人の中でも特に幼かったシヨウが、塔からの脱走を提案したのだ。そこからは当時からリーダー格だったジエラルを中心として、計画を練った。

だが、その計画は失敗に終わってしまった。

牢からは逃げ出せたものの、すぐに教団員達に見つかってしまったのだ。

その後、立案者だと決めつけられたエルザが拷問を受けてしまう事になった。帰ってきたエルザの体はボロボロで、右目を失ってすらいた。

更に、今度はエルザを助けに行ったジェラールが入れ替わりに拷問されてしまう事となる。

地獄だった。

だが、いや、だからこそだろう。

エルザは立ち上がった。

全ての奴隷を引き連れて反乱を行ったのだ。

途中、ロブ爺さんという俺たちに良くしてくれた人が死んでしまった事をきっかけに、エルザは魔法にまで目覚め、この反乱は成功する事となる。

この時の彼女は、それまでのただのか弱い少女ではなく、強い、誰かの為に戦える戦士に変貌していたのだと思う。

が、変わってしまったのはエルザだけではなかったらしい。

結果から先に言うと、島から出られたのはエルザただ1人だった。

外に出るのに使おうと考えていた教団の船が1つ残らず爆発したのだ。

「エルザは魔法を正しく習得できなかったせいで、その力に酔ってしまった。だから弱かった頃の象徴である自分たちを消すために爆弾を仕掛けた」とジェラールは言った。

そんな訳がない。絶対にありえない。

恐らくは、ジェラールの自作自演だろう。

しかし、ジェラールがエルザの裏切りに気づいたから爆発する船から離れられたのだと恩を感じていた他の元奴隷たちは、そのジェラールの言葉を鵜呑みにしてしまった。

ジェラールも変わってしまったのだろう。エルザとは真逆の方向に。

きつと、激しい拷問に心が耐えられなかったのだ。

ジエラールの変化の証拠に、塔の建築はその後も続けられた。言葉巧みに元奴隷達を操ったのだ。塔を作る事で、自分達を虐げてきた人々に復讐し、そして、安穏と生きる全ての人々を支配する事ができる、と。

確かに、教団員がいなくなつて、強制労働も、体罰も拷問もなくなつた。自由が増えて、食事も豊かになった。

しかし、そこにエルザの、そしてかつてのジエラールの姿はなかった。

これがオレたちの過去だ。

そして現在、楽園の塔は完成しようとしている。

ジエラールは「あとは生贄を用意するだけだ」と言っていた。

そして、その生贄として選ばれたのがエルザだ。

俺たちはそのために、エルザを連れてくるようジエラールに命じられた。

だが、俺はここである計画を立てた。

それは、エルザをできる限り派手に、今の仲間たちの前で攫うことで、塔に強大な魔導士を招き入れるという事だ。そして、その全員でジエラールを叩く。

ジエラールが蘇生しようとしているのは「黒魔導士ゼレフ」。

まともな魔導士、それもエルザの仲間ならば協力してくれるだろうと思つての事だ。

そして、この計画に魔法すら斬る事ができるお前は必ず必要になる。

お前がエルザと共にアカネビーチに来ると聞き、お前だけは何としても引き入れねばならないと、筆を執った。

万が一にも塔に来ない、などという事が無いように、お前の部屋に置いておく事にしたのだ。

どうか、ジエラールを止めてくれ。

そして、エルザを助けてくれ。

これが手紙の内容であった。

海図とコンパス、塔に行くための舟の置かれた場所のメモが同封されていたが、舟に乗っても仕方がないと、海図とコンパスだけをアルマに渡し、俺は昼間着ていた水着に着替えた。

すぐにホテルを出て、アルマの翼で海上を飛ぶ。途中疲れてくると交代し、俺が海を泳ぎ、アルマはその背に乗る。

これを繰り返しながら塔に向かうしかない。

シモンが3隻用意したという船が2隻になっていたことから、おそらくナツたちも塔へ向かっているのだろう。

待つてろ、エルザ……今行くからな。

▼エルザ視点

「ジエラールにシヨウ達の命を人質に取られていたとはいえ、1人だけ外の世界へ行き、8年も皆を放置した事実が変わらない。だから、ここで私がジエラールを倒す」

償いになるだなんて思っていない。

しかし、誰かがやらなければならぬ事で、私がやるべき事だ。

本当は今もルーシイ達を巻き込みたくないという思いがある。

だが、私の問題は自分達の問題だと言ってくれた人がいる。力を貸すと言ってくれた人がいる。私の鎧になってくれると言ってくれた人がいる……今はいないが。

まったく、しまらん男だな……ふふ。

でも、勇気は貰った。

ジエラールとの対峙を譲るつもりはないが、そこまでの道は頼れる仲間たちにお願いしよう。

ひとまずはナツと合流するところからか。アイツは何をしでかすか分からんからな。ここぞという時の爆発力は本物なのだが。

と、そこに新たな足音が響いてくる。

「その話……ど、どういう事だよ、姉さん……？」

！

シヨウ……

この島に連れてこられた当初、私は地下牢に入れられており、そこで監視をしていたシヨウを気絶させてここまで来た訳だが、すでに目覚めて私を追ってきていたのか。

「ジェラールは…ジェラールは、姉さんが俺たちを無かつた事にするために爆弾を仕掛けたって！姉さんが裏切ったんだろう!？」

私は彼になんと声を掛けるべきなのだろうか。

きつと、シヨウにとって、ジェラールの言葉は一種の救いだっただろう。

私が消えて、船が爆発したという事実がある。

信じていた私に裏切られたと思っただけでシヨウが、ジェラールだけを頼りにこの8年を生きてきたなど、想像するに難くない。

そんなシヨウを置いて、私は『妖精の尻尾』で新たな仲間たちと過ごしてきた。

私に「裏切った」という言葉を否定する術はない。

「あなたの知ってるエルザはそんな事する人だったの？」

ルーシイの言葉にハツとするシヨウ。

ルーシイはいつも助けられてばかりだと言うが、私はお前の明るさや、優しさに何度も救われているんだぞ？

それは、私にはない強さだ。

「じゃあ…じゃあ！姉さんの言葉が正しくて、間違ってるのはジェラールだって言うのか!？」

と、更に新たな人物が姿を現す。

「……そうだ」

そう肯定したのはズンズンと足音を響かせながら歩いてきたシモンだ。

どうしてここに……？

い、いや、それよりもどうして先ほどのシヨウの言葉を肯定できるんだ!？」

「お前もウオーリーもミリアーナも、みんなジェラールに騙されていたんだ。俺もこうして気が熟すまで騙されたフリをしてきた……」

騙されたフリ……

8年間顔も見せなかったんだぞ。私は？

「俺は初めからエルザを信じていた……8年間ずつとな」

ああ……

シモン……ありがとう。

そのまま真っ直ぐに私の前までやってきたシモンは抱擁を求めてくる。

当然それを受け入れ、私もシモンの背に手を回そうとする。

しかし、シモンの巨体ではそこまで手が回らない。

大きくなつたんだな、シモン。

8年か……それだけの時間があればこんなに変わるものか。

いや、でも、きつとこの温もりは変わっていない。

「会えて嬉しいよ、エルザ」

「私もだ、シモン……」

少しの間そうしていると、近くで誰かが崩れ落ちる音がする。

抱擁を解いてそちらを見ると、シヨウが嗚咽を漏らして泣いていた。

「どうして……俺は姉さんを……信じられなかったんだ……！」

何を言ってもやればいいのかは、やはりまだ分からないが……言いたい事は言っておこう。

シヨウの近くまで行ってしゃがみ、泣いているシヨウの頭をそっと抱きしめる。

「大分雰囲気が変わったと思っていたが、泣き虫なのは相変わらずか？」

「姉さん……」

「……私はこの8年、お前たちを忘れたことなど1度もなかった……だが、何もできなかった……私はとても弱くて……」

でも、そんな私はもうおしまいだ。

「シヨウ……もし、こんな私でも信じてくれるなら……お前も力を貸してくれ。私たちの力でジェラールと戦うんだ」

その言葉を引き継いだのはシモンだ。

「まずは火竜とウォーリー達が激突するのを防がねば。ジエラールと戦うにあたって滅竜魔導士は大きな力になる。できるだけ消耗を減らす必要がある」

▼三人称視点

そんな風に言われていたナツだったが、現在ネコグッズまみれの部屋にて、絶賛交戦中であつた。

「秒間32フレームアタック!」

自分の体を四角く分解させて高速でぶつけるカクカク男、もといウォーリー・ブキャナン。

その攻撃を逃れたナツの元に猫娘改めミリアーナの魔法が迫る。

「ネ拘束キューブ!!」

名前こそファンシーだが、効果は凶悪で、相手の身動きを封じた上で、魔力の放出をも防ぐのである。ナツが捕まってしまうば、炎が出せなくなるのは勿論、滅竜魔法由来の卓越した身体能力も発揮できなくなってしまう。

その事は知らないまでも、危険性は感じ取ったナツが横へ転がり、間一髪で避ける。しかし、長年ともに過ごした2人のコンビネーションは、更なる追撃を放つ。転がっている最中に放たれたウォーリーの銃弾にはさすがのナツも反応することができず、顔面に食らってしまい、後方へと吹っ飛ぶ。

「ぐおっ!?!」

吹っ飛びながら、ナツはウォーリーとミリアーナのコンビプレイに對して、やりにくい相手だと感想を抱くが、ウォーリーの方は、銃弾を受けて吹っ飛ぶだけってどういう事だ、などと考えており、むしろ攻撃を当てた方が追い込まれている心持ちであつた。

このままではまともなダメージが入らないと感じたウォーリーは、1度ミリアーナに拘束してもらってからトドメを刺すべきだと作戦を立てる。

その旨をアイコンタクトでミリアーナに伝えると、すぐに体をバラ

バラにしてナツの周囲を包む。

全方位を囲まれてはナツも対処に手間取り、その場に落ちていたネコの巨大ぬいぐるみを振り回したりしながら、突進してくるウォーリーの一部を打ち落としていくが、どうしても一瞬の隙が生じてしまう。

その間隙を狙ったミリアーナのチューブがナツの右手をとらえる。「なんだ!?急に魔法が使えなくなった!!」

1度巻き付いてしまえばあとは早い。

みるみる内に、右足、左腕と巻き付けられていき、終いには腕ごと胴をグルグル巻きにされてしまうナツ。

そこにウォーリーが銃口を突き付けてくる。

さしものナツも、魔法なしで銃弾を受ければ致命傷となるだろう。万事休すかと思われたその時、高く愛らしい声が響く。

「ナツーーー!!」

隣の部屋でナツが敵と闘っている事に気づいたハッピーが、飛んできてきたのだ。そのまま、ナツを仕留める前に決め台詞を言おうとしていたウォーリーに体当たりをかます。

「ハッピー!!」

無事だったかと喜ぶも、依然として拘束されたままで、魔法も使えないという状況は変わっていない。

「ハッピー、ネコ女の方を頼む!」

「あいさー!」

この部屋の主であると予想されるミリアーナにハッピーを当てる事でかく乱を狙ったナツの作戦は見事に嵌り、「ネコネコが飛んでるー!天使のネコネコ?」と夢中でハッピーを見つめるミリアーナ。

集中が乱れたせいか、ナツの拘束が緩み、しかもそのことにウォーリーとミリアーナは気づいていない。それどころか、ハッピーを撃とうとしているウォーリーを見たミリアーナが「ネコネコをいじめないでー!」と仲間割れをはじめている。

「おっしー!」

「いけー、ナツーーー!」

ナツのつぶやきに反応したハッピーだけがミリアーナの元を離れる。

その動きを見てようやくナツが拘束から抜け出している事に気づく2人だが、もう遅い。

「火竜の翼撃!!」

突き出した両手から炎を噴出し、隙だらけの2人を吹き飛ばしてしまふ。

「四角野郎にリベンジ完了だー!」

「やったねナツー!」

パアンとハイタツチするナツとハッピー。

しかし、完全に意識を失っているミリアーナとは異なり、ウォーリーは辛うじて体を動かせるようで、立ち上がろうとしている。

「オレたちは楽園へ行くんだ…真の自由がある世界、人を支配できる世界へ……こんなところで負ける訳には……」

だが、やはり体は限界を迎えていたようで、震えながらも持ち上げた膝が崩れ落ちてしまう。

ナツはそんな様子を見ながら、「自由なく」と考える。

そして、口を開こうとしたその時、部屋中にナツの顔程もある大きな口が無数に現れる。

当然ナツの口がいきなり増えた訳ではない。

「なんだあ!」

「何コレ!?キモチわるいよ、ナツ!!」

その口から話すのは、この事件の首謀者たる男だ。

ねつとりとした、悪意を煮詰めたような声が辺りに響く。

『ようこそみなさん、オレはこの塔の支配者、ジェラルル……』

「なんだこれは……ジェラルル?」とウォーリーですら困惑の声を上げている。

当然ナツとハッピーも訝しげな目で、口の1つに近づいて睨みつけた。

巨大な口は、そんな様子などお構いなしとばかりに続ける。

『互いの駒は揃った。そろそろ始めようじゃないか……楽園ゲーム

13話 「楽園ゲーム」

▼三人称視点

『ようこそみなさん、オレはこの塔の支配者、ジェラール……互いの駒は揃った。そろそろ始めようじゃないか……楽園ゲームを』

怪しげな男の声が、塔中に生えた大きな口から響く。

悪趣味な放送の演出やゲームという真剣みの欠けた言葉に、あくまで余裕を崩さない態度、それを聞く『妖精の尻尾』プラスアルファの面々は不気味さを覚える。

『ルールは簡単。オレはエルザを生贄とし、ゼレフ復活の儀を行いたい……つまりは楽園への扉が開けばオレの勝ちだ。そして、それを阻止できればそちらの勝ち』

ここまでは今のところ全員が共通する認識だ。

……エルザの回想を聞いていないナツとハッピーだけは「生贄エ!?!」と声を荒げているが。

『こちらは3人の戦士を配置しておいた……つまりは3対7のバトルロワイアルだ。それを突破せねば俺に辿り着く事はできない』

3人の戦士という言葉に少し動揺するシモン。

この塔にいる魔導士はジェラール、自分、シヨウ、ウォーリー、ミアーナと『妖精の尻尾』の面々だけだと考えていたからだ。

説得の余地があるウォーリー、ミアーナとは違い、その3人は完全なジェラールの味方なのだろう。上手くいけばジェラールまでの道を総スルーできるかもしれないと考えていたシモンは、自分の想定 of 甘さを痛感していた。この分では、自分がジェラールに騙されたフリをして隙を伺っていた事も恐らくバレていて、その上で泳がされていたのだろう、とシモンは思う。

しかし、それはシモンにとって、やはりそうだったか、という程度の事実でしかない。彼にとって自分という存在は、泳がせて楽しめる程度の些細な障害だったのだろう、というのは想像に余りある。彼の底知れなさを知るシモンならではの感想だった。

しかし、この後、シモンの想定を遥かに超えた発言が、ジェラール

の口から飛び出す事となる。

『だが、それだけでは緊張感が足りないだろうか？だからゲームオーバーを用意しておいた、双方にとつてのな……少し前、この塔の存在を評議院の老人どもに露見させた。従って、この地に衛星魔法陣サテライトスクエアによる攻撃が行われる可能性がある……つまりはエーテリオンだ』

放送を聞いていた全ての人間に戦慄が走る。

超絶時空破壊魔法、エーテリオン。

宇宙に設置された巨大な魔法陣——衛星魔法陣サテライトスクエアから、様々な属性を混合させた莫大な魔力塊を投下する大魔法だ。爆心地のあらゆる物を破壊せしめる、魔法評議院が保有する切り札的な魔法である。その威力は一撃で国を亡ぼすとも称され、この楽園の塔がある島程度なら、周囲の海ごと蒸発させることが可能だろう。

当然、そのような大威力の魔法はそうポンポンと撃てるものではない。技術的には、射出が決まってから、多数の優秀な魔導士による準備作業が数十分と必要になるような代物である上、そもそも射出決定にはお堅い評議員連中9人の内、過半数の5人が賛同する必要がある。

が、そのような事はエルザ達にとって何の慰めにもならなかった。

ジェラールは先ほど塔の存在を露見させたと言い放った。ゲームオーバーを本気で用意しようと言うならば、蘇生させようとしている対象が、かの黒魔導士ゼレフである事さえ評議院にバレているだろう。ただでさえ危険視される死者蘇生の黒魔法、それも復活するのが魔法界史上最も凶悪な魔導士とされるゼレフともなれば、事の重大さは尋常ではない。エーテリオン投下が認められてもなんらおかしな部分はないだろう。

『エーテリオンが落ちる事、それは即ち全員の死を意味する。勝者なきゲームオーバーだ……さて、タイムリミットまで、あと如何ほどか……』

そして実際、ここから遠く離れた魔法評議会会場ERAでは、今まさにエーテリオン攻撃議案の決が採られようとしていた。

これは、評議院が誇る若き俊英、最年少評議員にして聖十大魔道せいじゅうだいまどうの一角であるジークレインが発議したものであった。

ジークレインが言うには、自分はジェラルルの生き別れの兄であり、その事から常々彼の調査を行っていたそうだ。悪事を働こうとしている事や、どこかに黒魔術に関する施設を建築しているところまでは探れたが、その先が分からなかった。しかし、つい先ほど、さる情報筋から、楽園の塔の場所、そして真の目的——ゼレフ復活を知った、というのだ。

他の評議員たちは、当初からジークレインに賛同していたウルティア・ミルコビッチという女性を除いて、発議の段階ではエーテリオンに難色を示していたが、ジークレインの告白、そしてゼレフ復活という言葉を聞いて考えを改める。

結局、最終的な票数は賛成8、反対1。最後まで反対したのは、エーテリオンによって数多の命が失われるであろう事に重きを置いたヤジマのみであった。

こうして実際に投下準備に入ったエーテリオンだが、この事実を知らずとも、「エーテリオンが落ちるかもしれない」という可能性だけで塔内部の人間の緊張は半端なものではなかった。

そんな心情など知らぬとばかりに、愉しげ気なジェラルルが声を発する。

『さあ、楽しもう』

▽▽▽

この放送に酷く心を揺さぶられたものが何人か。

その1人が先ほどまでナツと交戦し、真の自由が欲しいと口にしていたウォーリーだ。

「なんだよジェラルル…エーテリオンってよう……」

実はエーテリオンがどんなものか分かっていないナツだが、ウォーリーの狼狽えきったその姿に思わず静かになってしまう。

「そんなの食らったらみんな死んじゃうんだぜ…？何を考えてるのか

分かんねえよ、ジエラール……オレたちはただ……真の自由が欲しいだけじゃなかったのか……？」

自由、自由と言うウォーリー。

この塔でこれまで何が起きたのか、今何が起きているのか、そしてこの後何が起こるのか、何も分かっていないナツでも、自分の事なら分かる。

「なあ、四角」

それまで地面に向かって気持ち吐露していただけたウォーリーが顔を上げる。

その表情はハードボイルドとは程遠い、今にも泣き崩れそうなものだった。

このまま気を失ってしまえば、泣き崩れるだけでは足りない。きつとこの8年、文字通りに積み上げてきたモノまでもが崩れてしまう。それを直感的に理解しているのだろう、その感覚だけで彼は気を失わずにいた。

「真の自由ってのが何なのか知らねーけど、支配なんていらねーんじゃないか？だって支配そんなのなくても妖精オレたちの尻尾は自由だぞ」

ウォーリーの視線はナツの右肩に刻まれた妖精の紋章に吸い込まれる。

これが、今エルザが居るギルドぼしょか、と何か納得したような気持ちになった。

8年の間に積み重なった塔が崩れ、更地になったとしても、それでウォーリーの人生ものがたりが終わる訳ではない。

寧ろ塔を支える為に硬くしてきた地盤が残っている。そこに何を築くのか、次に目覚めた時には自由に決められるようになっていようだろう。

そう考えながら目を閉じる。

——オレの運命は火竜オマエと出会った時に始まったのかもナ

くしくも、決め台詞としていた言葉と真逆の思いを抱きながら、安心して一時の眠りに落ちた。

▽▽▽

そして、ジエラルールの放送に心を揺さぶられてしまった者はここにも。

——何がゲームだ……！どれだけ俺たちを弄べば気が済むんだ!? 強い信頼……いや、ここでは依存だろうか。兎も角、それらは時として強い憎しみへと反転する事がある。

「ジエラルール……！」

今のシヨウはまさにソレだった。

怒りに体は震え、何もかも受け入れられないと言うように荒く息を吐く。

エルザを裏切者に仕立て上げ、自分たちを騙して8年もの時間を奪った。

何も知らなかったシヨウ達の手で、エルザを生贄に捧げさせようとした。

今度はここにいる全員の命を懸けたゲームをしようなどと抜かす。許してはおけぬ、生かしてはおけぬ。

チラと、横でジエラルールの言葉に驚いているエルザを見る。

——強くて、綺麗で、優しく、姿を見せずともオレたちを守ってくれていた姉さん……

と、ジエラルールの抜けた穴にスツポリとエルザを納めてしまうシヨウ。

エルザへの強い固執と、ジエラルールへの憎悪は彼に、ある決意を抱かせた。

すつと、未だに呆然としているエルザの方へ手を伸ばす。

バフ、という音が鳴って、エルザがシヨウの魔法によってカードの中に納められてしまった。

これはカジノで使った多人数を対象としたものではなく、外界との分離を完璧にするためのプロテクトをかけた完全版の封印だ。いくらエルザと言えども、内側からこの封印を解くことはできない。当然の事だが、エルザを守るための結界である以上、外側からの攻撃にも強く、内側のエルザが傷つけられる事は万が一にもないだろう。

「姉さんは俺が守る…誰にも指一本触れさせない…そしてジェラルはこの俺が倒す!!」

そう言つて1人駆け出してしまふ。

その場に残された面々は、あまりにも予想外のその行動に面食らい、驚きの声は出せども、一瞬ばかり動けなくなる。

まず復活したのはシモン。

「よせー！人じゃ無理だ!!」

その次がグレイだった。

シヨウを追おうとするシモンを引き留め、自分が追うと提案したのだ。

「ナツはネコ女の部屋にいるんだろ!?そこを知ってるのはお前だけだ!だからソツチ行け!」

駆けながら自分の考えを話すグレイ。

ハッピーを探しに行くとは分かれたナツの居場所は、おそらくミリアーナの部屋だろうというのが一同の予想であり、ジェラルの放送を聞いたのも、そこへ向かう道中だったのだ。

シモンはハッピーがミリアーナの部屋に連れて行かれたのを知っていたし、『妖精の尻尾』の面子はナツの鼻の良さを知っていた。そこから導きだされた結論だが、それならばとミリアーナの部屋を知るシモンが案内を買つて出ていたのである。

「わ、わかった…：エルザを頼んだぞー!」

本当はシモン自身でエルザとシヨウの2人を追いたいのだが、グレイの勢いに負け、その声を出すにとどめてしまふ。

「つたりめえだ!」

グレイは遠くの方で、顔だけこちらに向けて、そう叫んだ。

シモンもその表情を見て、この男なら任せられると、自分のやるべき事に集中する事とする。

「お前たちは念のため、この塔をくまなく探しておいてくれ。俺はミリアーナの部屋まで行ってくる!時間がない、よろしく頼むぞー!」

それだけ言い残すと、今度はシモンも駆け出してしまふ。

「ちよつと!!女のコだけ残してく気!」

ルーシイがそうツツコミを入れるが、聞く耳持たない。

「つたく、男子連中つたら……」とひとりごちてから、ジユビアの方を見る。

「仕方ありません、ここからは2人で行動しましょう……ジユビアとしては、グレイ様ではなく、恋敵と一緒にというのが若干気に食わないけど」

「いや、恋敵じゃないし……あたしが好きなのは……」

そう言って少しモジモジとするルーシイ。

しかし、ジユビアはその様子に気づかない。

「何ですか？グレイ様に魅力がないと!？」

「え、いやそういう事じゃなくて……」

「じゃあやっぱり恋敵なのね!？」

「ええ……私にどうしろと……?」

2人残された女性陣がくっちゃべりながら歩きだす。

その道の先に、ジエラルが配置したという戦士の1人がいるとも知らず……

▼トウヤ視点

俺とアルマの2人は今現在も、必死の思いをして海を渡っているとこだ。

いい加減疲れも出てくるが、エルザのためならエンヤコラ。

幸いにも、塔は大分近づいてきている。最初はアルマに上空まで行って確認してもらっていたが、今では泳ぎながらも確認できる。

「そろそろ私が運びますよ、トウヤ」

「……頼む」

情けないが、俺が泳ぐよりもアルマに運んでもらう方が格段に速い。

泳ぎが苦手という訳ではないし、ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士の身体能力を使って、常人の何倍ものスピードで泳げるという自信もあるが、流石に空飛ぶ猫と比べられると雲泥の差となってしまう。

滅魚魔導士フィッシュマスターなどが居れば速く泳げるのだろうか……

ん？それ漁師じゃね？

……くだらない事を考えていた俺だが、塔の見える方から、何か光が出ているのが見えては流石に思考を引き締める他ない。

海の上の塔、光とくれば思いつくのは灯台のような航路標識だが、ジェラールだって、まさか敵を招き入れるような親切をかます男ではあるまい。

とくれば、俺ではなく、何か別の船が来ているか、全く別の何かか……

そもそも、夕暮れ時に差し掛かっているとはいえ、まださほど暗くないのだから、標識とは考えにくいか。

だとすればあれは何の光……

って、なんかあれ、大きくなってないか？

んん？大きくっていうか、こつちに来てる……？

その事に気づいてじっと見つめ、耳も澄ませてみると、キイイインというジェットエンジンのような音も聞こえてくる。

どんだんその光が近づいてきて——止まる様子がない！

このままじゃぶつかるぞ！？というところまで迫ってきた時点で、その光の正体が、背負ったロケットで空を翔ける巨体の人間である事に気づいた。

ん？人間？フクロウ？え、何あれは……！？

兎も角、フクロウの被り物をした大男がこちらに突っ込んでくる——

—！！

「曲がります!!」

敵の初撃に気づいてくれたアルマが、グイツと右に曲がる事で、正面から突っ込んできていたフクロウ男を、寸でのところで回避する事に成功した。

「我が一撃を躲してみせるとは、やるな……悪党よ」

あ、悪党？

いや、そりやまあ正義の味方を目指した覚えもないが。

「貴様らの悪名は聞いているぞ、妖精フェアリーテイルの尻尾。至るところで破壊の限

りを尽くす極悪集団め！」

うーん否定しきれない……

とはいえ、俺はそうでもないはずなんだが。

「そして貴様は、我らがギルド、髑髏会の構成員を数多く打倒してきた巨悪！この正義戦士、梟ジャスティスが裁きを下す！」

意外と真つ当な報復だったー!?

い、いやいや、そんなことはない！

髑髏会といえは暗殺依頼を主として活動する闇ギルドだ。その構成員が正規ギルドの人間に倒されるとあつては、普通に自業自得だろうよ!?

なんにせよ、巨悪呼ばわりされる筋合いはねえ!!

まあ悪だろうが正義だろうが、俺達の敵である事には変わらない。

それに、梟といえは――

「三羽トリニヤイレイブン鴉と呼ばれる、髑髏会トップグループの1人ですね……以前闘った団員たちと同じように考えてはいけませんよ」

そう、危険な相手だ。

確か、どこかで行われた戦争で、片側に雇われて、敵方の将校全員をたつた3人で暗殺したとか何とか……

でも、そのロケットエンジンでどうやって暗殺するんだろう？

皆殺しとかの方が似合うと思うんだが。

まあ、それは定かではないが、逆に言えば、夜闇に紛れてコソコソと人を殺すような集団とは違って、正面切つて闘つても強いという事なのだろう。

ここは海上、必然的に空中戦となる訳だが、つけ入る隙があるとするれば、飛行能力の性質の違いだ。先ほどの突進を思い返せば、確かにトップスピードではアルマの方が劣るが、翻つて小回りや停空飛翔には分があると言える。

フクロウマスクなんぞ被つて我が物顔で空を飛びやがって、空を統べる存在が何なのか教えてやるよ！

……あれ？

自力で飛んでる訳じゃないから、ドラゴンじゃなくて猫が空を統べ

る事にならないか、コレ……？

▼三人称視点

トウヤが空中戦を開始しようとしていた頃、グレイは徐々にシヨウとの距離を詰めていっていた。

何度後ろから呼びかけても反応はなく、無理やり止めようにも、あとちよつとというところで手が届かない。痺れを切らしたグレイは両手を合わせ、魔法を発動させた。

すると、みるみる内にシヨウの眼前に巨大な氷壁が出現する。突然現れた壁に対処しきれなかったシヨウは、顔面から激突してしまった。

明らかに正気でない顔で振り返って、グレイを睨みつけるシヨウ。「用があるのはジェラールだけだ！邪魔をするならまずはお前からやってやるぞ!!」

「一旦落ち着け馬鹿野郎!!……そんな明らかに冷静じゃない状態で闘ったところで、ジェラールに手玉に取られるだけだぞ！そうやって騙されてきたんだろうが!!」

騙されていた事をシヨウ側の落ち度であるように語っていると感じたシヨウは、更に怒気を強める。

「オレは冷静だ!」

「なら何で、エルザを狙ってる奴と闘おうってのに、当のエルザを無防備な状態にして連れて行ってんだよ!?!」

いくら強固にプロテクトされているとはいえ、それをジェラルの前にわざわざ持って行ってやる必要はない。誰かに渡すなりしてからジェラルの元に向かえば、エルザの安全度は更に高まる。

「姉さんはオレが守るから何も問題はない!!」

「それが冷静じゃねエって言ってんだよ!」

もはや問答をする事が苦痛になってきたのか、シヨウは懐からトランプのカードを無数に取り出し、グレイに投げつける。

たかがカードと侮るなかれ、そもそも材質と飛ばし方次第では野菜

すら切る事ができるのだ。ましてや今飛ばしたカードは戦闘用の特注品、咄嗟に避けたグレイの向こうの石壁へと見事に突き刺さっている。

「てんめつ……一旦、頭ア冷やさせてやる！」

両手を組み合わせるグレイ。

後ろに氷壁がある分シヨウの逃げ場は狭いが、あえて右側に逃げ場を作るように槍を生成する。

「アイスメイク 槍騎兵^{ランス}！！」

「くっ、この……！」

案の定、シヨウはその隙間に飛び込んで難を逃れ、仕返しに再度カードを投げつけようと構える。

しかし、この展開こそグレイの狙い通り。

槍を打ち出した直後から動きだしていたグレイが先を取り、カードを放つ前にシヨウを組み伏せてしまった。

マウントポジションを取り、身動きが取れないようにさせてから、一旦落ち着いてからグレイが語り掛ける。

「別にジエラールを倒しに行く事は止めやしねえよ……だが、今みたいに何も見えてない状態で行かせる訳にはいかねえ。ましてや、そんな無防備な状態のエルザを連れてるなら尚更だ」

「だけど姉さんは！」

「姉さん、姉さんって言うてるが、お前はエルザが信じられねえのか？」

エルザが信じられない、この言葉は今のシヨウを著しく刺激する言葉だった。

8年間たった1人でエルザを信じてきた男を見てしまったせいで、エルザを信じ切れなかった己に深い怒りを感じているのだ。

「そんな訳ないだろ!? お前はオレと姉さんの何を知ったつもりで言うてるんだよ!!」

「じゃあ、お前は今のエルザの何を知ってんだよ!」

「！」

「エルザは強い。本気のアイツに勝てる奴なんかいやしねーよ。」

まあ、敵はエルザを生贄にしようって輩だ、心配するのは分かる……が、少なくともカードの中に居るよりは、普通に闘った方が安全だ」
「そ、れは……」

エルザが強いのは、8年前の反乱で知っている。
が、今が如何ほどのものなのかは知る由もない事だ。
今のエルザはどのように闘うのだろうか？

鎧を換装して闘うのは聞いているが、どのような鎧なのか、いくつ持っているのか……そう想像している内に、少しずつ冷静さが戻ってくる。

人は、怒りで1つの事に固執している時、別の事をじっくりと考えることで冷静になる事ができる。

狙ったの事ではなかったが、結果的にシヨウの暴走を止める事に成功したグレイは、すつとシヨウの上からのき、手を引つ張つて立ち上がらせる。

「なに、エルザを守りてえってんなら、一緒に闘えばいいんだ……3人で殴り込みに行くぞ」

シヨウがその意見にゆつくりと頷いて、エルザのカードを取り出そうとした——その時だった。

「あんさんがエルザはんを連れてらしたんやねえ……」

しやなりしやなりと、2人のすぐ後ろまで、見覚えのない女が歩いてきたのは。

髑髏の絵が描かれた趣味の悪い着物を着崩し、身の丈ほどもありそうな長刀を携えた妖しげな女だった。

——いつの間に!? 全く気が付かなかった……!!

いきなり登場した女——それも明らかに味方ではない——を前に、驚愕に思考を染められていたグレイだったが、彼女がすつ、と刀に手をかけた瞬間には意識を覚醒させた。

女が見ているのはシヨウの方、それも手にしたカードの部分だ。
マズい、そう声が出る前に体が動く。

凜と音がしそうな程美しい剣閃が、シヨウの手に持ったカードに――ではなく、その前に躍り出たグレイの胴体に吸い込まれる。

「ぐあっ……!!」

ツーとグレイに赤い線が走り、そこから血が噴き出した。

「あら、見事どすな……」

致命傷を負ったグレイはたまらず膝を折り、倒れ込んでしまう。

「その献身に敬意を表して、まずはあんさんから逝かせて差し上げますえ」

そう言つて、刀を振り上げる女。

身動きの取れないグレイの首筋に向かおうとする長刀は、しかし、キンと弾かれ目的を達成しない。

「あら、エルザはん。無粋な方やわあ」

「抜かせ……貴様にはジェラルルの前の準備体操の相手になつてもらうぞ」

グレイが身を賭して稼いだ時間は、シヨウがエルザを解放するのに十分なモノだった。

カードから出てすぐにグレイの元に駆け出したエルザは、それと並行して魔法剣を呼び出し、女の凶刃を一刀の下に防いだのだ。

一瞬つばぜり合いの体勢を取ったが、すぐに互いが後ろに飛び、今は様子を見合っている。

しかし、一見互角のやり取りをしたように見えた2人だったが、実際には女の方が先制パンチを奪っていたようだ。

「その程度でジェラルルはんと闘うつもりどすか？」

そう言うと同時に、女と打ち合ったエルザの剣が半ばで折れてしまふ。

女の見事な腕前に目を見開くも、すぐに気を取り直して、シヨウに指示を出すエルザ。

「くっ……シヨウ、グレイや妖精フェアリーテイルの尻尾の皆を連れて塔から離れてくれ。このままではグレイがマズい」

「で、でもそれじゃ姉さんが……」

「私の事なら大丈夫だ。信じてくれ」

その言葉にハツとなるシヨウ。

たしかに、このままではグレイが危ない。早急に危険のないところに行つて、止血しなければならぬ。

そこまで考えたシヨウは、今度こそ信じる者を間違えなかつた。

「うんー！」

相手は強い。

自分では役に立つことはできないと、あの一合で分かつてしまった。

だがきつとエルザは負けない。負ける訳がない。

そう信じて、自分は己がすべき事をするのみだ。

そつとグレイを横抱きにし、揺らさないようにしながら、この場から離れていく。

「お話は終わりますか？」

「待たせたな」

「ええんどす。では改めて……うちは鬪體会、トリニテイレイブン三羽鴉イカルガの斑鳩と申しますう……よしなに」

返事代わりに天輪の鎧を換装するエルザ。

両者、得物を構え、隙を伺い……

「参ります」

斑鳩の言葉と同時に、鬪いの火蓋が切られた。

14話「エーテリオン」

▼三人称視点

猫まみれの部屋で、ウォーリーとの問答を終えたナツの前にシモンが現れる。

カジノ襲撃犯の中では、自分に攻撃したウォーリーにしか目が行っていないかつたらしく、シモンを見て「誰だ、コイツ？」という顔をすするナツと、事情を知らないが故に未だに敵側の存在だと勘違いしたまま警戒を露にするハッピー。

「ナツ、コイツあの四角の仲間だよ！」

なら喧嘩を売りに来たのか？と思うも、待て待てというように手を突き出しているシモンの様子を見るに、どうもそういう訳ではないらしい。1度握った拳を解く。

「今は味方だ……そこに倒れている2人もそうだが、オレとエルザは幼い頃をここで過ごした仲間だった」

驚きの事実だと驚くが、ならなぜエルザを襲ってきたのか、ここでナツとウォーリー達が闘ったのか、という疑問が湧いてしまう。

「今は味方ってどういう事？」

と、代表してハッピーが聞いてくれる。

「カジノを襲った他の3人はジエラールに騙されて、エルザを1人でこの塔を出た裏切者だと信じ込まされていたんだ。オレだけはエルザを信じていたが、ジエラールを倒すには力が足りなかった」

ジエラール……さっきのいけ好かないヤローか、と思い返して炎が揺らめく。

エルザを生贄にするなどと抜かす男への怒りがこみ上げてきたのだ。

「だからこうして、魔導士が多く集まる機会を待っていた。その全員でジエラールを攻撃しようとな……だが、結局それすら見越していたジエラールに刺客を放たれ、みなバラバラにされてしまった。おそろく、このままではエルザ1人でケリを付けに行ってしまうだろう」

助けてくれるか、とは聞いてくれたんだがな……と複雑そうに言う

シモンだったが、ナツやハッピーにはエルザが1人で行く事の何にそんなに悩んでいるのか分からなかった。

「もしや、コイツもあのヤローをぶん殴りたいのだろうか？その機会をエルザに奪われる心配をしているのか？と的外れな予想まで立てている。」

「でもエルザなら大丈夫だよ！」

『妖精の尻尾』のエルザに対するその全幅の信頼は尊いものだが、単純にエルザが強いというだけでは解決できない関係性が、エルザとジェラルルの間にはあると、そうシモンは考えていた。

「いいや……エルザではジェラルルには勝てない」

その言葉には黙っていられなかったナツは、シモンの胸倉を掴んでしまう。

グイツと引き寄せて、威嚇するように叫ぶ。

「エルザをバカにしてんじゃねえ!!」

が、逆にシモンもナツ以上の熱量を、眼帯のついていない片目から発して、ナツのマフラーを掴んだ。

その剣幕にナツも押し黙る。

「そうじゃない！力や魔力の話じゃないんだ！……エルザは未だにジェラルルを救おうとしている。確かにあの2人には8年の因縁がある。だが、それ以前の情もエルザには残っているんだ。アイツにジェラルルは憎めない……オレには分かる」

そして、と言葉を続ける。

「ジェラルルはそれすら利用する狡猾な男だ……それに、もうすぐエーテリオンが落ちる。エルザなら、それを利用して道連れにすることも言いかねん……アイツを知るなら想像がつくだろう？」

「何!?!」

エルザの因縁なら自分が出しやばるまでもないのではないか、そう思っていたナツだったが、エルザが死ぬ気かもしれないとすれば、そんな事を言っている訳にはいかない。

「お前がジェラルルを倒し、エルザをエーテリオン発射の前にこの塔から連れ出してくるんだ！……俺ではジェラルルには勝てない……」

頼む、エルザを助けてくれ！」

この通りだと深く頭を下げるシモン。

ナツの位置からでは、その顔を伺い知る事ができないが、忸怩たる思いで歪んでいる事くらい簡単に想像がつく。

「ハッピーー！」

「あいー！」

「行くぞ!!」

言葉少なにやり取りを交わし、部屋の窓から身を乗り出させる。

その背中にハッピーが捕まり、翼を生やして飛び立った。

部屋には、ナツが出ていった後も頭を下げ続け、「頼む、頼む」と懇願を続けるシモンの声が響いていた。

一方、空からショートカットで頂上に向かおうとしていたナツ達だったが、そう上手くはいかなかった。

ある程度進んだところで、空中に巨大な結界が張られている事に気づいたのだ。

当然何度か体当たりを行い、破ろうと試みたのだが、これを無理やり壊すなら、早く中に入って、上がっていった方が早い、と結論づけた。

——エーテリオン発射まであと20分

▼エルザ視点

「期待外れどすなあ、エルザはん……」

この女、強い……！

先ほどから、新たな鎧を纏う度に斬り捨てられてしまっている。

どんな硬度、性質の鎧を身に着けても、コイツの刀の前では歯が立たない。

今も、私の保有する中で最高クラスの堅牢な守りと、装着者の膂力を何倍にもする最強候補ともいえる煉獄の鎧を纏っているが……

「ぐはっ?!……ハア……ハア……!」

粉々に砕かれてしまう。

全て細かいものではあるが、私の体は既に傷だらけで、血もそこそこの量を流してしまっている。

「うちに斬れないものはありません……欲を言えば、おたくのこの斬魔はんを斬ってみたかったんやけどなあ」

斑鳩の剣筋は、見えなくはないといった程度のものだ。

が、実際には反応できないでいる。

純粹な迅さはもちろん、巧さでもあちらの方が上なのだろう。そうでなければ、こうまでいい様にやられはしないし、何より同じように振ってぶつかった剣が、私の方だけ折れるなどという事にはならない。

それにしても、トウヤか……

確かに、なんでも斬れるトウヤと、この女の剣は似ているかもしれない。

格好的にも羽織と着物で共通性があるしな。

だがまあ……

「お前ではトウヤは斬れんさ……アイツは私より強い」

トウヤだけじゃない、『妖精の尻尾』の誰もが、私より強い心を持っている。

だが、それに比べて、私は本当に弱い……

いつもいつも硬い鎧からで心を覆って、周りに自分を強く見せようと必死だった。

鎧が私を守ってくれると信じていたのだ。

でも、そうじゃなかった。

だから、この女に全て砕かれてしまったのだろう。

きつと、私はこいつとの対峙の仕方を間違えたのだ。

何をも斬り裂く剣を振るう相手に、鎧など纏っていてどうするんだ。

当たれば斬られるというなら、当たらなければいい。

必要なのは硬さよろいではなかった。

身軽さ、柔軟さ、鋭さ、集中力、そして何より——覚悟だ。

「……敵わんからって、捨て鉢にならばったん？」

私が次に換装したのは、鎧ではなく、ただの装束。何の魔力も持たないサラシと紅い軽衫だ。

手には二振りの刀を持ち、後ろで髪を縛っている。

初めにこの衣装を用意したとき、使う時など来ないと思っていた。それをまさか、ここぞという時に使う事になるとはな……

「違う……今更になって気づいたのだ」

「なんにどす？」

「私を守っていたはずの鎧は、実際には壁でしかなかったという事だ……妖精の尻尾の心と私の心を繋いでくれる隙間を埋めてしまっていたんだ」

「……………」

「鎧を脱いだ私なら……皆の強さと繋がれる」

力を借りるぞ。

そう思えば、もう尽きそうだと思っていた気力が再び湧いてくる。

「下らんなあ。そんなんで強くなれたら世話あらしまへん」

そうだろうな……お前たちには分かるまい。

人と人の繋がりを絶つ事を専門に受け持つ、暗殺ギルドではな……

！

「覚悟オ!!」

そう言って、これまでで1番のスピードでもってこちらに飛び込んでくる斑鳩。

だが——見える、反応できる……身体が軽い！

時間が遅くなったようにすら感じる。

こちらも走り出して迎え撃つ。

——もう迷いはない。私の全てを強さにかえて討つ！

音も色も消え失せて、斑鳩の一刀、私の二刀、この三点だけに集中する。

凜、という音がして、2人の剣閃が交わった。

「くっ」

私の肩口に傷が走った。

「勝負あり」と呟いた斑鳩に、そうだなと笑ってやる。

すると、斑鳩の体に、私の傷よりも深く、紅い一文字が刻まれた。

斑鳩は「そんな」と驚きながら、桜が散るように崩れ落ちてしまう。

「み、見事……どす……うちが負けるなんて……ギルドに入ってから……初めてや……」

言葉だけを聞けば、素直に負けを認めている斑鳩だが、その声音には、なぜか意地の悪い響きが籠っている。

まさか負け惜しみでもあるまい、と振り返ると、やはり不敵に笑っている口許。

「でも……エルザはんもジェラルはんも、揃って負けどすわ……あと15分」

「なに？」

仰向けになって、天へと向けて徐に右手を突き出した斑鳩。

「落ちていく」

正義の光は

皆殺し

ひどい詩、と1度自嘲して気を失った。

その様子を見届けた後、エーテリオンの事か？と焦りながら斑鳩の元を離れ、ジェラルのいる頂上を目指して走りだすエルザ。

残された時間はあまりにも短い。

——エーテリオン発射まであと15分

▼トウヤ視点

「ホーホホウ!!」

奇妙な掛け声とともにこちらへと突っ込んできて、蹴りを浴びせながら、俺たちの右側を抜けていく梟。

助走の時間がある分躲す事自体は難しくないが、それにカウンターを合わせようとなるとかなりの集中力が必要となってくる。

しかも、相手の手数は少ない訳でもない。

今も、Uターンしながら再び突っ込んできたのだが、その軌道が描く弧は思っていたよりも遥かに小さい。

この調子で縦横無尽に飛び回られては捉えようもないだろう。こちらはアルマと2人で飛んでいる分、無茶な姿勢が取れないし、そもそも、今日のアルマはここまで何度も飛んでくれていて余裕がない。あまり時間をかけすぎると訳にはいかない。

「斬竜の刀牙、一連斬！」

両手を交互に振るい、こちらに向かってくる梟に斬撃を飛ばす。

相手も馬鹿正直に振るわれた二条の斬撃には悠々と対処し、僅かに身を捻るだけで躲してくるが、それでも少しはスピードが落ちる。

これなら、と梟が繰り出した蹴りを掴んで止めた。

捕まえた！

この状態なら対等な殴り合いができる！

そう思っただけを突き出すも……

「斬竜の槍け……ぬおっ!？」

梟は逆に俺の腕を掴んできて、ジェットエンジンを吹かして飛び始める。

一瞬たじろいだが、関係ない！

強烈な風圧に負けないように体を無理やり起こして一撃…一撃

……うつぶ。

ダメだ！コイツ乗り物扱いか!?

物凄い吐き気が襲いかかってきて、つい攻撃をやめてしまう。

「滅竜魔導士の弱点は分かっているぞ！」

——くそ、コイツ自分を乗り物扱いされる事に抵抗がねえ!?

いやいや、そこはどうでもいいが、実際かなり相性が悪い。

俺達の最大の弱点である乗り物酔いを的確に突いてくる上、接近のために魔法のエンジンを使うだけで、肉弾戦自体には魔法を使っただけでいい。

元々こういうスタイルなのか、俺の事を調べて対策を練ったのかは知らないが、頗るやりにくい……

魔導士というものは、どうしても自分の魔法が打ち消されると、大なり小なり何かしらの反応を示してしまうものだ。それは例え、俺の能力を知っている相手だとしても例外ではない。自分の魔法なら大丈夫かもしれない、という意識がほんの僅かにあるからだ。また、確実に自分の魔法が消されると分かった上で魔法を放ってくる相手であつても、その意図——たとえば陽動など——を読めば、カウンターを取る事は容易い。

が、コイツには打ち消すべき魔法が無い。エンジンの魔法は斬れるかもしれないが、そこだけ狙えるなら、最初から本人を斬ればいい。

あ、やばい……考えがまとまらない。

きもちわるくなってきた……

い、いや、ここは自己暗示だ！

コイツは鳥だ！鳥だ！フクロウだ！乗り物じゃない！！

「うう、うっぷ……斬竜の……鋭爪！」

背中のアルマが意図を読んで、勢いよく俺の体を跳ね上げてくれる。

持ち上げた体の右足だけを勢いよく振りぬき、踵落としを仕掛けるが、至近距離での大きな動きでは流石に避けられてしまう。

だが、俺の腕を放させる事には成功した。

勢いが付きすぎてくると回りながら、梟との距離が離れていくが、掴まれていた時を思えば少し気分がマシなのだから、滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーの体は不思議なものだ。

「ホウ……大したものだ、この正義戦士ジャスティス、梟と空中戦でここまでやり合えるとはな」

フクロウのように首を傾けて俺に賛辞を送る梟。

……フクロウのような梟って分かりにくいな。

「だが、もうじき塔の連中に裁きの光が落ちる頃だ……そろそろ貴様にも正義の鉄槌を下してやろう」

裁きの光……一体何の話だ？

不可解な単語に首を傾げ、後ろのアルマにも疑問の視線を向けるが、こちらにも心当たりがないらしい。

「ホウ？その顔では知らなかったと見える……冥土の土産に教えてやろう。あの塔には、につきき悪の首魁、魔法評議院によるエーテリオン攻撃が敢行される事が決定しているのだ……時間にしてあと10分といったところか」

なに!?エーテリオンだと!?

しかもあと10分!?

クソっ、そんな切羽詰まった状況だなんて……!!

大体どうやって評議院はこの塔の存在を知ったんだよ、捜査したなら優秀すぎないか!?

普段は頭硬い癖にこういう余計な時だけ行動力がある奴らだな、全く。

というか、なんでそんなヤバい事態のクセに、塔から人が出てきている様子が無いんだよ。

一体、塔内はどうなってるんだ!

「では行くぞー!これでトドメだ、斬魔の死神!!」

こちらの動揺などお構いなしに突進を仕掛けてくる梟。

トドメという言葉に相応しい火力だが――

「アルマ、耳」

「分かりました!」

こんなところで遊んでいる訳にはいかなかった。

アルマが俺の指示を受けて、腕で耳を折りたたんだのを確認した後、大きく息を吸い込む。

コレをやると、普段声を出さない分、喉が痛くなって嫌なんだがな

……

今回は仕方あるまい。

「斬魔の……咆哮オ!!!」

俺の口許から銀色の閃光が吹き出して放射線状に広がり、こちらへ超スピードで向かってきていた梟の全身を包み込む。

「ホオオオオオオオオオ!!!」

光の中で四方八方から斬撃を浴びた梟は、ズタズタに斬り裂かれていった。

やがて光が収まると、全身に傷のない所が無いといった様子で意識を失い、海へと落下していく。

「アルマー！」

落ちていく梟の背中を見た瞬間に、あることを閃いた俺は、アルマを呼んで梟の方を指さした。

「え、拾うんですか……？」

そう、着水する前に回収する必要がある。

急いで梟の落下地点に体を割り込んだ俺は、フクロウマスクの大男を、まるで女の子を受け止めるように、そつとキャッチした。

「め、珍しいですね。倒した敵を助けるなんて」

え？

いや何言ってるの？

用があるのはコイツじゃなくて、コイツの背負ってるバックパックだよ？

よしよし、まだ生きてるな、ジェットエンジン。

これを傷つけないように外して、残りのフクロウ男は海にポイ——とする前に、一回素顔を見ておこうか。

あれ？

このマスク、外れない……え、やだ怖い。

うん、忘れよう。

良い感じの流木を見つけたからそこに寝かせておき、自分はアルマを抱えてバックパックを背負う。

さあ、塔まで全速力だ！

——エーテリオン発射まであと10分

▼エルザ視点

先ほど走り出してから5分が経った。

つまりは、エーテリオン投下まであと10分。

——だが、間に合ったぞ……

大きな扉を開けるとそこは、左右に側廊方式のようなアーチ型に配

置かれた柱が並ぶ空間だった。そのアーチの向こうには外の景色が、ガラスなどを隔てることなく広がっている。

そこから取り込まれた夕焼けの光が、部屋全体を紅く染めていた。しかし、少しの間部屋に居れば、徐々にその光が弱くなっているのが分かるだろう。じきに夜が来るのだ。それこそ、あと10分もすれば。

「久しぶりだな、エルザ」

部屋の奥、シルエットだけが浮かんでいるのかと錯覚するような黒ローブを着込んだ男が、凝った造りのチエス盤を弄りながら、こちらに声を掛ける。

「ジェラール」

その呼びかけに、男はローブのフードを取りながら振り向いた。

評議員ジークレインと全く同じ顔が現れる。

そのせいで、8年ぶりだというのに、あまり久しいとは感じられなかった。

浮かべる表情が、双子の兄より少し悪辣に見える程度だ。

「私がかつての仲間たちを解放する」

楽園の塔、そして、ジェラールという鎖から。

「構わんよ……もう必要ない。楽園の塔は完成したのだから」

必要ない、か……

昔のお前は、絶対に言わなかった言葉だ。

「あと10分足らずで破壊されるというのにな？」

そう、ここが謎だった。

8年もかけて建てた悲願の塔へエーテリオンが発射されるように仕掛けるなど、タガが外れているとしか思えない。

それに、この塔には、ある肝心なモノが欠けているはずだ。

この8年、近づけばショウ達を殺すと脅されていたために、ここ自体を訪れる事は終ぞできなかったが、楽園の塔というモノ自体はそれなりに調べてきた。

当時私たちを働かせていた教団は、ここ以外にもいくつか塔を建設していたという。その資料から、Rシステムと呼ばれる、塔の根幹を

成す魔法の構想や原理を学んだのだ。

この1日、塔を登って見てきた分には、確かに設計図通りに作られている。

しかし、だからこそ、他の場所に作られようとしていた塔と同様の、根本的な問題も抱えていると推測できる。

つまりは——魔力だ。

圧倒的に魔力が足りない。

Rシステムを起動するためには、大陸中の魔導士を集めるというよ
うな、まさに桁の違う魔力が必要となってくるのだ。その魔力がこの
塔のどこにも見当たらない。

「エーテリオンか……それも問題ない。簡単な話さ。すべてを破壊さ
れるその時より先に、お前を生贄に捧げ、ゼレフを復活させればいい」
私を生贄にする程度で、その魔力を補えるというなら、それはそれ
でとんでもない発明ではあるのだがな。

もはや狂人になり果ててしまった、というだけならばいいのだが
……

しかし、なんにせよ、エーテリオンさえ落ちてしまえば、ジエラー
ルも塔も粉々になるのだ。私にできるのは、その間ジエラールをこの
塔から出さない事。

「そうか……ならば私のやる事も簡単だ。貴様をココに足止めする
……それで全ての決着が付く！」

外で待っていてくれるはずの皆に申し訳ないとは思う。

だが、ここでコイツを止めて、全ての軛を壊すのが、私の8年に課
せられた使命なのだと思うのだ。

その時に、ジエラールだけ1人など寂しいじゃないか。

「行くぞー！」

掛け声とともに左手を突き出したジエラールが魔力弾を放つてく
る。

こちらは側転しながらそれを避ける。

避けきれないものは手に持った刀で弾く、いなす、斬り落とす。

トウヤほどではないが、極限の集中状態にある今の私ならば、この

程度の芸当はこなせる。

そうして一歩ずつ近づいていったが、ジェラールへの道が空いたと思った瞬間に放たれた衝撃波を食らい、柱を砕きながら宙に投げ出されてしまう。

が、墜ちてやる訳にはいかない。

私と一緒に吹っ飛ばされた瓦礫を足場に、右、左と空を飛び回り、元の場所まで戻ってくる。

落ち行く私を見る為にか、部屋の淵にきていたジェラールに、飛び上がった勢いで上段から斬りかかった。

ジェラールはそれを後ろに跳躍する事で回避し、先ほどよりも濃密な魔力の籠った魔弾を投擲する。

そこでふと、トウヤの言葉——を読み取ったアルマの言葉——を思い出した。

『とっておきの魔法を正面から突破してみせれば、殆どの魔導士は動きが止まる、だそうです』

これからエーテリオンを浴びようというんだ、ここでジェラルルの魔法を食らう事など、どうという事でもない。

「ジェラアアアル!!」

放たれた魔力塊に背面から突っ込んで抜け出し、振り向きながら袈裟懸けに斬る。

案の定驚いた顔をしたジェラールは反応が遅れ、それをもろに食らってくれた。

「ぐあ!!」

怯んでいるところに、畳みかけるように蹴りを叩きつけ、後ろ倒しにしてやる。

そして、そこに馬乗りになって、左手と右脚でジェラルルの両手を拘束しながら、右手で刀を突き付けておく。

もう残り時間は本当に少ない。

最期の語らいといこうじゃないか、ジェラール。

「どうしてRシステムが完成したなどと嘯く?」

「完成したさ!もはやお前を生贄にさえすれば起動する段階にある

！」

「そんな訳があるか……私だつてRシステムについて調べた。少しでも知識のある者なら、魔力が足りていない事など、すぐに気づく」

そこまで言うのと、観念したようにジェラールが笑う。

「そんな事まで見抜かれていたか……」

さあ、本当のお前を見せてくれ、ジェラール。

何がお前の狙いだというんだ。

「オレの体はゼレフの亡霊に憑りつかれている……ゼレフの肉体を蘇らせるための人形になり果てているんだ……」

憑りつかれた……？

操られていた、とでも言うのか？

「亡霊の囁くままに、この塔を建てさせられてきた。最終的に魔力が足りなくなると言う事に気づきながら……だが、それでも止まられなかった」

「魔力のないままに、儀式の完成を求めた……完成しない事など、俺自身にも、亡霊にも分かりきった事だったのに……」

「きつと、生贄にお前を選んだ事は、最後に残った俺のひとかけらが、お前を求めていたからなのだろう……エーテリオンもそうだ。お前という死に場所を求めて……」

「すまない、エルザ……俺という壊れた機関車と、運命を共にさせてしまった」

本来なら、操られていたとはいえ、シヨウ達の時間を奪った事は許される事ではないとなじるべきなのだろう。私を裏切り者にし、皆を人質にとつたと怒るべきなのだろう。

だが私は、ジェラールもゼレフの犠牲者だったのだな、と思っってしまうのだ。

誰もお前を救ってやれなかったという事なのだろう。私にも、ジェラール自身にも。

なら、私はここでその罪を償おう。

すつと、ジェラールの上から体をのかし、手を差し伸べて上半身を起こしてやる。

「いいんだジェラール……思えば私は、ココにたくさんを置いていってしまった。シヨウ達はもう外に出たはずなんだがな……最後に残ったお前が、ココで終わりたいと言うなら、付き合っただけが私の仕事だ」

空を見れば、すでに太陽は沈み切ってしまった。

しかし、夜というにはあまりにも明るい。

理由は至って単純で、この塔の直上にもう一つの太陽が現れたからだ。

その太陽は、強い光を放射しながら、今にも落ちてきそうに渦巻いていた。

▼三人称視点

「ありがとう、エルザ……」

エーテリオン発射まで、あと10秒……

エルザはそつとジェラールの体を抱きしめた。

8秒……7秒……

「最期に見たのがエルザの顔で良かった……」

5……4……3……

「オレは……救われたよ……」

2……

1。

聖なる祈りが光となって降り注いだ。

その光は、エルザと楽園の塔と、「勝った！」と黒い笑みを浮かべるジェラール

——そして、もう一人と一匹を、強く強く照らした。

15話「鎧として」

▼三人称視点

エーテリオンにより、全てが灰燼に帰したはずの楽園の塔。その頂上にて、未だに息をしている事に疑問を持ったエルザが、思わずといった様子で呟いた。

「生きてる……？…それに、ここは……？」

エルザと同様、いやそれ以上に動揺した様子を見せたジエラールは抱きしめていたエルザをグイと押しつける。

「な……にが……？」

エルザが抱いた疑問はまず、自分がなぜ生きているか。次に、自分の居る場所がどうして、ところどころが蒼い魔水晶ラクリマでできた建物に変わっているのか。

自分の頭上からは確かにエーテリオンが降り注いだはずで、それならば今頃死んでいなければおかしい。まさか、このまばらに魔力の光を浮かび上がらせる魔水晶の塔が天国という訳ではあるまい。その証拠に塔の外側の景色はエーテリオン投下前のものと一致——とは言っても、一面に海が広がるだけなのだが——している。ならば、この魔水晶は楽園の塔の内側にあつたのか？

そこまでエルザが考えた時、不意にジエラールが駆け出し、フロアの淵まで行つて上、下と塔を観察し始めた。

「どうして!?!計算は間違っていないなかったはずだ!!なぜ足りない!?!」

ジエラールが困惑していたのはエルザと同じ理由ではなかった。生きている事——想定通りだ。

塔の中から巨大な魔水晶が出てきた事——元々そういう設計だ。

2人が生きているのは、塔内部に仕込まれていた巨大魔水晶が、エーテリオンの魔力を吸い取ったからであるはずだ。

エルザの言っていた通り、Rシステムには膨大な魔力が必要で、ではそれをどこから持ってくるのか、というのが問題だった。それを、エーテリオンの魔力を吸収させるという方法で解決する、というのがジエラールの回答である。

計算上では殆ど丁度、Rシステム起動に必要な27億イデアの魔力が魔水晶に蓄積され、エルザを生贄に捧げさえすれば、ゼレフが復活するという状態になるはずであった。

では、今ジエラールが何に焦っているのかといえば、それは蓄積された魔力が想定していたよりも遥かに少なかったからである。

確かに、塔からは逆らんばかりの魔力を感じる。

しかし、明らかに27億には達していない。

あくまで目算であるが、およそ半分程しか溜まっていないと感じたのである。

誰も行った事のない計算であるが故、溜まる魔力に多少の誤差が出る事はあるだろう。しかし、半分しかないなど、それは流石にあり得ない。何か不測の事態が起こったに違いないのだ。

一体何が起きたのか、そう必死に思考するジエラールだったが、不意にその答えが——文字通りに——降りてきた。

トウヤとアルマが2人のいるフロアに下降してきたのだ。

トウヤは黒いパンツに、腹の部分のない黒のインナー、その上から緑のマントを羽織るといふ、普段とは異なる出で立ちでありつつも、満身創痍で今にも倒れそうな様子。アルマも、そのトウヤを重そうに抱えて、疲労困憊である事が見てとれた。

結局限界を迎えたのか、アルマが地面まであと少しというところで取り落としてしまい、トウヤが「ウゴ!」などと声を上げる。

「トウヤにアルマ!?!どうしてここにいるのだ!?!」

トウヤはもう立っていられないとばかりに横たわり、辛うじて左手を「よっ」という風に上げ、質問に答える。

「迎え、だ……」

アルマも引き継いで、

「エーテリオンも何とかしましたし、先ほど見ていたところ、そちらの方とも和解したのでしょう? なら、妖精の尻尾フェアリーテイルに帰りましょう。ジエラールさんも一緒にいかがですか?」

と、逆に聞き返してきた。

エーテリオンをなんとかした——なったではなく、した——という

部分に激しく疑問を浮かべつつも、数分前の自分が余りにも想定できていなかった状況に困惑しすぎて、「あ、ああ……？」と声を出す事しかできずにいるエルザ。

しかし、「一緒にどうか？」などと聞かれた男の方の心中は激しい怒りと憎しみに支配され、返答などしている場合ではなかった。当然、仮に返答したとしても、間違いなくNOではあるのだが。

「まさか……まさか、まさかまさかまさか!」

明らかに様子のおかしいジェラルルの態度に首をかしげる3人。

特に、エーテリオン投下直前の穏やかな会話を知るエルザの困惑は測り知れない。

が、そんな周囲の雰囲気などもはや眼中に入っていないジェラルルは、トウヤを只管に睨みつけた。

その眼は親の仇を見るような、大切なものを奪った人間を見るような憎悪に彩られており、視線の先のトウヤの心胆を寒からしめる。

怒りによる興奮で呼吸すら乱していたジェラルルが、声を裏返しそうになりながらも絶叫した。

「トウヤ・グレイス……貴様……エーテリオンを斬ったのか!!!」

▼ルーシー視点

——エーテリオン発射5分前

グレイ達と別れ、ジュビアと2人でナツを探し始めてすぐ、あたしたち2人は闇ギルド髑髏会・三羽トリニテイレン鴉の1人であるヴィダルダス・タカに襲われたんだ。

相手の魔法でジュビアを操られたり、水が効かなかつたりと苦戦もしたけど、最終的にはあたしとジュビアの合体技みたいなもので撃破する事ができた。

後でジュビアに聞いたら、合体魔法ユニゾンレイドという凄く難しい技術だったらしく、別々の魔法同士の魔力を融合させて大威力の魔法に昇華させるモノだそうだ。

でも、あたしとしてはそんな凄い魔法を発動できた事よりも、戦闘を通してジュビアとの距離が大分近づいた事の方が嬉しいかった。一度は敵対した相手だけど、これからは仲良くできそうだな。早く『妖精の尻尾』に入ってきて欲しいなあ。

結局その後、2人とも魔力の使い過ぎで眠ってしまい、次に気がついた時にはウォーリーとミリアーナって人に背負われて塔を出るところだった。

最初はこういう状況かと焦ってしまっただが、話を聞いてみると、2人とも既に大体の事情をシモンから聞いているみたい。

2人はナツに倒された後、ナツと話に来たシモンに介抱されて、その間にジェラールやエルザの事を聞いたって。その上で、エーテリオンから避難するために外に出ろという指示をのんで移動していたところに、倒れているあたし達を発見、連れてきてくれたみたいだ。

ジュビアも、ミリアーナもウォーリーも、全員が一度敵対した事があると思うと、なんだか面白い縁だなと思える。きつと『妖精の尻尾』は、色んな人を変えてしまう力を持つてるんだろうなあ。

4人で、あたし達が乗ってきた小舟に乗り込もうとしていた時に、グレイとショウもやってきた。

グレイが大きなケガをしたみたいで、それを見たジュビアが大分取り乱していたが、きちんと応急処置がされていて、今は血も止まっていると分かったら——それでも大分心配そうだが——すぐに落ち着いてくれた。

その騒動が終わったと思ったのも束の間、舟を出してすぐに目覚めたグレイが、エルザを置いてきてしまったと騒ぎ出した。こちらはショウの「今は姉さんを信じるしかない」という言葉を聞いて渋々納得したようだ。

そうは言っても、今も塔に残っているエルザ、ナツ、シモンが心配なのは変わらない。

それはここに居る全員に共通の気持ちのようで、横を見れば皆一様に不安そうに塔の方を伺っていた。

——早く出てきて、3人とも

そうして塔の中に思いを馳せていると、唐突にグレイが質問してきた。

「ん？何か聞こえねえか？」

そう言われると、エンジン音のような、悲鳴のような……何かが近づいてくる音が聞こえる。

その正体は、あたし達にとっても馴染み深いものだったようで……

「トウヤアアアアアアアアア!!速すぎますうううううう!!」

「……………止まらん」

「いやあああああああ!!!」

トウヤとアルマの2人が謎のロケットのようなものを背負って爆速でやってきていた。

しかも、何とか聞こえてきた言葉から考えると、かなりマズい状況のようだ。

「みやあ……爆速ネコネコ……元気最強……!!」

あの元気っ子のミリアーナにすら若干引かれるスピードで迫る2人だが、最悪なのは軌道的にこっちに向かって突っ込んできているという事だろう。

「なにやっつてんだアイツら!?……まあいい、ひとまず止めるぞ!」

「は、はい!グレイ様!!」

ツツコミながら、氷の壁をいくつも生み出していくグレイと、その間に挟むように水流の壁を作るジュビア。

「ネコネコのピンチ!?……ネ拘束チューブ!!」

ミリアーナもチューブを何本か出し、かなり目の粗いネットのようにして、受け止める体勢を作っている。

あ、あたしも何かしなくちゃ!

えつと、えつと、アクエリアスは全員巻き込まれるし(そもそも今は彼氏と旅行中らしく呼べない)、今日はタウロスを呼べない曜日だし……ええい!

「開け、処女宮の扉!バルゴ!!」

と、少しでも受け止める人間を増やすためにバルゴを呼んだ。

呼び出されてすぐ周囲を観察し、瞬時に状況判断を行うバルゴ。
「姫、トウヤ様を受け止めればよろしいのですね？……お仕置きです
ね」

いや、何ですよ!?

コチラの体勢が丁度整った頃に突っ込んでくるトウヤ達。

氷を砕き、水の膜を破り、チューブの網を巻き込み、けれど確実に減速しながらあたし達の方へやってくる。

よし、来なさい!

ぐつと、バルゴと2人で踏ん張ってトウヤ達を受け止める。しかし、遅くなっているとはいえ、そもそも男の人1人分の重さが突っ込んできている訳で、女子2人では身に余るものだったらしく、結局は体勢を崩して全身で受け止めてしまう事になってしまった。

つて、近っ!!

しかも、なぜかトウヤの格好が海パンで、すぐそこに肌があって、押し倒されてるみたいだな——!

「すまん……」

「う、ううん!……トウヤは大丈夫?」

至近距離でのやり取りに顔を熱くしていたが、「姫、これはお仕置きですわね?」という声を聞いて、あたしたちに下敷きにされているバルゴを思い出し、すぐに移動することになった。

もう少しでもあのままがよかったなあ……いやいや、違う違う。

ちなみに、バルゴはトウヤの分の星霊界の服を出し、早着替えさせた後に帰って行った。帰る瞬間、そつとあたしに耳打ちして、「色は姫とお揃いにしておきました」と言っていた。

……グツジョブ。

「それにしても、どうやって2人はここに?」

あたし達はナツの鼻でなんとか辿り着けたのだし、そもそもトウヤ達はエルザ達の事情を知らないという問題もあると思うのだが……

あと、さつきまで背負ってた謎のロケットも何だったのだろうか?

その質問に答えてくれたのはアルマだ。

「シモンさんという方からお手紙をいただきまして……ここまでは泳ぎと、私の翼と……あと、先ほどの三羽鴉の方からの戦利品ですが……まあそうしてやって来た訳です」

飛んできたのは兎も角、合間に水泳って……結構ビーチから距離あつたと思うんだけどなあ……

というか、シモンはトウヤに手紙なんて渡してたんだ。まあでも、カジノに居た時点から、塔に魔導士を集めるようにしてたんだからおかしくはないよね。トウヤほどの魔導士を呼ばない意味はないだろうし。

「シモンが？……もしかしてボーイが斬魔とやらかい？」

あ、そっか、ウオーリー達は初めて会うんだもんね。

ジュビアはカジノで会ったって言ってたけど。

「この人はトウヤ、後ろのネコちゃんはアルマ。妖精の尻尾の仲間なんだ」

そう言えば、ウオーリーはなるほどと頷き、ミリアーナは「ピンクのネコネコ！元氣最強？」とアルマに抱き着いている。

「あなたがミリアーナさんですね？……そして、私たちの顔を知らないという事は、そちらの角ばった方がウオーリーさんですか」

よろしく、と言いあう2人と1匹だったが、トウヤの方は周りを見回してから、あたしの服の裾をクイクイと引っ張ってきていた。

「どうしたの？」

「……2人は？」

そうだ……そのことも話さないかね。

「ナツとエルザと、あとシモンって人もまだ塔の中にいるの……あたし達、ここで3人が出てくるのを待ってるんだけど……」

そう伝えるとトウヤはわずかに目を開いて、焦りだす。

こんな事言いたくないけど、もしトウヤ達がもう少し早くついてたら、今頃3人ともここにいたりとか……

ううん、舟も無しにここまで来れてる時点で相当頑張ったんだもんね、2人とも……

早く出てきてよ、皆……

しかし、あたしの願いは届く事なく、無情にもタイムリミットがやってきてしまう。

太陽が沈んで薄暗くなってきた空が、再び白みだした。

それは塔の上空にあまりにも巨大な魔法陣が出現して、発光しているから。

その威容から漏れ出る光だけで、マズいモノだと気付いてしまう、そんな代物だ。

本当にアレが落ちるの……？

今までは、「全員が死ぬ」とか、「灰燼に帰す」とか、大仰な字面でしか理解できていなかった事が、こうして目の前に顕現した事で一気に絶望的な気分になってしまう。

こんなの、本当に塵も残らない！

もう間に合わないの……？

嫌だよ、こんなの……

「クソッ………アルマ!!」

余りの光景に全員が押し黙ってしまう中、トウヤだけがアルマの目を見て叫んでいる。

呼ばれたアルマが「本気ですか？」と聞き返したが、トウヤは軽く頷くだけ。

やがて、諦めたように溜息を吐き、「私も覚悟を決めます」と呟いてから翼を生やし、トウヤの背中に張り付いた。

黙ってふよふよと浮かんでいく2人。

「お、おい、どこ行くつもりだ!？」

そんなグレイの質問に振り返ったトウヤは、後ろからエーテリオンの光を受けていて、まるで天使のような……

そう想像して気づく。

………トウヤ、エーテリオンを止めるつもりなんだ。

本当に大丈夫なの？

皆そろって帰ってきてくれるの……？

そんな視線に気づいたのか、トウヤはこちらを見て、本当に薄くだけ笑った。

「すぐに戻る」

私は両手の指を絡めるように組んで、塔に向かっていくトウヤの背中を見つめた。

エーテリオン発射まで、残り数十秒。

奇しくも、評議員たちがエーテリオンの犠牲者の冥福を祈っていた丁度その時、あたしは仲間の無事を願って祈りを捧げていた。

▼トウヤ視点

いやあ、カッコつけて出てきたはいいが、流石に無理じゃないかなあ、アレは……

こうして近づけば近づく程、圧縮された魔力の力強さを感じるんだが、ジョゼの魔法など比にならんパワーだぞ。

一番良いのは発射される前に近づいて、魔法陣自体を破壊してしまう事だろう。そうすれば危険は殆どない……ハズ。

「アルマツ！」

「分かっています！もう一段スピードを上げます!!」

宣言と共に、俺にかかる重圧がグンッと増え、スピードが上がる。

鼻のジェットエンジンを使った時ほどではないが、それでも凄い速さだ。目の前にある塔がどんどんと下方へ流れていくように見える。

今日は一日中飛びっぱなしだというのに、その疲労を感じさせない。

この件が片付いて落ち着いたら、旨い魚でもたらふく食わせてやらなきゃな。

ほんの一瞬だが、塔頂点の2本突き立ったような部分の1つ下の階、おそらく人が入れる分では最上階にあたるであろう場所で一組の男女が抱き合っているのが見えた。

緋色の髪の人と、蒼い髪の男だ。

女の方は間違いなくエルザだろう。男の方はパツと見た感じだけ

なら、評議員のジークレインという胡散臭いやロウに似ていたのだが、まあ状況的にアレがジエラルののだろう。

抱き合っているなら、和解が済んだのかもしれない。

エーテリオンという、自分を明確に死に追いやるモノを間近で目にしようやく正気に戻れたとか、エルザの説得が効いたとか、そんな感じだろうか？

何にしても、ジエラルだって元を正せばエルザの仲間だったのだ、更生するというならそれ以上は無い。評議院からは逃げ回る生活になってしまっただろうが、ここで死ぬよりマシだろう。その方がきつとエルザも喜ぶ。

こりゃ、エーテリオンを止める理由が1つ増えたな。

それに、嬉しい発見はもう1つあった。

エルザが鎧を着ていなかったのだ。

勿論、普段着だったという意味ではない。魔力を感じない戦装束を着ていたのである。

単にそれで闘うのが効率面で良かっただけ、という可能性もあるのだろうが、俺にはそれが覚悟を決めた故の格好であるように感じられた。きつと自分を閉じ込めていた殻を破る決心が付いたのだろう。

めでたい事だ。

きつとこれからのエルザは更に強く、いい女になるのだろう。

やはり、こんなところで死なせる訳にはいかない。

俺は以前、アイツに鎧の代わりになってやると言ったが、自分から脱げたのなら、もう俺はお役御免だ。何もしてやれなかったが、せめてものお祝いに、鎧としての最後の仕事をするでしょう。

正直、エルザを守るだけなら、アルマに頼んで、塔から運びだせばいいだけだ。ナツだってハッピーと一緒になんだから、逃げおおすくらいはできるはずだし。

しかし、エルザが鎧に、体だけでなく心を守る役目をも求めていたのなら、俺はそれに応えてやらねばなるまい。シモンもジエラルも、エルザの大事なものを守ってやって、ようやく鎧の代わりになれる。

グツと力を込めて拳を握った。

目の前には何重にも描かれた魔法陣の下端の1枚がある。

発射までに少しでも削っておく！

「天爪……斬竜の槍拳!!」

魔法陣の1枚と俺の拳が激突する。

重い……!!

今までいくつもの魔法を打ち消してきたが、ここまで反応が鈍いのは初めてだ。

魔法陣だけでこれほどか！

だが諦めればこの場の全員の命がない。となれば諦めるなどという選択肢は端から存在しないのだ。

歯を食いしばり、血がにじむ程に拳を握りしめ、ケツに力を入れる。

「ツラアアアアアア!!」

ギンツと音が鳴って、巨大な陣に亀裂が走り、消失していくのが分かった。

よし、1枚は何とか削れた！

……が、ここが限界か。

俺が割った魔法陣の遥か後方の上空に、バカげた密度、サイズの魔力球が現れた。

まるで太陽のようにすら見えるそれは、バツバツと弾けて今にも爆発しそうだ。

言葉にするなら、人が生んだ災害、とでも言おうか。

ははっ、これからアレとやり合おうってのか、俺は。

「……アルマ」

俺を上には振り投げて、全速力で逃げてくれ、そう言おうとするが、アルマはゆつくりと首を横に振った。

「いいえ、あなたの背中ならアレは食らいませんから、逃げません……いつもと同じですよ。私はあなたを信じています」

そうか……

本当にお前は最高の相棒だよ。

じゃあ、こつちもその期待に依えて、とっておきの技を見せなきやな……！

両手を前に突き出し、そこに体内の全魔力を集中させていく。迸る銀色の光が徐々に形を成していき、白銀の太刀が生まれた。

軽く、それでいて重厚で、見れば誰しもが業物であると気付けるような、そんな刀だ。刃だけではなく、鍔や束まで全てが銀色で、幻想的な逸品である。

斬魔ノ太刀 刃じんの型・斑征ムラマサ。

俺の技の中では、文句なしで切り札と呼べるモノだ。

自分の全ての魔力を斬魔の性質に変化させて、それで刀身80センチ程度の太刀を形成する。

風牙や天爪は他の攻撃に斬魔の性質の魔力を上乗せする、言うなれば強化技エンチャントだが、こちらは斬魔の魔力そのものを叩きつけるため、斬れる魔力の量は比にはならない。

ちなみに、名前は東洋に古くから伝わる有名な妖刀から貰ったものだが、きつとホンモノの方でもこんな大一番は経験していないだろうな、と思う。

上を見れば、いよいよ太陽が落ちようとしていた。

少しだけ回転を付けながら、こちらへと迫る極大の光線。

ふう、と1つ息を吐く。

「行くぞ、アルマ」

「はいー！」

やり取りのあと、アルマが加速を開始し、俺自身も魔法を使って宙を裂く斬撃と化してスピードを高めていく。太刀を前方へ突き出し、この勢いを乗せる！

「滅竜奥義……斬覇月竜閃!!」

全てを破壊する閃光と、全てを斬り裂く剣閃が衝突した。

「ぐつつつ!!」

手元の魔力はかき消せているが、全てを打ち消すには処理速度が足

らないらしく、徐々に徐々に下方へと押し込まれていく。

いや、何も全てを消す必要はないんだ。

この大きな塔にあらず海を抉る部分も多分にあるだろう。そんなところは放っておいたらいい。

大事なのは手元の分だけ。ここから穴をあけて、円錐状にエーテリオンが落ちない地帯を作る。そこに塔を入れればいい。

そう思っ手元だけに集中するも、それでもやはり押し込まれていってしまったている。

そもそも、太刀に込められた魔力が足りていないのか、少しずつ少しずつ刀身にヒビも入ってきていた。

やはり無理なのか……!?

そう思っ矢先、塔の先端、2本の尖った部分の辺りまで高度が落ちた時、不思議な事が起こった。

その水晶質の尖塔が魔力を吸収し始めたのだ。

おかげでグツと楽になったが、楽園の塔は魔水晶製だったという事だろうか……?!

よくわからないが、単純に負担の軽減にもなるし、とあるアイデアもくれたので、俺としては楽園の塔くんには感謝したいぐらいだ。

……いや、やっぱエルザ達をひどい目にあわせた元凶だからダメだわ。

そのアイデアとは、魔力の吸収だ。

魔力が足りないなら、回復すればいい。

幸いな事に魔力なら目の前に沢山ある。

……本当にこんなもの食べて大丈夫なのか、という心配はあるが、剣を食べても問題ないとかいう滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーの不思議体質に賭けるしかない!

すうすうすう、と息を吸う。

すると、周りのエーテリオンが狙い通りに口に入ってくる。

変な味だな……甘いような辛いような痛いような……!?

魔法陣を一枚砕かれ、俺と塔に魔力を取り込まれ、妖刀に力を殺がれたエーテリオンがついに力尽きた。

光が段々と細くなっていき、俺にかかる圧も小さくなっていく。

——勝った

やってやったぞ！

と、本当はガッツポーズを決めたい心持ちなのだが、生憎と体はピクリとも動かない。

「お疲れ様でした、トウヤ……」

後ろでアルマが囁いてくれる。

お前もあきらめずに俺の背中を押してくれたんだ。だからアルマもお疲れ様。

閃光も力尽きたが、それと同時にこちらも限界が来たらしい。

魔力自体はエーテリオンを食べたせいで、いくらが残っているが、痛みに耐えた体が悲鳴をあげ、力が入らなくなったのだ。

体制御のできない人間を支える力はアルマにも残っていなかったらしく、2人そろって落ちていった。

△ △ △ △ △ △

「トウヤ・グレイス…貴様……エーテリオンを斬ったのか!!!?」

こうして、状況は冒頭に至ったのだが、ジエラルルの激昂を見るに、鎧としての俺の仕事はまだ残っていたらしい。

もう既に俺の体はボロボロで、血管が弾けるようにして裂けており、血も噴き出しまくっているのだが、ジエラルルの殺意はそんな事お構いなしとばかりに突き刺さっている。

どうやら、エルザと和解したように見えたのは、ジエラルルが演出したウソだったらしい。

そうじゃなきや、エルザがあんな風に、悲しそうな、悔しそうな、情けなさそうな、それでいて憤怒に染まっていると分かるような複雑な表情はしまい。

状況は驚く程悪いが、そんな顔を見せられればやるしかないだろう。

元々今回の件は殆ど参加できてなくて不満だったんだ……

こんなボロボロの状態でも、目いっぱい殴り合ってやるよ、ジエ
ラール!!

16話 「流れ星二つ」

▼トウヤ視点

「8年だぞ!?……8年もかけてオレが築き上げてきたものが、ポツと湧いて出たクソガキの魔法なんぞで……!!」

頭をガリガリと掻きむしりながら叫ぶジェラール。

「長い時間をかけて計画を練った!魔法も使えなかったグズ共を少しは使える程度にまで育ててやった!オレの理想^{ゆめ}を理解する事も出来ぬ阿呆共にすら言葉をかけてやったんだ!」

手紙で読んだ部分しか知らない俺が言う事ではないかもしれないが、本当に酷い言い分だと思う。

8年の間、体を動かしていたのはシモン達だろうか?

本当なら魔法なんて使えなくても良かったハズの人たちまで便利なコマにしたかっただけだろうか?

ここから出るという夢を奪って、都合の良いようにすり替えただけだろうか?

どこまでも、コイツの心の中には自分しかないのだ。

「エーテリオンを落とすために、思念体を作って評議院に潜りこませた!」

ジェラルルの隣にぼんやりと影のようなものが現れ始める。

その姿がはつきりしていくにつれ、見覚えがある事が分かった。

以前にも出会った事がある評議員の1人、ジークレインだ。

ジークレインは何も言わないままに、ジェラールと姿を重ねていく。すると、完全に2人は1つになってしまい、発する魔力もそれまでと比にならない大きさとなる。

ジェラルルを初めて見た時、同じ顔だとは思ったが、まさか本当に同一人物だったとは……

というか、実体を持った思念体をあんなに離れたところで活動させて、しかも、本体じゃないのに聖十大魔道^{せいだいまどう}になつてどれだけ規格外なんだ……?

「思念体……だと?お前たちは双子の兄弟という話ではなかったのか

「……？」

未だに床にへたり込んだままのエルザがそう質問するが、ジエラルは「いたのか」とばかりに興味のなさそうな目でエルザを見つめる。実際、生贄を捧げる意味の無くなった今では、もはや興味などないのかもしれないが。

「本当に馬鹿な女だな……全部ウソだ！俺に兄は存在しない！ジークレインなどという人間はエーテリオンを塔に吸収させるためのまやかしだ！さつきお前に言った事もそうだ……お前がオレの死に場所だと？馬鹿を言うな！オレはゼレフを復活させるまでは死ねんのだ！！」

それまで怒りにだけ染められていた顔を、今度は心底おかしそうな嘲笑の笑みに変えて言うジエラル。

「やりきった顔をしてオレを抱きしめるお前は傑作だった！エーテリオンが落ちる前にお前に殺されないようにと、咄嗟に出た言葉にあんなに反応するんだからな！話をしている間、吹き出さないように苦労したよ！！」

完全に振りきれた目で「くはは」と笑うジエラルを見るエルザの左目が少しずつ潤んでいく。

ああ……ダメだ。

君はこんなヤツのせいで涙を流しちやいけない人だ。

俺は、動かない体にもう1度気合を注入して、無理やり立ち上がらせ、エルザの方へ向かった。

「お前はどこまで……！」と震えているエルザの手を左手で強く握り、反対の手でエルザの目元を拭う。

「エルザ……ここからは任せてくれ」

「トウヤ……」

「……あんな奴を殴って傷つくお前を見たくない」

ジエラル相手では、あんな風になってしまった今でもきつと、エルザは純粹な怒りだけでは拳を握れない。

殴れはする、殺せもするだろう。

だけど、拳を打ち付ける度、その反動がエルザの心を殴りつけるの

だ。

察しの悪い俺でも分かる、エルザは今、そんな顔をしている。

「俺はお前の鎧だと言った……その最後の仕事だ。お前の心も、お前の大事なものも守ってくる」

これ以上、大事なもの本人に、「ジェラール」を壊させやしない。

明日ベッドで目覚めたエルザが、今日の事を悪い夢だったのだと笑えるように。

「オレの次はその男か、エルザ！女冥利に尽きるなあ……ホラ、こいよトウヤ・グレイス……貴様は楽には殺してやらんぞ！」

だから――

「エルザの前で血祭りに上げてや――は？」

先ほど取り込んだエーテリオンの魔力が、体中から再び噴き出してくる。

今までに感じた事のないような速さでジェラルルの懐まで飛び込んで、一歩踏み込んだ。

「――少し、黙れ」

神速で突き出されたオレの右拳は、正確にジェラルルの顔面を捉えて、魔水晶で出来た壁まで吹き飛ばしてみせたのだった。

▼三人称視点

「貴様、その体のどこにそんな力を……!?!」

殴られ、壁にぶつけられたとはいえ、さほど大きなダメージのないジェラール。

対するトウヤは、その一度の攻撃だけで再び限界がきたのか、肩で息をしている様子だ。闘志だけは衰えていない事を示すようにフアイティングポーズを取っているが、その足は震えている。

「まあいい。驚かされたが、オレの天体魔法の相手ではない。チリに
してやる……流星!!」ミューティア

ジェラルルの体から黄金の光があふれ、ブレる。

次の瞬間、背後からの打撃がトウヤを襲った。

「ガッ!？」

何が起きたとトウヤは混乱するが何のことはない。どこまでも単純に、トウヤの目に留まらない速さで移動しただけの事だった。

多種多様の魔法が扱えるジェラールが得意とし、規格外の能力を誇る魔法、天体魔法。その一つである流星^{ミューティア}だ。

名前の通り、流星の如き超スピードを得る魔法だが、その速さは先ほどのトウヤに勝り、梟のジェットエンジンとは比べ物にならない。

「はははははー良いザマだな、トウヤ・グレイス！さあ、黙らせて見せろよ！」

右から来たと思ったら左。

左から来たと思ったたら上。

カウンターを狙うトウヤは、五感をフルに動員してなんとかジェラールに追いつくが、キレのないパンチやキックは空を切るばかりで全く当たる気配がない。

反対に、ジェラールの打撃は着実に体の芯を捉え、トウヤの体は打たれるたびにグワングワンと体を揺らしている。

「トウヤー！」

あまりの劣勢に、へたり込んでいたエルザも刀を持って加勢に行くとうとするが……

「来るな!!」

殴られながらも、声を荒げるトウヤ本人に止められてしまう。

「どうして……」

夜空に消えてしまいそうな程にか細い疑問の声は、しかし、戦闘が始まってからエルザのそばまで移動してきていたアルマに拾われる事になる。

「今のジェラールは、8年の計画が潰れて錯乱した状態にあります。何を言うか分かりませんから……あなたが対峙したら、変わってしまう前のジェラールまで否定されるかもしれない。トウヤはそれが嫌なのかもしれません」

「その程度の事など……!」

「トウヤにとっては、その程度の事じゃないんですよ……彼は以前、私

に言ってくれたことがあります」

「……何を？」

「本当に辛い時に得た絆ほど大事なものはないのかもしれない、と……独りぼっちの時、私の卵を拾えて本当に良かった、と。だから、エルザにそれを失わせるくらいなら、ジエールの視線を自分だけに集めて殴られる方がマシなんです、きつと」

すとん、と何かが腑に落ちて、刀を置くエルザ。

「私は今、守られているのか……」

これがそうか。

……私は守られて良いのか。

今まで、自分を強く見せる事に必死で、実際に強くなる事に必死で、自分を守って、誰かを守って……その実、誰かに守られた事などなかったのだ。

初めての体験に心が熱くなるエルザ。

だがすぐに、いいや、はじめてじゃないと気付く。

皆にそのつもりがあるかどうかは別として、自分はきつと、ずっとずっと折れそうな心を『妖精の尻尾』に守られてきたのだ。

心の鎧が私自身まで届く事を阻んでいたから気づけなかっただけで、皆の心はいつもずっと近くにあって、鎧が？がれないように包んでくれていた。

「それ、トウヤに聞かないでくださいね？結構繊細なんですから」

もちろんだ、と少しだけ嬉しそうに頷くエルザ。

だが、今もジエールに殴られ続けるトウヤに視線を戻すと、すぐにその表情も曇ってしまう。

「だが、このままでは」

「それも多分大丈夫ですよ。トウヤは直情的なタイプですが、勝算のない勝負は賭け事ではしません」

アルマ自身で言うておきながら、それはそれでどうなんだと突っ込みたくなる気持ちを抑えて、エルザの疑問を氷解させるために言葉を続ける。

「確かにこの状態からトウヤ一人で逆転するのは厳しいでしょうが、

もう一人残っているでしょう？頼りになる妖精の尻尾フェアリーテイルの魔導士が」

▼トウヤ視点

いや強いなコイツ……

万全の状態でも勝てるか怪しいぞ？

「任せろ」って言って出てきた手前、こうまでボコボコにされると割とへこむ。

だが、流石に少しずつ慣れてきた。

確かに今のボロボロ具合では超スピードですっ飛んでくるジェラールには対応できない、それは認めよう。

だが、一矢報いるくらいはやってみせる。

ジェラールはこちらに寄ってきた後フェイントを何度か入れて、確実に当たるような状況を作ってから、すれ違いざまに一撃入れていくというヒットアンドアウェイ方式で攻撃を仕掛けている。

問題はこのフェイントで、目で見て対応できない速さな上、何度やっても読み切れないほどランダムで仕掛けてくる。本当に恐ろしい戦闘センスである。

だが、避けよう、当てようとするから翻弄されるのだ。

当てられてもいい、むしろその瞬間が最大の狙い目。

ダン、と足を一度鳴らし、全身から魔力を放出する。

俺が何かを仕掛けようとしているのは分かっているくせに、対処できるといふ自信から気にせず飛翔するジェラール。

正面から来て、一度左に曲がる。

俺は視線を右側に向かわせ、肘を突き出して迎撃しようとするフリをするが、案の定それは当たらない。右に行つた後、そのままグルンと回つて、再び正面にやってきたジェラールが俺の腹に膝蹴りを突き刺した。

俺は毎度の如く「ガハッ」と口から血を吐いたが、今回はそれだけで終わりではない。

ジェラールの方も、太ももや腹部から血を噴出させたのである。

「なにっ!？」

狼狽えてたたらを踏んでいるジェラールにスツと迫って追撃を仕掛けるも、流星にこちらは流星^{ミレティア}で回避されてしまった。

「貴様、何をした!？」

言うかボケ。

身体の周りに不可視の斬撃を発生させる魔力を放出させただけである。

カウンターとしてこれ以上ないという程に確実なものだが、その実、消費する魔力の多さの割に、斬撃の勢いがなくて威力がでないという欠陥技だ。

直接殴つてくると分かっていたから一撃は入れられたし、これしかないと思つてありつたけ魔力を注いだから、それなりのダメージにもなっているはずではある。

が、その分こちらの消耗も大きい。

正直、本当に一矢報いたかっただけの攻撃だ。

「だんまりか……だが、何にしたって近づかなければいいだけだ!」

そう、その通り。

もはや魔法をかき消す魔力も残っていない今、遠距離に徹されれば、こちらになす術はない。

「七つの星に裁かれよ」

ジェラールが上空へと飛び上がりながら、左手を上向きに開き、その上に2本指を立てた右手を乗せてこちらに向けてくる。

^{グランシャリオ}
「七星剣!!」

掛け声とともに、ジェラールの更に向こうの高空に、7つの星が浮かび上がった。

眩い光を放ったそれらは、巨大質量となつて俺の方に降り注ごうとしている。

くそ、ここまでか。

だつせえなあ……

エルザに「任せろ」つつたのに、こんな事になるなんて。

でもまあウソはついてないよな。

「俺に任せろ」とは言っていないんだから。

だから、すまんが頼むぞ——「ナツ!!」

「火竜の剣角!!!」

エーテリオンで崩れた瓦礫を全て除けてここまでやってきたナツが夜空高くまで舞い上がり、今まさに魔法を放とうとしていたジエラールに激突した。

▼三人称視点

「火竜の翼撃!!」

不意をつかれ、空中でくの字に体を折り曲げているジエラールの顔を鷲掴みにし、下方へ放り投げる。

「と」

ジエラールが地面にぶつかろうという時、炎を吹かして追ってきたナツの蹴りが振り下ろされた。

「火竜の鉤爪!!」

魔水晶でできた硬い床と竜の健脚に挟まれたジエラールが苦悶の声を上げつつも、すぐに立ち上がるとうとするが、蹴った反動で宙に上がり、そこで追撃の体勢を整えていたナツの方が早い。眩い爆炎がジエラールを包む。

「火竜の……咆哮!!!」

魔法を使おうとしていたところへの完全な不意打ちは流石に効いたらしく、血反吐を吐いているジエラールだが、トウヤの顔は険しい。効いたのは不意打ちだった剣角だけで、他は然程のダメージではなかったように思えたからだ。

「また滅竜魔導士か……!」
ドラゴンスレイヤー

ナツのブレスで焼けてしまったローブを払いながら言うジエラールの体は、白と黒の全身タイトのような戦闘服に包まれていた。

忌々しそうにナツを見据えてから流星を発動し、ナツの周囲を飛び回って肘鉄、膝蹴り、右フックと翻弄する。

これに反応できなかつたナツの前に再び降り立ち、フンツと鼻で笑った。

「だが、相手にはならなさそうだな……」

「んのヤロオー!」

一蹴されたまま黙ってはいられないと突撃するナツだったが、これもまたあつさりと躲かれ、カウンターを一発顔面に貰ってしまった。

「ナツ……分かつてるな」

「ああ、ずつと聞こえてた……アイツが居るとエルザが泣いちまう」

そのナツの横に、エルザの刀を勝手に食べてほんの少しだけ回復したトウヤが立つ。

「トウヤ」

「ああ」

「燃えてきたぞ!!!」

牙を剥いた2頭の竜が同時に駆け出す。

何人増えたところで同じだとばかりに、軽く腕を振って、その先から巨大な魔力弾を放出するジェラル。

ナツがそれを受け止め、その間にジェラルに肉薄したトウヤが殴りかかる。

これに対しジェラルは流星ミューティアを用いて避けつつ、トウヤの背後から殴りつけようとしたが、最初からどこを狙うか分かっていたとばかりに駆けてきたナツの拳が届く。

「火竜の鉄拳!!」

「ぐお!!」

1度隙を晒してしまえば、もう1頭の竜からの攻撃からも逃げられない。

「斬竜の鎌尾!」

トウヤの回し蹴りが放たれ、その円の先全てに斬撃が発生する。

ナツの拳に飛ばされ、少し離れたところにいたジェラルはそれに巻き込まれ、腹部に大きな裂傷を刻まれた。

「クソツ……これでも食らえ!!」

痛みを気にするよりも、連続攻撃が止んだ今が反撃の好機だと見たジェラルルは、数十の光の矢を生成し、2人に投げつけた。

ナツは上手く躲しながら進んでいく一方で、トウヤは自分を狙う全ての矢に撃たれながら鬼気迫る様子で進んでいく。

「舐めやがって……!」

それに意識を持っていかれ、矢に交ざって自分もトウヤの方へ駆けていくが、その途中で、そこまで矢を掻い潜ってきたナツに邪魔される。

ナツが前傾姿勢で殴りかかるが、ジェラルルは身を捻ってそれを躲し、肘を上からナツの後頭部に叩きつけた。

そのまま地面に勢いよくぶつかるナツだが、ただでは転ばない。倒れた先に見えたジェラルルの右足を掴んでいたのだ。

凄い力で足を取られ、その場から動けずにいるジェラルルに、今度はトウヤの拳が迫っていた。

ダンと頭に打撃が炸裂するが、吹き飛びそうになったところで、右足を掴むナツから待ったがかかる。ただ殴られた先に飛ぶはずだったジェラルルの体は、半円の軌道を描いて地面に衝突。泣き面に蜂とばかりに、トウヤによる追撃の踵が落ちてくるが、ジェラルルは流星ミューティアによる強制離脱を選択。

未だに右腕にしがみついているナツごと宙に浮かびあがり、横に一回転する事で追撃の体勢にあったトウヤにぶつける。この一撃はナツ、トウヤ双方に大きなダメージを与え、吹き飛んだ先で、2人折り重なってうずくまってしまう。

その隙を見逃さなかったジェラルルは上空から特大の魔力弾を2人に放った。

バチバチと帯電しているように魔力を漲らせているそれに、トウヤの上で悶絶していたナツは即座に防御を選ぶ。脚をふらつかせながらも立ち上がり、腕をクロスさせて魔力塊を受け止めた。

「おおおおあああああ!!」

受け止めきったナツは全身からプスプスと煙を吹き出し、ガクツと

膝をついてしまう。

そのおかげでこの攻撃に関しては無傷であったトウヤだったが、エーテリオンを斬った時からの疲労とダメージが蓄積された体はとうの昔に限界を迎えていた。

しかし、2人とも体は少しも動かずとも闘志は健在で、ジェラールを睨みつけている。

「ハア……ハア……まだやろうと……いうのか……？」

高みから2人を見下ろすジェラールも殆ど限界に近かった。

「もういい……どうせこの塔はもう使えん……塔もろとも貴様ら全員を消し去ってやる！」

違いがあるとすれば、魔力面ではほんの少し余裕があったという事だろう。

「今度は5年で建ててみせる……待っているぜレフ!!」

そう言う宇宙に浮かびながら、両手を更なる天に向けてクロスさせたジェラール。

残った魔力全てが手元に溜まっていく。

「諦めてなかったのか」

呆れたように呟いたトウヤの言葉に、ジェラールは心外だという気持ちを含めて答えた。

「当たり前だ……全てはゼレフ復活のため!!」

夜空とジェラールの間にもう一つ夜空が生まれていく。

否、それは夜空ではなく、宇宙を凝縮したようなジェラールの魔法だった。

その場にいた全員に怖気が走る。悪意が煮詰められたような濃密で気持ちの悪い魔力、黒く輝いているにも拘らずそちらに向かつて影が伸びていく不自然な現象、どこをとっても危険であることが一目で分かった。

ナツとトウヤの体は殆ど動かない。ジェラールが魔法の準備を始めた時に作動させた拘束バインドスネークの蛇という魔法でエルザも身動きが取れなくされた。

誰もアレを止められない。

そう絶望しかけていたところに、1人の男が歩いてくる。

塔に残った最後の1人、シモンだ。

「シモン!?なぜまだ残っているんだ!」

「闘いでは役に立たないと分かっていたが、どうしてもお前を置いて逃げる気にはなれなかつたんだ……」

エルザに答えながら、空間の中央まで進んでいくシモン。

「何をする気だ!」

ポリポリと頬を掻きながらエルザの方を一度見て、その後ナツとトウヤを見つめた。

「安心しろ、あれは俺が受け止める……だから後は頼むぞ、ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士」

▼トウヤ視点

「よせシモン!!」

「貴様ごとき虫ケラが何匹束になつてもこの魔法は止められんぞシモオオン!!」

シモンが受け止める?アレを?

何を言っているんだ……?!

いや、何を言わせているんだ?

俺は何をしてんだよ……!!

違うだろ!頼まれるのは後の事じゃない!今の事だ!

俺はエルザの鎧としての最後の仕事を全うするんだらう!?

何だこの体たらくは!?

どうしてシモンは決死の覚悟を決めてそこに立っているんだ!?

どうしてエルザは泣いているんだ!?

俺が弱いからだ!!

魔力が足りないなら、そこら中に転がってる魔水晶を食ってやればいい!!

「貴様ごとチリとなれえええええええええ!!」

倒れ伏したまま、ガジガジと床の魔水晶に齧りつき、「ナツ」と声を

掛ける。

「お前、アレに突っ込め。道は俺が斬り開く」

その言葉と床を食らう俺の姿に一瞬驚いた顔をしたものの、すぐに意図が伝わったらしく、ニヤリと笑って頷いてくれる。それどころか、ナツまで一緒になって魔水晶を食べ始めた。

味わうのが2度目になっても全く慣れる気のしない激痛に気合で耐えながら、必死に立ち上がる俺達。

その場にいる全員が驚いてこちらを見る。

「違うぞシモン……そんな結末は誰も望んでねえ……!」

「そうだ……オレはエルザを助けるって約束したんだ……こんなところで寝てられるかああ!!」

ジェラールも驚いていたようだが、どうせこの魔法が落ちれば終わりだと気を持ち直したらしい。

「ゴミが何人立ち上がったところで結果は変わらない! 砕け散れ……」

凝縮した宇宙が落ちてくる。

今日だけで太陽に、エーテリオン星に、グランシャリオ宇宙まで落とされるとはなあ……

だが、何が落ちてきても関係ねえ!

『妖精の尻尾』の魔導士として、斬竜セルバルドの息子として、そしてエルザの鎧として!

何が来たって、全て斬り伏せてみせる!!

「天体魔法——アルテアリス暗黒の楽園!!」

ナツ……奇遇だな、約束なら俺もしてるんだぜ?

「エルザの大切なものは……何も奪わせねえ!!」

大きく、大きく息を吸う。

これはジェラールを打ち倒す前の鬨の声であり、勝利を祝う凱歌にもなるものだ。

なら、とびきり大きな雄たけびを上げなきやな。

「斬竜の……咆哮オオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

漆黒の宇宙と銀色の流星がぶつかり、荘厳な塔の頂上でゴオンと鐘

の音が鳴る。

鳳仙花村の晩、エルザの代わりに流星が泣いた時のように、夜空が切り裂かれた。

そして、その斬れ目からもう1頭の竜が飛び出し、アギトを開く。

塔の先端を蹴り上がり、手から炎を噴出させたナツだ。顔面には竜の鱗が浮かんでいる。

「馬、鹿な……俺はゼレフに選ばれた男だぞ！こんなところで負ける訳がない!!」

「人から自由を貰おうとしてんじやねえ!!」

「違う！俺とゼレフで真の自由国家を作るんだ！なぜ分からん!?俺達こそが歴史を動かす者なのだ!!」

「人から自由を奪って作った国の歴史なんか、俺はいらねえ!!」

ジェラールより高く飛び上がったナツが、その拳を振り下ろさんと迫る。

「お前は自由になんかなれねえ！亡霊に縛られてる奴に自由なんかねえんだ!!」

赤い竜が叫んだ。

「自分を解放しろオオ!! ジェラアアアアアル!!」

ナツの拳がジェラールに突き刺さり、吹き飛んだジェラールが塔を割っていく。

今ここに、ジェラルルの理想と、エルザの8年に渡る戦いが終わりを迎えた。

△・△ △ △ △

「マズい、塔が崩壊するぞ！さっきのナツの攻撃でエーテリオンの魔力をため込んでおけなくなっている！」

ゴゴゴと揺れる塔を見てシモンが叫んだ。

ナツは先ほどの一撃で限界が訪れ、気を失っており動けないし、俺

の方も意識はあれど体は動かない。つまり、ここから逃げるにも、シモン、エルザ、ハッピー、アルマしかまともに動けないという状態なのだ。

「オイラ達だけじゃ全員は運べないよー!」

万全の状態のアルマ達なら協力して3人は運べたろうが、今の疲労度では1人ずつ運ぶのがやっとだろう。

普通に考えたら、動けるエルザとシモンに自力で脱出してもらおうの
がいいんだろうが、今日のエルザには最後までお姫様気分であって欲しい、というのがここにいる男子の共通見解だろう。

「ハッピー、ナツを」

「あ、あいさー!」

「アルマは……」

深々と溜息を吐いたアルマが、頭に手を当てながらやれやれと頷いてくれる。

「……分かりました。まったく、格好つけもいい加減にして下さいよ?……それではシモンさん、よろしくお願いしますね」

「ああ、当然だ。大体、その男が言ったんだろう、『エルザの大切なものは何も奪わせない』と」

え、え、と話についてこられていないエルザをアルマが掴んで浮かんでいく。ハッピーの方もナツを抱えて既に準備完了だ。

「待てアルマ! 私は大丈夫だ! それよりトウヤを!」

「まあまあ、落ち着いてください……ホラ行きますよ」

アルマがなだめすかしながらエルザを運んでいるが、空中で暴れて叫んでいる。

お転婆な事だ。

塔には俺とシモンの2人だけが残された。

俺を背負ったシモンが塔を駆け下りながら、口を開く。

「本当にありがとう」

何を言っただか。

一世一代の活躍の場を奪っちゃまった挙句、お姫様じゃなくて自分を

運ばせているような輩だぞ、俺は。

「俺も……手紙、助かった」

「いや……それだって俺の願いの為に出したものだからな」

まあ、そりやそうかもしれないが、アレがあったからここまで来られたんだ。感謝しておいても問題はないだろうよ。

「本当に、エルザにできた仲間が、お前たちのような者で良かった……この先もエルザの事を頼むぞ?」

頼むぞっってお前……

「お前ら全員、妖精の尻尾ウチに来ればいい」

そう言うと、シモンはおそらく少しだけ驚いたのだろう。後ろ姿だから顔は分からないが、何となくそんな気がした。

そう悪い反応では無いのではないか、と思ったのだが、シモンは徐に首を振ってしまう。

「それも楽しいかもしれないが……オレは旅に出ようと思うんだ。今までのオレ達の世界はこの塔だけだった。これからは色んなところを見て回りたい。それに、妹がいるんだ。あの子にも会いに行きたい」

「……そうか」

まあ、遠慮してるとかじゃなくて、やりたい事があるっていうんだから、こちらとしては文句は付けられない。

「なら、エルザは任せろ」

とはいえ、これからの彼女は心配せずとも、今よりずっと強い女の子になるとは思うけどな。

シモンは静かに、ゆっくりと頷いただけだったが、その動作にどれだけの思いが籠っていたのだろうか。

少し経って、かなり下の階層まで降りてきたところで、塔の揺れが一層強くなった。

「残ったエーテリオンが暴発しようとしているのかもしれない……ここから飛び降りるぞ!」

そう言ってシモンが塔の窓から飛び降りた直後、塔は光に包まれた。

▼三人称視点

先に塔を出た2人＋2匹がグレイ達と合流するとすぐに、塔が大爆発を起こした。

この事に、その場にいた全員に動揺が走る。

息を呑む者。

天を仰ぐ者。

ギョツと拳を握りしめて、無事を信じる者。

そして、エルザは「あ、ああ……」と左目から涙を流している。

全員が静まり返っていた。

だからだろう、その声が聞こえたのは。

「なんとか生き残ったな……」

「ああ……」

全員の視線が一点に向かう。

そこにはプカプカと海に浮かぶ2人の男の姿があった。

皆一様にバシヤバシヤと水を蹴って駆け出すが、1人いち早く動いていたエルザが最初に2人を抱きしめた。

エーテリオンでジエールと共に死のうとした時、私には残される者の気持ちが理解できていなかった。

生きていてくれるというだけで、こんなにも嬉しいのに。

無事でいてくれてありがとう……

これから、本当の自由が待っているのだろう。

私は置いてきたものを、何も無くさずに取り返せたぞ、トウヤ。

様々な思いが去来したエルザは、2人を強く強く抱きしめながら、両目から涙を流した。

間話②

17話「お風呂回です」

▼トウヤ視点

ドオン、ドオンという大きな音で目が覚めた。

「……は……」

ホテルの部屋？

……そうか。

塔を命からがら脱出した後、エルザに抱きしめられてそのまま眠ってしまったんだったな。

んで、この音は花火の音か。

ジェラールと闘ったのも夜だったから、多分丸一日寝てたんだらう。

折角花火なんてやってるんだからテラスで見るか。

そう思っただけで重たい体を起こした。

「……コレ……」

しかし、夜空に咲いていたのはただの花火では無かった。

完全に魔力を感じるのだ。

こんな派手な事をするのはナツ達だろう。

ただの花火とは比べ物にならないだろう火力で燃え盛る大輪の炎や、氷で出来た華が浮かんでいる。あのキラキラと光る星の結晶はルーシイの魔力だろうか？

綺麗なものだ。

だが、どうしてこんな事をしているのだろうか？

ホテルの方から頼まれたとか？

ふと気になって、打ち上げている人物の方に目を向けてみると、予想通り手や口を空に向けて魔法を飛ばしているナツ、グレイ、ルーシイを見つける。その少し前に、なぜか立派な鎧を付けて旗を振っているエルザが見えた。自然、更にその先に目が向くと――

「なるほど……門出か」

シモン、シヨウ、ウオーリー、ミリアーナが小舟に乗り込んで航海へ出ようとしているのが見えた。

4人の目元から流れる雫は、花火の光に照らされてキラキラと輝いている。

シモンは旅に出ると言っていたが、他の3人も一緒に行く事にしたんだな。

1人くらいは『妖精の尻尾』に来るかと思っていたから少し寂しい気もするが、これが今生の別れという訳ではあるまい。

なにせ、皆生きていて、これから先は自由に航路を選べるのだから。いずれ俺たちとアイツらの道が再び交わる事もあるだろう。

その旅路に幸多からん事を。

そう願って小さく手を振る。

気づかれなくても良いと思つてやった行動だったが、シモンはこちらを見ながら大きく手を振り返してくれた。

これから頑張れよ……またな。

△・△ △ △ △ △

「目覚めたのか……！」

シモン達の舟が見えなくなつて暫くしてから、俺の様子を見に来たエルザが部屋へと尋ねてきた。

1日中寝ていたのだったら少しは心配を掛けてしまっただろう。

申し訳ない事をしたかもしれない。あの4人の船出にもギリギリでしか間に合わなかったしな。

「あの晩から3日起きなかったんだぞ。ナツの方は今朝目覚めたんだがな」

1日中どころじゃなかったでござる。

「したかも」じゃなくてはつきり申し訳ない事をしていました。

こりゃ、アルマなんか心配を通り越してキレてるかもしれない……

「……すまん」

「まったくだ……心配したぞ。お前が起きない間、どれだけ私が気を

揉んだと思ってる」

いや、もうホント申し訳ないです……

「悪いと思ってるなら少し付き合え。いくつか話したい事がある」
「はい……」

まあ、軽くお話しするくらいならどうという事はない。

説教怖いとか思ってる。思ってる。

あ、でも、風呂とかは済ませたいな……

あの後3日も放置していたと思ったら、急に気持ち悪くなってきた。

腹も減ってるが、逆に減りすぎてよく分かんないや。

そんな風に思っていると、少し逡巡している様子のエルザがある提案を持ちかけてくる。

その提案は、渡りに船のようで「え？その船沈まない？」的な、衝撃のモノであったために、軽い気持ちで領いた事を後悔する羽目になるのだった。

「そ、そうだな……こういう時は裸の付き合いだ！風呂に入るぞ!!」

……………は？

▼エルザ視点

「子どもの頃は入っていただろうー」とか、「胸襟を開いて話すには風呂が一番だ!」とか誤魔化しながらトウヤを風呂に連れ込んでやったが、私は一体何に言い訳しているのだろう……?」

実際、以前は自然に入れていたし、グレイやナツが相手ならこんなに緊張しないのに……って私は緊張しているのか!?

「お、オホン……トウヤ、気持ち良いか?」

「……………ああ」

気を取り直して、トウヤの背中を泡の付いたボディタオルで擦る。

それにしても背中が広いな……男性、という感じだ。

ルーシイなどとは違って、私の体は筋肉質で女性らしくないと思っ

ていたが、やはり本物の男には負けるようである。

こうして触れていると、安心するような、少し高揚するような不思議な感じだ。

高揚？興奮か……？

興奮!?

わ、私は何を考えているんだ、破廉恥な!

トウヤはこんな状況でも落ち着き払っているというのに!!

……落ち着いている、というのも何となく腹が立つな。

私には女性としての魅力がないというのだろうか？

「それで……話は？」

少し考え事をしてしていると、トウヤにそう催促されてしまう。

折よく背中も洗い終わっていた。

「む……そうだな。湯船で話そう。流すぞ？」

ザーつとシャワーをトウヤに流しかけ、背中合わせになるよう誘導しながら風呂につかる。

……小さい頃は普通に前向き同士で入れていたのに、どうしてこうも今回は上手くいかないのだろうか。

気のせいか、心臓がバクバクと早鐘を打って、苦しいどころか痛いし。

まあいい、とりあえず、背中越しでも話をしよう。

「シモン達は先ほど全員で旅に出てしまったよ……私も妖精フェアリーの尻尾テイルには誘ったのだがな。やりたい事を自分の手で見つけたい、だそうだ……」

「……良かったな」

良かった、か。

そうだな。寂しくはあるが、アイツらにとっては最善の選択だったのだろう。

なにより、自分達自身でそれを選べたという事が、本当に嬉しい。

「アイツらがお前にも礼を言っていたぞ……シモンなんかは、落ち着いたら私の分と一緒に手紙を出すともな」

「楽しみだ……」

「エーテリオンに突っ込んでいった事や、最後の魔法を斬った事、忘れないと口々に言っていた……まったく無茶すぎだぞ」

「う……すまん」

「そうだ、もつと反省しろ。」

「お前は自分なら大丈夫だからと、無闇に敵の攻撃へ突っ込みすぎだ。」

「完全にはないとはいえ、エーテリオンを受け止めたなど前代未聞もいいところだし、最後はナツとそろってエーテリオンの籠った魔水晶ラクリマを食べていただろう。」

「しかし、ただ叱る訳にもいかない。」

「コイツの一番性質タチが悪いところは、そういう無茶をするのは、いつも誰かの為になる時だという事だろう。」

「だが……お前のおかげで全員がああして新たな道を進む事ができた、勿論私もだ」

「……」

「エーテリオンが弱められていなかったらゼレフが復活していたかもしれん。ジェラールを倒してそれを阻止していても、塔の魔力が暴発して全員が死んでいたかもしれない。少なくとも、ジェラールの攻撃でシモンは死んでいただろう……本当にありがとう」

「トウヤが黙ったままで、ズルつと体を湯船の中に下げていつているのを感じる。」

「背中感触からして、肩までつかっているのだろう。」

「別に、礼を言われる事じゃない……」

「暫く続いた沈黙を破ったのはトウヤだった。」

「俺がしたかった事だから……エーテリオンの時、鎧を脱いだお前を見て、ここで死ぬのは勿体ないと思った。シモンの時は、アイツが死んでお前が泣くのを見たくないと思った」

「ほう、そういう風に言うのか。」

「なら、私がお前に礼を言うのは、私が言いたいからだな」

「そう言うのと、「ぐぬぬ」と言っただけで押し黙る。」

可愛い奴め。

「じゃあ、もう一つ」

「何だ？」

「俺は、普段からエルザに世話になってる。俺じゃナツ達をまとめられない。剣も貰ってるし、フォローもして貰ってる……最近、一緒に仕事するようになってから楽しい」

ふふ、それこそお互い様というものだろう。

「私だって、普段から何度も助けられている。ファントムの時だって、ジュピターを受け止めたのはお前だろう？ ナツやグレイを纏めながら、自分ものびのびといられるのだって、お前が後ろにいると思うからだ」

そうして、こつちこそ、そつちこそとお互いの良い所、助かる所で言い合いになってしまう。

元々何の話だったかも忘れてきた頃、なんだか無性におかしくなつて、笑いがこみあげてきた。

「ふふ……はは……ははははー！」

トウヤもつられて笑い出し、バスルームに楽し気な声が充満する。塔の事も、ジエールの事も、シヨウ達の今後の事も、こうして一緒に風呂に入っている事も、無意識に絡まっていた様々な緊張の糸が解れて、体に入っていた力が抜けていった。

幸せだな、本当に。

2人の声が止んで心地の良い沈黙が降りた時、トウヤが心底嬉しそうな声で言う。

「……泣いてるエルザも綺麗だが、やっぱりそうやって笑ってる方が好きだ」

……
ん
んっ
!!!?

「の……のぼせそうだ！ 私は先に出る！ お前はしっかり温まってこい

!!

ザバツと音を立てて立ち上がり、急いでバスルームを出てしまう。簡単に体を拭き、髪にはバスタオルを巻いて女子部屋に戻った。

まだ胸がドキドキと鳴って痛い……

まったく、心臓に悪い奴めっ!!

▼トウヤ視点

「ドキッ嬉し恥ずかしエルザと密着混浴大会、ポロリはないよ!」から少し経ち、我らがギルドに帰ってきた。

いや、アレは何だったんだ、本当に。

あの話を風呂場でする意味あったか???

俺の心臓を爆発させて暗殺する依頼だった、とか言われたら納得できるレベルで緊張したぞ。

その……背中同士でくっついてただけだけど、すごくこう、シトつとして気持ちよかったです。

いや、そんな事よりギルドについてだ!

ついに新ギルドが完成していたのである。

旅行に出る前に大分完成に向かっていたし、旅行も一週間も(その内、2日目は楽園の塔を駆け、そこから6日目の夜まで眠っていた)あったからそこまで不思議ではないのだが、知らない内に完成していたとなると何だか不思議だ。サプライズ的な感動が増える。

外観は城塞のような豪華なものになり、門から建物までの間にはオープンカフェが配置されていた。解放感があつて非常によろしい。外で食べる刀というのも乙なものだ。

入り口にはグッズショップが開かれており、様々な『妖精の尻尾』グッズが置かれている。ギルドマークの入った特製Tシャツや、リストバンド、タオル、魔水晶などがあつた。ちなみに俺は、アルマと自分の分のマグカップを買っておいた。

変わり種では、『妖精の尻尾』魔導士たちのフィギュアなどというものもあり、実はこれが一番人気だという。

女性陣のものが下着姿にキャストオフ可能で、十中八九そのせいで売れてるんだと思うんだが……マカオとか買ってそうだし。

俺？

俺はさ……ホラ、アルマに見つかるとさ？ね？

あ、でも招きネコ的な感じでマスターのは買ってしいちゃんもいいかも。

ちなみに、売り子のマックスによれば、俺のフィギュアは魔除けとして奥様方に人気なんだとか。解せぬ。

いや、我ながらご利益ありそうだけでも。

「お、トウヤー！帰ってたのかい？早く中に入んなよ」

そうカナに引っ張られて入った建物の中も、凄まじい変わりようだった。

全体的にキラキラしてる感じがする。

酒場には整然と机や椅子が並べられ、最奥にはステージが置かれて
いる。

その奥にはなぜかプールがあったり、地下にビリヤード、ダーツなどが楽しめる遊技場があったり……

他にも、クエストは勿論別だが、S級じゃなくても2階に行っても良い事になったらしい。

えー！超ワクワクするんだが！

ビリヤードしたい、ビリヤード。

そういった感じで地下に行こうとウズウズしていた俺に声がかかった。

「帰ってきたか、バカタレども」

若干ドヤ顔のじいちゃんが歩いてくる。

後ろに女性を連れているが……あれ？

「新メンバーのジュビアじゃ」

おお、ジュビアじゃん！

『妖精の尻尾』に入れたんだな……いやあ、これでグレイにアタックしやすいというものだ。

「がんばれよ」と「よろしく」という気持ちを込めて、スツと手を挙げておく。

すると、丁寧にお辞儀を返してくれた。

「おお！本当に入っちゃまうとはな！」

そんな風に喜ぶグレイや、「アカネビーチでは世話になったな」と声を掛けるエルザ。

それを見たじいちゃんは「知り合いか……？」とサプライズが失敗して落胆した様子だ。

「じゃあこっちはどうじゃ!？」

と、もう一人いた新メンバーを呼びつけたが、このメンバーには流石に驚かされる事になった。

「ガジル!？」

前ギルドを壊した張本人が現れた事で、グレイやナツ、エルザは顔を険しくして「どうしてコイツが!？」と声を荒げている。ルーシイなどは怯えているようだが。

話を聞くに、孤独を好むガジルの心配してジュビアがウチを紹介したみたいだ。

俺としては別になんでもいいかな。

妖精の紋章を刻んだなら守るべき家族だ……まあ、守る必要はなさそうだが。

じいちゃんが良いと言ったなら、おそろく大丈夫さ。

レビイ達シャドウギアがどう感じるか、という問題もあるが、そこから辺も解決しているのだろうし――

と、ふと視線を逸らすと、遠まきに怯えた目つきで「全然気にしてナイヨ」とおどおど呟くレビイと、鋭くガジルを睨みつけているドロイ、ジェットが目に入ってしまった。

ああ、解決してねーな、コレ……

ま、まあ、ここは一肌脱ぐか、とガンつけている他のヤツらをのけて、「よろしく」と手を差し出した。

が、ガジルは腕を組んだままで

「慣れ合うつもりはねえ………だいたいテメエはキャラが被ってんだよ」

と宣った。

ああ〜ね、食べる物とか似てるよね、うん。
目つき悪いし、あんまり喋らないし、うん。

え、俺こんなに怖いかな……？

地味にシヨックだなあ。

すると、俺の心を写したようにギルドの照明も暗くなってしまう。

……と思ったが、これは何かイベントが起きる合図のようだ。

周りの事情を知ってそうなヤツはそわそわとして嬉しそうだし、ところどころで「メインイベントが始まるぞ」といった声が聞こえてきている。

何がはじまるのかと期待していると、酒場奥のステージにスポットライトが当たり、ギターを持ったミラの姿が目に入った。

ミラは手に持った楽器と、宙に浮かぶマイクで仕事に出る魔導士に当てた歌を奏でる。優しい歌声が酒場全体に広がり、ガジルに挟られた俺の心も癒されていった。

と、ここまでで終われば良かったのだが……

「痛てえー！今わざと足踏んだだろ!？」

というナツの声が響いた。

それに反応してしまう輩が数人。

「ミラちゃんが歌ってんだろ!」「暴れんなコノヤロー!」「物投げたの誰だコラァ!」「私のケーキが……」と、どんどん連鎖して騒ぎが広がっていく。

いつの間にか、ミラまで空気を読んで、バラード調からロック調に曲が変えたようだ。

「はあ……」

俺は溜息を吐きながら、ルーシイやウエイトレスなどの喧嘩に参加しない人達の方へ歩いていき、飛んでくる椅子や机をぶった斬っていく。こういう乱闘が始まると、俺は大体、こんな感じで、ケガ人を出さないような立ち回りをしてしまう。たまには俺もギルドの奴らと喧嘩してみたい、といった気持ちもなくはないのだが……

——ああ、新しいギルドがもう傷だらけだよ……つたくもうさあ。

いつも結局こういう呆れの気持ちで勝ってしまう。
ま、でもこういうのが俺達らしさなのだろう。
新しいギルドの雰囲気馴染めず、機嫌が悪そうだったナツが楽しそうに笑っていたのを見て、俺も少しだけ笑った。

▼三人称視点

『妖精の尻尾』が新ギルド完成に沸いていた頃、別のところでは暗躍者たちの会話が繰り広げられていた。

泡の浮かぶ浴槽から、豊満な肉体を覗かせる黒髪の女が、脇に置いた通信用魔水晶に話しかける。

「評議院は責任問題が大きすぎて、しばらくは機能しないでしょうね……組織解体もありえるわ」

たゆんと胸を揺らしながら髪をかき上げる仕草にはえも言われぬ色気が漂っていた。彼女は風呂に入っているのが熱くなったのか、脚を組み、白磁のようなすべらかな太ももを露出させる。

『見事だ、ウルティア……で、ジェラールはどうなった？』

魔水晶から聞こえるしわがれた声を聞き、厚い唇を妖艶に歪めさせた女。

その正体は声の言う通り、ウルティア・ミルコビツチだ。かつてはジェラールに従い、ゼレフ復活の為に協力していた女性である。

楽園の塔の折には、ジェラールのエーテリオン投下発議に真っ先に賛成し、投下後も自らの持つ強力な失われた魔法^{ロストマジック}、時のアークを用いて評議院の会場を崩壊せしめていた。

「さあ……死んだんじゃないかしら？」

しかし、その悪戯気な返答には、以前のジェラールとの蜜月な関係性を感じ取る事は出来なかった。

楽園の塔での失敗で見限られてしまったのか。

否、そうではない。

『哀れな男だ。利用しているつもりの女に、逆に利用されていたとも知らず……』

最初からジエラールなど、ウルティア、そして彼女の所属する闇ギルドにとつては、駒の一つにしか過ぎなかったのだ。

ゆつくりと風呂から上がったウルティアの背中に、タラリと雫が流れ、それが心臓を模した紋章をなぞっていく。これこそが、彼女の所属するギルドの紋章だ。

その名も『グリモアハート悪魔の心臓』。

「私は楽しかったわよ？……だって彼、8年間ずっと私がゼレフの亡霊のフリをしていたって事に気づかないんだもの」

しつとりとした黒髪を拭い、妖しい魅力を放つ肢体をバスタオルにくるんでいくウルティア。

『洗脳の甲斐あって、コトは順調に進んでいる……評議院をも巻き込んだ騒動のおかげでコチラは好きに動く事ができたのだからな』

少しの報告を済ませ、通信を切ってバスルームを出ながら誰に言うでもなく呟く。

「ホント、気の毒な人。ゼレフ復活だなんて……ゼレフは今も生きていて、ただ眠っているだけだと言うのに」

ふふ、と笑うその姿には危険な魅力が漂っていた。

18話「穏やかな日々」

▼トウヤ視点

俺達がギルドに帰ってきた翌日、新築記念という事で週刊ソーサラから取材が入る事になっていた。

週刊ソーサラとは、毎週水曜発売の魔法、魔導士についての専門誌だ。新登場の魔法商品や、話題のギルドの情報に魔法関連のニュースなどを扱っている。とはいえ、そこまで硬い内容のものではなく、有名魔導士のコラムや、美人女性魔導士のグラビアが載っていたりもするのだ。ウチのギルドで言えば、ミラが数回モデルになっている。ちなみに俺は毎週買っているが、ミラが載っている刊はきちんと保存してある。

ミラのグラビアを除けば、『妖精の尻尾』についてはお騒がせ記事として載っている事が多いと言えるだろう。過去には「歴代お騒がせ妖精の尻尾事件特集」なるものまで組まれていたと記憶している。何かと物を壊すナツや、全裸徘徊のグレイ、天然でやらかすエルザを筆頭にして色んな事件が取り沙汰されてきたが、俺についての記事は驚くほど少ない。

そもそも普段の仕事ではトラブルは起こさないからだ。また、しよつちゆう絡まれる闇ギルド関連については、娯楽雑誌的にあまり大きく扱えないのか、情報規制がかかっているのか、俺の名前が出される事は少ない。純粹に、たまたま出くわして絡まれて、ノリで全滅させてしまうから、いつの間にか壊滅してた、とかで俺の存在に気づかれていないだけな気もするが……

俺って地味すぎ……？

という訳で、今回の取材では少しでも存在感をアピールしようと思う。

新品の藍色の羽織を下ろし、アルマに身だしなみのチェックもしてもらった。

いざ、という気持ちでギルドまで来てみると、すでにやんややんやの大騒ぎだ。自然体で騒いでいるヤツもいれば、俺のように取材だと

意識してソワソワしているヤツもいる。ルーシイはおめかししているし、エルザ——鎧を脱ぐ時間は増えたが、単純に着ている方が落ち着くらしい——は新調の鎧を着ている。

「ルーシイ、エルザ」

「あ、トウヤー！」

「ほう、お前も新しい衣装にしたのだな」

「ホントだ。見たことないやつ着てる！いい色ね！」

2人ともすぐに気づいてくれて嬉しいです。

そこでルーシイが自分の番とばかりに、両手を広げてその場でくりと回転してみせた。

「ねえねえ、あたしもおしやれしてみたんだけど……どうかな？」

髪を後ろで纏め、ピンクのキャミソールとホットパンツで露出は多いが、ルーシイの活発さとセクシーさが出ていてかわいいと思います。

ていうか、その上目遣いで見てくる感じ凄くグツとくる……

「良いと思う」

グツと親指を立てて言う。

「そっかー」と嬉しそうな反応を示してくれて良かった。

こういう時の語彙力のなさヤバいからな、俺。

「では私はどうだ？」

今度はエルザが前に出てきた。

妖精の羽根のような意匠が付いた鎧は『妖精の尻尾』らしさを出しつつ、カツコよさを演出している。また、短めのプリーツスカートから覗く生脚も健康的で良いと思う。

でも、「良いと思う」はもう使ってしまった……残弾が無いぞ!?

「……素敵です」

「そ、そうか。ありがとう」

エルザは少し赤くなって顔をパイツと背けてしまった。

怒らせてしまったのだろうか？

褒め言葉の練習とか、アルマと一緒にやってみようかな……

そう悩んでいると、入り口の方から嗅ぎ覚えのない匂いが入ってきた。

た事に気づいた。

「Oh——!!ティーターニア!!本物のエルザじゃん!!COOL!!」

という暑苦しい挨拶(?)が聞こえ、振り返ると、超ハイテンションで膝スライディングをかましてコチラに近づいてくる男が1人目に入る。おそらく、この人が記者の方だろう。カメラ持つてるし。

それにしても、やたらテンション高いし、『妖精の尻尾』のTシャツを着ているし、さてはこの人、ウチのファンだな?

それならば、知る人ぞ知る——自分で言うの悲しい——俺の事を取材してくれる可能性も高いとみた。

「もう来ていたのか、見苦しい所を見せてしまったな」

代表して受け答えをしたエルザが、酒場で行われている飲みや歌えやのどんちゃん騒ぎを指して謝るが、記者さんは気にするどころかむしろ歓迎しているようだ。何でも「こういう自然体を期待してた」とか。

「良かったらいくつか質問に答えてくれないかい?」

「かまわないが……」

エルザと記者さんはそのままインタビューに入るらしく、2人で向こうの方に行ってしまった。

そして、この場には必死にアピールしつつもスルーされた俺とルーシイだけが残った。

「あたしの知名度ってやっぱこんなモンか……ていうかトウヤもスルーされるんだ」

「……うん」

悲しい。

あ、エルザがなぜかバニー服に換装きがえした。

どういう流れでそうなったかはさっぱりだが、やはりああいう派手さが必要なのだろうか?

「俺達も……ああいうの着るか?」

「バニーを!?トウヤが?!?」

「やめてください!!」

まったくもう、といった様子で俺に突っ込みを入れに来たのはアル

マだ。

「だいたい、トウヤの顔が売れても大していい事は無いでしょう？
……闇ギルドに絡まれる回数が増えますよ？」

う、それは嫌だな……

「悲惨ね……」

うるさいやい、ルーシイ。

「まあ、私達は私達のペースでやりましょう。評価してくれる方達は
きちんとしているんですから」

そうだよな……

マスターじいちゃんが認めてくれたからS級になれているんだし、仲間達の中で
俺を蔑ろにしてる奴なんていない。

ちよつと目立ってる奴らが羨ましくなって、大事な事が見えなく
なっていたん……

「Oh!!アルマ!!そんな小さい体でどうやって家事をこなすんだい？
本当にクールだよ!!」

「え!?え?……ま、まあ日ごろの努力の賜物です……そう褒められる
と照れてしまいますね」

アルマを見つけてバビュンと飛んできた記者さんに話しかけられ、
驚きながらも答えていくアルマだったが、横で俺とルーシイが白い眼
を向けている事に気づいているかい？

「アルマ………」

「こ、これは違います！聞かれてしまえば、答えなくては失礼というも
のでしょう!?もう、トウヤ、ルーシイ！」

まあ、そりゃシカトしろとは言わないけどさ……

と、不満タラタラの目でアルマを見ていたのだが、記者さんはアル
マが俺の名を呼んだ事でようやく俺の存在に気づいたらしい。

「も、もしや君が斬魔のトウヤかい!?ほ、本物だぁー!!超COOOO
OOL!!」

おおお!!?

この反応だよ!!

やっぱ嬉しいよなあこういうの!ついに俺の時代到来なんじゃない

いのか？

……ま、まずは明るく、フレンドリーに返事をしなきゃな！

「……………ウム」

「無口!!超クール!!」

ウムってなんだよ……………

まあ、記者さん喜んでるし別にいいか……………？

「オレ、ジェイソン！実は今回の取材ではナツとトウヤの話をも是非聞きたいと思っていったんだ！」

なんだと!?

これはやはり俺の時代だ！

ここで完璧な受け答えをして、意外と気さくで優しい魔導士、トウヤ・グレイスとして有名になるんだ！

「く、くるしゆうない……………」

ああ、もう!!

殿か!!?

さつきから汗が止まらない…………アルマは頑張れという視線を送ってくるだけだし、ルーシイは「やるしかない！」とどこかへ行ってしまうし、誰も頼れないぞ……………!

「トウヤ・グレイスといえば闇ギルド討伐だよね？どういう経緯であんなに多くの闇ギルドと戦う事になったんだい？」

いや、それは偶然出会った所で、^{ガッ}眼つけてると勘違いされて襲われるだけで、別にそんな深い理由とかはないんだけど……………

あ、でもコレ不憫エピソードとかで怖い印象を払拭できるんじゃないや

……………?

「は、歯向かう者を血祭りに上げたただけだ」

違う！違うの!!

いう事聞いて、俺の体!!

もうさつきから緊張で足がガクンガクンなんだよ!!

「COOL!COOL!超COOOOOOL!!」

もう喜んでるからいいかな……………

「じゃあ、じゃあ、トウヤは剣を食べられるんだろう？好きな刃物とか

あるのかい？」

む、それは難しい質問だな……

やはり、東洋の刀が一番だが、その中でもこの刀匠が一番か、とか、どの形状がおいしいか、となると詳しい話をしなくてはならない。それに、そういったものは手に入りにくい。その意味では普段よく食べるものから選ぶべきかもしれないし……

俺に全てを説明できるのか……？

そう1人悩んでいる俺だったが、急に辺りが暗くなった事で正気に戻る。

この演出は昨日も見たが、ミラがもう一度歌うのか？

そうステージの方に視線をやるが……

「オレを雇ってくれるギルドは数少ねえ♪」

違う!?

なぜかバニー姿のルーシーをバックダンサーに起用して、自らはアコースティックギターを握ったガジルだ!?

「たとえばつての敵だとしても 友と思えば歌ってみせよう♪」

ぼびくんとギターを鳴らして弾き語るガジル。

ギターは超絶下手だが、言ってる事的には、あいつも不器用なりに『妖精の尻尾』に馴染もうとしているのが分かって少し嬉しくなる。

昨日「キャラ被ってる」とバツサリいかれた時はどうしてくれようかと思っただが、いいところあるじゃないか。少し見直したぞ。

「オレが作った曲だ……『BEST FRIEND』聴いてくれ」

なんだか少し緊張が和らいできた。

こういうのはやっぱり自然体で答えるのが大事なんだよな……
ってジェイソンいねえ!?

いつの間にか、最前列で聴きに行ってる!?

「カラフル カラフル シュビドゥバー♪

恋の旋律♪ 鉄色メタリック♪」

そして歌詞ひでえな!?

「……トウヤは頑張りましたよ」

アルマが俺の頭を撫でてくれる。

ちなみに、後日発売された週刊ソーサラーではガジルの歌が大きく取り上げられており、俺の記事は端の方にちよこんとあるだけだった。

ガジル許さねえ……

△・△ △ △ △

『妖精の尻尾』特集の載った週ソラが発売されてから少し経った現在、俺はミラと2人であと数日に迫ったマグノリア収穫祭に向けての買い出しに来ていた。

なぜ街が祭りをするからといって買い出しに出る必要があるのかといえば、2日間開催される祭りの最終日、その夜に大きなパレードをするからだ。『ファンタジア』と呼ばれるこのパレードは、大陸中からわざわざ見に来る人がいるほど毎年盛大に行っている。

俺も当然参加するのだが、ナツのように火を噴ける訳でも、エルザのように剣を浮かせて乱舞させられる訳でも、エルフマンのように怪物に変身できる訳でも、女子のようにいるだけで華を添えられる訳でもない俺は、毎度地味なポジションや裏方に徹す事になる。

ミラと買い出しに来ているのもその一環なのだが、買った内容がいつもと若干違う気がして、疑問の目をミラに向けてみた。

「ああ、今年は1日目にちよつとした出し物をするのよ。ミスフェアリーテイルコンテストって言って、私も参加するから応援してね！」
へー、ミスコンかあ。

ウチの女性陣は美人揃いだから、相当熱い戦いになりそうだ。

今は誰がエントリーしているのだろうか？

「今はね……確かカナ、ジュビア、エルザ、レビイ、ビスカ、ルーシイがエントリーしてるわよ。私を入れて7人ね」

カナはエキゾチックビューティーって感じで色気が凄いし、エルザやミラは押しも押されぬ『妖精の尻尾』の看板娘だ。ルーシイは知名度こそまだまだだが、素材は抜群に良いし、作戦が嵌れば良い勝負ができるだろう。

ジユビアやビスカは特定の男子がいるから厳しいかもしれないが、あの2人は狙った票が取れば満足だろう。ジユビアは兎も角、ビスカとアルザックはそろそろハッキリさせて欲しいものである。

そういう意味では未知数なのがレヴィイかもしれない。おそらく『妖精の尻尾』きつての清楚かつ常識人だと思うが、それがどう転ぶのか。あと、一応ジエツトやドロイとの三角関係でもある訳だが、こちらはど響くのはというのも気になる。ただまあ、あの2人は完全に相手にされていないというか、恋愛対象として見られていない感じだからなあ……

俺もレヴィイとは本の貸し借りなどでちょくちょく話すが、割と仕事中の愚痴が多い。主に、ドロイとジエツトが先にやられてしまったてその尻ぬぐいをした、という話だ。確か3人は幼馴染という話だが、その立場に胡坐をかいていたら、ポツと出の男に取られてしまいそう。というか、冷静に考えると、『妖精の尻尾』で育った奴らなんて大体幼馴染なんだから、そもそもアドバンテージにもならないのではないのだろうか。

「ねえ、トウヤ」

悪戯っぽい笑みを浮かべたミラが、ミスコンに思いを馳せていた俺に問いを投げかけてきた。

あ、この顔は困らされるやつだ。

「トウヤは誰に投票するの?」

えっ、あ、うーん……

そりやこの場で答えるならミラって事になるだろうが、そんな答えを見透かせないミラではあるまい。

ジユビア、ビスカは除外して考えても、みんな身近過ぎるが故に皆関わりが深くてなかなか決め難いな。

ルーシイはファントムの後のほっぺちゅーの一件から正直意識してしまっているし、エルザはこの前の件から雰囲気が大分柔らかくなり、女性的な魅力が増したように思う。カナは3年程修行を見ている仲だ。一生懸命取り組んでいる様子を見ている分、思い入れは深い相手と言えよう。その3人程関係が深いとは言えないが、レヴィイだって

十分魅力的な女の子だ。

ミラも普段は抜けているところが目立つが、アルマの次に世話を焼いてもらっている自覚がある。俺の気持ちをすぐに読み取ってくれる人の1人だし、俺があんまり掃除をさぼったりすると、アルマのヘルプに入って家事を手伝ってくれている。

いや、もうホント自分でやりなさいって話ですよ、すみません。もちろんミラが来たときは俺だって一緒にやるんですよ？それがアルマの作戦な気もするが。

あと、たまに家族2人（ミラとエルフマン）では余るから、と持ってきてくれるおかずはめちゃくちゃ美味しい。（ただ、大食漢のエルフマンをして食べきれないとすると、3人分作ってしまったのではないかと、しんみりとしてはしまうのだが）

それに何より、こうして見るとやはりとびきりの美人だ。

白雪のような髪、優し気でクリツとした瞳、スツと通った鼻筋に、額を出していて快活さを感じさせる髪型も可愛らしい。週ソラのグラビアを何度も飾ったスタイルは文句なしに拔群だし、ふとした仕草にも女性的な魅力が詰まっている。さすがは『妖精の尻尾』のアイドルだ。いや、もうホント、昔の面影どこ行った？

「もうっ！そんなに見ないで……ちよつと恥ずかしい」

「す、すまん……」

長考に入ってしまったせいで、ますますミラに投票するとは言いづらくなった……

というか、そもそも目の前にいるのに「入れるよ」って言うの凄くハードルが高いのでは？

でも、別の人に入れるって言うのも嫌な奴だよな……？

どうすればいいんだ……!?

「ふふ、そんなに悩むならもういいわよ。当日のアップールタイムを見て決めてね」

思い悩む俺に向けて、ミラは唇に指を当ててウインクしてきた。

やっぱミラに投票しよ……

余りに可愛い仕事のせいで頭の中が蕩けさせられていたところに、コロコロとボールが転がってきた。俺の足にゆっくりとぶつかって止まったので、持っていた荷物を片手にまとめ、空いた方の手でそれを拾う。おそらく子どもが遊んでいて、こちらに飛ばしてしまったのだろう。持ち主を探さなければ。

と、道の少し先に何かを探す素振りを見せる小さな男の子を見つけた。

あの子だなと思い、ボールを転がす姿勢を取ろうとしたのだが、それより先に子どもの方がこちらに気づいて嬉しそうな顔をする。

が、俺と目が合った途端、すぐに泣きそうな顔になってしまった。

「ふふ……トウヤ、貸して?」

泣き叫ばれば俺には弁明不可能だ。最悪逮捕されてしまってもおかしくない。

大人しくミラにボールを差し出し、成り行きを見守る。

すたすと子どもの方へ寄っていき、同じ目線になるようにしやがみ込んだミラ。そして「よく泣かなかったわね」と頭を撫で始めた。

「あのお兄ちゃん、見た目は怖いけど、とっても優しいのよ? だから大丈夫」

ほら、今も私の荷物を持ってってくれるの、と続けるミラに少し照れて頬を掻く。

このくらいは男手として駆り出されている時点で当然の事だと思うのだが。

「ほんど?」

ミラが手招きしているの、こちらも近づいて、ミラにならって男の子と目線を合わせた。少し恥ずかしいが、頭も撫でてみよう。

「ボール、もう無くすなよ」

「うん!」

素直ないい子だ。

久しぶりに子どもとこうして話せた気がする。ミラ様々だなあ

……

その後少しだけ話をしたが、お友達が待っている事を思い出した少年が「いかなきゃ」と言つて、たつたつたと駆けていってしまった。「おにいちゃん、おねえちゃん、ばいばーい！」

走りながら大きく手を振ってくれるので、俺達も小さく振り返っておく。

前を見ていないのでこけそうだと心配していたが、無事に路地を曲がって見えなくなつてしまった。

それを見送つたミラが、ふふと笑つてこちらを見てくる。

「子どもつていいわね……凄くほっこりするわ」

「ああ……」

「最近新しいギルドができて活気が増してきてるし、収穫祭も近くて楽しみだし……なんだか、こういう穏やかな日がずっと続けばいいのにつて思つちゃうな」

確かに、ギルドに居る時くらいゆっくりしていたいもんな。

冒険をするのはクエストに出た時で十分だろう。もう二度とファントムの時のようなギルド全体を巻き込む面倒ごとは御免だ。

「現役を引退して、確かに毎日の刺激は少なくなつたけど、ギルドの皆が元気に帰ってきてくれるのを待つ、そういう生活も気に入つてるの」

帰つてくるのを待つ、か。

俺はいつもミラにおかえりと言われる側だからそちらの事は分からないが、いつもその言葉にホツとしている自分がいるのは確かだ。

俺にできる恩返しはそうだな……それこそ、ミラの言う通り、元気に帰つてくる事なのかもしれない。

「……ケガしないようにしなきゃな」

お願いね、と笑うミラ。

ふと、その笑顔に、失つてしまった少女の姿が重なつてしまった。

元気に、怪我なく帰る。

大事な事だ。

俺達の仕事は常に危険と隣り合わせ。

失敗すれば帰る事すらできなくなつてしまうのだから。

「トウヤ、行きましょ?」

気持ちが悪んでいる事を察したらしいミラがこちらに寄ってきて、上目遣いに俺の袖をクイと引つ張り急かしてくる。

考えてみれば、男の子と会ってから何となく足が止まったままだった。ギルドでは今持っている荷物待っている奴もいるはずだし、これ以上油を売っている訳にはいかないだろう。

「そっういえば……」

そこで何かに気が付いたような様子のミラが、俺に耳を貸すように手招きしてくる。

その顔は、さつきまでの俺のしんみりとした気持ちを吹き飛ばす太陽のような笑顔だった。

「さつきの私達……2人で子どもをあやして、夫婦みたいだったわね」
それだけ囁いたミラは、さつさと前へ向き直って歩いて行ってしまう。

俺も遅れてそれに付いていくが、決してミラの横に並ぶ事はしなかった。

理由は簡単で、自分の顔をミラに見られなくなかったからだ。

はく、顔が熱い。

B O F 編

19話「祭りの始まり」

▼トウヤ視点

今はマグノリア収穫祭一日目の朝だ。

しかし俺は今、マグノリアから少し離れた森の中を急いで歩いていた。

どうしてこうなったか、順を追って説明していこうと思う。

始まりは昨日の朝、アルマがフリードに頼まれ事をされた、と俺に報告してきた事だった。

フリードとは、『妖精の尻尾』フェアリーテイルの魔導士の1人で、ラクサスの親衛隊である雷神衆のリーダーをしている男だ。

詳細は分からないが、術式魔法という古代文字を空間に刻む事で、その空間にルールを課すという魔法を使うらしい。事前準備が重要になるようだが、以前エルザと立ち会っているところを見た限りでは、単純な戦闘能力も高いように思えた。もう少しギルドに帰ってくる回数が増えれば、今年のS級魔導士昇格試験の受験者にも選ばれるだろう。

雷神衆の他メンバーも実力は高い。ビックスローという鎧の顔当てを被った男は、自らが操る靈魂を人形に憑依させて戦うセイズ魔法を扱う。これの厄介なところは、靈魂の方が無事ならいくら人形を破壊しても意味がないという部分だろう。紅一点であるエバーグリーンは妖精をイメージさせる魔法をいくつも使用する他、石化眼ストーンアイズという強力な魔眼を持っている。効果は名前の通り、目の合った者を石に変えてしまうという物だ。

しかし、この2人もフリード同様にギルドにあまり寄り付かない。少し寂しいのだが、まあ人それぞれの仕事の仕方があるから仕方がないのだろう。

そして、そんなあまりギルドにいないはずの男からの頼み事とは何だったのかといえ、とある村で発見した危険な呪物の破壊であつ

た。

もともと雷神衆は今年の収穫祭に参加するつもりだったそうで、クエストを受けながらマグノリアに向かっていたらしい。その中で立ち寄った村の1つにて依頼をこなした後、ふとその村にある古い遺跡に立ち寄ったところ、封印が解けかけた状態の壺を見つけたという。すぐに破壊を試みたが、下手に攻撃を加えれば封印だけが壊れる可能性もあると考え、俺を呼んだ方が早いと判断してギルドに帰ってきたそう。

俺は正直非常にめんどくさいとは思うのだが、直接その話を聞かされたのはアルマだけだったので、事は一刻を争うという言葉に二つ返事で引き受けてしまった。

ファンタジアの準備をネタにゴネようと思ったのだが、本番2日前に迫っている状態では演技の確認以外は全て終わっていたのでそれは無理だった。また、村の場所的に列車で急げばギリギリ日帰りできそうだったために、心的ハードルも下がってしまった。

(まあ、そこで「最悪一泊してもファンタジアには間に合う」と言ったアルマと「ミス・フェアリーテイルコンテストも見たい」と思っていた俺とでひと悶着あったが)

そして、トドメとして「ゼレフに関わっている可能性がある」という言葉がフリードから零れたと聞いてしまった。そこで亡霊に憑りつかれていたジェラルの顔が思い浮かんでしまえば、もう俺の中に放置しておくという選択肢は無くなっていたのである。

マスター達への報告は行っておくというフリードの言葉——に頷いたのはアルマで、俺は事後承諾だったが——に甘える事にして、急いで列車に乗り込んだのだった。

乗り込んだのだったが……

いざ目的の村に到着してみても、村長に話を聞いてみても「そんな壺の話は聞いたことがない」としか言われず、念のため入った洞窟遺跡でも魔力の残滓すら感じない壺の破片が見つかっただけだった。

不可解な事はそれだけではなく、その遺跡から出ようとした時に天井が崩落し、瓦礫を除けて外にでた瞬間には闇ギルドに襲われた。

ここまでなら普段のアンラッキーかとも思ったのだが、その闇ギルドの1人と強めの《お話》をしたところ、この村に居る『妖精の尻尾』の魔導士を襲えと依頼した奴がいた事を教えてくれた。

極めつけに、最寄りの駅で列車の不備が見つかって、少なくとも明日までは列車が動かないというではないか。

明らかに、俺をマグノリア収穫祭に参加させたくない人間が存在する、というのが俺とアルマの共通見解だった。

仲間を疑いたくはないが、どう考えてもフリード、もしくは雷神衆、ラクサスの思惑であろう。これがただの嫌がらせなら一発殴る程度で済ませられるが、俺にいられたら困るような、魔法を使った大掛かりな何かを引き起こそうというならただではおけない。

一泊して始発で帰るというのも考えたが、宿や列車にも何か仕掛けられている可能性を考えて自力で帰る事にした。宿は兎も角、列車の中では乗り物酔いでロクに戦えもしないからだ。

夜通し歩けば早朝にはマグノリアへ辿り着くかと考えていたが、俺はここで自分の読みの甘さを痛感する事になった。

行く道行く道で何者かの襲撃に遭ったのである。

いくつか、本当に偶然出会っただけの犯罪者もいたのが俺らしい所なのだが。

敵を倒しながら街道を進むか、隠れながら森を行くかで迷い、結局後者を選んだ訳だが、森の中にも襲撃者が待ち伏せしてうんざりする羽目になった。

そんなこんなで心身ともに疲れ果てた状態で迎えた収穫祭初日の朝。
マグノリアまではあと数時間だ。

▼ミラジェーン視点

『エントリーNo. 3、ギルドが誇る看板娘、その美貌に大陸中が酔いしれた!!ミラジェーン・ストラウス!!』

司会のマックスにそう呼ばれて、ミス・フェアリーテイルコンテス

トのステージに出ていく。

この口上、私は大袈裟だと思ったのだが、こういう大会ではこのくらい大きく出るのが普通だと押し切られてしまった。

でも、ステージを見てくれている人は「待ってました」とか、「本で見るとより可愛い」などと言ってくれている人は「恥ずかしがっているよ、笑顔で手を振らないとね。」

私の前の2人、カナとジュビアは自分の魔法を使った派手なアピールをしていた。カナはカードを舞わせている間に水着に早着替え。ジュビアも1度水になってから水着姿へと変身し、しかも背景に波まで出して演出していた。

だから、私も自分の得意魔法を使って盛り上げようと思うの。

「顔だけアルマー！」

「「「えー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！？」」」」

ふふ、アルマは可愛いものね！

お客さんも皆喜んでるわ。

お次は少し外してみようかしら。

「顔だけガジルくん!!」

「「「ぶー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！？」」」」

顔以外は私のままだから、ガジルくん女装しているみたいに見える、相当おかしく見えるはず。

現に会場も大ウケだ。

水着は用意できなかったけど、インパクトでは前の2人に負けていないし、会場の盛り上がりでは私が勝っているだろう。

次のエルザには悪いけど、今回の勝負は私が貰ったわね。

そう思いながら、演技が終わった出場者の控室に向かうため、ステージに張った3枚の緞帳の隙間からステージ裏に引っ込んだ。

勝利は確信しつつも、私の心は完全な晴れ模様とは言えなかった。当日は見に来てねと約束したはずのトウヤが会場にいなかったからだ。

正確には昨日から姿を見ていない。

朝早くからフリードとアルマが話していたのを見たが、それに関し

ての事だろうか。

フリードがマグノリアに居るなんて珍しいとは思ったが、何やら真剣に話しており、邪魔してはまずいと話しかけられなかった。それに、帰ってきているなら後でギルドにも来るだろうし、その時に話せばいいかとも考えていたのだ。

しかし、アルマやトウヤは勿論、フリードまでもがギルドに来る事はなく、今日の朝がやってきてしまった。

私との約束を守って、コンテストまでには戻ってくるかとも思っていたのだが……

こうなってくると、ステージを見てもらえなくて残念だったという気持ちよりも、何かトラブルに巻き込まれたのではないかという心配が勝ってしまう。

しかし、その手掛かりを得ようにも、雷神衆の方もどこにも見当たらないというもどかしい現状に頭を抱えるしかない。

本当に大丈夫かしら、トウヤ……なんだか嫌な予感がするわ。

「あら……浮かない顔ね、看板娘さん？」

そんな私に声を掛けてきたのは、話を聞きたいと思っていた人物の1人である、雷神衆エバーグリーンだった。

「エバーグリーン!? やっぱり帰ってきてたのね！」

「ええ、つい昨日程にね」

ならばフリードとも一緒に行動していたはず。

久しぶりの挨拶もほどほどに、嫌な予感に従った私は、聞きたい事を聞いてしまう事にした。

「じゃあ、フリードからトウヤ達の事を聞いてない？ 昨日から姿が見えないんだけど……」

そう聞かれたエバーグリーンは、口許を扇で隠してふふふと笑い始める。

奇妙な反応だと怪訝な目を向けてしまうが、見るべきなのはエバーグリーンではなく、その後ろの光景であったと気付いたのは次のセリフを聞いた後であった。

「知ってるわ……トウヤはこの祭りが終わるまで帰ってこないの。今

頃は彼に恨みを持つ奴らに襲われているところかしら」

それはどういう事だと問う前に、ジユビアとカナが石になって立っているのが目に入ってしまった。

——石化眼!?

マズい、そう思つて手で目を覆おうとした時にはもう遅く、眼鏡を外したエバと目が合う。

徐々に固まり、動かなくなっていく四肢。

こうなつては最早遅いと自覚しつつも、辛うじて動く口を開いて問うた。

「どうして……………!?!」

抵抗の術すら分からないまま全身の力が抜け、意識までもが固まつてしまう。

最後に聞いたのは、愉し気なエバの

「祭りが始まるのよ……………あなた達はその舞台装置になるの」という呟きであった。

▼三人称視点

「よオ……………妖精の尻尾のヤロウども……………」

騒然としたギルドのステージ上にラクサスとフリード、ビッグスローが降り立つ。

その後ろには、雷神衆の最後の1人、エバーグリーンと石になった『妖精の尻尾』の女性魔導士7人が並んでいた。

その内訳はカナ、ジユビア、ミラジェーン、エルザ、レビイ、ビスカ、そしてルーシイ。先ほどまで行われていたミス・フェアリーテイルコンテストの出場者達だ。

7人の内、最初の6人は控室に戻った所を狙われた訳だが、最後のルーシイだけは異なっていた。エントリーされていないはずのNo.8として会場に乱入したエバーグリーンのアピールとして、観客の前で石にされてしまったのである。

その様子を見てしまえば会場が阿鼻叫喚に包まれるのは当然の事。

既に観覧に来ていた一般人は散り散りになって逃げだした後で、残っているのは『妖精の尻尾』のメンバーだけになってしまった。

もちろん、そこまでもが首謀者達の思惑通りであった。なぜなら、先の言葉から分かる通り、彼らにとって用があるのは、他でもないギルドの面子だけだったからだ。

「祭りをしようぜ、ジジイ」

心的にも、物理的にも一段上からの目線で自らの祖父——マカロフに語りかけるラクサス。

しかし、そこには久しぶりに会う肉親同士の温かい雰囲気のようなモノは微塵もありはしなかった。

「今すぐ皆を元に戻せ！これ以上は冗談では済まんぞ!!」

その至極当然の要求には、ラクサスもまた当然の如く否定の声を上げる——事すらなく、ルーシイの石像の傍に雷を落とす事で応えた。

落雷を操った男は、悪びれる様子もなく固まったルーシイの肩に手を回して話を続けていく。

「この女達は人質だ。ルールを破れば1人ずつ砕いていくぞ」

『砕いていく』

同じ紋章を刻む仲間に対して、石化させるだけでなく砕くと言う。

早い話が殺害予告だ。

この言葉は元々ステージ上を睨んでいた男達の視線をさらに険しくさせた。

その殺気を浴びながらも、泰然自若として一步前に進み出たフリードが細かいルール説明を行っていく。

「制限時間は3時間。バトルフィールドはこの街全域。そのどこかに居るオレ達を見つけて4人とも倒せばそちらの勝ち。全員戦闘不能、もしくは3時間が経てばこちらの勝ち、つまり石像全てが砂となる」

それを聞くギルドの面々は、あまりの事態に「本気か」と尋ねる事すらできずに黙りこんでしまう。

ただし、その中にはただ動揺するだけではなく、とある希望を抱きそれを気付かれまいと黙っている者も居た。

その希望とは、すなわちトウヤだ。石化など彼にかかればすぐに解

除する事ができる。

しかし、ギルドの中でも有数の実力者達は、それは難しいだろうと考えていた。

ラクサスは常々他者を見下した態度を取っており、実際多くの者を眼中にもないと考えている。しかし、そのラクサスをして無視できぬ者が数人いた。それがギルダーツ、ミストガン、そしてトウヤだ。たった3人ではあるが、だからこそラクサスがトウヤを警戒していない訳がない。

そんな考えを裏付けるように、今までニヤニヤとするだけで口を閉ざしたままだったビックスローが話し始めた。

「おっとオ!? トウヤなら人質を解放できるとか考えてるおバカさんがいるなあ……?」

妖精の紋章の刻まれた舌を露わにしながら語りかけてくるビックスローに、バカと言われた連中がピクリと視線を向けた。

「ごんねーん! アイツなら今頃この街から遠く離れたところで、アイツに恨みを持つ連中に襲われてるトコだよ! ぎやはははっ!」

人質を用意する仕事があるエバークリーン。

とある仕事のため街中を駆け回ったフリード。

そしてビックスローは、この祭りのための準備として、トウヤを足止めするための工作を行っていたのだ。

自らの魔眼、フイギユアアイズ造形眼にて傀儡とした一般人にトウヤの情報を巡らせ、時には闇ギルドに依頼までさせてトウヤを襲わせたのである。

この言葉にざわざわとした『妖精の尻尾』の面々。

しかし、再び口を開こうと動いたラクサスを前にして再び静けさを取り戻す。

その沈黙には目の前の男への畏怖が滲んでいた。

「妖精の尻尾最強は誰か、フエアリーテイルここらでハッキリさせてやるよ!」

すつと右手を顔の前までもつてきたラクサスが、そこからカツと雷光を迸らせ、雷神衆と共に姿を消す。

後に残るは落雷の残響が如き宣言のみであった。

「バトル・オブ・フエアリーテイル……開幕だ!!」

△・△ △ △ △

バトル・オブ・フェアリーテイル開始から40分程度が経った。

「よせーやめんかガキども!!」

ガランとしたギルドの中で、マカロフが悔しそうに手を握りしめ、空中に浮かんだ文字を睨みつけている。

今、マグノリアの街のあらゆる所にはフリードの術式が張り巡らされていた。

術式で区切られた空間は、そこに入った人間に何らかのルールを課す。それは例えば『この中で一番強い魔導士のみ術式の外へ出る事を許可する』だったり、『この中に居る者は、戦闘終了まで魔法の仕様を禁ずる』だったりと多岐に渡る。

このうち、『妖精の尻尾』メンバーを苦しめたのは、言うまでもなく前者の類いのルールであった。これにより、妖精は共食いを始めざるを得なくされてしまった。

雷神衆と出会う事無く、近くにいる仲間同士で潰しあう。それで生き残ったとしても、疲弊した状態ではギルドトップクラスの实力を誇る雷神衆の相手にはならない。

初めは百人近くいた魔導士達は次々と倒れていき、ものの数十分で半数以下にまで減ってしまっていた。

マカロフが憤っているのは、その様子が文字でだけとはいえ、空中に浮かぶフリードの術式で実況されているからであった。

今も『エバーグリーン vs. エルフマン 勝者エバーグリーン』と表示されている。

今回は、この件を引き起こした連中の一員であるエバーグリーンを相手にした戦闘だったが、今までに表示されたアナウンスの中には、普段は仲のいい者たちが争った事を伝えるモノまである始末だ。

当然、コレを見たマスター・マカロフの心中は穏やかではなかった。普段から、ギルドの人間を「ガキども」と呼んで慈しみ、ひとたびその子らが不当に傷つけられれば、すぐに怒れる巨神となる男にとっ

ては筆舌に尽くしがたい状況であったのだ。

傷つき倒れていく子ども達。しかし、傷つけたのもまた愛すべき子ども達。

いくら石になった女性陣を助け出すためとはいえ、仲間同士で傷つけ合うなど看過しがたかった。

そして何より、その状況を作り出したのと同じギルドの子、それも実孫であるという事実がマカロフを追いつめていた。

それでいて、ギルドの中に留まるしかない無力を呪いながら、己を拒む『80歳を超える者と石像の出入りを禁止する』という文言の刻まれた透明な壁を前に立ち尽くすしかなかったのである。

そして、その隣にはマカロフと同様に悔しそうな表情を浮かべる者がもう一人。

「くう~~~~!!」

しかし、その理由は真逆と言って良かった。

「オレもまざりてえっ!!」

この戦いをただの「ケンカ祭り」としか捉えておらず、ギルド最強を巡って自分も戦いたいと、ナツが悔しがっているのであった。

ではなぜ参加していないのかといえば、隣で不服そうな顔をしているガジルと同様、なぜか80歳以上出入り禁止の術式に引っ掛かって外に出る事が出来ないでいたからである。

つまり、今ギルドに残っているのは、マカロフ、ナツ、ガジル、そしてナツに付き添って動かずにいるハッピーの4人だけという事になる。

つい先ほどまで、ラクサスを怖がって動けなかったリーダーダスもいたが、石化解除の薬を貰ってくるため、ポーリュシカという薬物に詳しい人物のいる森に向かってしまっていた。

マカロフは、未だに「流石のラクサスでも仲間を殺したりはしない」と信じきっているナツに、感心半分、呆れ半分という視線を向けながら、リーダーダスの帰りを待っていた。

しかし、その微かな希望は打ち砕かれる事となる。

『フリード vs. リーダス 勝者フリード』

これで残りは40人。

そこから人数の減少は止まらない。

グレイがビックスローに倒された時には、マカロフがラクサスに降参を申し出る事すらした。

しかし、思念体として現れたラクサスは「降参するならマスターの座を寄越せ」と要求。

マカロフとて子ども達の命と比べれば、ギルドマスターの座など簡単に投げ捨てられるものだと考えていた。しかし、今のラクサスに渡せるかと問われれば、絶対に否だったのである。

結局、この祭りが終わりを迎える事はなく、たった今、アルザックがフリードに倒され残り2人となった。

そう、2人だ。

もともと頭数にいれられていないマスターであるマカロフ、猫であるハッピーを除いての2人、つまりはここから出る事のできないナツとガジルだけとなったのである。

「こいつ等だけじゃとー！ー!!?」

これはもう万事休すかと項垂れたマカロフだったが、ナツやハッピーがエルザの石像を熱して溶かせばなんとかなるのではないかと、言い出したのを聞いては必死に止めるしかない。

あーだこーだと喚く面々。

混沌としつつも、やはり「ここからどうすればいいのか」という雰囲気漂ってしまう。

少しの間だけ沈黙が降り、その場の誰も動きが止まった。

しかしその瞬間、残り人数を示していた文字が再び変化し始める。

静止した空間では、文字の変化というごく小さな動きであろうともやけに目立ち、4人の視線はそこにくぎ付けとなった。

『残り3人』

増えた1人は一体誰なのか。

そう誰かが疑問を口に出そうとするより先に、凜という音が響き透明な壁が裂けた。

そして飛び込んでくる翼の生えた1つの影。
銀の光を纏った灰色の髪の方と、その背中に張り付いたピンク色の
猫がギルドの入り口に降り立った。

「遅くなった、マスター………」
じいちゃん

20話「魔人」

▼トウヤ視点

「トウヤ、よく戻った！」

マスターじいちゃんがこちらに駆け寄ってくる。

いや、ほんとよく戻れたよね……

森の中で会った奴らを片っ端からボコしたと思ったら、落とし穴、落石、土砂崩れ、激流、エトセトラ……魔法を使わない罫の類いが大量に仕掛けられていたのだ。

面倒になって空を飛ばば、すぐに下の奴らに見つかって石やら魔法やら投げられる始末。

うんざりしすぎて、森を叩き斬って道を作ってしまった。

後で方々から怒られるだろうとは思ったが、罫を全スルーできるようになると思つて、つい。

ついでに、そんな超常的な現象を見て恐れをなしたのか、襲撃が止んだのは柵から牡丹餅といった感じだったが。

「ナイスだトウヤー！これでオレも混ぜられるぞお!!」

「待て火竜サラマンダー、抜け駆けしてんじやねえ！……一応、礼は言っとくぜ斬竜、ギヒツ」

ナツやガジルもじいちゃん同様、こちらに寄ってきたかと思えば一度肩を叩いて街の方へ向かってしまった。

ガジルは兎も角、こんな事になつている状態でナツがギルドに残っているのはおかしいと思つていたが、なるほど、フリードの術式に閉じ込められていたのか。

先ほどギルドの前まで飛んできた時に何かの結果が見えたので、道中の術式と同様に斬り捨ててしまったが、それが滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーを閉じ込めるものだった訳だ。

なんとなくやった事だったが、もし斬つてなかったら俺も激突していたかもしれない。そうなるのかなりカツコ悪かったら……

いや、そんな事はどうでもいい。まずはミラ達を解放しないとな。

「トウヤ、アルマ。おまえたちは今の状況をどこまで理解しておる？」

「大体は」

「ここに来るまでに、街の端の方でリーダーダスと会ったんです。そこで諸々の事情を聞きました」

ミス・フェアリーテイルコンテストの出場者たちが石にされた事。

フリードの術式に嵌ったせいで、仲間同士で潰しあっている事。

じいちゃんに頼まれてポーリユシカさんの所まで行こうとしたらフリードにやられてしまった事。

仲間の為に何もできなかったと涙ながらに教えてくれた。

こんな風に仲間を思いやれる奴らが無闇に傷つけて、ラクサスは何がしたいんだらうな……本当に。

「そうか、ならまずほ……」

「わかつてる」

ラクサスに灸を据える事は後だ。

石にされた女の子たちに近づいていく。

皆がみんな、驚いた顔や訳が分からないという顔をして固まっている。石化など、同じ紋章を刻んだ者に向けられるべき魔法ではない。エルザですらエバークグリーンに警戒を抱いていなかったのだろう。そうでなければ簡単にやられる訳がない。その信頼を裏切った事實は重いぞ、ラクサス……

そんな風に思いながらルーシイの肩に手を置く。

——スパン

あ、やべ。

怒りで出力を間違えた……

「……トウヤ？って、きゃああああ!!」

石化の魔法だけでなく、身に着けていたチア衣装まで斬ってしまった。

真ん中からスッパリと縦一文字に裂け、内側から徐々にその双丘が露わに……あ、頂上が見え——

パァン!!

お山の観察に夢中になっていた俺は、横から飛んできたビンタに反応する事が出来なかったのであった。

△・△ △ △ △

ルーシィに1度土下座をキメてから他の面子の石化も解除していった。

以降はちゃんと注意深く斬っていったので、先ほどのような事故は起こらず作業を終えられたのだが……あの、その、アルマさん、視線が痛いです。

ルーシィの方は俺の羽織を渡し、事情を説明した上で、ラクサスのせいでイライラしてたら出力を誤ったと言ったら『まあいいよ……ああいう事していいのは私だけだからね?』とお許しの言葉をいただけた。優しい。

なぜかその言葉を聞いた後から、アルマの視線が更に厳しくなったのだが、一体なんだと言うのか。

……よく分かんが、多分ラクサスせいだ。おのれラクサス、許さん。

「……という訳じゃ」

今はじいちゃんがルーシィの後に元に戻った連中へと現状を説明しているところだ。

エルザだけは片目が義眼なせいで魔法のかけりが甘く、大体の事情が聞こえていたようで説明する側に回っているが。多分、俺が来なくてもあと10分もあれば自力で解除していただろう。

俺も一応一緒に聞いていたのだが、まさか先ほど出ていった2人以上は全滅しているとは思わなかった。

それでいて雷神衆は全員生き残っているという……

まあでもこれは作戦勝ちだろうな。街中にある術式の全てを把握している奴らが負ける事はそうそうない。

が、それはここまでの事。

俺が来たからには術式など関係がない。

それを分かっている女性陣も、大事な人達の敵討ちのため闘志を燃やしている。特にグレイがビックスローにやられたと聞いたジユビ

アが怖い。悪鬼が見える……

しかも、ギルドを覆っていた結界を壊したという事はマスターも出られるという事。

ガキ同士の喧嘩に親が出てくるのもどうかとは思いますが、これでこちらの負けは無くなつた訳だ。

と、思っていたのだが……

「ここからはワシも参加する。反撃開……」

ビーーーーッ!!

鬨の声を上げようとしたじいちゃんを邪魔するように、轟音が鳴つた。

ギルドの至るところに雷と鬨の描かれたマークが浮かび上がってきて、そこから怒りを滲ませるラクサスの声が響きだす。

『よくもやってくれたなア、トウヤ……今回の事はコチラの想定を超えた速さで帰ってきた事に免じてペナルティ一つで許してやるよ』

ペナルティ？

なんの事だ……？

『これからはおまえにもルールに従ってもらうぞ……そのために神鳴殿かみなりでんまで起動させてやったんだ』

「神鳴殿だど?!? 貴様!! 関係ない者たちまで巻き込むつもりかラクサス!!?」

この言葉に間髪入れずに怒号を響かせるじいちゃん。

コチラも何の事か分からないが、この反応からするに良いものではないのだろうという事は分かる。それにこの流れで言うという事は……

『制限時間がくれば街に雷が降り注ぐぞ……ジジイがギルドから出て、トウヤが術式を壊しても一緒だ。それが分かった瞬間、即座に神鳴殿を発動する』

なるほどね、街の人間全てが人質って訳か。

……本気で言ってるのか？

世界の9割の人間が魔法を使えないんだぞ？

ましてこの街の魔導士ギルドはウチだけ。

もしそんな事になれば、どれだけの人が死ぬと思つてやがる……
「安心してください、マスター。私達だけでもなんとかしてみせます」
ワナワナと怒りに体を震わせているマスターに向けて、エルザが俺たちの気持ちを代表して言ってくれた。

『さて、お前程度でできるかな?……リタイアするならいつでも聞いてやるぜ、マスター』

そう言つてラクサスは通信を切つてしまった。

くそ……参加できるだけマシだが、これで俺の行動は大分制限されてしまった。もし、先ほどのように出力を誤つて術式まで斬つてしまったらと考えれば、おいそれと斬魔の力は使えない。

厄介な事になつたと頭を抱えていたのだが、悪い事は続くもの。

「待てラクサス!!話は終わつて……ぐう!!」

意味がないと分かっている上で、それでも感情を制御できずに叫んでいたじいちゃんが、急に胸を押さえて苦しみだしたのだ。

「マスター!?!しっかりしてください!!」

レビイやビスカが駆け寄つて看病しつつ事情を聞こうとするが、じいちゃんは「こんな時に……!」とだけ呟いて気を失つてしまった。

こんな時に、という事は以前にも同様の事があつたと捉える事が出来る。なら、まさかとは思うが、じいちゃんは何かの病気で……

まずいな、今の状態では医者に見せに行く事すらできない。

「エルザ」

すぐに動かないといけない、そう思つてエルザと目くばせをする。

我が意を得たりとばかりにエルザも頷いてくれた。

「非常事態だが、マスターが外に出ていないかを確認する方法が分からない以上、まずはラクサス達をどうにかしなければならぬ……ひとまずマスターはレビイとルーシイで看病してくれ。他の者でヤツらを叩くぞ」

エルザの指示に従つて、ルーシイとレビイがじいちゃんを連れて奥のベッドに引つ込んでいった。

それと入れ替わりに、いつの間にか上階のテラスから外の様子を見に行つていたミラが帰つてきて、外に莫大な魔力をため込んだ魔水晶ラクリマ

が浮かんでいると報告してくる。

確認の為に俺達もテラスに出てみたが、確かに黒い魔水晶が帯電しながら浮かんでいるのが見えた。ぐるりと街を取り囲むように配置されており、その全てから魔力が放出されればマグノリアの街は目も当てられない惨状になる事だろう。

一番良いのは全て破壊してしまう事だが……

「こんなの全部私が撃ち落としてやるわ!」

スナイパーライフルを換装したビスカが、止める間もなく魔水晶を1つ狙撃してしまう。

「きゃあああああ!!」

すると、破壊されたラクリマから電流が走りビスカの体に直撃した。絶叫をあげながら黒コゲになるビスカを見て、ハツとした様子のカナが声を上げた。

「生体リンク魔法……!」

攻撃してきた者と自分のダメージを連結する魔法がかかっているそうさ。うかつに攻撃すれば手痛い反撃を受ける事になるだろう。見た感じ300個はある以上、全て破壊というのはかなり難しい。

やはり罠があったか。

厄介な事をしてくれる……

「まったく、ホントにアンタは邪魔なヤツね……トウヤ」

ビスカの容態を確認しようとしていた所に、それはコチラのセリフだと叫びたくなるような声が上空から届いた。

ああもう今度は何だ、次から次へと!?

そう思っ顔を上げようとすると、ゴトリと向かいの建物の天井に何か置かれた音がした。

声の主はエバーグリーン、音の正体はエルフマンと他数人の石にされた『妖精の尻尾』の魔導士達だった。

「やるなるわね、ホント。アンタがいると私たちの準備がおじやんになるわ……だからコレはそのペナルティよ」

宙に浮かんだまま眼下の石像を指さすエバーグリーン。
先ほどラクサスも同じような事を言っていたが、まさか……!?

「まずはこの筋肉ダルマを砂にするわ……他の石像もアンタが余計な事をしようとする度に砕いていくの」

な、正気か!?

ちよつと待て、俺の行動のせいでエルフマンが死ぬって言うのか!?
まてまて、そんな理不尽な事あっていいはずないだろ!?

エルフマンはつい最近、ようやく全身での変身が可能になって、今年はS級試験にだって選ばれそうで、ずっと天国のリサーナに笑われないようにって頑張ってきたんだぞ!?

それを……?!

よりによってミラジエーンの前で……?!

「私たちの邪魔をしようとしたことを悔いなさい」

ニタニタとした顔のままエルフマンに手を向けるエバーグリーン。
ン。

怒りよりも焦燥が勝ってくる。

俺は正常な判断もできないままエバーグリーンの方へ駆けだしてしまおう。

「お前ええええええ!!」

いや、この判断はそう悪い手ではないはずだ。

石像を砕かれる前にアイツを即行で潰せばまだ何とかなる!

そう思って床を強く蹴る。

強硬策に出た俺に恐れをなしたのか、エバーグリーンは先ほどまでの笑みを消してエルフマンへ魔法を飛ばそうとする。

あと1メートル。

——間に合え。

あと50センチ。

あと少しで手が届く。

景色の流れがゆっくりになって、色も薄くなる。

本人すらも気づかない内に、悪魔と化したミラジエーンがエバークリーンの頭部を掴んで遙か遠くの地面に投げつけていた。

その悪魔は髪を逆立たせ、頸窩けいごから下腹部までぱっくりと割れた赤いレオタードのような衣装に身を包んでいる。攻撃的なハイヒールや、大きな爪のようになっていた籠手も目立つが、何より目を引くのは大きく黒い翼と尾だろう。

——接収テイクオーバーサタンソウル。

魔法の種類自体はエルフマンのものと同じだが、違いは吸収した対象にあった。エルフマンは魔物の力を使うのに対し、ミラジエーンが使うのは悪魔の力。それは爆発的な力を産み、あらゆる物を吹き飛ばす破壊力を秘めている。

今、宙を踏みエバークリーンを見下ろしているのは、『妖精の尻尾』の看板娘として愛されるミラではなく、今や現役を退いたはずのS級魔導士、魔人ミラジエーン・ストラウスだった。

「あ、アンタ正気!? こっちには人質がいるのよ!? 遠隔操作で破か…ぶへっ!?」

脅し文句を言いきるより先に、正面に立っていても消えたのではないかと思えるような速度で肉薄したミラジエーンの拳がエバークリーンに突き刺さった。

横面を叩かれ吹き飛んだエバークリーンだったが、空中で体勢を整え、自身もまた妖精の翼を広げ宙に立つ。

今の一瞬でまた素早く移動したらしいミラジエーン。

それを見失ったエバークリーンだったが、莫大な魔力を頭上感じてそちらに目をやった。

その目に映ったのは両手の平を真下に向け、魔力を収束させているミラジエーン。

これを食らえば自分に確実な死が訪れると感じたエバークリーンは、魔眼による石化という対抗手段すら忘れ、爆発する鱗粉を撒き始める。

「いやあああああ!!!」

その直後、魔力で出来た光の柱が地面に突き立ち、エバークリーン

を呑み込んだ。

咄嗟に撒いた鱗粉が爆発し、ほんの僅かに威力が殺がれたのか、意識を失うのみに済んだエバーグリーン。

しかし、鋭敏な悪魔の耳にはその胸の鼓動が聞こえてしまう。

この瞬間、エバーグリーンが生き延びる目は消え失せた——かに見えた。

「消す」

グングンと、気絶したエバーグリーンの元へ降下していく。

殺気を発し、岩をも穿つその凶拳に落下の勢いを乗せて振りぬいた。

——その瞬間、灰色の影が割り込み、ガツンと硬い音が響いた。

「トウヤ……」

その正体は、ミラの拳がトウヤの石頭に阻まれた音であった。

トウヤの頭部からは血を吹き出し、その脚を突き立てた地面は無惨にもひび割れている。

しかしトウヤは吐血し、ワナワナと体を震わせ、膝をついても目だけはミラから外さなかった。

その様子に観念したのか、変身を解くミラジェーン。

元の姿に戻ったミラを見て薄く笑ったトウヤに、ミラは白い少女——ミラの妹であったリサーナ——の笑顔を重ねた。

脳裏に響いていた声も、映っていた像も消え、ミラの心に残ったのは仲間を殺さずに済んだ安堵だった。

「ごめん、トウヤ……」

「大丈夫だ……エルフマンの石化は解けた。エバーグリーンも気絶してるだけだ。誰もいなくなったりしていいない」

ミラも膝を折り、涙を流しながらトウヤに抱き付いた。

「ごめんね、ありがとう、と繰り返し嗚咽を漏らすミラジェーンの頭

をトウヤがそつと撫でる。

「誰もいなくなつてない……大丈夫、明日になったら皆そろつて笑いあえる。そこにはラクサスも雷神衆もきつといる……平和で穏やかな日々は続くんだ」

もはや何か言う事すらできないようになって、ただただ泣く。

ぎゅつと強くなつた抱擁に驚きながらも、トウヤはミラの頭を撫で続けた。

「俺が続けさせてみせるから……」

▼トウヤ視点

泣き疲れてしまったのか、こちらまで走ってきたエルフマンを見て安心したミラは眠つてしまった。

今はエルフマンにミラをおぶつて貰つてギルドまで帰っているとこらだ。

メチャクチャ頭が痛い、俺に後悔はない。

エルフマンを殺すと言われた時、きつとりサーナの事を思い出したのららう。

その怒りは分かる。

だけど、怒りに任せてあそこでエバーグリーン——同じ紋章を刻んだ人間を殺してしまえば、きつとミラはずつと後悔する事になつていただらう。

そうなれば、以前彼女が言っていた穏やかで平和な世界に彼女自身がいられなくなる。

そんなのは嫌だ。

そんな風に思い詰めるミラなんて見たくない。

俺自身、ギルドに帰つてきてミラに「おかえり」と言われなくなるなんて事に耐えられそうにない。

だからこの頭の痛みは、エバーグリーンではなく、ミラジエーンと俺自身を助けた痛みなのだ。何も後悔はない。

「トウヤ……また頭から血が噴き出してゐるぞ」

ウソ、ちよつと後悔してる。

別に頭でいなくても良かったよな……

どうして手とかで受け止めなかったんだろ。

しつかり戦ってきたエルフマンより、一撃受け止めただけの俺の方がボロボロで笑えるな。

いや、笑えないよ。

ミラめっちゃ強いよ、怖いよ……

久しぶりに穏やかになる前の魔人さんの恐怖を味わった気がする。

目が覚めたミラがあ頃の性格に戻ってたりしたら俺は泣く。

外間も気にせずワンワンと泣き喚くね。

「あのおよ、トウヤ」

そんな益体もない事を考えていると、エルフマンがおずおずと話しかけてくる。

どうしたんだらうか？

ミラを背負うのを代わって欲しいとか？

怪我人である事は2人とも変わらないし、漢フェチ——こういうと凄く怪しい——のエルフマンがそんな漢気のない事を言うなんて想像もつかないが。

というかそもそも、俺がミラを背負うのはダメでしょ……

こう……胸部装甲がさ。

さつき抱き付かれてた時も必死に気にしないようにしてたのに、今背負ったら絶対意識しちゃうだろっ!?

……兎に角、まあそういう事ではなさそうだ。

「姉ちゃんの事ありがとうな……オレ、姉ちゃんの事絶対守るって誓ったのに、守るどころか人質になっちまって……」

なんだ、そんな事か。

「別に……俺にとつてもミラは大切なんだ。お前の代わりにやった訳じゃない」

そうか、と言って肩を落としてしまうエルフマン。

何となく、その背のミラが「大切」というところでピクリと動いた気がするが、気のせいだろう。

「今回はたまたま手の届くところに居られたただけだ……次はどうか分らない。だから、その時は頼りにしてる」

そう言ってエルフマンの頭に手を乗せる。

少し前まで俺とそんなに変わらない身長だったクセに、すっかり大きく強くなりやがって、まったたく。

「お、おう！任せてくれ、兄ちゃん！」

兄ちゃんてお前……

うん、まあ頭とかよく撫でてるしね。

ミラの事を姉ちゃん姉ちゃんと呼んでいるから何となく弟感が強く、そんな感じで接してしまっている。

年齢不詳な俺だが、年齢不詳なりにカナと同じ年って事にしたから、一応エルフマンとも同じ年になるはずなんだがな……

まあいいか。

「ああ……頼んだぞ、弟分」

そう言くと、エルフマンも嬉しそうにしてくれた。

……ん？

なんか、ミラの顔赤くなってるないか？

気のせいかな……？

21話「弱さ」

▼トウヤ視点

「エルザ、カナ」

先ほどギルドに戻ってきたのだが、酒場に残っていたのはこの2人だけだった。

マスターとビスカは奥のベッド。レビイとルーシイはその看病。ジユビアはビックスローを討つために街に出たらしい。単独行動はどうかとも思ったが、今回の場合は逆にフリードの術式を警戒して単独行動するのが最適解だと言えるので仕方がない。

「おかえり、あんたたち」

「ミラも久しぶりの戦闘で疲れたのだろうか。問題はないだろうが、ついてやってくれるか、エルフマン」

「もちろんだー！」

そうなつてくると、自由に動けるのは俺、エルザ、カナだけだ。

残る相手はラクサス、フリード、ビックスロー。

恐らく先に出たナツとガジルは滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーの鼻を使ってラクサスを探しているだろう。ビックスローの方もジユビアに任せておいて問題ない。ビックスローの実力がどれほどのモノか完全に知りえてる訳ではないが、ジユビアの方は間違いなく強いし、今回はグレイをやられたという強い動機もある。よっぽど変な術式に囚われない限り、負ける事はないだろう。

となれば、俺達が片付けなければならぬ相手はフリードだ。

が……

「なあ、エルザ……」

「待ってください。本気ですか、トウヤ？」

ある提案をする為にエルザに話しかけようとした所、俺の意図を読んだアルマに止められてしまう。

だが、これに関しては俺達2人でやる他ないだろうし、必ずやらなければならない事だ。引き下がるつもりはない。

そう態度で示してやれば1度溜息を吐いてからではあるがアルマ

も折れ、俺の代わりにエルザへ説明までしてくれた。

「エルザ、トウヤからの提案なのですが……2人で神鳴殿かみなりでんを破壊しないか、だそうです」

「ふむ……それならば私も考えていたことだ」

おお、気が合うな。

というか、現状これがやはり最優先なのだろう。

神鳴殿さえ壊してしまえば最悪の事態は免れられるし、ルール違反も然程気にしなくてよくなる。そうすればフリードも倒しやすくなるというものだ。

だが問題は……

「問題があるとすればラクサスに気づかれなにかどうかだな」

そう。

俺達が神鳴殿破壊に乗り出した事に気づかれた場合、すぐに妨害が入るだろうし、最悪そのまま問答無用で神鳴殿を発動されるかもしれない。そうなっては本末転倒だ。

「いいや、その問題は何とかなるかもしれないよ」

そう言つてカナが空中ディスプレイを指さした。

そこに書かれていたのは『残り9人』の文字。

ここにいる3人に既に街に出た3人、医務室にいるがまだ戦闘をしていない2人で計8人だ。あと1人いるという事は、新たな参戦者が現れたという事。

「ミストガン……」

俺の気づきを裏付けるように『ラクサス vs. ミストガン』という表示が空中に追加された。

「なるほどな……ならば問題あるまい。では、私は西の半分を任せようか」

じゃあ、俺は東の150個だな。

斬魔の力で斬れば生体リンク魔法ごと斬り捨てる事が出来る。150もやれば魔力が心もなくなるだろうが、俺には手っ取り早い魔力回復の方法もある。

むしろ心配なのは反撃をモロに受けるエルザの方だ。

「案ずるな。元々は1人で全て破壊しようと思っていたんだ。それを思えば半分など容易いさ」

いや、1人で全部は化け物だろ……

ホント、コイツが味方で良かったよなあ。

というか、ラクサスはよくもこの状態で「ギルド最強を決めよう」とか言い出したよな……

俺は兎も角、エルザが石になってて、ミラが——今回の件で復帰するかもしれないが——引退状態で、ミストガンは参加するかどうか掴めなかった。師匠に至っては居もしない。

いや、そもそも俺を排除して、自分に有利なステージをつくるという発想が「最強」を名乗る人間に相応しくないのではないだろうか。

「では、私はギルドの中で破棄してよさそうな刀剣類を探しておきます」

「じゃ、私はフリードだね!」

カナが凄く乗り気だ。

まあ、アイツは若い連中の中では1番の古参だ。ギルドへの想いの強さも一入ひとしおなのだろう。

さあ、作戦開始だ。

▼三人称視点

マグノリアの中心地、カルディア大聖堂。

そこでは『妖精の尻尾』屈指の実力者同士による激しい戦闘が行われていた。

「眠れ!!五重魔法陣御神楽!!」

ラクサスの頭上に複雑な紋章が描かれた魔法陣が五枚出現する。

これに対し、ラクサスは回避や迎撃ではなく、魔法の制御に集中しているミストガンへの反撃を選んだ。

魔法陣から光線が噴き出すと同時に、ミストガンの足元から雷撃が昇っていく。

押し付けられるラクサスと、打ち上げられるミストガンだったが、

次の攻撃に出るのが早かったのは後者の方だった。

空中で印を切ると、ラクサスの居る場所の床がぐにやりと歪んで拘束せんと迫る。しかし、この程度の攻撃で捉えられるラクサスではない。瞬時に雷と化して教会内部を飛び回り、未だ着地できていないミストガンに突撃する。雷速の一撃を避ける事が出来ず、ミストガンはこれに直撃した——ように見えた。

が、それは幻影。

いつの間にか本体と幻影を入れ替えていたのだ。

雷化を解除し、地面に降り立ったラクサスの前に、ぼんやりとミストガンの姿が現れていく。

「チツ……やるじゃねーか」

「お互いにまだ小手調べだろう」

返答しようとしていたラクサスの動きが少し止まり、思い出したと
いうように悪い笑みを浮かべた。

「ハッ……流石はアナザーとはいえジエ……」

溜めもたつぷりに、ミストガンの核心に触れるような発言をしかけた瞬間、大聖堂に入ってくる影が1つ。

「ラクサス!!」

ラクサスの匂いと、ミストガンとの戦闘音を頼りにここまで辿り着いたナツだ。

この一瞬、ミストガンの胸中には様々な思いが渦巻いた。

なぜラクサスが自分の正体を知っているのか。

どこまで知っているのか。

どこで知ったのか。

ナツに聞かれやしなかったか。

ナツがいるという事はエルザもいるのではないか。

自分にはエルザへの特別な感情がある訳ではないが、この顔を見られるのはマズい。

だからだろう。

ほんの数秒、ミストガンは死に体となってしまうていた。

並みの相手であれば見逃してしまう、そんなごく小さな隙。

しかし、ミストガンにとって不運だったのは、目の前の相手は決して並みの存在ではなかった事だろう。そして、ただ実力者だというだけでなく、格好の弱点を抱えている相手を慮るような性格をしていなかったという事もそうだった。

「スキあり!!」

ラクサスの左手から放たれた雷光はミストガンの顔面を——いや、正確にはそれを包んでいた覆面を焼いた。

そこから現れた見覚えのある顔にナツは驚愕が隠せなくなる。

「え?……おまえ」

蒼い髪。

整った顔。

顔面の右半分を覆う大きな入れ墨。

「ミストガンがジエラール!!」

楽園の塔にてエルザ達を苦しめ、ゼレフを復活させようとした大罪人、元最年少評議員にして、元聖十大魔道、ジエラール・フェルナンデスと同じ顔の男が立っていた。

これ以上顔を晒す訳にはいかず、またナツであれば無闇に吹聴する事もないだろうと考えたミストガンは即座に撤退を決定。その為の魔法を起動させた。

「私はおまえの知るジエラールではない。別人だ」

後は任せる、とだけ言い残してふわりと消えてしまうミストガン。

「オイ!!」

待て、と続ける間もないまま颯爽と去ってしまったミストガンに複雑な感情を抱きながらも、ナツは「今はラクサスに集中しなければ」と気持ちを切り替える。

「だー……いや、やこしい事は後回しだ!!勝負だ、ラクサス!!」

強敵の排除に成功したラクサスはニタリと凶悪な笑みを浮かべていた。

そのままの表情で、先ほどの相手より些か物足りないとは思いつつも、目の前の青年を挑発した。

「かかってこいよ、ザコが」

▼トウヤ視点

147、148、149……150！

これで準備完了だ。

斬撃を一齐に飛ばすなんて初めてだったから出来るかどうか心配だったのだが、やってみれば何とかなるものだな。

セルバルドの言った「魔法に寄り添い、魔法を理解し、魔法を手足と思う」事を念頭に置いてしつかり修行してきた甲斐があったというものだ。

途中で倒れていたウォーレンを拾った事で、離れた位置にいるエルザとも連携はバツチリになった。

一齐に破壊すれば、例え生体リンク魔法の反撃を受けて動けなくなっても既に破壊済みだから関係ない、というエルザのヤベー作戦に乗った訳だ。まあ理には適っているが、物凄いダメージを一気に受け止めてやるのかという漢気パネエよエルザ。エルフマンより漢だ。

俺の方は別に一齐に破壊する必要はないのだが、ラグがあればあるだけフリード達に気づかれる可能性が高まるので、やはり一気にやる方がいいだろうと考えた訳である。

当初は時計を見て行うという作戦だったのだが、エルザが道中でテレパシー念話魔法の使えるウォーレンを見つけたので、こうしてリアルタイムで作戦が進められるようになった。戦闘では大した事ないが、非常に便利な魔法を使う男である。

『エルザ……準備完了だ』

『こちらも問題ない。いくぞ』

——セーのっ!!

「斬竜の矢鱗!!」

東の空に銀色の光が打ちあがっていく。

西の空を見れば、こちらの空にも銀色に輝く剣が数多舞っている。

すぐに空中の魔水晶ラクリマが全て砕け、パラパラと欠片が散ってきた。煌

めく粒は雪のようにも花火のようにも見えて幻想的だ。

しかも、西の方では滝のような雷光が一点に向かって降り注いでいる。何も知らない街の人からすれば祭りの余興か何かかと目を惹かれる事だろう。

アレが何かを知っている俺からすればぞつとする光景なのだが……

ホント大丈夫かなあ、エルザ。

「…………ふう」

かく言う俺も少し疲れた。

使ったことのない技150発分に斬魔の力を乗せて狙撃などすれば流石に魔力がすつからかんだ。

あと、そもそもミラに殴られた頭の傷も結構重症だった。

地面に仰向けになって倒れ込み、アルマが来るのを待つしかない。とはいえ、早い段階から駆けずり回って剣を集めてくれていたので、間もなく来るだろう。

ザッ、ザッ……

ほら、噂をすれば足音が聞こえて――

違う!!

この匂いはアルマのものじゃない!

このタイミングはマズいなんてもんじゃないぞ!?

魔力なしで勝てるような相手じゃない……………!

「どうせなら十全な状態のおまえ相手にどこまでやれるか試してみたかったんだがな……………これもラクサスのためだ」

歩み寄ってきたフリード。

その手には妖精の紋章が象られた鍔のついたレイピアを握っている。

――は、はは。斬竜の最期が剣で刺殺とか笑えないって……………!

フリードは着々と歩を進め、ついに俺のすぐ傍まで至る。
グツとレイピアが振り上げられ、俺の心臓に突き刺さろうと迫り――

▼カナ視点

「トウヤはやらせないよー!」

トウヤしか目に入っていない様子のフリードに向けて、炎を吹き出すカードを投げつけた。すぐに火柱が立つ。

フリードがそれに包まれている間にトウヤを横抱きにして回収しておく。

「くっ……読まれていたか」

当然だ。

術式魔法は展開に時間がかかるという弱点を挙げられがちだけど、逆に事前準備さえできれば最強の部類に入る魔法と言える。今の状況でコイツに勝とうと思えば、先ほどのミラのような圧倒的な力で叩き潰す以外には術式自体を破壊するしかない。それをするにはレビィのような言語系魔法に詳しい人物がフリードの術式のルールを読み取るか、トウヤのような反則気味の能力で破壊する必要がある。そういう意味ではトウヤはフリードにとっての1番の天敵と言えるだろう。

ってまあ、肉弾戦メインを除けば、殆どの魔導士にとっての天敵ではあるんだけどさ。

術式との相性の問題の他にも、ラクサスが一目置いているという事情もある。

フリードは雷神衆の中でも1番と言って良いほどラクサスに心酔していて、そのラクサスが警戒すべき相手だと認めているのだ。注視しないはずがない。

だが、フリードでは万全の状態のトウヤには逆立ちしても勝てない。

恐らく、トウヤが帰ってくるのは雷神衆にとって本当に想定外だった。

たのだろう。神鳴殿も元々の計画にあつたとは思えない。少なくともフリードは、無関係の住人を巻き込む事を良しとするような性格ではないと言える。

だが、この男は咄嗟にそれを利用し、おそらくトウヤなら神鳴殿の破壊に動き、その後は無防備になると踏んだのだ。

本当に恐ろしい男だが……私は読み切ったよ。

問題は、私でコイツに勝てるのかって事だけ……

「だが、動けないトウヤとお前ではオレには勝てないぞ」
姿勢を低くしたフリードが斬り込んでくる。

——速い！

けど、トウヤ程じゃない！

頭を狙ってレイピアが飛んでくるが、首を傾けて避ける。

反撃に懐から取り出したカードを3枚投擲しながら、自分は後ずさっていく。

フリードはそのカードを器用に斬り捨てるが、生憎それはただのカードではないんだよ。

「祈り子の噴水！」

真つ二つになった3枚のカードから水が噴き出す。

頭から激流を被ったフリードは体の自由を失い、たたらを踏んだ。

ここが狙い目！

カードマジック
魔法の札！

へブン、リバースデス、マウンテン！

「招雷!!」

3枚のカードを取り出し、相手に向けて振るう。

すると、目の前に魔法陣が浮かび上がり、緑色の雷撃の槍が幾筋にも分かれてフリードに飛んでいった。

直撃は避けられたが、地面に溜まった水を伝って電撃が流れていく。

「ぐおおおお!!?」

私、闘えてる！

少しずつではあるが、着実にダメージを与えられているのが分か

る。

これまでのトウヤとの修行は無駄じゃなかったんだ。

それが凄く嬉しい。

このまま畳みかけてやるよ！

痺れているフリードの元まで駆け寄り、トドメを刺すためにカードを取り出す。

近接レンジでしか使えない代わりに威力の高いカードを……

そう調子良く考えていた私だったが、そこに寝そべったままのトウヤから怒号が飛んできた。

「カナ！ダメだ!!」

どういう事だ、とブレーキを掛けた時には既に相手の術中に嵌っていたという事に気がついた。

私の前に不可視の壁が立ち上がっていたのだ。

「しまった、術式……!?!」

ここに誘導されていたのか！

与えられたルールは隠されていて読めない。

しかし、フリードも同時に入っている事から問答無用なルールでない事は確実だ。

今の所なにも変化がない事から察するに、何か条件を満たしたら発動するタイプだろう。まずはフリードの様子を観察して……

「フン、ギルドの古株というからどの程度かと思ったが、拍子抜けだな。これではS級試験にも4度落ちる訳だ……」

なんだ……もう勝ち誇ったつもりか？

術式の中に入った途端、態度を変えてこちらに語り掛けてくるフリード。

意図を読めないままだが、単に話すだけなら問題はないようだ。なら乗ってやろうじゃないか。

「何が言いたいんだい？」

「やはり、このギルドは改革が必要だと思ってな。もっと強く、誇り高い、そんなギルドにならねばならない。ラクサスがマスターになれば、おまえ程度の魔導士も、ファントムから寝返った連中も、敵に攫

われるような女も全員クビにしてくれるだろう」

朗々と自分の考えをひけらかすフリード。

しかし、私にとってその演説は不快なだけのものだった。

フアントムに攫われるって、ジュービアやルーシイの事を言ってるのか……？

強さは私だって大事だと思うよ？

でも、その為と同じ紋章を刻む家族をそんな風に言えるようにならなきゃいけないってなら、私は弱くていい！

体の中の血液が熱されていくのが分かる。

アンタ達なんか私に私の仲間の事を言われたくない！

そう思い、感情の高ぶりに任せてカードを投げようとしたのだが――

「アンタ!!」

と、叫んだ瞬間に首に強烈な痛みが走った。

息が苦しくなって、吐き気すらする。

苦し――

その隙を見逃さなかったフリードが私の体にレイピアを突き刺しながら、何かを書き込んでいった。

「闇の文字 エクリチュール // 痛み」

次の瞬間には、首だけではなく全身が激痛に包まれ始める。

あらゆる骨が砕かれ、頭髮が引き抜かれ、爪がはがされ、内臓が裏返るような、そんな痛み。

「ああああああああ!!!」^{!?!?}

耐えられず叫び声をあげると、今度は首がギリギリとねじ切られそうな苦痛が――

つまり、この空間のルールは『大声を出した者の首を絞める』とか、そういう事なのだろう。

私はフリードの誘導に乗せられてこの空間に入っただけでなく、まんまと挑発されてルールも踏まされた訳だ。

全く……何が「闘えてる」だよ。

ダメージは与えられていても致命傷には程遠く、全ては手のひらの

上。

この程度で舞い上がって、ホント情けない。

こんなヤツ、やっぱりあの人には釣り合わないよね……

酸素が足りなくなつて、意識が薄れていく。

ごめんね、トウヤ……情けない弟子で。

そう思つて彼の方に目を向ければ、必死にこちらににじり寄つてきているという事に気づく。

魔力も体力も限界だろうに、まだ諦めてない……

いや、違う、それだけじゃない。

あの目は「私に諦めて欲しくない」と訴えてきている。

まだ、私を信じてくれるのかい……？

全く……

本当に私には過ぎた、いい師匠おしこだよ、アンタはさ。

でも、その期待には応えないと、弟子おんなとしてダメダメで終わつちま

うよね……！

カードマジック
魔法の札。

スラツシユ、デステイニー、ラバーズ。

「……愛の矢尻」

苦し紛れに放つた魔法はフリードには簡単に避けられてしまう。

紅い刃はそのまま、フリードの向こう側に飛んでいって——

それを見届けた私は、とうとう体を起こしている事も出来なくなつて、突つ伏した。

▼トウヤ視点

「なんだ？最後の悪あがきか……？」

違うよ、フリード。

悪あがきなんかじゃない。

バリ、ボリ、ガキン。

アイツは最後に精一杯の仕事をしてくれた。
最高のパスだ。

こんなに美味しい魔法は久しぶりに食べたような気がする。
カナの気持ちもこれでもかと詰まっていたのだ。

……ごちそうさまでした。
さて、と。

「取り消せ」

さっきの言葉自体はカナに大声を上げさせるために言ったウソ
だったとしても、ギルドを強くしたいという発想はラクサスの真意か
らそれほど離れた話ではないんだろう。
なるほどな。

こうして闘争を起こす事で、ギルドの中で戦闘能力が低いメンバー
を炙り出し、切り捨て、その上でマスターの座まで奪っちまおうって
か。

そりや理に適ってるかもしれないねーな。

「な!? どうして動ける……まさか先ほどの魔法は!」

だが、それで手に入る強さは「ギルドの強さ」じゃねーんだ。

こいつらはそれが分かってない。

いいや、もしかしたらフリードは気づいてて、それでも言い出せず
にいるのかもしれないが。

「取り消せよ……カナも、ジュビアも、ガジルも、ルーシイも、誰一人
いない奴なんていない」

ルーシイの明るさはギルドを照らしてくれる。

ガジルだって不器用なだけで、少しずつ歩み寄ってきてくれてい
る。

ジュビアは 그레이 が絡むと暴走しちまうけど、ギルドにいる時はホ
ントに楽しそうに笑うんだ。

確かにさっきのカナの戦闘は説教すべき所も多かったけど、仲間の
事を想って怒れるヤツのどこがいない奴なんだよ。

「ラクサスはあのような人材を求めていない……我々で誇り高いギルドを取り戻すのだ。その為に掃除が必要なのがどうして分かん」

わっかんねえよ……

弱いから仲間を作るんだろうが。

「俺はさ、喧嘩は強い……けど、マックスみたいに喋れない。ルーシイみたいに物語を書けない。ビクターみたいに踊れない。カナみたいに呑めない。ジュビアみたいに想えない。マカオみたいに子を愛せない。ミラみたいに待てない。エルザみたいに鼓舞できない。リーダスみたいに描けない」

強さって色々だよ。

俺にだって弱い所なんて沢山ある。

なんなら、戦闘力的にはギルドで一番弱いであろうアルマが居なきやまともに生活する事すらできない。

色んな強さがあって、それを1人じゃ満たせないから人は集まるんだ。

ただ喧嘩が強いだけだなんて、なんの意味がある。

誰も想っていない力なんて虚しいだけだろうが。

「喧嘩が強い事ってそんなに大事か？お前、ただ喧嘩が強いってだけでラクサスの傍にいるのか？」

「それ、は……」

「お前より強い仲間がラクサスに出来たら、お前は捨てられるんだぞ？」

そこまで言うのと、一瞬フリードはハツとした顔になり、すぐに怒りの形相に変化させた。

「違うーそんな訳がない!!」

レイピアを構えたフリードがこちらに突っ込んでくる。

俺は難なく初撃を躲し、吹き飛ばさないように力を絞りながら顔面に上段蹴りをぶつけた。

カハツと息を吐きながらも、追撃の手を緩めず我武者羅に剣を振るってくる。

余裕なフリをしていただけで、カナからの攻撃はそれなりに効いて

いたようで、かなり動きが鈍い。

そもそも魔力のある状態ならフリードの剣を躲す必要はないのだが、こうまで見え見えだと受け止める意味もない。

結局、フリードの猛攻は何一つ俺に当たる事はなかった。

「お前……弱いな。ラクサスもお前みたいない奴いらんじやないか？」

そう問いかけながらフリードを殴り飛ばす。

その先でフリードは必死の顔で自分自身に何かを書き込んでいる。作業が終わると、フリードの姿が骸骨のような顔に一对の角が生えた筋骨隆々の怪物へと変化していた。体から放つ魔力も先ほどとは比べられない程強くなっている。

きつと、アレがフリードの奥の手なのだろう。

「違う！違う！オレはラクサスだから着いて行くんだ！」

何事か喚く怪物が俺の懐にまで突っ込んでくる。

「ラクサスだって、オレだから傍にいるのを許して……！」

鋭い爪の生えた怪腕が俺に迫るが……

悪いが当たる気がしない。

斬魔ノ太刀 斬の型・天爪――

ラクサスの力じゃなくて、ラクサス自身を仲間だと思う。

きつと、ラクサスだってフリードの力だけを見ている訳じゃない、か。

分かってんじやねえかよ……

「それがギルドだろうが!!!」

裂帛の気合と共に放たれた俺の渾身の右ストレートは、突進してきた怪物へとカウンター気味に深々と突き刺さり、元来た方へ押し返した。

その際に斬魔の力が作用し、フリードの変身が解けてしまう。

「俺だってそうだ……カナは強い。けど、強いから信じてるんじゃない……カナだから信じてるんだ」

そこには、俺達が闘っている間に回復していたカナが立っていた。吹き飛んでくるフリードに対し、3枚のカードを翳す。

「魔法の札！カードマジックファイア、リバースサン、ジャステイス……食らいな、落陽!!」

フリードの頭上に魔法陣が浮かび上がり、巨大な火球が彼を押しつぶさんと墜ちてくる。

満身創痕のフリードにそれを避ける術はなく、この一撃が終戦の合図となったのだった。

△・△ △ △ △ △

「ホントはこんな事しても意味ないって分かってたんだろ？」

俺とカナとフリード。

3人で寝ころびながら話をする。

と言っても、カナは疲れ果ててもう1度眠ってしまったようだが。

俺の問いかけに対し、たつぷりと考え込んだ後、徐に口を開くフリード。

「アルマと話した時……あの子は簡単にオレの話を信じてくれた。それは大変ですねって。フリードの頼み事なんて珍しいですから、是非とも引き受けさせてくださいって……本当に嬉しそうに言ったんだ」
確かに、アルマなら普段ギルドに寄り付かない奴からの頼み事なんて嬉しくてたまらなかっただろう。目に浮かぶようだ。

「その時、オレは何も見えていないのではないか、と思った……オレの仲間はラクサス1人だけじゃなかったんだと、気付いたんだ」

「……カナがお前を酒に誘ってるの、見た事ある」

「ああ、覚えている……リーダーダスに絵のモデルを頼まれた事もある。ナツやエルザと立ち会った事もある。マスターに……ラクサスを頼むと言われた事もある」

フリードの声が震えだし、熱を帯びていく。

そう言われた時の嬉しさを思い出し、それを忘れていた事に悲しみを抱き、約束を守れなかった事を悔しく思う。

それが俺にも伝わってくる。

「こんな事……したくなかつ……たんだ……」

ひぐつ、うぐつと嗚咽交じりに漏らされたのは、やっと聞くことができた仲間の本音だった。

「だけど、オレはラクサスを、止められ……なかつた……」
うん。

「オレは、弱いつ」

そうだな。

きつと、お前は弱かつた。

「でも……きつと、強さを勘違い、して……いる、ラクサスも……弱かつたん、だ」

でも、そこまで分かっているなら、もうただ弱いだけの奴じゃないよ、お前は。

「頼む、トウヤ……ラクサスを、止めて……くれないか？オレじゃ、できな……かつた」

折よくアルマがありつたけの刀剣類を抱えて飛んできた。

魔力補給を済ませた後は、アルマにカナとフリードを頼んで俺は聞かん坊に説教といきますかね。

「勿論、引き受ける……俺達、仲間だろ？」

滂沱と涙を流すフリードは、相変わらず震えた声で「ありがとう」とだけ呟いた。

22話「家族」

▼トウヤ視点

街の中心部まで歩いてきて分かったが、大聖堂の辺りから轟音が響いている。

おそらくそこでラクサスが闘っているのだろう。

先ほど別れる直前に、フリードからジュビアがビックスローを下したという報告を受けた事だし、後顧の憂いはない。

今ラクサスが誰と闘っているのかは知らないが、俺も乱入してやる
としよう。

フリードと約束もした事だしな。

そんな風に考えながらカルディア大聖堂に向かって歩いていると、
嗅ぎ覚えのある匂いが漂ってきている事に気づいた。

「ここまでくれば……………トウヤ!？」

かなり焦った様子のミストガンがぼんやりと目の前に現れたのだが、ラクサスはどうしたとか、なぜ焦っているのかとか、そんな事よりも気になる事があつて思考が停止してしまった。

普段顔を覆い隠している布が剥がれて、ジェラールにそっくりな顔が露わになっていたのだ。

ジェラールがなぜここに……………？

というか、ミストガンの中身だった？

いや、ミストガンがジェラールであるはずがない。

それならファントムの時に一緒に闘った意味が分からない。それに、意味を言い出すならそもそも『妖精の尻尾』に居る必要性もない上に、エルザと接触していないのもよく分からない。

エルザ自身がミストガンと話した事はないと言っているのを聞いた事があるし、その様子はウソをついているようにも見えなかった。

ならば、たまたま顔が似ているか、本当にジークレインのような生き別れの兄弟がいたのか。それでジェラールがお尋ね者になって顔

を隠して……いや、それも時期的におかしい。

まあでも、おそらくコイツはあのジェラールではない。

……なら良いか。

「ミストガン……ラクサスはどうなった？」

そう言うと、ミストガンは心底驚いたという顔をする。

「お前は私を問い詰めようとは思わないのか……？」

いやいや、今すぐ聞かせてくれるなら聞きたいけども。

隠してきたからにはそれ相応の理由があるのだろう。

というか、さつさと隠れないとマズいと思うし。

エルザに見られたらまあまあ厄介な事になるんじゃないか？

「ジェラールではないんだろ？……なら、いい」

「あ、ああ……確かに、私はジェラールではないが……」

まあ、でもやっぱ有名人と顔が同じで困ってる、とかなら力になれる方法は考えたいしな。後で事情は聞かせて欲しい。

「だが、もし何か困ってるなら、後で話は聞かせて欲しい」

しかし、ミストガンはその要求には難色を示した。

申し訳なさそうな顔で、「それはできない」と言ってくるのだが、その表情ではこちらもお節介を焼きたくなくなるというもの。

「気が変わったらいつでも言え」

何となく、ミストガンという時の空気感が好きだし、他人とは思えない感じがするんだよなあ。

だから、ギルドの皆みたいに家族とか、仲間とやってだけじゃなくて、なんて言うか……

そう――

「俺達、友達だろ？」

そんな感じがする。

しかし、そんな俺の言葉を聞いたミストガンは急に笑い始めてしまう。

聞いたことのないような大声で、俺は少し驚いた。

しかも、ただ笑っているだけじゃない。

両の瞳に煌めく粒が見えたのである。

何か、ミストガンの琴線に触れる発言をしてしまったのだろう。

一瞬何かとんでもない事を言ってしまったのかとドキツとしたが、悪い反応ではなさそうなので良しとしておこう。

「気が変わった……この祭りの後、私と少し話をして欲しい。時間を作っておいてくれるか？」

え？ いいの？

よく分からないが、聞かせてくれるというなら、少しでも力になれるように頑張ろう。

「勿論」

「感謝する……では私は一旦姿を隠すでしょう」

俺の横を通り過ぎ魔法で消えてしまうその直前、こちらを振り返ったミストガンが言う。

「ラクサスの事、頼んだぞ」

色んなヤツに頼まれちまつてるなあ、まったく。

だが、まあそれに対しての答えも一緒だよ。

「任せとけ」

▼三人称視点

ラクサスとナツの闘いは終始ラクサスが押す形で進められた。

ラクサスは、ナツの言葉に心を揺り動かされはするものの、もはや事ここに至っては退く事などできはしない。

表情的にはどこか切迫しているラクサスが、戦力的にはナツを圧倒していくという奇妙な状況へと陥っていた。

ナツに遅れて駆けつけたガジルが参戦し、2対1となってからもその戦況は大きく変わりはない。

即席とは思えない2人の連携により攻撃こそ当たるようになってきたが、攻撃力、防御力、スピード全てにおいて2人を凌駕するラクサスを前に致命傷を与えるには至らず、むしろたつた数発の攻撃を食らっただけの2人の方が追いつめられていたのだ。

「いくらコイツが強エからって……竜迎撃用の魔法をこれだけ食らって……ありえねえ!!」

異常な頑丈さを誇るラクサスに慄くガジル。

この硬さはむしろ自分や隣の火竜サラマンダーのような――

「そいつは簡単なことだ……ジジイがうるさいから隠してきたが、特別に見せてやる」

コオオオと息を吸い始めるラクサス。

その姿に竜を幻視し、ラクサスの正体を悟ったナツが叫ぶ。

「お前も滅竜魔導士だったのか!!」ドラゴンスレイヤー

その問いへの返答はあらゆる物を薙ぎ払う雷光によって為された。

「雷竜の咆哮!!」

この一撃を受けてはひとたまりもない。

ナツもガジルも倒れ伏し、辛うじて意識を保っているだけの状態となつてしまった。

しかし、命を奪うつもりで放った魔法がその結果だった事が気に入らなかつたらしいラクサスは更なる追撃を仕掛ける。

それはもはや目の前の2人だけに向けたものではなかつた。

気に入らないもの全てを破壊し尽くしてやると、両手の平に極大の魔力を集めていく……

「おまえらも、エルザも、ミストガンも、トウヤも、ジジイもギルドのやつらも、マグノリアの住民も全て……全て消え去れエツ!!」

以前同じ魔法が放たれた時には気絶していて覚えていなかったガジルは猛り狂う魔力を前に体をガクガクと震わせ、近くで見っていたナツは「よせ……!」と満身創痍で叫んだ。

その魔法の名は妖精フェアリーの法律ローウ。

術者が敵とみなしたものを全てを標的とした超絶審判魔法だ。

「オレが一から築き上げる！誰にも負けない、皆が恐れ戦く最強のギルドをなア!!」

だから一度滅んでしまえ、そんな言葉を言おうとしたラクサスを遮るように、4人目の竜の声が響いた。

「斬魔ノ太刀 斬の型・天爪」

進退窮まったこの状況下、期待できる中での最高の援軍に、ナツやガジルは喜色に満ちた声で「トウヤ!」「斬竜!」と名を呼ぶ。

逆にラクサスは苛立ちながら「何しにきやがった!」と叫んだ。

何をしにきたか、など聞くまでもない事なのだが。

「決まってるだろ、お前を止めに来た……斬竜の刀牙!!」

振るわれたトウヤの右手から銀色の剣閃が飛んでいく。

エーテリオンすら削いだトウヤの力なら妖精の法律と言えども耐えられまい、そうナツやガジル、ラクサスすらも思った。

——しかし、その斬撃が魔力球にぶつかっても、真つ二つに斬れる事はなかった。

「斬れ、ない……?」

信じられないという顔をするトウヤ、ナツ、ガジル。

対照的に勝ち誇った笑みを浮かべたラクサス。

「くく。くは……くははははは!!はーはっはっはっは!!!」

辺りに高笑いが響く。

——ただしトウヤの笑い声だが。

何が起きているのだと、ナツとガジルは怪訝そうな顔を更に深め、今度はラクサスまでも不思議そうな顔をした。

「気でも触れたか?……まあいい、これで完成だ」

手のひらを合わせ、合掌を作ったラクサスが終焉の合図を口に示した。

「妖精の法律、発動!!」

ラクサスの手許から目が潰れてしまいそうなほどの光があふれる。その光はナツを包み、ガジルを包み、未だ笑い続けるトウヤを包んだ。

しかし、それだけでは終わらない。

街中に倒れたままのギルドの面々も、ギルドで皆の帰りを待っていた連中も、ベッドに伏せるマスターも、街の全てまでも呑み込んだ。審判の光が止んだ後、マグノリアに残ったのは――

▼トウヤ視点

マグノリアに残ったのは普段通りの人の営みだろう。

住民達どころか、『妖精の尻尾』の誰一人として傷ついていない事は間違いない。

ラクサスの目の前にいる俺達ですら発動前となんら変わらないのだから。

「そんな馬鹿な……なぜ誰もやられてねえ!!」

そんなに不思議な事か？

いやホント、可愛らしい奴だな、コイツ。

「妖精の法律は、術者が敵とみなした者を殲滅する」

狼狽えているラクサスに真相を伝えてやるとしようか。

「その通りだ!!だからお前たちは倒れてなきやおかしいだろうが!!」

俺の言葉の真意にナツやガジルすら気づいたようで「へへっ」と笑っている。

「おかしくねえよ……マグノリアにはお前の敵は1人もいなかったっただけなんだから」

「……………は？」

目が点になって絶句するラクサス。
単純な話だ。

審判の規準を作る魔法自体は欺けなかったというだけの事。
どれだけ突っ張って、斜め上の理想を掲げていようと、心根では俺達全員を仲間だつて認めていたのだ。

俺が斬れなかったのは、斬魔の力を「俺に対して敵意を向けている魔法だけを斬る」よう設定していたからである。

「お前、凝り固まった理想に目を向けすぎてただけなんじゃねえか……さては妖精の尻尾大好きだな、てめー」

バチバチとラクサスの体から雷が漏れ出してくる。
流石におちよくりすぎたかな……？

「違う！違う!!オレの邪魔をする奴は全員敵だ！敵なんだよ!!」

つたく、世話が焼ける奴だなコイツは。

「違わねえ……お前は誰にも負けない、皆が恐れる最強のギルドを作りたいんだろ？」

それはなぜか。

その根源に辿り着けば分かる事だ。

「それって、お前の大好きな家ギルドが馬鹿にされるのが許せなかったからだろう？」

ガツという音が轟き、雷となったラクサスが飛来する。

俺の前で脚を踏ん張り、力いっぱい殴りつけてきた。

「うるせえ!!」

技術も何もないガキの喧嘩みたいな一発。

いいじゃねえか、乗ってやるよ。

元々今回の喧嘩は子どももの癩癩だったって事も分かった事だしな。

「お前がやりたかったのは！最強のギルドを作る事じゃねえ！妖精の尻尾を最強にする事だ！」

言葉を吐き出す度にラクサスの顔面に拳を突き刺す。

相手も負けじと魂を削るような叫び声をあげて殴りかかってくる。

「そうだ！だからこんな事をした！ギルドを強くする為!!」

「やり方が違うだろうが！」

「違わねえ!!」

「なら言ってみろ!!妖精の尻尾ってなんだ!!」

「ギルドの名だ!!」

「違う!!そこに居る人達だ!!お前はそれを忘れちまつてるだけだ!!」

俺に殴られ、一步後ずさった所でラクサスの動きが止まる。

お互いの顔は痣だらけ、腫れだらけです。パンパンである。

肩で息をして、脚も震えている。

控えめに言って満身創痍。

小休止的に息を整えながら、伝えておかなければならない事を言う。

「ハア……ハア……今、じいちゃんはベッドで、倒れてる……何かの病気かもしれない……こんな事してる場合じゃ、ねえって……ハア……分かるだろう？」

「オレには関係ねえ……ハア……ハア……関係ないんだ!!」

んな訳あるか……!

俺達の親だろうが!!

「オレはオレだ!!ジジイの孫じゃねえ!!ラクサスだあああああ
!!!」

短い休憩も終わり。

しかし、今度の一発でこの鬨いの方もお終いになりそうだ。

止まっていた体に無理やり火を入れ、もう一度コチラに殴りかかってくるラクサス。

だが、その動きは今までで一番大ぶりだ。

俺はそれを避けながら更に一步奥へと踏み込んで、渾身の右スト

レートをぶち込んでやる。

「つたりめーだ!!俺の仲間、『マカロフの孫』なんて名前のヤツはいねえ!!!」

その一撃でラクサスの体は限界を迎え、仰向けに倒れていく。

俺は立ったまま、ラクサスの方へ指を向けた。

「俺が、言いたかったのは…ハア…ハア……さっさと謝って、兄弟喧嘩は終わりにして…ハア……ガキみんで、オヤジの見舞いに行くぞって事だ」

——俺達の家族はギルドの皆なんだからさ。

「許されないのが怖いなら、俺も一緒に謝ってやる……それに、皆はそんなちっちゃな奴らじゃねえよ……なあ?」

俺はラクサスに向けていた指を後ろの方、教会の入り口の方に向けた。

そこにいたのはグレイにエルザ、ストラウス姉弟、カナ、ルーシィ、レヴィ、ジュビア……他にも沢山のギルドメンバー。この戦いに参加したほぼ全員が集まっていた。端の方には雷神衆も立っている。

ラクサスの妖精の法律が不発に終わると分かった瞬間に、ウォーレンに連絡を取り動けるメンバー全員を大聖堂に集めるように頼んでいたのだ。

俺の言葉に反応したラクサスが首だけを上げて、その眼を丸くした。

その瞳に映っているのはきつと、やれやれという表情で笑っている家族の姿だろう。

「ハア……参った、俺の負けだ」

ラクサスは頭を地面にゴンと下ろしながら、少しだけ震えた鼻声で

そう言った。

△・△ △ △ △

夜空に光の花が咲き誇る。

その下では『妖精の尻尾』の魔導士達が各々の魔法を使つて、思いの帕フォーマンスを行い、聴衆を沸かせていた。

ラクサスと殴り合つてから2日経つた晩。

本来なら祭りは2日しかなく、ファンタジアも最終日の夜に行う予定だったのだが、多くの者が傷だらけでそれどころではなかった。

ファンタジアそのものが中止になるかとも思われたが、街の皆の熱烈な要望があつた他、本人達も全員が開催を希望し、特例として祭りを一日延長。本来あり得ない祭り3日目でのパレード決行と相成つた。

とはいえ、参加していない者も数名存在する。

それは例えば、ラクサスとの戦いでボロボロになつてしまつたガジルや俺——ちなみにナツもボロボロだったが、みんなの静止を振り切つて参加している——だったり、目立つ事は避けたいミストガンだったり……

そして、今俺の隣で神妙な顔をしてパレードを見守つているラクサスだったりする。

マスターは俺たちが闘っている間にギルドまで来てくれていたポーリュシカさんのおかげで一先ずは容態が安定し、祭り2日目には目を覚ました。

その際に俺や雷神衆は病室に駆け込み頭を下げたのだが、流石にその場にラクサスがいない状態では意味がなく一喝されてお終い。

勿論、雷神衆は石にされた女性陣にもきつちり謝罪し、そちらは何とか受け取つてもらえた。こちららもラクサスに関しては、その場になかつたので保留となつたが。

日付が変わつて3日目の昼、やつとこさギルドに顔を出したと思つた当のラクサスは、本当に軽く頭を下げ「悪かつた」と呟いただけだつ

たので、雷神衆の苦勞を想って少し涙が出たのは内緒だ。

しかし、そんな小さな謝罪であっても、ラクサスがしたというだけで効果は絶大だったようで、エルザやカナは「あのラクサスが謝った……!？」と驚愕して、そのまま水に流してくれたようだ。

しかし、マスター的にはそうはいかせられなかったようで、じいちゃんが寝ていた病室で2人きり、何やら話してから出てきたラクサスには妖精の紋章が付いていなかった。

当然、雷神衆は「ラクサスが破門なら自分達も」と着いて行こうとしたものだが、きつとラクサスもこのままではいけないと思ったのだろう、「ジジイが決めた事だ」と言って断固として同道を拒否していた。

1人で行く事を決意したラクサスは、祭りの中でひっそりとマグノリアを去る事にしたのだった。

このような経緯があつて、2人、一時の別れの前にファンタジアをバックにして話すに至ったのである。

「……これからどうするんだ？」

パレードはどんどん盛り上がりを増していく。

ルーシィ、ビスカ、レビィが祭り用の可愛い衣装に身を包んで舞い、エルフマンは巨大な怪物に化けて雄叫びを上げる。ミラはそれよりも遥かに大きな蛇とトカゲの間の子あひのような、どこか愛嬌のある生物に変身して観客を沸かせている。

お次はグレイとジユビアだ。氷で出来た城を載せた山車の上で、王子と姫のような恰好をしていた。お似合いの2人が腕を振るうと、城の周りの空間に激流が渦巻き、その上に氷で出来たFAIRY TAILの文字が浮かび上がる。

エルザは様々な衣装を換装しながら剣舞を披露していた。正に妖精といった美しさだ。

「気楽に旅でもするさ……そこで色々と見てこようと思う」
そりやいい。

外では沢山の人に出会う事だろう。

その中には本当に強い人も、またその逆もいる。

そうした経験の中で、ラクサスにとって本当に大事なもの、本当に必要な強さを見つめ直す事が出来るだろう。

次会う時はグンと強くなっているかもしれないな。

「……帰ってきたら妖精フェアリーテイルの尻尾最強の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーを決めよう」

俺の目は祭りに釘付けになっていて、ラクサスの表情を伺う事はできないが、何となく「帰ってきたら」という言葉にピクリと体を動かした気がする。

「オレは体にラクリマを埋め込んだだけの紛い物だがな……お前も確か持ってたら」

ラクリマ……？

ああ、そういえばそんな感じの緑色の宝石を闇ギルドから回収してたな。

一時期はお守りにしてたが、案外邪魔くさくて、家の金庫にいれっぱなしにしたまま忘れていた。

「関係ない。同じ魔法を使う仲間だ」

「ハッ、言ってる……」

と、そこに山車に乗ってファンシーな格好で踊るじいちゃんがやってきた。

その楽し気な様子を見て満足したのか、すぐに踵を返して、俺に「じゃあな」と言って歩き出すラクサス。

——おっと、まだメインイベントが終わってないぞ？

「ラクサス」

俺は振り返らないままにラクサスに声を掛け、パレードの方を指さす。

何事かともう一度反転したラクサスの視線がファンタジアに向かったのを気配で察知してから、俺はパレードの方に手の甲を向けるように半周捻りながら、手を天に掲げた。

それに同調するようにギルドの全員が手を挙げていく。

このポーズはじいちゃんにパレード中に必ずするようにと頼まれたものだ。

姿は見えなくとも、お前を見ているぞという意味のメッセージらし

い。

誰に向けたものかは言われなかったが、ギルドの誰もそれを聞こうとはしなかった。

俺だって、誰に向けたメッセージかは聞かされてない。

だが、きつとこの位置取りならメッセージを受け取る誰かさんに、俺のうなじの紋章をしっかりと見せられた事だろうと思う。

「じーじ……ありがとな」

そんな涙声は、祭りの喧騒にかき消され、俺の耳には届かなかった。

ニルヴァーナ編

23話「連合軍結成」

▼トウヤ視点

ラクサスがギルドから抜けた後、ナツが「どうしてやめさせた」とマスターにじいちゃんぶー言ったり、逆にじいちゃんの方が責任を取ってマスターの座を降りるとか言い出したり、「これ以上ラクサスの罪を増やさないでください」と、ロン毛を坊主にしてまで反省の意を示したフリードがそれを諫めたりと、しばらくは騒がしかった。

だが、一週間もすればそれらも落ち着き、雷神衆の3人も他の連中と大分打ち解けてきたように思う。元々軽い性格のビックスローや、ナルシスト気味のエバーグリーンは兎も角、堅物のフリードまでもが誰かと談笑しているのを見ると、あの戦いも無意味なものではなかったのではないかと少し嬉しくなる。あとはさっさとラクサスが戻ってきてくれれば何もいう事はないのだが、頑固者の祖父が再加入を認めるまでどれだけかかる事やら、といった感じだ。

ちなみに、ミス・フェアリーテイルコンテストはエルザが優勝したらしい。エバーグリーンの乱入によって滅茶苦茶になってしまったコンテストではあったが、祭り2日目の間にマックスたちが何とか票を集めてきたそうだ。

あの時は石化の解除やラクサスの事が気ばかりで全然意識していなかったが、確かにゴスロリ姿のエルザは破壊力抜群だったもんなあ……

その後に続く2位がルーシィ、3位がジュビアだった。2人とも新人メンバーながらの大健闘で驚かされたものだ。しかし、優勝賞金は1位にしか出ないらしく、それを家賃のアテにしていたルーシィはいつも通り金が無いと嘆いていた。……あの子にハートファイア財閥のお嬢様だった時代があるというのがたまに信じられなくなる。

しかし、そうなると優勝候補だったミラに何があったのだろうと気になってしまい、周囲に確認してみれば、いつもの天然が悪い方向で

働いて自爆してしまったそうさ。なにやら顔だけガジルに変身したとか……ミラよ、それじゃミスコンじゃなくて隠し芸大会だ。

この事について「そりやないだろ」とミラ本人に突っ込みに行ったのだが、これが藪をつつく結果となった。

「見に来てって言ったのに来なかつた人には言われたくないわ」と頬を膨ませたミラにカウンターを食らわされてしまったのだ。ほとほと参った俺は「いう事を一つ聞く」と言ったのだが、これまた悪手であつたと言わざるを得ない。会話を遠くで聞いていたカナ、エルザ、ルーシイが「じゃあ私達も」と便乗してきたのである。

約束してたのはミラだけだろと言いたかつたのだが、何やらまくし立てる女性陣の前では俺の声帯は無力。

「え。え……」としか声が出せず、味方かと思っていたミラも「良いわね！みんなで共有しましょう？」となぜかノリノリで俺に逃げ場はなかつた。

結局、カナとは2人で呑む約束、エルザとは男女ペア限定のスイーツ食べ放題に付き合う約束、ルーシイとはクエストと一緒に行く約束、ミラとはストラウス家へ御飯を食べに行く約束をさせられた。

色々と付き合つた感想としては、前から順にそれぞれ「覚えてない」「場違い過ぎて緊張した」「ルーシイの成長が凄く感じられた」「飯は美味かつたがエルフマンが暑苦しかった」である。

他に最近起こつた特筆すべき事と言えば、なんといつてもミストガンの過去話についてだろうが、これはあまりにも衝撃的過ぎて簡単に言い表す事はできない。

少なくともエルザにとつて害がない事は分かつたのだが、わざわざ言いふらす事でもないだろうから、ミストガンの顔を知つてしまったナツには「問題ないから他言するな」とだけ言つておいた。

そんなこんなで穏やかな日々を過ごしていた俺だつたのだが、内が落ち着けば今度は外が騒がしくなるものらしい。

近頃、バラム同盟の一角である『六魔將軍』オラシオンセイイスの動きが活性化しているという。

バラム同盟とは、『六魔將軍』、『悪魔の心臓』グリモアハート、『冥府の門』タルタロスという闇

ギルドの親玉的な3つのギルドの間に結ばれた利権上の不可侵条項だ。

殆どの闇ギルドがこの3つのギルドいずれかの傘下となって上納金を渡しているらしい。

それだけ強大で影響力のあるギルド群であるという事なのだろうが、件の『六魔將軍』はたった六人で構成されているというのだから恐ろしい話だ。

そんな風に緊張感が高まっている中、いくつかの闇ギルドが集結しつつあるという情報がウチに回ってきた。

回ってきたというか、要するにそこを一網打尽にしろという俺宛の依頼であったのだが。

六魔の動きに関連したものが、集結しているのは六魔の傘下ギルドなのか、などの調査も兼ねた掃討作戦（俺とアルマの2人のみ）だ。

情報を聞いてから1週間、ひたすらに闇ギルドを潰して回ったのだが、『裸の包帯男』やら、『黒い一角獣』やら、どいつもこいつも六魔傘下ばかり。

倒した奴から話を聞いてみると、行先こそ口を割らなかったが、六魔に召集されたというのはゲロってくれた。

この話をじいちゃんへ通信用魔水晶ラクリマごしに報告したところ、俺とは別の情報筋からワース樹海という場所に眠っているらしい、ニルヴァーナという魔法を六魔が狙っているのではないかという話を聞かされた。

この情報を元にウチ、『青い天馬』、『蛇姫の鱗』、『化猫の宿』の4ギルドで討伐隊を結成するに至ったらしい。

天馬にはロキみたいな魔導士ホストが多くおり、その他にも一夜さんという珍獣も在籍している色物集団だが実力は本物だ。ラミアについては聖十せいじゅうに選ばれているジュラさんがいる事で有名だ。今回の作戦には参加するようだし、合流できた時には是非とも話してみたいものである。

しかし、俺が1番気になっているギルドはその2つではなく、最後の『化猫の宿』だ。このギルドにはとある伝言を頼まれている少女が

在籍しているのだ。

ちなみに、ウチからはエルザ、ナツ、グレイ、ルーシイの4人が選出されている。俺もこのまま参加しろとの事だが、先に来ているという事は報告済みだから別動隊として動いていていいと言われてしまった。

ので、今はアルマと2人ぼっちで斥候をしているところである。しかし、この辺りには特にそれらしい痕跡は発見できない。

もう少し西側に行ってみようか、と考えていた時ちらりと小さな女の子の影が視界に入ってきた。

青みがかった長髪が清纯な印象を与える可愛らしい女の子で、未だ幼さを感じさせる四肢を震わせながら走っている。

きつと親とはぐれたか、森に迷い込むかしてしまったのだろう。

この森は今非常に危険だ。

成果のなさそうな斥候はやめにして、あの子を街まで送ってあげた方がよいかもしれない。

そう思つて、木々の隙間から道の方に出て、後ろから少女に声を掛けた。

「なあ……」

その声に盛大に反応した少女がビクウと体を震わせ、おどおどとしながら口許に手をやってキョロキョロと振り向いたのだが――

「ひいええええええ!!」

俺と目が合った瞬間に顔を真っ青にし、心底怯え切った様子で両手を挙げて全速力で逃げて行ってしまった……

「ええ……」

俺は少女の走って行った方向に力なく手を伸ばして、立ち尽くすのみだった。

子どもに泣かれる事は多々あれど、あそこまで怖がられたのは流石に初めてで凄く悲しいのだが……

「どうしたんですか、トウヤ……ああ、あの子を泣かせてしまったのですね……まあ、あちらにはエルザ達が集まっている天馬のマスターの別荘がありますから、何とかなるでしょう」

うん……そうだね……

ちなみになんだけどサ。

あの子も泣いてたと思うけど、俺も今泣きそうだよ？

はあ……

「……………西の方、見に行くか」

▼ルーシイ視点

「残るは化猫の宿の連中のみだ」

「連中というか、1人だけと聞いてまあす」

マスターに——なぜか——『六魔将軍』討伐連合軍に指名されたあたしは、エルザ達と一緒に馬車に乗って、天馬のマスター・ボブの別荘へとやってきていた。

連合軍4ギルドの内、既に3つのギルドが集合しており、今は残りの1つのギルドを待っているところだ。

『妖精の尻尾』も——あたしを除いて——相当クセの強い人間の集まりだとは思っていたのだが、他の連中も変わった人ばかりだった。

『青い天馬』のメンバーは、金髪の爽やかイケメン・ヒビキ、幼い見た目のイヴ、褐色ツンデレのレンで、3人ともなぜかホスト然とした格好、言動をしている。先ほどから、これから一緒に戦う仲間同士というより、客と店の人といった方がしっくりくるような会話しかしていない気がする。他にも、一夜というよく分からないキモい人も来ていた。この人もエルザ曰く高い実力を持っているらしいのだが……

『蛇姫の鱗』はウチのマスターと同じ、聖十大魔道のジユラという人がいる他にも、なんと以前ガルナ島で戦ったシエリーとリオンも来ていた。聖十に選ばれている人の実力は疑う余地がないし、後の2人も紛う事なき強敵だった。

こうしてみると、ホントに何であたしがここにいるのだろうかという気持ちになってしまう。

残る『化猫の宿』の人も、こんな作戦に当たるといいうのにたった1人で来ているヤバい人みたいだし……

心細いから早くトウヤと合流したいなあ、などと思っていると、急にボタンと扉が開いてあどけない少女が部屋へと入ってきた。

「ごごごごめんなさい遅れてしまいました……………あの、その、さつき怖い人とそこで会って！その……………多分、今回戦う人なんだと思って、それで、でも私怖くて……………」

作戦に不似合いの少女の登場と、唐突な六魔の目撃情報に場が騒然となる。

私自身も混乱しているところだ。

遅れたと言っている事から、この少女が『化猫の宿』のメンバーなのだろうが、1人で戦うにはあまりにも弱々しいというか、幼い感じがする。

それに、先ほど見たという事はこの近くまで六魔が来ているという事で、それってかなり危険なんじゃ……………？

「少しは落ち着きなさい、ウエンディ。まずは自己紹介よ」

混沌とした場に、更にもう1人……………というか、1匹現れて、ぴしやりと空気を引き締めてくれた。

「シャルル?!ついてきてたの!?!」

シャルルと呼ばれた白いネコは、大きなリボンのついたワンピースを着て、二足歩行をし、人間の言葉を話していた。

ハッピーやアルマの他にもまだいたんだあ……………

ちなみに、そのハッピーはシャルルに一目惚れしてしまったようで、目をハートにしていた。白ネコちゃんは全く相手にしていないが……………

「アナター人じゃ不安で仕方なかったもの……………私はシャルル、この子はウエンディよ」

そのセリフを聞いて、おたおたとしていたのをようやく少しだけ落ち着かせ、あたし達を見た少女がゆっくりと話始めた。

「あ……………えと、その、ケットシエルター化猫の宿のウエンディです……………私、戦闘はできませんけど、サポートの魔法は沢山使えます……………よろしくお願いします……………」

よろしく、とお互い言い合った後、少し落ち着いてからジユラが代

表して質問する。

「それで、先ほど見た人物というのは？」

まだ少しおどおどとしつつも、はつきりと質問に答えてくれるウェンデイ。

「さつき、ここまでくるのに通った森の中で、凄く目つきが悪い人に声をかけられて……」

闇ギルドが活動してるっていう森の中で、いきなりそんな人に声を掛けられたらそりゃあ怖いよね……

1人で来るほどの魔導士っていうからビビッてたけど、普通の子どもじゃない。

きつと、サポートの魔法が物凄い力なのよね。

「目つき以外に外見的特徴はないのかね？」

その一夜の質問にはシャルルの方が答える。

一緒に入ってきた訳ではなかったが、ついてくる最中で一緒に見ていたという事だろう。

しかし、彼女が語った情報は、『妖精の尻尾』あたしたちに何ともいえない悲壮感を抱かせるに至ってしまうのだった。

「灰色の髪で、東洋風の羽織を着ていて、身長は平均的、あと私やそのオスネコみたいなネコを連れていたわ……あの目は間違いなく何人もヤツてきてるわね」

灰色の髪。

東洋風の羽織。

ハッピーみたいなネコ。

「ねえ、グレイ……」

「ああ……そうだろうな」

すーっと遠くに目をやりながら、グレイと言葉を交わす。

エルザは片手で目頭を押さえ、ナツまで「何してんだアイツ……」と苦言を呈していた。

そのままの体勢でもう片方の手を軽く上げたエルザが、『妖精の尻

尾』を代表して申し訳なさそうに言った。

「すまない……それは恐らくウチの者だ……」

△・△ △ △ △

「すみません！すみません！本当にすみませんでした！」

「そんなに謝る必要ないわ。大体紛らわしい見た目をしている方が悪いのよ」

勘違いで逃げ出したのだと分かり、ヘッドバンキングかと思う程に頭を激しく下げるウエンディと、それでも傲岸不遜な態度を貫くシャルル。

2人を足して割るくらいが丁度いい反応だと思うのだけど、これはこれでバランスが取れていていいコンビなのかもしれない。少なくとも、ナツとハッピーのようなツツコミのいない暴走ペアのようにならないだろう。

というか、むしろ謝るのはこちらの方だ。

まったく、トウヤったら、こんな小さい子を怯えさせるなんて……「ウチのトウヤがお騒がせして、本当にすまなかった……少し緊張感に欠ける状態にはなってしまったが、改めて本題に入るとしないか？」

エルザが軽く頭を下げてから、一夜さんを促す。

1度一夜さんのトイレタイムを挟んだものの、始まった作戦説明の概要はこんな感じだった。

まず、『六魔將軍』の目的は、ここから北に向かった場所にあるワース樹海に眠る古代の破壊魔法ニルヴァーナ。

奴らの拠点を見つけ、そこに6人を集めるのが、あたし達の目標。敵の集まっている拠点に向け、天馬の誇る魔導爆撃艇クリスティーナで攻撃を行い、拠点諸共殲滅するそうだ。

何とも物騒だが、そんな作戦を選ばせるような相手だという事が方が恐ろしいのではないだろうか。

できればあたしはエンカウントせずに終わりたい……

そして、肝心の敵の情報は写真付きで伝えられた。

まず、トウヤ並みに目つきの悪い男が、毒蛇使いのコブラ。

モヒカンに尖った鼻が特徴的なレーサーという男。名前……とい
うかコードネームだと思うけど、そこから推察する限り、スピードを
高めるような魔法を使うと思われる。

神父のような恰好で、角ばった顔の男が天眼てんげんのホットアイ。角ばつ
た顔って、楽園の塔で出会ったウォーリーくらいしか当てはまる人間
がないと思っていたのだが、割と高ペースで出会ってしまった。2
人に何か関係があれば面白いわよね。

次が『六魔将軍』唯一の女性メンバー、エンジェルだ。心を覗ける
という話なのだが、本当だったとしたら厄介すぎる……

最も情報が少ないのはミッドナイトと呼ばれる黒髪に白いメツ
シュの入った男。

そして最後に六魔の司令塔、ブレイン。白髪をオールバックになで
つけた褐色の男で、顔に左右対称のラインペイントが入っている。

「6人まとめてオレが相手してやるアー!!」

敵の情報を聞いている内に闘志を抑えられなくなったらしいナツ
が周囲の静止も聞かずに飛び出して行ってしまおう。

相手の説明は聞いていても、作戦は聞いてなかったのね……

あ、いや、聞いてて無視したのかもしれないけど。

「仕方ない、行くぞ」

と、ナツを追いかけていくエルザ。

その後、残った面々も「妖精の尻尾」には負けていられないとばか
りに駆け出していく。

1人で別荘に残っている訳にもいかないので、あたしも後を追う。
追うが……

皆、血気盛んすぎるよおー!!

▼三人称視点

意気揚々と駆け出した面々だったが、この後すぐに出鼻をくじかれ

る事となった。

そろそろ樹海に入ろうかという段になって、目の前に『六魔將軍』が勢揃いで現れたのである。

そして、連合軍の頼みの綱であったクリステイナが落とされる事が開戦の狼煙となったこの一戦は、連合軍の完敗で終わってしまう。

もしかしたら、クリステイナ陥落がきっかけと考えている時点で連合軍の敗北は決まっていたのかもしれない。

『六魔將軍』は個々の力も然ることながら、その狡猾さにおいても一流であったのだ。

まず、この樹海に来た段階で一夜とジユラという主力に負傷を負わせていたのである。

まず、別荘に潜入していたエンジェルが1人トイレに入った一夜を拘束、自身の魔法による一夜のコピー体を作った。それにより、一夜の思考を読んだエンジェルは連合軍の作戦の全てをブレインにリーク、クリステイナの撃墜に至る。また、そのコピー体を用いてジユラを騙し討ちにし、重症を負わせる事にも成功していた。

そうしてまんまと罠にかかった連合軍を、今度は各々の武で翻弄していく『六魔將軍』。

レーザーのスピードに全く反応できず、ホットアイの地面を操る魔法に足を取られ、乱戦に混乱をもたらすエンジェルのコピー体によって各個撃破されていく。眠ったままのミッドナイトには、放った魔法が歪んで攻撃を当てることすらできず、コブラの操る毒蛇はエルザの右腕に噛みついて遅効性の致死毒を注入してしまった。

ブレインに至っては一步も動く事はなかったにも拘らず、連合軍で動ける人間はあつという間に1人もいなくなっていた。

戦闘が始まった途端、近場の岩に身を隠したウエンデイだけが唯一の例外だが、怯えきつて満足に動けもしない事を考えれば、他の連中と大した違いはないだろう。

それまで静観を決め込んでいたブレインが一同にトドメを刺そうと、骸骨の意匠が不気味な杖を振り上げた。

そこからは大気が震える程に膨大で、見た人の体が震えるほどに凶

悪な魔力が渦巻いている。

しかし、結局その魔法が放たれる事はなかった。

数人が死を覚悟したその時、ブレインが岩影のウエンデイを見つ
け、魔力を霧散させたのだ。

「天空の巫女……!?!」

良いものを拾ったとばかりに笑みを浮かべたブレインが、伸縮自在
で物体を掴む事のできる煙の魔法を用いて、ウエンデイ——と、咄嗟
にその場にいた者を掴もうとしたウエンデイによって巻き添えと
なったハッピー——を攫ってしまった。

その後、今度こそとトドメの魔法を放ち、超スピードで拠点へ戻っ
ていく『六魔將軍』。

しかし、この数秒がこの場に居た全員の命を救った。

負傷を抱えつつも何とか駆けつけたジュラが張った岩の壁が皆を
守ったのだ。

こうして惨敗した連合軍。

全員が既に思いダメージを負い、エルザなどは放っておけば死に
至ってしまう。

しかし、一度の敗北で心が折れてしまうような柔な人間ならば、こ
の作戦に選出されていない。

体は弱つても闘志の衰えたものはおらず、むしろ雪辱を果たしてや
ると、その瞳に煌々と炎を灯していた。

シャルルの言葉により、ウエンデイが治癒魔法を使う事の出来る天
空の滅竜魔導士である事を知った連合軍は、エルザを解毒するために
もウエンデイの奪還を第一目標として反撃を開始したのだった。

一方、連れ去られたウエンデイはといえば、ワース樹海西の廃村、
『六魔將軍』のアジトにて意外な人物と対面していた。

「ジエラール……!?」

24話「恩人」

▼ウエンデイ視点

今日の私はいつにもましてダメダメだ……

朝から仲間の方を——しかも、よりにもよって『妖精の尻尾』フェアリーテイルのトウヤさんを闇ギルドの人と間違えるなんて失礼すぎる。

そもそもこの戦いに参加する事を決めたのも、トウヤさんとナツさん、私と同じ滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーであるお2人に会ってみたかったからなのに。

これで嫌われてしまって、グランデイーネの事を聞けなかったらどうしよう……

と、少し前まで悩んでいたのに、数十分経っただけでもっと大きな悩みが立ち続けに私の前へと現れたのだ。

連合軍の皆さんが樹海の入り口で『六魔將軍』オラシオンセイイスの人たちに襲われていた時、怖くて動けなかっただけじゃなく、なぜかそのまま『六魔將軍』のアジトまで連れ去られてしまった。

最初は意味が分からなかったけど、会話を聞く限り、どうやら彼らは私の治癒の力を欲していたらしい。

凄く怖いけど、それでも悪い人達に手を貸したりなんかしない！

正面から戦うのは怖くても、それくらいの抵抗はしなくちゃ。

そう思っていたのだけれど……

彼らが私に治させたい人物が誰か、というのが今日最大の問題だった。

「ジエラール………!?!」

私にとっての恩人であり、世間にとっての大罪人、ジエラールが棺のような箱に磔にされていたのだ。

7年前、私が育ての親だった天竜グランデイーネが姿を消して、路頭に迷っていた時の事だ。私は同じく道に迷っていたらしいジエラールと出会い、一カ月ほど旅を共にした。彼と出会っていなければ

ば、幼い私は飢えて死ぬか、魔物に食べられてしまっていただろう。一緒にいると危険だからと『化猫の宿』ケットシエルターに私を預けてからはずっと会えていなかったけど、私にとつては大恩人であり、お兄ちゃんのような人である事は変わらない。

だが、私と別れてからのジェラールが行ってきた事は、私の知る彼からは想像もつかないような悪行ばかりだったらしい。

曰く、多くの人を奴隷として働かせていた。

曰く、評議院に潜入し、不正にエーテリオンを投下、評議院の権威を失墜させた。

曰く、大昔の凶悪な黒魔導士、ゼレフを復活させようとした。

曰く、曰く、曰く……

いまやジェラールは、大陸全土を震撼せしめた希代の大犯罪者である。

私は目の前のこの人を治癒してはいけないのだろう。

危険な大罪人が眠ったままにいるのなら、起こしてしまうような事はすべきではないし、『六魔将軍』の人が起こそうとしているのだから、何か狙いがあるに違いないのだ。

しかし、私の脳裡には、あの優しく撫でてくれたジェラールの手の感触が蘇る。

彼が噂のような事をしていたなんて信じられない。

私がかれまで生きてこられたのは、間違いなくこの人のおかげだ。短い間だったけど、兄妹のような関係だと思っていた。

彼が今、長い眠りについていてというのなら、助けてあげたい……

「5分やろう……その間にどうするか決断しろ」

「ダメだよ、ウエンディ!!」

私をここまで連れてきたブレインという人が私を促し、実際にジェラールと対峙したというハッピーが私を止める。

——私はどうすればいいの……？

▼トウヤ視点

「……アルマ」

謎の少女に心を抉られてから暫しの時間が経つ。

俺とアルマは当初の予定通り樹海の西側を探索していたのだが、その最中に非常に古い建物の跡が残る廃村を見つけた事ができた。

廃村自体には怪しい部分は見当たらないのだが、その奥にある洞窟からは数人の匂いや物音が感じられる。

無関係の人間がここにいるとは思えないし、ここがアジトで間違いないだろう。

本来なら深入りはせず、討伐隊と合流しにいくのが得策なのだが、そういう訳にもいかないようだ。

今、洞窟の中から微かに感じる匂いは5つ。

2つは全く知らない、どこか嫌な感じのする匂い。おそらくは、これが『六魔將軍』の誰かなのだろう。

3つ目、4つ目はなぜかハッピーと先ほどの少女。どうしてここにいるのか、なぜこの組合せなのかは全くもって分からない。しかし、巻き込まれたか、人質にされたか、何か他の目的があるのか……いずれにせよ危険な状態である事は間違いない。

こうなってしまうえば、1度救出作戦を敢行する必要がある以上、当初のクリスティーナによる爆撃という方法は使いにくくなってしまふ。まさか、2人を巻き込んで攻撃をする訳にもいかないし、救出してしまえば相手はアジトによりつかなくなる。現時点で第一プランは失敗したと考えるべきだろう。

となれば、ここですべきなのは信号弾を撃って仲間場所を知らせて、自分は2人の救出に走る事だろう。

アルマとハッピーの翼と俺の魔法があれば、『六魔將軍』2人が相手といえど、逃げる事くらいはできるはずだ。

しかし、その作戦を取る事も出来ない。

最大の問題は5つ目の匂いだ。

本当にどうしてここにいるのか分からないが、楽園の塔で会った方のジエラルルの匂いがする。

作戦に私情を挟む事はしたくないが、ジエラルとエルザが接触す

る事はできる限り避けたい。

だから、信号弾を撃つ訳にはいかない。

そうなつてくると……

「ナツかグレイを探せ………ジエラルールがいる」

こそこそとアルマに話しかける。

ジエラルールの名前に息を呑んだのが分かったが、その事についてはそれ以上追及しようとはせず、「分かりました」とだけ小さく呟いた。

「トウヤ、無茶はしないように」

エーテリオンを食べてから魔力の質・量ともに上昇しているものの、ここで3人を仕留められるはずもない。

しかし、ここから離れる訳にもいかないだろう。

それを無茶というのなら、その言いつけは守れそうにない。

……まあ「約束できない」と正面切って言える程の度胸もないが。

「……善処します」

これ以上問答する訳にもいかないと感じたのか、深く溜息をついてから飛び立ってしまった。

その背中をいつまでも眺めていたところで仕方がないので、さつきと洞窟の中に入る事にする。

中は隠れるところが無いほど狭く、一步入った時点で中の全てが一望できるほどだった。

大きな棺の傍らにたたずむ白髪褐色の男とモヒカン野郎。その奥で震えている少女。ボロボロの服——というよりはその切れ端を身に着けたジエラルール。よく見れば、その布地には楽園の塔で見たものの面影がある。

こちらを見ても、どことなく色が無いというか、感情のこもっていない視線をコチラにやるだけで、何か様子がおかしい気がするし、一体何が起きているのだろうか。

交錯する4人の視線。

白髪の男が口を開こうとするも、それより先に少女が涙をこぼしながら声を上げた。

「ごめん…なさい、トウヤさん……この人は私の……恩人なの……」

どうしてこの子が俺の名前を？

それより、ジェラルルが恩人だと？

そう思っただけを改めて眺める。

ああ、なるほど……

どうして、俺はあの時、森の中で彼女を必死に追わなかったのだろうか。

彼女の右肩には猫の紋章が刻まれている。

つまり、『化猫の宿』の魔導士という事だ。

それさえ分かっていたら、少女の正体も自ずと分かる。

天空の滅竜魔導士ウエンディだ。

その魔法は、今や誰も使う事ができないとされる治癒魔法すら使う事が出来るという支援特化のモノだという。

ジェラルルの服がボロボロな事から考えるに、『六魔將軍』の連中が楽園の塔の爆発に巻き込まれて瀕死になったジェラルルを回収し、たった今、ウエンディに治療させたというところだろう。

ジェラルルの噂は聞いているだろうに、自分の中にいるジェラルルを信じて行動したのだろう。

優しい子だ……

それだけに何とも悲しく思えてしまう。

この優しさの根源がただの勘違いだなんて……

「ほう、トウヤ……妖精の尻尾の斬魔か。噂は兼ね兼ねといったところだが、我々3人を相手にするには、いささか役者不足なのではないかね？」

白髪の男が今度こそ話しかけてくる。

実際、ウエンディを連れて逃げるだけでも一苦勞ではあるのだ、反論はできようもない。

俺は半身になって構え、相手は手に持った骸骨の杖を少し持ち上げる。

「知らん……だが、お前らを逃がす訳にはいかない」

ジェラルルが動きを見せない事に不気味さを感じつつも、戦端を開こうとしたその時、外から大きな声が響いた。

「ジェリアアアアアアル!!」

燃え滾る憤怒を込めて叫んだナツの声が洞窟内に反響する。

その声を聞いて痛そうに頭を抱えるジェラル。

焦燥のようなものが表情に滲み、汗が噴き出している。

「ちっ……ここは私達2人で十分だ。近づかせるな、レーサー」

「OK」

即座に迎撃を命じる白髪頭に、軽く返事をするモヒカン男。

走っているだけとは思えないスピードで颯爽と洞窟を出ていった。

これでこの場に残されたのは、対峙する俺と白髪、頭を押さえるジェラルと、まだ泣いたままのウエンデイ、必死にナツを呼ぶハツピーだけ。

それにしても、ホント舐められてるな……

俺にとっては都合がいいのだが。

チャンスは何故かジェラルが悶えている今をにおいて他にない。

そう思っ駆け出す。

「斬魔ノ太刀 纏の型・風牙」

相手もそれに反応し、杖から黒い炎を広範にまき散らしてきた。

狭い洞窟の中では十分な目くらましとなり、すぐに斬り払っても一瞬は見失ってしまう。

——どうしかけてくる？

黒炎が晴れたその瞬間、ガガガと岩が動く音がした。

下からか、そう思い身構えようとしたその瞬間、意外な光景を目を奪われる。

「なにっ!!?」

その轟音は白髪の男ではなく、ジェラルの放った魔法によるもので、むしろその男を狙って放たれていた。

目の前に開いた大穴に吸い込まれるように落ちていく六魔の男。

その瞳は驚愕の色に満ちており、何かのブラフという事ではなさそうだ。

ならば、こいつらは一枚岩ではなかったという事か？

何がどうなっているんだ……？

そこで突然の衝撃が俺の体を弾いた。

「ぐおっ!？」

唐突な出来事を目にして呆気にとられたせいで、目の前に迫るジェラルルの魔力弾に反応しきる事が出来なかったのだ。

咄嗟のガードこそ間に合ってダメージを負う事はなかったが、少し離れた所まで吹き飛ばされてしまった。

その間に逃げたらしく、体勢を整えた時には既に洞窟内にジェラルルの姿はない。

このタイミングで逃げるなど、何が狙いだというんだ……？

……まさか、ニルヴァーナを自分で使おうとしている？

それなら、ジェラルルがニルヴァーナの場所を知っているという事になるし、ここで『六魔將軍』がヤツを起こすのにも頷けるが……

いや、それよりも、白髪男が穴から這い出てくる前にハッピーとウエンディを拾って逃げなくては。

「ハッピー、ウエンディ！」

「は、はい！」

「うん！」

急いで2人を両脇に抱え、洞窟を出る。

すると、空に流星が走って行き、森のどこかに着地したのが見えた。方角は覚えた……この2人を安全な場所に置いたらすぐに追わなければ。

そう考えているところに、ナツとアルマ、それからもう一匹見覚えのない猫が現れる。

「トウヤー・ジェラルルは!？」

「すまん、逃げられた……2人で追ってくれ」

抱えていたハッピーを下ろし、ジェラルルが飛んで行った方向を指さす。

言われた最初こそ、「何をやってるんだ」と言いたげな表情でコチラを睨んできたが、ナツの優先順位はジェラルルにあるのだろう。

「任せろ！そっちはエルザの事、頼んだぞ！」

そう言つて2人で飛んで行った。

見送りながら、エルザがジエラールの方に行かないように見ていてくれ、という意味にしては表情が鬼気迫るものであったな、と疑問に思う。

「トウヤ、エルザは今、コブラという男の手によつて毒に侵されているそうです。幸い即効性のもではないようですが、このままだと……」

何!?

そんな事になっていると知っているなら、ジエラールなんかにこだわっていないで駆けつけて……

つて、そんな事しても意味はないのか。

相手は毒蛇使いという話だ。

魔法による毒じゃないなら、俺では解毒できない。

じゃあなぜナツは俺に向かって「頼んだぞ」などと言つたのだろうか？

……あ。

ふと、今抱えている人間が誰なのかを思い出して合点がいった。

「ウエンデイ、エルザを頼む」

そう言つると、白猫とウエンデイが驚いた表情をする。

「あ、あの……トウヤさんは私の事を知ってるんですか？」

「やっぱり変質者なのね、あんた！」

おいコラ、白猫！

「……………エルザのトコ、行こう」

焦つて何を言つてもいい訳みたいになると思つて、ひとまず口をつぐんだ。

△・△ △ △ △

エルザの元に向かうため、ウエンデイは白猫に、俺はアルマに背を掴まれて低空を飛行する。

その間にいくつか話をしている。

まず最初に簡単な自己紹介をした。

といっても、ウエンデイについては元々知っていたので、目新しい情報といえば親のドラゴンの事を何か俺やナツに聞けるかと思っ作戦に参加した、という事くらいだった。

白猫の方の名前はシャルルというそう。

何やら気難しい性格のようだが、少し話しただけでも分かるウエンデイの頼りなさから考えると、これくらいしつかりしている方がバランスを取っていて良いのだろう。

二足歩行で会話可能とくれば、どう考えてもハッピーやアルマの同類、エクシードなのだろう。様子を見るに、例の任務とやらは心配なさそうだが……

お互いの事を把握した後は、アルマによる簡単な現状報告を聞いた。

クリステイーナは撃墜。連合軍メンバーは『六魔将軍』の襲撃を受けて漏れなく負傷。エルザに至っては致死性の毒を食らってダウン。ウエンデイは攫われてしまった。

絶望的な状況に陥ったものの、ウエンデイ救出を第一目標に、ギルドごとに分かれて樹海を探索していた、という。

例外として、天馬のヒビキとルーシイが樹海入り口に残って、エルザの様子を見ているらしい。

俺達が合流すべきはそこだ。

ヒビキは情報系の比較的新しくできた魔法を使うらしいし、俺達の合流やエルザ回復の報告を全体に回す事も可能かもしれない。

また、ナツと共に行動していたグレイはレーサーと交戦中らしい。異常なスピードで駆けていったという事しか分からないが、それだけでも断言できるほど相当の手練れだ。

グレイなら何とかしてくれるとは信じているが、苦戦は必至だろう。

最後は「なぜ、俺がウエンデイの事を知っているのか」だが、これはこの場でどこまで話したものか……

そう考えていると、ウエンデイが少し違った切り口から話しかけてきた。

「あの……森の中で会った時は逃げ出してしまって、すみませんでした……私、悪い人だなんて勘違いしちゃって」

いや、まああれは俺も考えなしの話しかけ方だった。

子どもにはよく怖がられているのだから、あの場面ではアルマに出なくて貰うべきだったろう。

「こつちこそ……あの時はお前がウエンデイだとも気づかなかったし」

こちらこそ、こちらこそ、と謝罪合戦になりかけていたところにシャルルが口を挟んでくる。

「それで？そろそろあんたがウエンデイの魔法について知っている理由を教えてもらえるかしら？」

うわあ……凄い疑念の目だ……

これまで話していた間も、全く信用していないぞ、という雰囲気ビンビンに醸し出していたし、これは相当嫌われてしまっているなあ。

まあ何にせよ、俺にできるのは真実と、伝言を伝える事だけだ。

「……俺はウエンデイの恩人を知っている」

こう言うと、ウエンデイには不思議そうな目で見られ、シャルルにはより一層怪しいものを見る目で睨め付けられる。

「それってジェラルルの事……ですよね？」

ウエンデイは伏し目がちに聞いてきたが、なんと答えるべきか……「そうだが……さっきのアイツじゃない。いや、同一人物だが、本人ではない、というか……」

あ、これ絶対伝わってない。

2人の怪訝な視線を感じる。

アルマもジト目でこつちを見てしていると気付いて、なら代わってくれと睨み返してやる。

「簡単に言えば、ウエンデイと昔一緒に行動していたジェラルルと、先ほどのジェラルルは顔が同じなだけの別人という事だと理解してお

いてください……それ以上は本人と話してください」

混乱を極めて、顔のまわりにハテナマークをいくつも飛ばしていたような顔をしていたウエンデイが「本人に」という言葉を聞いた途端に、それまでにない喜色に満ちた驚きの顔を見せた。

「えっ、別人？……それより、本人につて……ジエラールが今どこにいるか知っているんですか!？」

「ああ、妖精の尻尾にいる……今度遊びに来い」

「は、はい！」

やはり、長年音沙汰の無かった恩人の所在が知れるというのは嬉しい事なのだろう。

俺だって、セルバルドが元気になっていると分かるだけで、大分気持ち軽くなるだろうしな。

『私の事情に巻き込む訳にはいかなかったとはいえ、7年もの間連絡できずに申し訳なかった。君が元気にしてくれているだけで嬉しく思う』だそうだ」

アルマに目くばせして、少しウエンデイの方に寄る。

空中で、というのが恰好つかないところではあるが、そつとウエンデイの頭にポンと手を乗せた。

「だから安心してくれ……君の恩人は何も悪い事はしていない。君の知ってるジエラールのままだ」

そう言うと、ポロポロと涙をこぼし始めるウエンデイ。

多分、まだ全てを理解する事は出来ていないのだろうが、大事な事だけは伝えられたと思う。

「良かった……本当に良かった……私、ジエラールが変わっちゃったのかなって……そんな訳ないって信じたくて、でも、そんな事誰にも言えなくて……怖くて、心配で寂しくて……」

後ろで睨みつけてくるシャルルが怖いが、そんな事より、今はこの子を安心させてやりたい。

そんな思いでウエンデイの頭を撫で続ける。

そうしながらどれだけ経っただろうか。

エルザやルーシイの匂いが感じられたので、アルマに頼んで一旦地

上に降りてもらおう。

地に足が付いた時にはウエンデイも落ち着いてきたらしい。

しかし、そう思った途端、今度は顔を真っ青にさせてしまった。

「あ、あの……じゃあ私、勘違いで悪い人を治療しちやったって事になりませんか……？」

うーむ、否定できない。

が、そんなに気にする事ではないとも思うのだ。

「いいのよ、ウエンデイ！あの時はそうしなくちゃ、あなたの身が危なかったんだから！」

「でも……」

納得できないという顔で、先ほどとは別の意味で涙を目に溜めるウエンデイ。

真面目な子だ……なんとというか、庇護欲がくすぐられる。

つついもう一度頭に手を乗せてしまう。

「あジェラルルをぶん殴るのは俺やナツでもできる。……でも、エルザを治す事はできない」

「トウヤさん……」

それに、と前置く。

「あいつにはもう誰も傷つけさせない、俺やナツが……ウエンデイの優しさは誰も傷つけたりなんかしない」

実を言えば、もう一度話す機会があるならそれに越した事はないと思っていたのだ。

根底の根底が、俺の友達と同じだというなら……

エルザやシモンの友だった時の優しさが少しでも残っているなら

……

それを引つ張り上げるのが俺の仕事だろう。

「もし、これでも気にするなら、少し頼まれ事を聞いてくれないか？」

こそこそとシャルル、アルマ、ウエンデイに耳打ちする。

「それくらいなら大丈夫です！任せてください！」

「別に良いけど、あんたの方こそエルザの事、感謝しなさいよ」

25話「起動」

▼ウエンデイ視点

「ん……ん……は？」

あ、エルザさんが目を覚ましたみたい。

処置に問題はなかったはずだけど、それにしても少し回復が早い気がする。やはりエルザさんは体力も私とは段違いみたいだ。

これくらい体力や魔力があれば、今以上に天空魔法をうまく使えるのだろうか？

「どこか調子のおかしい所はありませんか？」

エルザさんがのそりと体を起こして私の方を見つめてくる。

「あ、ああ。問題はないが……私は確か毒蛇に噛まれて……」

どうやら少し意識が混濁しているようだ。

今の状況を説明しておいた方がいいのかもしれない。

「ウエンデイがあんたを解毒したのよ。感謝しなさい」

そう思っていたところに、シャルルが私に代わって話し始めてくれるが、何もそんな言い方しなくても……

「そうだったのか……感謝する」

律儀に頭を下げてくれるエルザさん。

「い、いえ、そんな！頭を上げてください！」

仲間としてできる限りの事をするのは当然の事だ。

ただでさえ戦闘には協力できないのに、今日はこっちのジエラールを治療しちゃった訳だし、これくらいしないと申し訳が……

って、いけない！

ネガティブな気持ちになっちゃいけないんだった。

「それで、あの光の柱は一体……」

そう、今、森の奥には黒い不気味な光の柱が立っている。

今はもう、ルーシイさんと一緒にあの光の方へ向かって行ってしまったヒビキさんの話では、あの光こそがニルヴァーナの封印が解かれた証だそうだ。

あの光が発生すると光と闇の狭間に居る者の属性を入れ替える、ら

しい。

私も一度説明を聞いたただけだからよく分からないんだけど……

「ニルヴァーナの封印が解かれ始めているようです。あの光が出ている間は悪感情を抱いている人間が悪人になってしまう、という話でした」

この場に残っている最後の1人、シャルルと同じネコの女の子、トウヤさんの相棒のアルマが簡潔に説明してくれた。

つまりはそういう事だ。

だから今は気を強く持つてないといけない。

意識すればするほど難しい気もするけど……

「なに!?では既にニルヴァーナは敵の手に落ちているというのか!?こうしてはいられん、私たちもあそこへ向かうぞ」

えつと……

間違いようのない正論だ。

エルザさんは討伐隊の主戦力の一角であり、ここに留まっている意味もない。

ただ、個人的には今すぐ光の方に向かわれてしまおうと少々困ってしまふ。

どういう事情があるのかは分からないが、トウヤさん曰く、エルザさんとあのジェラールと会わせてはいけないらしい。

恐らくあの光の元にさっきの人がいるはずだ。

だから、私はエルザさんを少しでも長い間、あそこに向かわないように誤魔化さなければならぬのだが……

私にできる事なら、と二つ返事で引き受けてしまつたが、私には少々難易度が高いように思います、トウヤさん。

「あそこには既にトウヤやナツが向かっています。先ほどもヒビキさんとルーシイがああ光を目指して走って行きましたから、そこまで慌てる必要はないはずですよ」

「そうよ。ウエンディの治療を受けたとはいえ、あんたは病み上がりなんだからもう少し慎重に動いても良いと思うわ。こちらには非戦闘員が三人もいるんだし」

私よりネコたちの方がしつかりしているんじゃない……

「む、そうか……私の方は問題ないが、お前たちだけを残していく訳にもいかんしな……仲間を信じる事も仕事の内か。周囲を警戒しつつ慎重に向かうとしよう」

ほっ……

良かった。

時間稼ぎはしつつも最終的にはニルヴァーナの元へ辿りついてい
る方が良いだろうし、ゆつくりと進めば、トウヤさんやナツさんが何
とかしてくれているだろう。

「そ、そうですね……ってあれ？」

方針を決定して立ち上がったその時、嗅いだ覚えのない匂いが森の
中から歩いてくるのに気が付いた。

私だって滅竜魔導士だ。
ドラゴンスレイヤー

トウヤさんやナツさん程ではないとはいえ、普通の人より五感
は敏感な自信がある。

こんな森の中で覚えのない匂いが近づいてくるという事は……

「僕は夢を見る、君も夢を見る……真夜中に」

森の奥に目を凝らすと、そこには真っ白な肌に刺々しいメイクを施
した紅い目の美青年が立っていた。

気怠げで不気味な雰囲気まき散らしながらこちらにゆつくりと
近づいてくる。

あの姿は恐らくミッドナイトと呼ばれる六魔將軍の一角だ。
オラシオンセイムスクリ
ステイーナが落とされた時には、確か空飛ぶ絨毯のようなものに乗っ
て眠ったまま戦っていたはずだ。

そんな状態でも戦える人間がきちんと覚醒した状態で戦えばどう
なるというのか……

よく見れば、その白い肌や、ファーの着いた服に赤い液体が付着し
ているのが分かった。まさかとは思うが、討伐隊の誰かの返り血……
とかじゃないよね？

「ふうん……先ほどのエモノよりは楽しめそうだ」

にやりと笑みを浮かべながらこちらに殺気を飛ばしてくるミッド

ナイト。

即座に戦闘態勢に入るエルザさんに対し、私は腰を抜かしてしま
う。

「ひ、ひう……」

「貴様……ミッドナイトだな。既に仲間たちが世話になったらしい
が、ここで借りは返しておくでしょうか」

そう言いながら剣を向けるエルザさん。

奇しくも時間稼ぎがしたいという目的は叶ったが、こんなに刺激的
な事態にならなくても良かったのに……

▼トウヤ視点

……ナツは何やってるんだ？

エルザをウエンディ達に任せした後、1人全速力でジェラルルが向
かった方向へと走り始めた。

数分程経った頃、近くの洞窟から黒い光柱が立ったのだが、どう考
えても良いものではないだろう。

肌がざわざわとし、圧迫感もある。

何か、イラつきが大きくなり、自分が自分でなくなっていくような
……

兎に角、あの光がニルヴァーナに関わるものであるというなら、ナ
ツはジェラルルを止められなかった可能性が高いという事になる。

ナツの鼻とハッピーの速度でジェラルルを見失ったという事はな
いだろうか、ありそうなのは六魔の誰かと出会ってしまったという
所か。

洞窟の中に一步入る。

中からはやはりジェラルルの匂いが感じられるが、ナツの匂いはし
ない。

今度は逃がさない、そう決意を新たに歩みを進めていく。

開けた場所に入ると、光を発する塔のような物と、見覚えのある
コートを羽織っている——確か、六魔の集めていた闇ギルドの中の1

人が着ていた気がする。倒れていた所から拝借したのだろうか——
ジェラールが何故か苦しそうに膝をついているのが目に映った。

「……ジェラール」

俺の声に反応したヤツは体勢は変えずに首だけを徐にこちらに向けてくる。

俺の存在を認めると、その整った顔に警戒の色を露わにし、苦しうに立ち上がった。

「おまえは……邪魔はさせんぞ」

どういう理由かは分からないが、既に満身創痍のジェラール。それでも俺と一戦交えるつもりのようなのだ。

お互いに構えをとる俺達2人。

「ハッ!!」

ジェラールが裂帛の気合と共に魔力弾を放ってくる。

しかし、楽園の塔で闘った時は勿論、先ほどの六魔のアジトで退治した時と比べても明らかに威力が低い。

何よりも、この程度の魔力弾では俺相手には目眩ましにしかならないというのに、撃った後にジェラールがその場から動いた気配がない、というのが奇妙だ。

何か狙っているのか……？

「斬魔ノ太刀 纏の型・風牙」

スツと右手を振り上げる。

その動きに少し遅れて追従するように縦に裂ける光線。

ジェラールの狙いが分からないのが不気味で、敢えてこちらもその場から動かさずに対処してみるが……

「何っ!?!」

何故か、魔法を打ち消された事に驚くジェラール。

この程度の攻撃にまで斬魔で処理した事に驚いた……？

いや、どちらかというとなぜ魔法を斬る事が出来るのかが分からない」といった驚き方のような……

「うっ……この力は……頭が、痛い……!」

そう呟いてから一度啖血し、この洞窟に入ってきた時と同じように

膝をついてしまうジェラール。

「おまえ、何を……？」

思わず警戒を解いてほんの少し歩み寄ってしまう。

今日のジェラールは妙だ。

確かに敵対の意思は感じるが、塔の時のようなネットリとしたドス黒い悪意のようなものを感じない。

「ふっ……自律崩壊魔法陣を自分に組み込むのは早かったようだな」

自律崩壊魔法陣だと!?

確か、魔法開発局が作ったという組み込んだものを自壊させるとかいう……

よく見ればジェラルルの体にはかなり高度な魔法陣が浮かんでい
る。

しかも、なぜかニルヴァーナと思しき塔の方にも同じ魔法陣が描か
れていた。

「だが、この魔法陣がニルヴァーナを消し去るまであとわずか……こ
のような身体であつても、そのくらいの時間を稼ぐことはできる」

「何を……」

「何となく……どんなにボロボロになつても立ち上がった男たちの姿
が頭に浮かぶんだ……オレも最期はそんな風に……」

まさか、コイツ記憶が無いのか？

だとすれば色々辻褃はあう。

だが、それでそのまま死んでしまおうなんて、それはあまりにも

……

「おまえたちにニルヴァーナは使わせない!」

再び立ち上がってファイティングポーズを取るジェラールだが、俺
はその姿を見て盛大に溜息を吐いた。

要するに闇ギルドの人間に間違われた訳だ。

本日2度目である。

「その体で無茶するな……俺の目的はニルヴァーナの破壊だ」

ジェラールは驚いた顔をしているが、特に気にもせず近づいていく
俺。

初めは強い警戒を見せていたものの、毒気の抜けきった俺の顔を見てはそれも長くは続かなかったようだ。

気の抜けた様子で、その場に座り込むジェラール。

「君はオレの事を知っているのか……？」

「ああ……何も覚えてないのか？」

本当に記憶を全て無くしてコレだというなら、やはりこの男の本質は楽園の塔で見たアレではなく、シモンの手紙にあった子どもの頃の姿なのだろう。

それならここで死ぬのは勿体ない、と思ってしまう。

「エルザという名前と……どんなにボロボロになっても立ち上がってくる男達の姿……それと、罪の意識、それだけだ……って、何をしている？」

すぐそばまで行って、俺も同様に膝をつき、ジェラルールの胸元に――正しくはそこに刻まれた自律崩壊魔法陣に触れた。

するとすぐにその魔法陣はかき消えてしまう。

「なぜ……？」

「お前はクスだった……が、今のお前がいなくなれば悲しむやつがいる」

そう言った後、俺も腰を下ろし、進んでいくニルヴァーナの自律崩壊魔法陣を2人で見守りながら、俺の知っている限りのジェラルールの事を教えてやる。

「オレは何て事を……」

仲間たちの自由を奪った事、その上で駒のように扱った事、拳句にはエルザやシモンの命を奪おうとさえした事、断片的な俺の言葉を聞いて、それでもジェラールは涙を流した。

今のコイツなら、シモンやエルザに会わせてもいいのではないか、そう感じる。

記憶を取り戻した時にどうなってしまうのか、それだけが心配だが、何となく、本当に何となくだが、こいつはもう大丈夫だと直感的にそう思った。

もうすぐ自律崩壊魔法陣が起動する。

それを見届けた後、一緒にエルザの元に行こう、そう言おうとした
丁度その時だ。

カツ、カツという足音が聞こえた。

それと同時に嗅ぎ覚えのある匂いも感じる。

話に夢中になっていて接近に気づかなかったのか……！

「自律崩壊魔法陣か……」

洞窟に入ってきたのは『六魔將軍』オラシオンセイヌのアジトでも相対した白髪で褐色肌の男だ。

不敵な笑みを浮かべてニルヴァーナに近づいていく。

「トウヤ・グレイスよ、そういえば貴様には私のコードネーム名乗って
いなかったな……我が名は脳。ブレインその由来は、かつて所属していた魔法
開発局で数百に及ぶ魔法を生み出したこの知識だ」

魔法開発局……自律崩壊魔法陣を作ったのもそこのはず……！

嫌な予感がして、ブレインの方へ駆けだす。

「ふんっ……」

飛び掛かろうとしたタイミングでブレインが、俺の右側を掠める軌
道で醜悪な魔力塊を放った。

その向かう先には自律崩壊魔法陣を自分にも掛けていた影響で、も
はや限界の近いジェラールがいる。

「クソッ……！」

咄嗟に斬魔の力を展開するが、ただ斬るだけでは間に合わない。

ブレインへ呐喊する動きを無理やり右側へ曲げて、ジェラールと魔
力弾の間に割り込む。

「ぐっ」

大したダメージはないが、派手に吹っ飛び、ジェラールの横まで転
がってしまう。

その間にブレインはニルヴァーナの元へとたどり着き、魔法陣に手
を翳した。

すると、パリンパリンとガラスが割れるような音が辺りに響き、自
律崩壊魔法陣は脆くも崩れ去ってしまった。

「この魔法も私が開発したものだ。解除コードなどなくとも無効化することなど造作もない……そもそもコレをお前に教えたのも私だ。忘れていたのか、ジェラール」

こんな事なら魔法陣による自壊を待たずに俺の手でニルヴァーナを壊しておくべきだった！

ジェラールに気を取られていたとは言え、今回の事はあまりにも迂闊だったと言えよう。

「そんな……」

ジェラールの悲痛な呟きがゴゴゴゴという地鳴りでかき消された。

ニルヴァーナが起動しようとしているのだろう。

だが、まだ今なら止められる可能性がある。

ほんの少しの希望に賭けて、再びブレインとニルヴァーナの方へ駆け出す……

「こ、れは……」

襲いかかる猛烈な吐き気に、俺の足は思わず止まってしまう。

——まさか、ニルヴァーナって

轟音と共に地面が割れ、ブレインの高笑いが響く。

「ニルヴァーナは私が頂いたア!!!」

感覚的に分かる。

ニルヴァーナは巨大な乗り物だ。

だが、あまりにも大きい。大きすぎる。

俺の足元はズンズンと上へとせり上がり、その下、目の前の塔から続いている部分の全容が露わになっていく。

それは石で造られた灰色の街であった。

「街が動いて……」

そう呟ききらない内に、足元が完全に崩れてしまう。

既に高度は相当なものになっている。

ここから落ちてしまえば、いくら滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーの頑丈な身体であつてもただでは済まないだろう。

そう思い、咄嗟にニルヴァーナの外壁の淵に掴まるが……
スルツ

乗り物酔いで手の力が抜けてしまう。

浮遊感を全身で得ながら、頬で風を感じる。

グングンと地面が近づいていくのが見えた。

これは流石にマズいかもしれない……

エルザのフォローに、と思つて残してきたが、こんな事ならアルマも一緒に来てもらえば良かった。

すまん、みんな……

そうして俺は――

▼三人称視点

ニルヴァーナが完全に起動する少し前。

ジユラは『六魔將軍』の一人、天眼てんげんのホットアイと対峙していた。

のだが……

「金などいりません……世の中は愛、デス♡」

ニルヴァーナは善人を悪人にする。

それと同時に悪人を善人にする力も持っていた。

尤も、どちらの力もこの時点では境界で揺らいでいる人間のみが対象になるのだが。

ホットアイ、本名リチャードは弟を探す事を目的とし、その資金を稼ぐ為に闇ギルドで活動していた。しかし、その事に対して僅かな罪悪感を抱いていたのである。そのせいでホットアイは悪人から善人へと反転したのであった。

ジユラは困惑しつつも、その境遇に同情を示し、しっかりと改心している判断し、新たな仲間としたのである。

そうこうしている内にニルヴァーナが起動してしまう。

地面深くから6本の足が出現する。

森の中に揺れていないところなど存在しなかった。

その振動に足を取られそうになりながらも、聳え立つ六本脚の巨大な怪物を睨む。

「アレは幻想都市ニルヴァーナ。古代人ニルビット族の住んでいた街

デス……400年前、世界中に溢れる戦乱を嘆いたニルビツト族が世界のバランスを取る為に生み出した魔法、それが光と闇を入れ替える超魔法、ニルヴァーナなのデス」

「なるほど……それが現代になって、悪の為に利用されようとしているとは、皮肉なものだな……」

2人は1度目を合わせ、ジュラの魔法によって蛇のように地面から伸びた岩に飛び乗った。

そのへビは空中を蛇行しながらニルヴァーナの上層、街の方まで伸びていった。

その他にもニルヴァーナへと向かう影がいくつか。

リオンと共に超スピードの絡繰りを暴きレーサーを下したグレイであつたり……

ジェラルルの追跡を邪魔してきたコブラを渾身の咆哮で耳を潰して勝利したナツであつたり……

ヒビキの魔法によってインストールされた超魔法ウラノ・メトリアでエンジェルを破ったルーシイであつたり……

強力無比な魔法の弱点を看破してミッドナイトを倒したエルザであつたり……

それに付いてきただけのウエンデイであつたり……

残念ながら、その他の討伐隊のメンバーは既に『六魔將軍』に重傷を負わされ戦闘不能になってしまっていた。不幸中の幸いは、死者が出なかつた事だけだろう。

ニルヴァーナの脚を登るメンバーにしても、ウエンデイを除いた全員が過酷な闘いを乗り越えてその場に立っており——現状は這うように登っているのだが——気合だけで活動している人間ばかりであつた。

既にたつた一人にまで減ってしまった『六魔將軍』のブレインは、それでもニルヴァーナの中央、王の間にて有頂天となっていた。

「既に4つの祈りが消えたか……まさかミッドナイトまでもがこの早い段階で倒れるとは思っていなかったが……まあいい。このニル

ヴァーナさえあれば駒などいくらでも用意できる」

ブレインの顔面に刻まれていた6つの入れ墨の内、なぜか4本のラインは消えてしまっていた。最後に残った2本を撫でたブレインが呟く。

「その為にも私が倒れる訳にはいかない……あの方が出てくれば、どんな事になってしまうか分からんからな」

くつくつと笑って、何事かニルヴァーナを操作するブレイン。

少しして、ニルヴァーナの6本の脚はのそりのそりと稼働を始めた。

要するに初めの標的が決まったのである。

こうして舞台は平和都市ニルヴァーナへと移っていく。

26話 「白銀の槍、黄金の剣」

▼トウヤ視点

「ぐっ……んんは……？」

周りには岩がいくつも転がっており、地面に亀裂も走っている。

地面に激突したせいにか、至る所に軽い痛みを感じる体を起こし周りを観察すると、俺の隣に倒れているジェラールを発見した。

ぼんやりとしていた頭が回転を始め、気を失う少し前の事が思い出される。

ブレインが起動させたニルヴァーナが乗り物に分類されるような代物であったがために、俺はその巨体から振り落とされてしまったのだった。アルマをエルザの元に置いてきてしまったからには、重力に従って落下していくしかない。

目算数十メートルからの無防備な落下だ。いくら頑丈な滅竜魔導士の体とはいえ、無事ではすまないだろうと覚悟した時、眩い光が俺に向かって飛び込んできた。衝突するかと思われたそれは俺の体を包み込み、スピードを少しだけ緩和させながら地面へと突っ込んだ。

そうして俺は意識を失ったのである。

つまるところ、アレはジェラールの流星ミージェアだったのだろう。

ジェラールがかばってくれたおかげでこの程度の傷で済んだ、と考えるのが自然だ。

まさか、楽園の塔ではあれだけ手古摺らされた魔法に助けられるとは……

それに、自律崩壊魔法陣でボロボロの体で流星を発動するだけでも相当な負担のはずなのに、その上で俺を庇った訳だ。

無茶しすぎだと説教したい所だが、このピンチを産んだのが俺の乗り物酔いというしまらない欠点では何も言えまい。

「ははっ……そうか、オレは……」

ジェラールも気が付いたらしい。

札を言うためにも近づこうと立ち上がったが、そこでジェラールの

様子がおかしい事に気づく。

目元に手を当てて静かに涙を流しているのだ。

「どう、した……？」

俺の呼びかけに対し、膝を立てて座ったまま、手をだらりとおろしてコチラを見る。

「全て、全て思い出したよ。先ほどの衝撃でな……」

そう、か……

恐れていた事態となった訳だが――

あまり心配する必要はなさそうだ。

楽園の塔で会った時のようなジツトリとした悪意は感じない。

むしろ、その相貌から感じるの深い後悔と自分への嘲笑の色であるように思える。

「安心してくれ、今のオレにゼレフへの狂信は存在しない……むしろ、あんな馬鹿げたマネをさせられた憎しみが……いや、これはオレが言っているいい事じゃない、か」

その心情は複雑なのだろう。

シモンやエルザの言う、元のジェラルドであるならば、自分がしてきた事に対しての自責は止められないだろうし、しかし、それをさせたゼレフへの怒りもとどめきれない。同時にその自責はゼレフへの責めすらも、自分が言うにはおこがましいと感じさせてしまう。

それは一面では正しいし、一面では間違っていると俺は感じる。

確かに、実際に酷い目にあわされてきた人間を前にして「オレもゼレフに騙された」などとは言わせられないだろう。

だが――記憶を失っていた時のジェラルドと話して分かった感覚からすると――ジェラルドはそういった感情を内側に溜め込んでしまうタイプだろう。そうして自分を責めているだけでは前に進めない。

――それではダメだ。

「ここでは……言っているいい。ここには俺しかない」「は……？」

きよとんとした顔をするジェラルド。

俺はそつとその隣に歩み寄っていく。

「お前だってゼレフの被害者だ……けど、そんな事お前自身では言えない、違うか？」

「……そうだ。俺は！」

「だから、俺がお前を赦そう」

ジェラルルの整った顔が歪む。

自分にとって都合の良い言葉を受け入れがたいのだろう。

「そんな事でこの罪は——」

「そうだ、償えない。だから、俺が赦しを与える分だけ、お前は自分を責め続けろ……でも、ただ責めるだけじゃない。俺の赦しに見合うように、お前は自分のやるべき事をやるんだ」

ただ、無条件で赦され続けるなど、コイツにとっては耐えがたいだろう。

前を向いてもらわねばならない。

エルザはきつと、その方が喜ぶから。

シモンや、他の面々だってそうだ。

ただ、うじうじと閉じこもっているだけのジェラルルを認めることなどありはしない。

ゼレフの言いなりになっていた時とは違い、もう自分の意思を取り戻しているのだから。

「今の状況は分かっているな？」

「あ、ああ」

「六魔の奴らが理不尽な暴力を振るおうとしてる……やるべきことは分かるな？」

「ああー！」

ジェラルルの肩に手を回し立ち上がらせる。

その頬には一筋の涙が流れた跡があり、その口許にはうつつすらと笑みが浮かんでいた。

「ありがとう」

その眩きに努めて反応しないようにしながら、進軍を続けるニル

ヴァーナへ向かって歩き始めた時、脳内に声が響いた。
『誰か……誰か、聞こえるかい?』

▼三人称視点

トウヤの元に通信が届く少し前、ジユラはホットアイと共にニルヴァーナへと乗り込んでいた。

ニルヴァーナの中心、王の間にブレインがいるだろうとのホットアイの言葉から、そちらに向かった二人だったが……

「誰もおらん、な」

「私もこのニルヴァーナの全てを知り尽くしている訳ではありません
デス……どこかに向かって動いているのを見る限り、自動操縦機能があるのかもしれませんが」

そのまま王の間に留まり、ニルヴァーナを止めるための手がかりを探す事とした。

しかし、こちらも一向に成果は出ず、次第に焦りが募りだしたその時、ジユラに向けて凶弾が放たれた。

パン、と乾いた音が響いて魔力弾が飛んでいく。

それに先に気づいたのは、意外なことにホットアイであった。

岩の魔導士らしく、石造りのニルヴァーナを熱心に調査していたジユラに対し、ブレインの狡猾さを知っていたホットアイは何か違和感のようなものを覚え、警戒していたのである。

しかし、いずれにしろ魔力弾が放たれてから気づいたのでは遅かった。

ブレインは焦っていた。

ニルヴァーナを起動した時こそ、自分とホットアイの2人であと少しの間耐えきれば、ニルヴァーナにより大量の駒を手にとけると安易に考えていた。

しかし、ニルヴァーナに乗り込んでくる面子の中にはジユラと共に仲睦まじく歩くホットアイがいたのである。

いかにたった6人でバラム同盟の一角を占める『六魔將軍』オラシオンセイイスとはい

え、このままでは多勢に無勢だ。

6人のうち、4人までを倒してしまったメンバーに、当の六魔が1人に、いまだ末席とはいえ聖十大魔道せいじゅうだまどうが1人……自信家のブレインからしても目的完遂は厳しいと言わざるを得なかった。

しかし、だからといって諦めるような潔い男でもなかったのである。

ニルヴァーナには自動操縦機能がある事を知っていたブレインは、すぐにそれを——ウエンデイのギルドである——『化猫の宿ケツトシエルター』に設定し身を隠した。

つまる所、ニルヴァーナが『化猫の宿』に放たれた時に属性が反転した者たちを操る人間が残っていればいいのだ。それは何も自分自身である必要はない。

確かに現状をブレイン1人で乗り切る事は難しいだろう。だが、条件さえ満たしていればそれで問題はないのだ。ブレインの体に施された封印さえ解けてしまえば、その体には『六魔將軍』最強の男が解き放たれるのだから。

彼にかかればこの程度の苦難、文字通りに“破壊”されてしまうに決まっている。必要以上に色々破壊されてしまいそうなのが不安ではあったが、背に腹は代えられぬとホットアイ撃破のチャンスを伺ったのであった。

「危ないデス!!」

ジユラを狙った——ように見えた——魔弾は、実際にはホットアイの腹に吸い込まれ、そこに穴を穿った。

愛に目覚めた……目覚めてしまったホットアイにとって、目の前の新たな仲間を狙った攻撃から、身を挺して庇うのは至極当然の事であった。

「ぐうっ！」

血を吹き出しながら膝から崩れ落ちるホットアイ。

だが、その表情は穏やかなものであった。

愛に生きる事、他者を思いやる事。

新たに自分の内に生じたそうした光を感じていたからだ。

そして何より、自分がここで倒れたとしても、横にいる新たな仲間
はきつとなすべき事を成してくれる、そういう強い魔導士だと信じて
いたからだ。

温かい気持ちに胸に、ホットアイは意識を失ったのだった。

「リチャード殿!？」

倒れたホットアイに駆け寄るジユラ。

気を失ってはいるものの、現段階では命に別状はない事が分かる
と、今度は魔力弾の飛んできた方向を睨みつけた。

「フンツ、六魔に貴様のような半端者は要らぬわ」

物陰から現れたのは、狙いを完遂し、新たに顔の封印が1本消えた
ブレインだった。

ブレインはニヤリと口端を釣り上げる。

実のところ、ブレインにとってこの展開は予想通りであった。

ホットアイが簡単に裏切るとは思えない、とあれば恐らく原因はニ
ルヴァーナ。悪の権化たる六魔、守銭奴であるホットアイが反転すれ
ばどうなるのか、ブレインは読み切ったのである。

故のジユラへの不意打ちであった。

十中八九、ホットアイが庇うだろうし、そうでなくても最も厄介な
聖十を始末できると踏んだのである。

「貴様……!」

想定通りに事が運んだと、内心喜んでいるブレインとは対照的に怒
気を全身から放って立ち上がるジユラ。

思わぬ迫力にブレインですら一歩後ずさってしまう。

「こちらに寝返ったとは言え、元は仲間であった者をそうまで容易く
……」

「ニルヴァーナの効果を信用しているだけの事だ。そうだな……実感
してもらおうとしようか。光栄に思え、貴様をニルヴァーナの操り人形
の1人目にしてやろう」

もはや問答は無用とばかりに構える双方。

眼光鋭くブレインを射抜くジユラと、不敵に笑みを浮かべるブレイン。

同時に手を翳し——ブレインだけが吹き飛んで行った。余りにも初速が違う。

周囲に大量の岩石が浮かび上がり、ブレインに突き刺さる。

反撃に繰り出した魔法は新たに出現した岩壁に防がれ、いなされ、ジユラの元に届きはしなかった。

挙句、その防壁は飛礫つぶてとなってブレインを叩く。

余りにも一方的な攻防は僅か数十秒の内に、ジユラの勝利という形で終わってしまったのだった。

しかし、それでも倒れゆくブレインの顔は——奇しくもホットアイと同様に——穏やかなものだった。

それも仲間の勝利を確信して、という奇妙な共通点を持っていた。「マスター……ゼロ……あとは……」

ジユラは「マスター」という不穏な言葉を気にしつつも、まずはホットアイの応急処置だと切り替えて踵を返した。

だから、ブレインの顔面に起こった明確な変化——封印のライン、その最後の一本が消える決定的瞬間を見逃してしまったのである。

ブレインには知識を好む表の顔とは別に、もう1つの人格が存在する。

それは破壊を好み「無ゼロ」のコードネームを持つ、『六魔将軍』のマスターである。

あまりに凶悪で強大な魔力を持ったために、ブレイン自身によって6つの鍵——六魔将軍のメンバーにかけられた生体リンク魔法で封じられていたのだ。

ホットアイが倒れ、ブレインも倒れた今、マスターゼロを封じる枷はもはや1つも無くなった。

ブレインの体から莫大で邪悪な魔力が間欠泉のように噴き出した。

何事かと焦りながらも咄嗟に身動きの取れないホットアイを庇うように抱きかかえたジユラ。

そこに目覚めの一発とばかりに、指向性を持たされた魔力の奔流が

襲いかかり――

▼トウヤ視点

『その声はトウヤ・グレイスかい!?!』

脳に響く甘い声は『青い天馬』ブルーベガサスのヒビキとやらだろう。

近年開発されたという情報を操る魔法の使い手と聞いているし、ウチのウォーレンのような芸当ができてもおかしくない。

「ああ……それで、今どういう状況だ?」

『それが……』

敵との交戦で一度は意識を失ったものの、何とか少し動ける程度には回復したヒビキは、まず作戦責任者である一夜とジユラに現在の状況を尋ねようと通信を開いたらしい。

一夜の方は気を失っているのか応答が無かったそうだが、ジユラからは切迫した状況が伝えられてしまった、という。

ヒビキが言うには、ニルヴァーナの影響で善意に目覚めたホットアイと共にニルヴァーナを探索中、最後の六魔であるブレインに不意打ちを食らい、ホットアイが撃破されてしまったそうだ。

その後はジユラとブレインがタイマンでやり合ったようだが、こちらには問題なく勝利を収めた。

問題は一度倒れたブレインの体から、それまでとは比べ物にならない量の魔力が吹き出し、まるで人格が変わったかのような苛烈な猛攻にジユラまでもがやられてしまったことだ。

ジユラは何とか意識を失う前にヒビキの呼びかけに応じて、これらの情報をもたらしたそうだ。

更に悪い事に、ヒビキの分析ではニルヴァーナは現在自動運行の状態になっており、このままでは10分もしない内にニルヴァーナを作った種族の末裔であるニルビット族の集まりである『化猫の宿』が呑み込まれてしまうのだという。

そして、自動運行を止める手段は見つからず、ニルヴァーナを破壊する方法も現在探索中だそうだ。

正直、ホットアイがこちら側に寝返つただとか、聖十が破れただとか、標的が『化猫の宿』だとか、それがニルヴァーナを作つただとか……訳の分からん情報がどんどんと開示されても困惑が勝つのだが……

しかも、何やら別の場所で通信を聞いているらしい『妖精の尻尾』フエアリーテイルの面々が騒がしい……十中八九、ナツがゼロと闘いに行つたのだろう。まあでも、そうだな……

俺は通信に声がのらないように懐から紙を何枚か取り出し、ジェラールに

【ゼロを倒しに行ってくれ、多分ナツが苦戦してる】
と伝える。

驚いた顔をして、声を出しそうになつたジェラールを手で制して、更に筆談を続ける。

【それが終わつたらそのまま行方をくらませろ。覚悟が決まつた時にエルザに会いに来い】

ジェラールが逡巡する様を眺めている時、不意にニルヴァーナの中心の塔から爆炎が立ち上つた。おそらくナツが戦闘を開始したのだろう。

ナツは強いし、手傷を負っている相手とはいえ、聖十にタイマンで勝てる男とやり合うのはまだ厳しいだろう。

やはり、何かしらの助太刀が必要になつてくるはず……

俺は少し悪い笑みを浮かべてジェラールの背中をポンと叩いて、とあるメモを渡した。

切羽詰まつた状況と理解してか、キツとその爆炎を見据えたジェラールは一步踏み出してからこちらを振り返る。

パクパクと口を動かしたと思うと、流星となつて飛んで行つてしまつたジェラール。

恐らく、あの口許の動きは『必ず、また会いに行く。ありがとう』
だつたと思う。

では、こちらまでできることをするでしょう。

「ヒビキ……あのデカ物を壊せればいいんだな？」

▼ウエンデイ視点

『あのデカ物を壊せればいいんだな？』

通信越しに聞こえたトウヤさんの声は、敵の狙いが『化猫の宿』であると感じて混乱しきっていた私の頭に染みわたったように感じた。多弁でなくても雄弁なその自信にあふれた声音が私を落ち着かせてくれたのだ。

なんだか、ジェラールみたいな……お兄ちゃんみたいな声。

トウヤさんは、あの通信の後すぐに飛び出していったアルマと一緒に、各地で倒れている討伐隊の面々から魔力を貰い、集めた魔力でニルヴァーナを破壊するつもりみたいだ。

今はもう地上の人たちの分は回収を終え、ニルヴァーナの上に向かっていているらしい。

今ここにはずっと一緒に行動していたシャルルとエルザさん、ニルヴァーナで合流した 그레이さん、ルーシイさんがいる。

私では刃を作る事はできないけど、トウヤさんも乗り物酔いが酷いみたいだから、トロイアが有効なはず。

私たちがおうちを守ってもらうんだもの、少しでも役に立たないと……

「あ、アレ、トウヤじゃない？」

そうこう考えていると、ルーシイさんが声を上げた。

どうやら、トウヤさんが到着したようだ。

「遅くなった……魔力くれ」

なんだか、既に苦しそうに見えるトウヤさん。

空気以外のものを食べようと試してみた時の私みたいな……

「おいおい、ホントに大丈夫なんだろうなあ？……ほれ」

そう言いながら氷の刃を差し出す 그레이さん。

乗り物酔いがあるせいかな、アルマに浮かせてもらいながらそれを受け取る。

続いてルーシイさんが馬の被り物をした星霊を召喚した。

「トウヤ、お願いね……サジタリウス、やつちやつて！」

「了解いたしました、もしもし」

星霊の弓から放たれた矢に齧りつき、これまた刃の部分を平らげていく。

今度は私の横からエルザさんが進み出てきた。

「無茶ばかりしおって。たんと食え……頼んだぞ」

数本の剣を換装してトウヤさんに渡し、トウヤさんも美味とばかりに喉に通していった。

おいしそうに魔法剣を頬張り終えたトウヤさんがこちらを向いて、優しく語り掛けてくる。

「ウエンデイ」

その声に反応し、私も1歩前が出る。

「あ、あの私、刃物は出せませんが、乗り物酔いを緩和する魔法なら使えます！だからその……」

そこまで必死に言った私を見てなぜかきよとんとするトウヤさん。

えっと、何が以外なのだろうか……？

「それはありがたいが……攻撃魔法の方も貰っていいか？」

攻撃、魔法……

そんなの使った事ないし……

「この子の魔法は治癒の魔法なの！攻撃は専門外だわ！……私たちのギルドの為にやってくれてるのは分かっているけど、それはできないものは諦めてちょうだい」

私の代わりに言いながらも、『化猫の宿』の存亡がかかっている為に、シャルルも強く言えないみたいだ。なんというか珍しいものを見られた気がするなあ……

ともかく、私の魔法は治療に特化していて攻撃はできないのは事実のほずだ。

でも、トウヤさんは納得いつていないみたいで……

「……滅竜魔法はドラゴンと喧嘩するための魔法だ。攻撃もできる」

「で、でも仮に使えたとしても刃物は出せませんよ……」

確かに、「滅」竜魔法と名前が付く魔法で攻撃ができないのは自然ではある。

私の経験測だけで勘違いしている可能性はあるかもしれないだろう。

だが、私の魔法で攻撃できたとして、それは恐らく暴風を起こすようなものになると予想できる。

極めれば鎌鼬のような斬撃が出せるかもしれないが、攻撃をしたことがない今の私では難しいのではないだろうか。

「はあ……それは問題ありませんよ。ここまでの道中、どうあがいても刃物を出せない方の魔力も無理やり食べてきましたから」

えっ、えっ。

そんな事って……

そう思い、エルザさんの方を見ると、こちらもアルマと同様に深く溜息を吐きながら

「コイツはエーテリオンを食ったことがある……ウエンデイの魔法も問題ないだろう」

と教えてくれた。

む、無茶苦茶です、トウヤさん……

頭を抱えたくなる衝動に駆られる私だったが、トウヤさんの目は終始いたって真剣だ。

きっと、私を信じてくれているのだろう。

「出し方は……そうだな……ぶつけてこい、俺に。一緒に化猫の宿を守りたいって気持ちを」

顎に手を当てて真剣に悩んでアドバイスをしてくれるトウヤさん。

その内容は具体的とは言えない。

でも、それは何となく、スツと私の中に入り込んできた。

——トウヤさんと一緒に守る、か。

そうだ。

守って「もらう」んじゃない。

確かに、実際にニルヴァーナを壊すのはトウヤさんだけれど、気持ちの上まで頼りきりじゃダメだ。

一緒に闘うんだ。

一緒に抗うんだ。

一緒に、家族を守るんだ。

そう思えば、なんだか自分の体に力が宿ってくる感覚が巻き起ころる。

——グランディーネ、これが私の魔法の力なの……？

やれる。

そんな確信がある。

「分かりました……トウヤさん、私の気持ち、受け取ってください!!」
驚いた表情をするシャルルと、心底嬉しそうにゆっくり頷くトウヤさんを見たあと、私は一息吐いて目を瞑った。

スウウウウと大きく息を吸い込む。

空気を、風を、大気を、空を……天空を喰らう。

体の奥深くの魔力炉が火を噴き、全身に力が漲ってくるのを感じる。

後はこれを吐き出すだけ——!

「天竜の……咆哮!!」

私の口許から巨大な竜巻が発生する。

あらゆる物をなぎ倒せそうな暴風はトウヤさんの方に向かっていって……トウヤさんの口に収まった。

やった!

私、できたんだ!!

この力で、私と一緒に『化猫の宿』を守って、トウヤさん!

「ありがとう……行ってくる」

そう言って、トウヤさんは空中で翻り、アルマと一緒に空高くまで飛び上がって行ってしまった。

私は初めて使った攻撃魔法の疲労と充実感からその場にへたり込んでトウヤさんを見送る。

少し経つと火照っていた頭が落ち着いてきたのだが……
私の口から出たモノが、トウヤさんの口に……つてなんだかちよつと恥ずかしいような……

▼三人称視点

ニルヴァーナ中央、王の間。

火の竜と破壊の権化がぶつかり合っていた。

いいや、ぶつかり合っていた、という表現は正確ではないだろう。先ほどこから、ゼロによる砲撃をナツがいかに躲すか、いかに防ぐか、というやりとりしか行われていないのだから。

ゼロの放つ闇色の光線は螺旋を描きながら変幻自在にナツを追い、前から後ろから、時には下からもナツを追いつめていた。

大きく体を動かしながらどうにか前に進もうとするナツに対し、ゼロは指先を軽く動かすだけ。攻撃を放つ暇すらないその闘いは、誰がどう見てもナツの防戦一方であった。

「はっ！どんな猛者が襲い掛かってきたかと思えば、とんだ雑魚じやねえかよ……さっさと壊れちまえよ！常闇奇想曲!!」
ダークカプリチオ

荒く息を吐き、立っているのもやつとと言ったナツに、これまでの中でも最も高威力かと思われる極太の光線が迫る。

「くっ……!」

躲す事を捨て、受け止める事を選択したナツが手を体の前でクロスさせて防御の体勢を作る。しかし、貫通性を持つゼロの魔法の前ではその程度の守りは紙切れ同然であった。

「いよいよ貫かれるかと思われたその時——

「流星!」
ミューティア

彼方より流星が飛来し、ナツの体を攫って行った。

流れ星はナツの体をゼロから少し離れた位置に優しく立たせ、その隣に自身も降り立った。

「おまえ……何しに来た!? ジェラール!!」

鬼の形相でジェラールの胸倉をつかむナツ。

ジェラールはその迫力にも負けずにナツの目をしっかりと見据えて言い放った。

「おまえを助けに来た」

どういうつもりだ、と言わんばかりにジェラールの襟をつかむ力が強くなる。その苦しきから少し顔を歪めながらも言葉を続けていく。「オレがしてきた事がどれだけ取り返しのつかない事かは分かっている……シモンや、ミリアーナ、ウォーリーにショウ……そしてエルザ。オレはかつての仲間を傷つけてしまった。だから、その償いがしたいんだ。そして、同じように、理不尽な力に翻弄される人々を少しでも減らしたい！」

ナツの力が少し緩む。

ジェラールの眼力は少しも弱まらず、ナツを見据え続ける。

「虫が良いのは分かっている……だが、ニルヴァーナを止めるための手伝いをさせてくれ！」

ジェラールの真意がつかめずナツの瞳が揺れる。

しかし、何となく分かってしまった。

ジェラールが1つもウソをつかず、真実、心から思っている事だけを語っている事を。

何より、楽園の塔で見た、あのどす黒い悪意のようなものが少しも感じられなくなっている、という事を。

しかし、こうなってくると面白くないのはゼロだ。

蚊帳の外にされたばかりか、トドメとばかりに放った攻撃を妙な横やりで躲され、しかもその正体が奇妙な事ばかり言う「堕ちた」ジェラールなのだから。

スツと手を2人の方に翳し、魔法を放った。

「んなトコで内輪揉めする暇があるなら、仲良くぶっ壊れちまえよ!!」不意に放たれた砲撃に身構えるナツだったが、その衝撃は届きはしなかった。

ナツと光線の間に入ったジェラールが、ナツを庇ったからだ。

大きく両手を広げナツの方を見て、ゼロの魔法を背中で受け止めたのである。

「ナツ……これはトウヤからおまえに、と」

ハア、ハアと息を吐きながら、懐から紙を取り出し、ナツに渡すジェラルル。

そこに書かれていたのは「今のジェラルルは大丈夫。ジェラルルが信じられないなら、俺を信じろ」という、紛れもなくトウヤの筆跡で書かれた言葉だった。

エルザを泣かせた事は決して忘れない。

だが――

「今回だけだ！おまえを許した訳じゃねえからな！」

少しの逡巡の後、そう結論を出したのだった。

その返事を聞いてホツとしたように頷き、左手を差し出すジェラルル。

その手のひらには金色に輝く炎が揺らめいていた。

「これは咎の炎……そして誓いの炎だ。後は頼む」

そう言い残し、ジェラルルの体は崩れ落ちてしまった。

そして、ナツとの間の壁となつて視界を塞いでいたジェラルルが倒れた事で、ようやく見えるようになったナツの姿は、ゼロにとってさながらドラゴンのものであつた事だろう。

漏れ出す明るい炎が夜闇を照らし、その体には鱗の模様が浮かびあがつている。

迸る魔力がキラキラと煌めいて、ゼロの脳裡にある言葉が想起される。

「まさか……ドラゴンフォース!?……つぐお!!」

先ほどまでと比べて数倍ものスピードで突っ込んできたナツの拳が、その問いへの返答となつた。

吹き飛んだ先ですぐに体勢を整え、反撃の光線を放つも、軽く振るわれたナツの拳によつて簡単に弾かれてしまう。

自分をも凌駕するかもしれない破壊の力を前に、身震いし、されどニタリと笑みを作つたゼロ。

どちらが上か競い合い、破壊し合う。

自分が求めていた闘いが目の前にある、と。

一方のナツも不思議な感覚に困惑しつつも、高揚を隠せずにいる。体中から力が吹きあがる感覚はエーテリオンを喰らった時に似ている。

それと同時に、何か心までもが温かくなるのも感じるのだ。

まるで、この炎をくれた男の心までもが伝わってくるかのように。

「ジェラール……確かに受け取ったぞ、おまえの炎」

——これならやれる。

そう確信したナツは再び大きく踏み込み、ゼロに殴りかかった。

こうして第2ラウンドのゴングが鳴らされたのである。

▽・▽▽

ニルヴァーナの上空へと、アルマと共に飛び上がったトウヤも新たな力の萌芽に戸惑っていた。

ウエンデイの魔力を受け取った時、普段魔力を取り込む時とは全く違う感覚が去来したのだ。

普段、刃を食べる時の感覚はそこに秘められた魔力が自分のものに置き換わり、増幅するような印象だ。エーテリオンのように無理やり捕食した場合も、その変換に明らかに大きな負担がかかり、苦痛を伴うという点以外はそう変わらなかったのだが、今回はそうではなかった。

まるで、ウエンデイの魔力そのものが入り込み、混ざり合うような感覚。

融合に近い何か。

——だが、これは……！

そう、遥かに負荷が大きいのである。

確かに、莫大な力の流れを感じるが、それは異物を異物のままに取り込んでの結果であり、自然な状態とはとても言い難い、劇薬のようなものなのだ。

「大丈夫なんですか、トウヤ！」

トウヤの様子がおかしい事に気づいたアルマがそう問うが、まさか「今にも爆発しそうだ」と返す訳にもいかず、仕方なく右手を横に突き出してサムズアップの形を取った。

無理をしているのがはつきりと分かる様子に納得できずに盛大に溜息をつくアルマ。

「……本当に無茶ばかり。たまにはコチラの気持ちも理解して欲しいものです。でも、今、ウエンデイのギルドを助けられるのはあなたしかいません……頑張つて下さいね」

予定高度に到達したアルマはトウヤを空中に放り投げた。

「……っしー」

落下しながら風を感じる。

下を向けば巨大な怪物。

ニルヴァーナの砲口の先を見つめれば、猫を象った建物がいくつか集まった集落が目映った。

自分が守らなければならぬ場所を見据えて拳を握るトウヤ。

例えばそれがハリボテであったとしても、こんな事でなくなつていいなんて事には決してならない。

優しさと編まれた世界の終わりは優しさであるべきだ。

だから、こんな自分たちの欲の事しか考えていないような連中に利用されちゃいけない。

そう考えながらトウヤは魔力を練り上げていった。

「——モード天斬竜」

迸る魔力の色が普段の銀色から、白銀へと変わっていく。

「斬魔ノ太刀、天の型」

脚を真下に向けて、天を切り裂く斬撃が超スピードで落下していく。

「滅竜奥義・改——斬覇天竜槍!!」

白銀の竜の咆哮がごだまし、それと同時に——

▽・▽▽

ドラゴンフォースを発動したナツと、本気を出したゼロの攻防は先ほどまでとは打って変わって互角であった。

一方が押せば、もう一方が押し返す。

この繰り返しであったが、しかし悲しい事に優勢なのは未だゼロの方であった。

この場面に至るまでに受けてきたダメージがナツを追い込んでいたのだ。

——あと一手、あと一手何かあれば流れを持っていける。

そんな折、天に白銀の矢が現れたのだ。

「何だアレは……」

その瞬間、ゼロの動きが止まった。

矢から放たれるあまりにも莫大な魔力、その破壊力に目を奪われる。

自分を遥かに超える破壊の権化を目にし、一種の感嘆のようなものを抱いてしまったのである。

そして、それはこの闘いの中で初めて見せたゼロの大きな隙となった。

普段とは少し違うが、あの魔力はまぎれもなくトウヤのものだ、ならば何も問題はない、そう素早く判断したナツにとって、その隙を突く事は兎戯にも等しかった。

ダンツと地を蹴り、ゼロの懐に潜り込む。

金色の炎が噴き出し、あらゆるものを焼き尽くす。

「しまっ——」

ゼロは下から迫る爆炎に再びドラゴンを幻視し、滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーが何たるかを理解した。

「全魔力解放——滅竜奥義 〃不知火型〃」

白銀の竜の咆哮がこだまし、それと同時に黄金の竜が雄叫びを上げる。

「紅蓮鳳凰剣!!」

夜空で白銀の槍と黄金の剣が交差する。

少しして、ニルヴァーナがゴゴゴと音を立てて崩壊を始めた。

これにて、ニルヴァーナ事件は閉幕と相成った。

27話 「天空の巫女」

▼トウヤ視点

「馬車が……快適だ……！」

「良かったですね、トウヤ。平衡感覚を補助する魔法……トロイア、でしたか？流石はウエンデイです。トウヤもちゃんとお礼を言ってください、ほら」

「ふんっ、その通りね、もつと感謝しなさい！ただでさえこの後治療魔法を使うんだから、ウエンデイに余計な負担を掛けないで欲しいものね！」

「もう、シャルル！トウヤさんにはお世話になりっぱなしなんだから、これくらいは当然だよ！」

ぶんすかと可愛く怒って妖精の紋章のついた右腕で、となりのシャルルにメツとするウエンデイ。

現在、俺はアルマ、ウエンデイ、シャルルと共にクエストに向かう馬車の中で揺られている。今回の依頼は、マグノリアから少し離れたとある村の金持ちからのもので、娘の治療をして欲しいという話だ。

本来、治療魔法というのは失われた魔法ロストマジックに該当する大変珍しいものであり、何らかの治療を受けた時は素直に医者を頼るのが普通だと言える。それでもクエストを発注したのは、娘の症状というのが研究の進んでいない魔獣から受けた毒を原因とするものだからだそうだ。今すぐにどうこうなるという程切羽詰まっている訳ではなさそうではあるが、いずれ衰弱死してしまうとかなんとか。

依頼主的には医療の発展を待ちつつ、一縷の望みを託しての発注だったのだろうが、結果的には何ともタイミングが良かったと言えるだろう。

なにせ、つい先日フィオーレにおいて恐らく唯一の治療魔法の使い手たるウエンデイ・マーベルが、我が『妖精の尻尾』フェアリーテイルに加入したばかりだったのだから。

では、『化猫の宿』ケットシエルター所属だったはずのウエンデイがどうしてウチに居るのかも含めて、ニルヴァーナが崩壊した後の顛末を語っていこうと

思う。

△・△ △ △ △

ニルヴァーナに渾身の蹴りをお見舞いしてやった後、俺は何とかブレーキを掛けようと地面に向かって魔力を噴出させていた。

「とま……れっ！」

努力の甲斐あって、完全に止まればしなかったものの、地面に激突したところで少しのケガで済むだろうという所までスピードを落とす事に成功した——のだが……

「トウヤア!？」

目の前にいくつかの人影が現れてしまった。

先ほど別れた後、すぐにニルヴァーナから避難したらしいエルザ達一行が落下の軌道上に突っ立っていたのである。

先ほど声を上げたのはグレイだったが、ルーシイもエルザもウエンデイもシャルルも、皆一様にこちらを見上げて驚いた顔をしていた。

とはいえ、全員が魔導士だ。

グレイやエルザは危険を察知してすぐにその場を退いたし、ウエンデイもしっかりしているシャルルに手を引かれて難を逃れていた。

良かった良かった、皆避けてくれた……

「ちよっ!？」

何故かその場であたふたしているルーシイを除いて、だが。

グングンと迫ってくる地面とルーシイ。

あっ、これ無理と思ったその時、何となく目をつむってしまったのがいけなかったのではないか、と今になって思う。

ゴンッ!

ガッン!

ごろごろごろ……

むにゅん。

落下の勢いそのままにルーシイに激突し、俺たち2人は地面を絡まりながら転げ回った。

ぐるんぐるんと回る感覚に少々酔いが来て、その場で掴まれそうなものに必死にしがみついたのだが、そんなもの互いに抱き合っている相手しかいなかったのである。

むにゆんと顔面に幸せな柔らかさを感じながら、へぶつと回転が停止した。

すぐにどうこうとはしたのだが、酔いからすぐには動けそうに……というか動きたくなかったです、ハイ。

「んっ、ちよっ……ああっ、もう……トウヤあ……」

ほおおあああ!?

なんかちよつとやらしい声出さないでもらえますか!?

「まったく……ほら、トウヤ。どかしますからね」

その時、ふつと体が浮かぶ感覚がして、幸せな感触が離れ……というか俺の方が離れていっていた。

首だけ回して振り返った視線の先には、若干お怒りになった雰囲気のアルマさんが……

一生懸命ここまで追いかけてきてくれたのに、見せられたのがルーシイの胸に顔をうずめる俺では怒って当然ですよ、ハイ。

と、ここまでの様子を見てエルザが一言。

「流石だな……ルーシイ……」

「どういう意味よっ!!」

△・△ △ △ △

ややあつてハッピーがナツを連れ、意識が回復して何とか逃げ出してきたらしいジュラとホットアイも合流する事が出来た。

ナツには睨まれながら「貸しイチだぞ……」と言われてしまったが、あの顔は何となくジェラールを既に認めていそうな感じがする。複雑な感情は少しの間消えないかもしれないが、まあ、借りを返す為の憂さ晴らしくらいには付き合ってもいいだろう。

ナツとの試合など面倒な事この上ないが、流石に今回は負い目が勝

つ。

ジユラの方は何気に今回ゴタゴタしていたせいで初めて会うという事に気づき、それなりの挨拶をした。なぜか「噂は聞いている。お互いに万全の状態で会えた時は是非て合わせ願いたいものだ」などと言われてしまったが……

いや、そんな、せいてん聖十大魔道の一角を占める御方に見せられるようなモンじゃないと思うんすけどね。めんど……恐れ多いので少々距離を取らせていただこう。

さて、ナツがハッピーと2人で帰ってきたという事は、ジェラールは俺の言った通り、あのまま何とか逃げていったのだろう。

逃げたとはいっても、あいつの事だ、本当にしらばっくれたりはしないはずだ。

これからは自分にできる償いを考えて行動し、落ち着いたころには再び俺達の前に現れてくれると信じている。

そういうお堅いところはウチにいるそっくりさんと共通だろうかから心配いるまい。

むしろ、かなり弱っていたのに1人で逃げる事になってしまった事の方が心配だが……まあこちらもあいつ程の実力なら問題はないだろう。

そんな風に考えていた時の事だ。

「手荒な事をするつもりはありません。しばらくの間、そこを動かさないでいただきたいのです」

その声と共に俺達の周囲に術式の結界が張り巡らされたのだ。

質的にはフリードのそれとは比べ物にならないが、複数人で捕らえる事に特化させて作っている為に、強度的にはかなり高いだろう。

勿論、その気になった破壊できる程度のものだが。

結界の向こうからぞろぞろと数十人……ともすれば百人を超える男たちが現れ、こちらを取り囲んでくる。

その全員がアングの意匠が描かれた制服に身を包んでいる。その中で唯一服の形状が異なる、長い黒髪を後ろで結び眼鏡をした男が一步前へ出た。

「私は新生評議院第四強行検東部隊隊長、ラハールと申します」

新生評議院、ね……

確か、今までの評議院はジェラールたちが起こした不祥事で信用を地の底に落として解散となったはずだ。

『妖精の尻尾』フェアリーテイルの面々からすれば目の上のたんこぶといった感じではあろうが、フィオーレ全体の事を考えれば絶対に必要な機関ではあるから、いずれ復活するとは思っていたがこうまで早いとは思わなかった。

「我々は法と正義を守る為に生まれ変わった。いかなる悪も決して許さない」

以前は、ウチが何かへまをやらかしても、擁護派のヤジマさんが何とか取り成してくれていたようだが、こう言うからにはこれからはそうもいかなさそうさだ。

「オイラたち何も悪い事してないよっ！」
今までの扱いを思い出してからハッピーが先手を打って抗議し始める。

見ればグレイやナツも若干身を硬くしているようだ。

……評議院を通さずにバラム同盟の一角を落とした事は、まあ、多分、恐らくは不問に処されるとして、実際今回は本当に悪い事などしていない。

おそらくここに現れたのは……

「今回の我々の目的は六魔將軍オラシオンセイブスの捕縛。ここまで赴いたのは……そこにいるコードネーム、ホットアイを引き渡していただく為です」

まあ、そういう事だろうな。

ニルヴァーナによって性格が反転したって話だったが、先ほど少し話してみただけでも気のいい男になっていたのは明らかだった。

あのままなら何の問題もなく世間に溶け込んでいけるだろうし、本来なら俺としては逃がしてやりたいのだが……目の前に検東部隊がいるのではどう頑張っても手遅れだろう。ここで明らかに庇い建てしようものなら、今度はコチラの立場が悪くなる。

ジェラールを先に逃がしたのは我ながら英断だったと言える。

「ま…待ってくれ！」

この中で最も長くホットアイと接していたからか、生来の漢気ある性格からか評議院に食って掛かろうとするジユラだったが、「いいのデスネ」とホットアイ本人に肩を叩かれ静止される。

「善意に目覚めても過去の悪行は消えませんデス。私は一からやり直したい」

少しの逡巡が挟まり、諦観と悲しみ、そして美しい覚悟への少しの喜びの入り混じった複雑な表情をしたジユラが口を開いた。

「ならばワシが代わりに弟を探そう…：弟の名は？」

「名前はウォーリー…：ウォーリー・ブキャナン」

弟を探しているという事情があった事は意外ではあるが、それ以上にその名前の方が衝撃的だ。

だって、俺達は——特にエルザは——その名前をよく知っているのだから。

そのエルザがとても嬉しそうな笑顔をホットアイに向けて語りかけた。

きつと、友の家族が見つかった事が嬉しいのだろう。あの塔から解放された人間の中で、今でも家族と交流できる人間が一体何人いるものか、と考えれば…：

「その男は私の友だ。今は元気に大陸中を旅している」

その言葉に驚きと感謝の表情を露わにし、ホットアイは泣き崩れてしまった。何度も「ありがとう」と呟くさまは見る者に感動を与えるには十分な光景だっただろう。

俺はそつとジユラに近づいた。

「ジユラ、ホットアイ…：いや、リチャードだったか…：弁護は頼むぞ」

この男の立場であれば、せめて極刑だけは免れる事が叶うだろう。こんなやり取りを見せられて、弟にあう事もないまま処刑では寝覚めが悪すぎる。

ま、言うまでもない事だったろうが。

その証拠に、ジユラは既に覚悟の決まった目をしていた。

「勿論だ……ワシにできる事は全てすると誓おう」

少しして、ホットアイが拘束され、さてこれで話もお終いかと思っていたのだが、なぜか結界が解かれない。まだ何かあるのか、と思っていたらラハールとかいう隊長殿に特大の爆弾を落とされてしまった。

「ところで、六魔將軍はジェラール・フェルナンデスの身柄を確保しているとの情報があったのですが、今回の討伐に際して目撃した方はいらっしやいませんか？」

知られてたのね……

大した情報網じゃないか、新生評議院。

ジェラールについて知っているのは俺、アルマ、ナツ、ハッピー、ウエンデイ、シャルルだけだ。全員が若干身を硬くして、ナツなどは明らかにそっぽ向いている。

エルザが「ジェラールだど!?!」とかなり衝撃を受けているし、恐らく俺達の態度から何か知っているといるという事が察せられているだろう。後で言い訳しなければならぬのが面倒だ……

「知らん」

誰も口を開こうとしないため、仕方なく俺が口を開いた。

ラハールは明らかに納得していない様子で俺を睨みつけてくるが、その程度の眼光で俺が押されるもんかよ。

こちらだって一層目に力をいれて睨みかえしてやる。

「隠しだとしてもあなた方に良い事はありませんよ」

「俺達はヤツに因縁がある。もし見つけてたらずぐにぶん殴って縛り上げてる」

先に目をそらしたのはラハールの方だった。

一瞬下を向いて溜息を一つ。

どうやら諦めてくれたらしい。

「わかりました……今回はここまでにしておきましょう。では失礼します」

そう口にして、合図を出すラハール。

すると百人近い検束部隊が一斉に踵を返し、歩き始めた。

なんというか、最初から最後までいやに鬱陶しい連中だったな……

△・△ △ △ △

それから討伐隊の全員で移動し、『化猫の宿』ケットシエルターの集落で一晩を過ごした。

朝になり、化猫のマスターから話があるとわれ、集落の中心にある広場に集められたのだが、その前に今回のお礼にとニルビット族に伝わる織物でつくられた衣装を着せてもらえる事になった。フィオーレではあまり見られない独特な雰囲気だが、よく見るとどこどころに猫を思わせるマークが入っていたりと可愛らしい服装だ。

何故か『青い天馬』ブルーベガサスの連中だけは普段通りのチャライスーツ姿だが。

アレも何かしらのポリシーなのだろうか？

「この流れは宴だろー!!」

化猫の連中、つまりはニルビット族の末裔らを前にして、ナツが宴会だとはしゃぎだす。それに同調して天馬の奴らやグレイにルーシイなども盛り上がる。

が、ニルビット族は全くそんな雰囲気ではないようだ。

静まり返った雰囲気、流石にただ事ではないと察したのか諸手を上げたまま固まる一同を前に化猫のマスターが重たく口を開いた。

「皆さん、ワシがこれからする話をよく聞いてください」

そんな言葉から始まった話は、俺を除いて全員に衝撃を与えるものだった。

まず、この集落はニルビット族の末裔などではなく、ニルビット族そのものなのだそうだ。

400年前、世界中に広がった戦争を止めるため作られたのが善悪反転魔法、ニルヴァーナ。やがてニルヴァーナはニルビット族の国そのものとして、その国は平和の象徴となった。

しかし、強力な力には反動がつきものである。世界を平和に……悪しき心を正した分だけ、善を悪に変える力をため込んでいったニルヴァーナは、その闇をニルビット族に降り注がせた。その後は地獄のような殺し合いが始まり……最終的に生き残ったのはマスター1人

だけだったという。

そして、そのマスターもいまや思念体だけの存在となり、ニルヴァーナを破壊できる者が現れるその日まで、ニルヴァーナを見守るだけの存在になっていた。

「今……ようやく役目が終わった」

そう話すと、周囲の人間達が1人、また1人と減っていく。

ウエンデイとシャルルは明らかに狼狽した様子で消えていくギルドメンバーの名前を呼んでいく。その瞳には輝くものが……

「騙っていてすまなかつたな、ウエンデイ……ギルドのメンバーは皆、みなワシが作り出した幻じゃ……ニルヴァーナを見守るため、この廃村に1人で住んでいたワシの元に、1人の少年が訪ねてきた。7年前の事だ」

それがジエラール……いや、ミストガンだ。

ミストガンは自分の使命のため、ウエンデイを連れて行くのは危険だと判断して、ある廃村に1人で住む老人にウエンデイを預けたという。

老人はミストガンのまっすぐな瞳に押し切られたそうだ。

こうして『化猫の宿』という形をとったのは、ウエンデイが魔導士ギルドというものに強い憧れを抱いていた事で、咄嗟についた嘘が原因だったという。

俺が事前にミストガンから聞かされていたのはこの辺りの流れだ。ニルビット族がどうだという話は流石に知る由もなかったが、『化猫の宿』が幻によつて作られたものであるという事だけは知っていたのである。

「そんな話聞きたくない！バスクもナオキも消えないで!!」

ウエンデイが耳を塞ぎ、泣きじゃくって目を瞑る。

無理もない事だろう。

突然、家族が皆幻だったなんて言われてしまえば……

特に、俺達滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーはそういった話に弱い自信がある。

家族を失う事、そして、その家族がいけないものとして扱われ信じてもらえない事。

どれだけの傷になっているか……

でも、この幻はそういった「幻」じゃない。

心無い人が否定するために使う言葉なんかじゃなくて、ウエンディを……大切な家族を思いやっつての優しい嘘だ。

目を瞑ってちやいけなない。

ウエンディの肩をそつと掴み、手を耳から除けてやる。

「ウエンディ、よく見ろ。よく聞け……じいさんは笑ってるぞ」

そう言つて頭を撫で、じいさんの方を指さす。

その先にいた老人の顔は満ち足りた笑顔をしていて、まるで孫の門出を祝う好々爺のようだった。

……いや、「まるで」じゃなくて、その通りか。

姿は幻でも、その絆は本物の家族だったのだから。

「ウエンディ、シャルル……お前たちにもうワシらは必要ない。新たな仲間がいるのじゃからな」

老人はウエンディの後ろの俺達一人ひとりの顔をゆつくりと見渡して、最後に俺を見た。

「まさか、ニルヴァーナを一人で壊す者が現れるとは思っておらんかった……お主の力は危うい物じゃ。じゃが、その目、家族を想うその目をしているウチは大丈夫じゃろう……」

危うい力、か……

だが、じいさんの言う通り、何のための力かを見誤らなければ問題ないだろう。

そんな風に考えていると、じいさんは少し溜めを作つてこう言つた。

「ウエンディとシャルルを頼みます」

俺は何も言わずに頷いた。

本来ならミストガンに言え、と言いたい所なのだが、ヤツも近いうちに居なくなつてしまうであろう事を考えれば、俺が引き受けるのは当たり前的事だ。

それに、そんな理屈なんて抜きにしても、このいじらしい背中を見ていると、俺にも妹ができたように感じられて世話が焼きたくなつて

しまう。

つまりはまあ、言われるまでもないという事だ。

徐々にじいさんの体も透けてきている。

最後の時が近いのだろう。

「ウエンデイ」

「……はい、トウヤさん」

ウエンデイは未だに涙を滝のように流している。

それでも、無理やり嗚咽をかみ殺して笑顔を作った。

「マスター……今までありがとう……!」

△・△ △ △ △

「……ウヤさん、トウヤさん!起きてください!」

ウエンデイの事を思い返していたら、人生で初めて体験する快適な馬車という物の中で眠ってしまったらしい。

何か妙に焦っているウエンデイの様子を見るに何かトラブルが起こったらしい……ってこの匂いは、十数人に囲まれてる?

ああ……完全に気が抜けてたな、全く、俺という奴は。

「すまん……すぐ片付ける」

すぐに馬車を飛び出して、外の状況を確認する。

1、2、3、4……15人か。

何となく紋章を見たことがある程度の闇ギルド崩れが相手だ、問題なくやれるだろう。

「……来い」

▼ウエンデイ視点

「無事終わってホッとしました……」

『妖精の尻尾』に加入してからの初めての仕事だったから、凄く緊張してトウヤさんをお願いして付いてきて貰ったけど、途中怖い人たちに

襲われた以外は特に問題もなく、治療もすぐに済んであつさりとマグノリアへ帰ってこれてしまった。

道中の襲撃もものの数分で簡単にトウヤさんが倒してしまつて本当に凄いと思つたものだ。特に派手な魔法を使った素振りは無かつたのに、次々と敵が倒れていく様は魔法というよりショーや手品の類いかと思つたほどだ。

トウヤさん本人は「慣れてるだけだ」と謙遜していたが、これからは私も戦えるようになっておきたいし、トウヤさんに鍛えてもらえないかなあ……なんて。

「ん」

それだけ呟いて私の頭をガシガシと撫でてくれるトウヤさん。

今はもう馬車も降りてしまつて、クエスト終了の報告をする為にギルドへ向かっているところだ。シャルルはアルマと何か話しているようだし、トウヤさんと二人きりで話すというもしかしたら初めてかもしれない状況に少し戸惑っている。

テンションが高くて口数が多い時じゃないトウヤさんのこういう呟きの意味を全て十全に理解する事はまだまだできないが、何となくこういうやり取りを楽しんでいる自分がいる気がする。特にこうやって頭を撫でてもらうと、心の奥がホツとして、じんわりと温かくなる。

ジェラールとはまた違うお兄ちゃんの間感というか……

ううん、そんな事より、今はトウヤさんにお礼を言わなきゃ！

シャルルがトウヤさんになにか警戒しているらしくて、なかなか2人になれず、きちんとこれまでの事のお礼が出来ていないのだ。

今、シャルルはアルマとのやり取りに夢中になつているようだから、ここできちんと済ませないと！

「あ、あのトウヤさん！その、今日の事も、ニルヴァーナの事も本当にありがとうございました！妖精の尻尾のみんな、優しい人ばかりで、グランディーネの事も滅竜魔法の事も信じてくれて……本当に嬉しい事ばかりで！トウヤさんのおかげです、ありがとうございます！」

ペコリペコリと頭を下げる。

『化猫の宿』の皆がいつてしまったのは寂しいけど、今の私はとても幸せだ。

最後にああやってお別れができたのはニルヴァーナを壊してくれたトウヤさんのおかげだし、こうして騒がしくも楽しい新たな家族と出会えたのも、『妖精の尻尾』に誘ってくれたトウヤさんのおかげで……

私の中のおふれんばかりの感謝を、こんな言葉だけで伝えられるとは思わないけど、ほんの少しでも！

「……ありがとう」

トウヤさんは何度も頭を下げる私を静止して、再びぐりぐりと頭を撫でてそう言った。

どうして「ありがとう」なんだろうか……？

お礼を言っているのは私の方なのに。

そう疑問に思っていると、トウヤさんは少し頬を掻いて早足でギルドの方へ歩きだしてしまった。

「全く、いけすかない男よね……」

そう声を掛けてきたのは少し後ろを歩いていたはずのシャルルだ。

いつの間にかアルマ共々追いつかれて、先ほどのやり取りも聞かれていたらしい。

「もう、そんな風に言っちゃいけないでしょ、シャルル！」

私が叱ってもどこ吹く風で、シャルルは続ける。

「あの変質者、あんたが依頼者の治療をしてる間どこか行ってたでしょ？あれ、なにやってたと思う？」

ああ、そういえばいなかったっけ？

集中していたからちやんと意識してなかったけど、何をしていたんだろうか。

「あの男、今回の騒動になってた魔物を一人で狩ってたのよ！……何と言うか、あざといというか、そういう点数稼ぎ的な所がいやらしいというか……聞いているの、ウエンディ！」

そうだったんだ……

またお礼を言わなきゃいけない事が増えちゃったなあ……

「まあそう言わないであげてください……天然で色々やっちゃう人ではありますが、話さないのが悪いだけで、本人的には効率がどうか考えてただけですから」

アルマのフォローが入るも、「なんかそういうのも含めてあざといわ！ぜったいにウエンデイの事をいやらしい目で見てるもの！」とシャルルは納得していないようだ。

「ちなみに、さっきの『ありがとう』は多分、妖精の尻尾を気に入ってくれてありがとうとか、そこまで嬉しそうにしてくれてこっちも嬉しいとか、そういう色んな感情をすつとぼして『ありがとう』って捻りだしちゃっただけですよ、多分」

なるほど、流石はアルマ先生だ。

私も早く色々分かるようになりたいなあ。

そんな風に考えていると、アルマが「あ、でも」と前置いて「お礼を言ってくれるウエンデイが可愛くて、ウキウキでお礼を言っちゃっただけっていうパターンもトウヤならありえますね」と言い放った。

「か、かわっ……！」

なんだか、顔が熱いような……

頭を撫でられた時とは違う熱を感じてしまう。

これは一体……

ちなみに

「やっぱり変態じゃない！ウエンデイ、あんな奴にもう近づいちゃダメよ！」

というシャルルの声は私には届いていなかった。

間話③

28話「宿命」

▼トウヤ視点

ウエンデイたちが『妖精の尻尾』フェアリーテイルに入ってから早くも数日が過ぎた。彼女たちを連れて帰ってきたその時こそ歓迎会だなんだと大騒ぎになったが、今ではもう既にウエンデイ達がいる光景が当然のものとして馴染んでしまっている。

歓迎会云々はそれを口実に飲み食いしたかっただけではないか、とは思うのだが、ウエンデイがウチに馴染んでくれたのは本当の事なので問題はないだろう。

このギルドはなんとというか、そういった部分については本当に寛容というか、懐が広い。どんな相手でも受け入れ、一度内側に入った人間の為なら何を投げうってでも節介を焼く。

世間ではお騒がせギルドとか言われているらしいが、俺はそこを含め、『妖精の尻尾』の体質を心底誇らしいと思っている。

幸いな事に、その気質はウエンデイにとっても受け入れやすいものだったらしく、出会った当初の引っ込み思案は大分薄らいでいるように感じた。ギルドでも何度か、彼女の明るくて可愛らしい笑顔を見る事ができていて嬉しい限りだ。

うん、なんて言うか、本当にウエンデイは可愛いな……

ウチにしては珍しく、小動物的な可愛さというか、守ってあげたくなる系というか。

貴重な癒し枠だ。

こないだ一緒の行ったクエストも、本当に『妖精の尻尾』かと思う程に常識的かつ穏やかに依頼を完遂する事が出来た。

常識人かつ癒し枠かつ治癒魔法の使い手とか、絶滅危惧種すぎて保護しなきゃと思うレベルである。なんて貴重なんだ。

今後の仕事は是非ウエンデイと一緒にいきたい。

何気に、解呪のプロフェッショナルと治癒のプロフェッショナルと

いう組み合わせになつてゐる事からも、俺達2人で解決できない依頼は単純に俺の戦闘力が足りないという可能性以外は考えられない相性の良さだし。

常識人枠という事で言うところルーシイも筆頭に上がる……はずだ。

しかし、彼女はなんというか……色々振り回されてツツコミを入れてゐる光景が板に付きすぎて、あまり常識人のイメージがないのである。

本人に言えばあんまりにも酷い言いざまに鋭いツツコミを入れてくれるであろう……ほらね？

違うんだ、ホントにあの子はいい子なんだよ？

『六魔將軍』の女が持っていた鍵を受け継いだらしく——これで9本目の黄道十二宮らしい——その契約の現場にたまたま居合わせてしまったが、その際、通常は「く体」と数える星霊を「く人」と呼んでいた。

後で聞いてみたら、「聞いてたの!？」と少し照れた上で事情を話してくれたのだが、どうやら、六魔の星霊魔導士は星霊をモノのように使い捨てる酷い人物だったようで、その事で思うところがあつたからとか、レオ——つまりロキとは既に人として接してきたからとか、そんな経緯だつたらしい。

が、そんな事より結局は「たくさん友達ができて嬉しいんだ」と言つた笑顔が彼女の本質であり、星霊を「く人」と数える気持ちの根源なのだろうと思う。

こういう子の元に貴重な星霊が集まつてくるのは、なんと言うか……嬉しい。

ルーシイといえ、もう1つ嬉しい知らせがあつた。

何と、『幽鬼の支配者』の時には色々あつたルーシイパパが、つい最近ルーシイに手紙を寄越したらしいのだ。

どうやら、俺が渡した資料は役に立てて貰えたらしく、穩便に大規模事業からの撤退を行えたようである。

今では、商売を志した当初の熱意と誠実さでもって、小さくも人々の役に立つ商談をまとめて回つてゐるらしい。

勿論、これまでよりも売り上げ規模は落ちるため、屋敷こそ手放してはいないようだが、お手伝いさんなどの数は大分減ったみたいだ。それにしたって、次の就職先はきちんと斡旋したという話だし、残った人たちも「お嬢様が帰ってくる家は綺麗にしておきたい」と言っ張切り切っているらしい。

ルーシイの実家に関わる人達が皆健やかに暮らせているという事実は勿論嬉しかったが、それ以上にその事を嬉しそうに話すルーシイの笑顔が、俺にとっては何よりも喜ばしい事だった。

だがしかし、皆がみんな幸せという訳にはいかないようで、今のギルドには浮かない顔をしている人間が何名か…

まずは目の前でずっと同じ皿を拭いているミラだろうか。

原因は分かりきっているし、だからこそ俺から言えることなんてないのだが。

「ミラ」

「あつ、ごめんなさい……私、さつきからボーっとしてるわね」

今俺達がいるのは、ギルドメンバーの憩いの場である酒場のカウンターである。

俺はと言えば、先日のウェンディとの依頼の報酬が思いの外高く、しばらくクエストをこなさなくて良いという喜びに胸を躍らせ、昼間から酒場に入り浸っている訳だ。

とは言っても、酒は飲めないから、ちびちびと廃棄予定の刀剣類をつまんでいるだけのだが。

カウンターを挟んで向かいにいるミラはと言えば、いつも通り酒場で給仕の仕事をしている訳だ。

他のヤツらに呼ばれれば普段の笑顔でテキパキと仕事をこなすのだが、俺の前に戻ってきて手が空くと途端に何かもの思いにふけたような表情となってしまう。

それだけ俺には心を許してくれていると思えば嬉しいことではあるのだが……

「いや、いい……大丈夫か？」

「ふふ、トウヤにはお見通しね……やっぱりこの時期になると、ね？」

そりやそうだわな……

まだ2年しか経っていないんだ……リサーナが死んでしまっ
たら。

リサーナとはミラとエルフマンの妹の事だ。

ギルドでは特にナツと仲が良かったが、俺にとつても『妖精の尻尾』
に流れ着くきっかけを作ってくれた恩人である。

今からだいたい6年前の事である。

親であった斬竜セルバルドが居なくなってしまうって、色んな所を旅
していた俺はその道中にやたら大きな卵を発見したのだ。なんと
く気になって拾ったその卵から産まれたのが喋るネコだった時は流
石に腰を抜かしたが。

その子猫に「アルマ」と名前を付け、寂しい1人旅が、1人と1匹
の珍道中となつてから1年が経った頃——つまり今から5年前、マグ
ノリアへとやってきた俺はアルマにそっくりな喋るネコと戯れる少
年と少女に出会う。

それがハッピー、ナツ、そしてリサーナだったのだ。

世にも珍しいネコを連れているという共通点を持つ俺達はすぐに
意気投合し、放浪の身である事、ナツと俺が同じ境遇であるという事
が分かると、俺は自然に『妖精の尻尾』に加入していた。

それまで他者を警戒してばかりだった俺が、この時ばかりは大して
疑いもせずにその提案を受け入れたのは、自分とダブるナツが居た事
だけではなく、きつとりリサーナの太陽のような明るさがあった事も一
因だったのだと思う。

そんなリサーナは、ストラウス一家で受けていたクエストの最中、
全身テイクオーバー接収の制御に失敗したエルフマンの暴走を止めようとして

……

それからオドオドしてはいても誰より優しかったエルフマンは誰
よりも強さを求めるようになり、抜身のナイフのような鋭さを持つて
いた魔人ミラジエーンは今のような穏やかな女性に変わってしまった。
た。

俺は勿論、今の2人も、昔の2人も変わらず家族として愛している。

しかし、時折、今の彼女たちをみて痛ましくなる事があるのだ。
俺はリサーナが死んだ現場に立ち会う事が出来た訳ではないが、
「家族を喪う」というその一点で酷く取り乱し、しばらく仕事も手に付
かないありさまになってしまった。

今思い返しても弱い自分が嫌になってしまいが、とにかくそれだけ
落ち込んだのである。

そして、今でも、エルフマンとミラジェーンの綺麗な白髪が揺れる
と、ふとした瞬間に太陽のような笑顔を思いだしてしんみりしてしま
うのだ。

俺でこのありさまである事を考えれば、ミラ達の気持ちはと云えば
……

「……今日は休め」

「ううん。今はこうやって動いてる方が気がまぎれるから」

そんなもんか……

「じゃあ……」

「ふふ、珍しいわね、トウヤがお酒だなんて」

そういう気分の時もあるってだけだ。

働きたがってる奴もいる事だし、注文しただけの事に過ぎない。

「……ありがとね」

だから、そうボソツと呟いた言葉は俺には聞こえていないのであ
る。

△・△ △ △ △

どうやらミラは気を使ってくれたようで、運ばれてきた酒は大分度
数を低くしたものだっらしい。

そのおかげか、ほろ酔い気分でマグノリアを歩く事が出来ている
が、どうにも新鮮な感覚だ。カナなどはいつもこのような感覚なのだ
ろうか？

摂取しているアルコールの量で言えば恐らく数百倍にはなりそう
だが……

高揚感から余計な事を言ってしまうそうだな、と思っていると、今一番余計な事を言っただけな女性顔が目に入ってしまった。

それは最近ギルドで浮かない顔をしている奴パート2のエルザだ。おっと、目があったからには流石に誤魔化して避ける訳にはいくまい。

「おい、大丈夫かトウヤ。顔が赤いように見えるが……珍しいな、おまえが酒など。ひとまずこっちに来い、フラフラ歩いては危ないだろう」

そう言っただけの手を引くエルザ。

近くの公園に入り、そこに設置されたベンチまで半ば強引に連れてこられた方がいいが……

「なんで膝枕……気持ちいいけど」

おっと、口が滑った。

先に座って膝をパンパンと叩いたエルザに「何やってんだコイツ」と思ったが、あっさりとその誘惑に負けている俺もよっぽどであった。

「少しは楽になるだろう？」

フツと笑うエルザは本当に綺麗で……だからこそ、その表情が次の瞬間に曇ったものにかわってしまったのが残念に思えた。

「なあ、トウヤ……その、ジエラルの事だが……本当はあの時、会っていたんだらう？」

「ああ……」

「どうして……どうして私に言ってくれなかったんだ？」

どうして、か。

うーん……

そう言われてもな、と思いつつながら、エルザの両頬をグイツと持ち上げて無理やり笑顔を作らせた。

「ひゃ、ひゃにをしゅるー！」

「エルザに泣いて欲しくなかったから、だと思っ……でも、余計なお世話だった」

パツと手を放して下からエルザの頭を撫でた。

どういう意味だと怪訝そうな顔をする彼女に向け話を続ける。

「多分、エルザやシモンが言う『昔のジエラール』に戻ってた、と思う……だから、心配いらない」

「それは本当か!？」

「ああ……万一の事を考えてあそこからは逃げてもらったが、約束したよ……落ち着いたら必ずもう一度会いに来るって。それまでは贖罪の旅を続けるんだと思う」

そうか、そうかと何度も呟いてはポロポロと涙をこぼすエルザ。

全く、俺が「泣いて欲しくない」っていったの聴いてなかったのか、コイツ？

ってまあ、今回のこれに関してはいいか。

嬉しい涙だもんな。

それに、ただ泣いているだけではない。

「やっぱり、笑ってる方が綺麗だ」

そつと、エルザの頬に手を伸ばす。

頬の肉が上がっている硬さに触れて、視覚と触覚でもって彼女の笑顔を感じた。

「馬鹿者……酔い過ぎだ」

△・△ △ △ △

次の日。

俺はギルド酒場の一角で悶えていた。

これまで酒を呑んだのは片手で数えられる程度の回数ではあるが、その度に記憶が飛んでいた。しかし、今回は記憶が残っている。

楽しい経験ができた事に感謝すると共に、あんな羞恥経験を記憶に留める羽目になった事についてミラに恨みごとの1つでもぶつけて

やりたい気分だ。

なーにが「笑ってる方が綺麗だ」だよ、そういうのはロキにやらせろ!!

「どーしたんだい、あんた。今日は一段と憂鬱そうじゃないか」

そう声を掛けてきたのは、いつものように樽ごと酒をかつ喰らっているカナだ。

これでも普段の事を想えば若干ペースが遅いというのだから、本当に俺とは異なる生物なのではないかと疑わしく思えてきてしまう。

どうして、酒のペースが遅いのかと言えば、つまるところ、コイツも最近調子の悪いギルドメンバーの1人であるという事だ。

カナはカナで不調の理由が分かりやすい。

恐らく、間近に迫ったS級魔導士昇格試験について思いを馳せてナーバスになっているのだろう。

俺としては今年こそはカナが合格すると思っているのだが、本人からすればやはり不安なようだ。

「ふふ、トウヤね、昨日少しかだけお酒を呑んで、それで珍しく記憶が残ってるから落ち込んでるみたい」

カナへと新しいつまみを運びに来たミラが、心底愉しそうにカナに密告しやがる。

「はあ!? あんた、どうしてそんな大事な事を私抜きでやってんだい!」

そんな事言われても、その場にいなかった人間を誘う術などないし、そもそも昨日の雰囲気的にカナでは合わないだろう。あと、カナが居たら、記憶が飛ぶまで飲まされていたに違いない。

その後はしばらくカナの恨み言を聞き流しながら、適当なものをつまんで過ごしていた。

鬱陶しい事この上ないが、ひとまず明るい雰囲気話させているようだったので、変に思い詰められるよりはこっちの方がいいか、と少しほっとして俺も会話——と言うには一方的に話しているのを聞いていただけだったが——を楽しんだ。

そんな矢先、大きな鐘の音が街中に響き渡るのを感じ、その鳴らし方に驚く事になった。

「ギルダーツが帰ってきた!!」

少し離れた所でナツがそう叫ぶ。

そう、この普段とは少し異なる鐘の叩き方は、正真正銘『妖精の尻尾』最強の男で、俺の師匠で、そしてカナの——である、ギルダーツがマグノリアへと帰ってきた事を知らせるため専用のものなのだ。

今まであの人が姿を見せなかったのは、S級クエストを超えるSS級クエスト、それを更に超えた10年クエスト——10年間誰も達成できなかった依頼をそう呼ぶ——を更に超える100年クエストに出かけていたからである。

いやどんだけだよ、と思ってしまうが、それだけの実力がある魔導士なのだ。

俺ではSS級はともかく10年クエストでも受ける許可が下りるかだろうか……いや、下りても面倒くさいから行かないけれども。

では、この特別な鐘の音はそんな過酷な仕事に出た男の帰還を祝うものか、と聞かれれば実は全く異なる。むしろこれは警報と言った方が近いものなのである。

というのも、ギルダーツの使う魔法は、あらゆるもの——建物は当然、生き物も魔法さえも粉々に砕いてしまうからだ。その上、本人の性格がもの凄く適当な事もあって、一度、街の入り口からギルドまで1本の横穴をあけてしまったという逸話すらある。

その為、このマグノリアには「ギルダーツシフト」なるものが存在しており……

『町民の皆さん!速やかに所定の位置へ!!繰り返します……』

外では空飛ぶ魔法のメガホンから、このような注意喚起がなされている。

人々は大声を上げて逃げ惑い、街は轟音を上げて割れていく。

そう、物理的に割れていくのだ。

要するに、街の入り口からギルドまで穴をあけて突っ切られるくらいなら、街を可動式にしてギルダーツに対応してやろうと考えた訳なのである。

断言しよう。

マグノリア市長はアホである、と。

「お嬢さん、確かこの辺りに妖精の尻尾つてギルドがあったはずなんだが……」

ギルダーツはギルドに入つて早々にミラに向かつてそう声を掛けた。

「ここがそうよ。それに私、ミラジュエーン」

「ええ!?随分変わったなあ、オマエ!!つーかギルド新しくなったのかよーっ!!」

ギルド最強の威厳など微塵も感じられない程のアホな表情で驚きの声をあげるギルダーツ。

あー、でもそうか。

つい最近建て直したばかりのギルドは勿論、ミラが変わつてしまつたのが2年前で、ギルダーツが100年クエストに出たのが3年前だから、そちらの事も……というかりサーナの事も知らない訳だ。

その後はナツがいきなりギルダーツに挑みかかつていたり、マスターに100年クエスト失敗の報告をしたりと色々としていた。

ギルダーツ程の男でも失敗するクエストがある事への衝撃や、ナツの鮮やかな撃沈ぶりにも思うところは多々あるが、俺が気になっているのは、隣でなんでもないように見せかけて酒を呑んでいる女の子の事だ。

「……何見てんだい?」

「別に?」

素直じゃない弟子の頭に手をやり、ガシガシと髪をかき混ぜてやる。

「ちよつと、子ども扱いしてんじやないよー!」

不貞腐れて抗議する姿はまだまだ幼さが見える。

普段はあんなに妖艶な雰囲気醸し出しているというのに、こういうギャップを見せてくるのだから、女の子というのはズルい生き物だ。

「頑張ろうな」

「……うん」

そんな風に頷いて、カナはまた酒を煽り始めた。

S級試験直前のトレーニング案を組んでやらないとなあ……

俺との特訓の成果は既に十二分に出ているとは思うのだが、カナはこれで意外と小心者というか、チキンというか……そういう精神的に脆い部分があるから、それを補うための口実を作るメニューを考えるべきだろう。

とか考えていたのだが、不意にギルダーツから声がかかった。

「ナツ、あとトウヤー！後でオレン家来い。みやげだぞ〜っ」

「あ、ああ……」

そう言うと、ギルドの壁を突き破って去ってしまったのだった。

思わず苦笑いしながら横を見ると……

「……バカ」

とだけ言われて脛を軽く蹴られてしまった。

「間が悪いよ、師匠……」

△・△ △ △ △

ナツはすぐにハッピーを連れてギルダーツの家に向かったようだが、俺はあの後カナのご機嫌取りに精を出す羽目になってしまったので少々遅れてしまった。

大雑把な人だから特に気にはしないだろうが。

急いで向かっている最中、ギルダーツのボロい家が見えてきた時、なぜか全力で駆けていくナツ、そしてそれを追うハッピーとすれ違ったが、一体何があったのだろうか？

「師匠。みやげって？」

「おお、トウヤも来たか……まあそう急ぐなって。お前、去年の試験でS級になったんだって？エーテリオンを食ったとか、古代兵器を斬っ

たとか、無茶苦茶やってるらしいじゃねえか」

それからはお互いの3年間について簡単にだが語り合った。

師匠の話の約半分ほどが土地ごとに出会った女の話だったのは少し……いや大分引いたが。

そして、「みやげ」というのはどうやらみやげ話だったようで、その肝心の部分に差し掛かろうという時、ギルダーツはいきなり体に巻いたマントをはだけだした。

そこから現れたのは傷だらけの体と、義肢になった左手、左脚であつた。

クエストの失敗くらいでは、何か難しい事態が起こったのだろうと楽観的に思えたが、まさかよりもよって、あのギルダーツが戦闘力において撤退を選ばざるを得ない相手がいるとはな……これには流石に驚愕が隠せなかつた。

「誰に……？」

「ナツのやつにも言ったんだがな、黒いドラゴンだ……ありや人類の敵だ」

黒い、ドラゴン……

そうか……そいつが……

「殆ど一瞬で左腕と左脚を持っていかれた。人間では勝てないだろうよ」

ギルダーツが言うくらいだ。

相当な実力を持った生き物なのだろう。

だが……

「お前はあんまり驚かないんだな。ナツのやつあ、よつぽどショック受けたらしくて走っていつちまったが」

ああ、それですれ違ったのか。

いやいや、俺だつて驚いてない訳じゃないんだ。

でも、なぜか、そんな事より、何か因縁めいたものを感じていて、それどころじゃないってだけで。

「別に……俺が師匠より強くなればいいだけの話だろ」

人類の敵で、家族の手足を奪った奴だろ？

なら俺の敵だ。

それに、竜はもつと賢くて優しい生き物なんだ。

そんなドラゴンの風上にも置けない野郎は俺がぶつ倒さなきゃならない。

何故だか、それが俺の使命なのだ、ふと思うのである。

「言ってくれるじゃねえか！なら、久しぶりに組手でもするか！」

「ああー！」

この時感じた漠然とした予感、は正しく的中し、この「黒い竜」は俺にとって宿命の敵となっていくのだが、それを語るのももう少し後にするとしよう――

エドラス編

29話「異世界へ」

▼三人称視点

「シャルル〜!」

普段通りの喧騒、『妖精の尻尾』フェアリーテイルのギルド酒場にて。

とある青いネコが、リボンのまかれた魚を掲げて、白いネコに近づいていく。

その表情は嬉しそうな、照れくさそうな、見ているだけで、青いネコの気持ち分かるようなものであった。

「これ……オイラがとった魚なんだ。シャルルにあげようと思って」

今度はモジモジとしながら魚を体の前へ差出し、白ネコ——シャルルに手渡そうとする青ネコ——ハッピー。

近くで見えていたルーシィやウエンデイもその顛末に興味を持って見つめているが、シャルルの返事は案の定そっけないもので……

「いらないわよ。私、魚嫌いな……私に付きまとわないで」

シャルルはそう言って、プイツと顔を背け、それどころか席から立ってギルドを出て行ってしまふ。

あんまりな言い方にウエンデイが苦言を呈すも、それもどこ吹く風という様子だ。

——何が「幸せ」ハッピーよ。何も知らなくせに……

シャルルの心の中はそんな怒りに満ちていた。

自分が何者かも分かっていないようなオスネコでは、自分のパートナーを守る事は出来ない。

自分は違う。

自分は何としてでもウエンデイを守ってみせる。

そんな悲壮な覚悟と、羨望にも似た軽蔑がシャルルとハッピーの間に埋めがたい溝を構築していた。

しかし、そんな事には気づけないハッピーは、健気にもその白い背中を追うのであった。

▽・▽▽

そして、ネコのケツを追っかける男がここにも1人。

「違うー………こいつもー………こいつも!!」

今は無き『幽鬼の支配者』から『妖精の尻尾』へと移籍し、その活動の実態はマスターであるマカロフしか知らないものの、秘密裏に二重スパイとしても暗躍する実力者、鉄の滅竜魔導士、ガジル・レッドフォックスだ。

そんな彼には現在、ある悩みがあった。

自分には何かが足りない。

しつくりこない。

そう、それは――

「なぜオレにはネコがいねえ……?」

火竜ナツには青猫ハッピー、天竜ウエンディには白猫シャルル、斬竜トウヤには桃猫アルマ。

ラクサスはともかくとして、『妖精の尻尾』において、滅竜魔導士はあの奇妙な喋るネコとセットにされる事が多い。

それが自分はどうだ。

いつも1人、あの翼で空を飛んだことなどない。

それを残念に思ったことなど、正直に言えはないのだが、それにしても他の奴らにあつて、自分だけに無いのは何か癪だ。

それ故、ガジルはトウヤ達がウエンディとシャルルを連れ帰ってきた次の日から、仕事のない時は必ずこうしてマグノリアの街へと繰り出し、自分のパートナーとなる喋るネコ探しに奔走するようになった。

しかし、実際いくら探しても喋るネコなど見つかりはしない。

それどころか、そもそも自分の強面ではただのネコにすら懐かれないのである。丁度現在も不用意に近づいたネコに手痛い攻撃を喰らい、顔面に幾本もの引っかけ傷を作っていた。

いいや、目つきの鋭さで言えば斬竜だってそれなりのモノだ。

アイツにネコが居て、オレにネコがない言い訳にはなりはしない、と自分を奮起させ、新しい路地へ入ろうとした時の事だった。

「その傷どうしたの？」

シャルルを追いかけたものの、再び心無い言葉を投げかけられ傷心中のハッピーが、結局渡せなかった魚を抱えながらガジルに声を掛けたのだ。

この時、ガジルに電流走る――

自分のパートナーが見つからないのは闇雲に、なんの指標もなく街をさまよっていたからなのではないか。

蛇の道は蛇。

喋るネコの道は喋るネコである。

つまり、この青猫にネコ探しを手伝わせるのだ！

サラマンダー 火竜に借りを作るようにイラつくが、背に腹は代えられないのである。

長時間街を駆けずり回り、疲れ切ったガジルの頭には、なぜかそれがとんでもない名案に思えてしまった。

「青猫オ!!オレに付き合え!!」

ガジルはそう叫んで、ハッピーの両脇に手を突っ込み、抗議の声にも耳を傾けず意気揚々と歩きだした。

――待ってろ、オレのネコ!ギヒツ!!

▼ウエンデイ視点

もう、シャルルったら。

ハッピーはシャルルに喜んでもらいたくて色々してくれてるのに、あんな言い方しなくなつて……

『妖精の尻尾』にお世話になるようになって、私は凄く楽しいけれど、シャルルは何だか張り詰めた表情をしている事が増えた気がする。元々みんなで仲良く大騒ぎするって性格ではないけど、それにしたつて余裕がないように感じてしまう。特にハッピーと話している時はそれが顕著だ。

この機にちやんと話しておいた方がいいのかもしれない。

そう思つて、私はその場にいたルーシイさんに一言断りを入れてか

ら、ギルドを出ていったシャルルを追いかけ始めた。

それに、今日はトウヤさんのお家にお呼ばれしている。

まだ予定の時間まで余裕はあるが、シャルルを探しておくに越した事はないだろう。

何やら、私に会わせたい人がいるんだそうだけど、それってもしかして……

って、あ。

あそこで歩いているのシャルルだ。

重たい雲がもたげて、今にも一雨振り出しそうな空の下、マグノリアを走る。

「シャルル！ やつと見つけた！」

「ウエンデイ……」

すぐ近くまで近寄って、その場でしゃがみ込んでシャルルと目線を合わせる。

「ねえ、シャルル。私たち、ギルドに入ったばかりなんだから、もっとみんなと仲良くしなきゃダメだと思うの」

「必要ないわよ……私はあるが居ればそれでいいの」

でも、私の思いはシャルルには届かず、そんな寂しい返事をされてしまう。

私の事を大切に思ってくれるのは嬉しいけど、そんなに狭い世界で生きていたって仕方ないのに……

マスター——『化猫ケツシエルターの宿』の方だけど——が言っていたように、私たちには新しい仲間ができた。

私にとってはもう『妖精の尻尾』のみんなは家族みたいなものだ。みんなとっても優しく、楽しくて、温かい——

私の事を大事に思ってくれているのなら、私の大切な人達も大事に思っただけ。

そして、シャルルにもギルドのみんなを新しい家族なんだって思っただけ。

それが私たちを受け入れてくれた『妖精の尻尾』への恩返しであり、そして何よりシャルルの為にもなると思うから。

「もおっ！またそーゆー事ばかり……」

でも、今焦って言い含めてもダメなのかもしれない。
ゆっくりと分かっていってもらうしかないのだろう。

もしくは、何かきつかけのようなものがあれば……でもそのきつかけを作るのは私ではダメなのだとも思う。私が与えたきつかけでは、結局私の事しか見ていないって事になっちゃうから……

「……とりあえず、ちよつと早いけどトウヤさん家ちに行こつか。降り出しそうだし……ね？」

「……そうね。でも、ウエンディ！あいつの家に行くなんて、ホントは反対なのよ、私！何か変な事されそうになったらすぐに逃げなさい。分かってるわね!!」

もうっ！

トウヤさんはそんな事しないよ!!

▼トウヤ視点

「アルマ」

家の前で2つの足音が止まる音が聞こえた。

恐らくウエンディ達が来たのだろう。

「はい、開けてきますね」

アルマがとてとととと玄関まで向かい、エーラ翼を生やして扉を開けて出迎える。

外の空気が入ってくることで、その匂いから一雨来そうな気配を感じたが、ウエンディに合わせようとしていた人物もすぐにやってくるだろうし、雨が止むまでウチに居て貰えばいいから、問題はないだろう。

「お邪魔します、トウヤさん！」

「邪魔するわよ」

少し緊張した雰囲気でおずおずとリビングに上がってきたウエンディと、尊大な態度で最低限の礼儀として挨拶をしているだけのシャルル。

俺とアルマも相当な凸凹コンビだと思っていたが、この2人に比べれば大分マシな方だと言えるな、と思えるほどの雰囲気の違いで少しおかしくなってくる。

アルマを手伝って2人に出すお茶の用意をしている間、ウエンデイがキョロキョロと部屋を眺めているのを背中越しに感じた。

もしかしたら、男の家に入るのは初めてなのかもしれない。

来客にあたり、アルマがきちんと掃除してくれているはずだから、おかしなものは置いていないはずだが、あまり熱心に見つめられると恥ずかしくなってきたりしてしまうな……

この家に来るのは、たまに家事を手伝いに来てくれるミラか、修行終わりの休憩に入り浸っているカナくらいのもので、女の子を招いた経験というのは多くない。シャルルの目線があると思うと、急にもてなしとしてのレベルを試されている気になってきて、俺まで緊張してきた。

「なんで2人とも固まってるんですか？」

「あはは……」

硬い笑い声がハモった事がおかしくて、ウエンデイと目を合わせ、今度は自然に笑う。

シャルルもアルマもなんだかよく分からないという表情をしているが、人間組の緊張感が霧散した事は感じ取ったのだろう。

「それで？ 私たちに会わせたいっていう人物は誰な訳？」

そんな風にシャルルが問うてくる。

言ってしまうでもいいが、どうせならサプライズ的にどーんと会わせてやりたいものだが……

そんな益体もない事を考えていると、最後の1人が到着した気配を感じる事が出来た。

妙にタイミングのいい奴だ、と思いつつながら、今度はアルマではなく俺が玄関に向かう。

扉の鍵を開き、その人物を招き入れ——ようとして、一旦やめる。

「その覆面取ってけ……あと、タオル」

普段通りに覆面をつけっぱなしなせいで一見して誰か分からない

状態であるその男に苦言を呈す。

また、ウエンデイがウチに来てからの短い間に雨が降り出してしまったようで、ところどころ才服も濡れていたのでタオルを貸してやる。

「すまない、助かる」

ある程度身支度が整ったのを確認した後、今度こそリビングまで連れて行ってやる。

ガチャリとドアを開くと、ウエンデイはこちらを見て、飲んでいた紅茶のカップを取り落としそうになる程驚いて目を見開いた。

「ジェラール!!?」

そして、涙を流しながらジェラール……ミストガンへと駆けよって抱き着いた。

「久しぶりだな、ウエンデイ……会えて嬉しいよ」

△・△ △ △ △

ウエンデイが落ち着くまで少し待って、ようやく話をし始める事となった。

といつても、ここからの話に俺の出る幕は無い。

ジェラールがどういう人物か、そしてシャルルに関する事、それがジェラールの口から語られるだけなのだから。

「まず私は今、妖精の尻尾のミストガンと名乗っている。2人の時はいいが、念のため人前ではそう呼ぶようにしてほしい」

「う、うん、分かった……でも、じゃあ、あのジェラ……ミストガンみたいな人は誰なの?」

あそこまで瓜二つで、名前まで同じ人物を他人の空似で済ます訳にはいかないだろう。これは当然の疑問だ。

「そうだな……私はこの世界の人間ではない、といえれば分かってもらえるだろうか。エドラスと呼ばれる並行世界からやって来たのだ。そして、この世界における私に当たる人物が……」

「あのジェラール……」

今更こんな嘘をつく必要などないと分かっているからか、ミストガンへの信頼からか、こんな信じがたい説明に対して、特に疑問を抱くことなく納得するウエンデイ。

それに対して妙な反応をしているのはシャルルだ。

「エドラス!? それって……」

「シャルル……? エドラスの事を知っているのですか?」

アルマの言う通り、先ほどからのシャルルの反応はエドラスについて知っている人物の反応だ。意味の分からない言葉を聞かされて戸惑っているとか、そういう類いではない。むしろ、よく知っているからこそ驚いている、と言った方がしっくりくるような……

「アルマは知らないの……?」

「私もミストガンから話を聞いて知ったのですが……」

シャルル達の出自がエドラスに関係する事は間違いないが、エドラスという言葉を知っているとのおかしいように思う。

「君は向こうの世界についての知識があるのか……では使命についても?」

「ええ……だから、私はこうしてウエンデイを絶対を守るって……」

そこでハツとしたように飛び上がって、ウエンデイとミストガンの間に立つシャルル。

その姿はまるでウエンデイを庇うようだ。

「答えなさい! あんたがこっちに来た目的はなに!」

「安心してくれ、俺の目的はアニマを閉じて回る事だ……君が危惧しているような事情ならば、幼い頃に既に会っているという事の説明が付かないだろう」

ああ、なるほど。

ミストガンも自分と同じ使命を帯びてアースランド——エドラスと対比してのこの世界の名前だ——にやってきたのではないか、と疑った訳か。

だが、大体の事情を知っている俺でも理解しがたいやり取りだ。何も分かっていないウエンデイは……

「ねえ、シャルル……使命ってなに? シャルルもエドラス? ってどこ

ろから来たの？」

混乱するに決まっているよな……

それからはウエンディにおおよその話を理解してもらうため、そしてシャルルにどうしてエドラスの知識があるのかを探るため、いちから丁寧に説明する事となったが、要約するところのようになる。

まず、俺達が棲む世界——アースランドとは別に、エドラスと呼ばれる魔力が有限な世界が存在するという。

魔力がどんどん減っていく世界を憂慮したエドラスの王は、無限の魔力を包含する別世界から吸収する魔法、超亜空間魔法アニマを開発した。これを使って、アースランドの魔力を奪おうと目論んでいるとそうだ。

そして、ミストガンがこちらの世界にやってきた理由はまさにそこにある。

いくら自国の為とはいえ、別の世界の人々を犠牲にしようだなんて間違っている。そう思い、こちら側からアニマの穴を閉じる為にやってきたのである。

そして、ミストガンだけでなく、アルマやシャルルといった喋るネコ——あちらではエクシードと呼ばれているらしいが——も、元々はエドラスの存在であり、しかもエドラスにおいて唯一自力で魔力を生成する事の出来る上位種族であるという。

「では、なぜエクシード達の一部がこの世界に送り込まれているのか。先ほど言っていたシャルルの使命とは何なのか、という話になるのだが——」

デリケートな話になるからだろうか、1度話を切ってシャルルの方を見て——いや違う、俺の方を見ている？

と、その時、俺の方でも違和感に気が付いた。

恐らく、この時差は長年実物を何度も見てきたからだろう。

しかし、まさかこれほどとは……

空全体から莫大な魔力の渦を感じる。

範囲的には街を覆っているのか……？

「ミストガン！」

「ああ、これがそうだ！妖精の尻尾を狙った超巨大アニマ……まさかこんなタイミングで来るとは思っていなかったが……仕方がない、作戦決行だ！」

すぐに外に出る準備をし始める俺達を見て、ウエンデイが戸惑いの声を上げる。

「どういう事!? ギルドを狙ってるって何!？」

「エドラスの連中は莫大な魔力の集まりである妖精の尻尾をマグノリアごと吸収するつもりなのだ。私達はあの巨大アニマからエドラスへと侵入してから、トウヤの魔法でアニマを破壊し、全ての決着をつけてくるつもりだ」

「それって、2人は帰ってくるの……?？」

「トウヤは必ず返す。私は……」

そこで言い淀んでしまうミストガンを見て、ウエンデイは覚悟を決めてしまったみたいだ。

「ジェラール！私も着いて行く!!」

「ダメだ！君をそんな危険な目に逢わせる訳にはいかない！」

そんなミストガンの正論に乗っかって、ウエンデイを守るためにシャルルも声を上げる。

「そうよ！絶対にダメよ！あっちの世界では滅竜魔導士は……」

だが……

俺には2人の気持ちが見えると同時にウエンデイの気持ちも痛いほど分かるのだ。

「俺はウエンデイを連れて行きたい」

ウエンデイはつい最近家族をなくしたばかりだ。

『妖精の尻尾』という新たな居場所こそ得たが、その傷が癒えきっていないまま、再び大切な兄貴分との別れを経験させるなんてあまりにも酷ではないだろうか。

家族がどこかに行ってしまうという状況で、それを静観するなんて俺達にはきつと不可能だ。

エドラスとアースランド、いずれは別々の世界に分かたれてしまう運命にあるとしても、せめて納得して別れるだけの時間は作ってやり

たい。

どうせお別れするなら、楽しい思い出を作ってからだ。なあに、異世界への旅行だなんて、そうじゃなくても一生記憶に残るような思い出になるだろうよ。

「ウエンディは強くなつてきてる。心配いらない……それに、俺が必ず守る。時間がない、全員で行くぞ」

言いたい事だけ言ってアルマを連れて外へと出る。

アルマには「良いんですか？」と聞かれてしまったが、俺の家から飛び出してくる気配を3つ感じてほくそ笑む。

「行くぞアルマ!!」

アルマを背中に背負い、全速力で上空へと駆けていく。

激しい雨が頬を打つが、それすらも今は高揚した体を冷やしてくれて心地よい。

マグノリアの上空には、自然現象ではありえないような渦が発生していた。

その渦はどんどん大きくなり、真つ黒な穴へと変わる。

そこから神々しいような禍々しいような、形容しがたい光が漏れ出している。

時間がない……もつと早く!

そんな俺の気持ちを読み取ったのか、アルマや、俺の後ろに追従して飛んでいたシャルルとウエンディ、そしてミストガンもスピードを上げる。

そして、その大穴を——抜けた!

視界に広がるのは沢山の島が浮遊し、見た事もない生き物が跋扈し、名前を想像する事すらできない未知の植物が繁茂する完全な異世界。

——これがミストガンの故郷……

綺麗な場所だと感心してしまうが、今はそれどころではなかったと思いついて気を取り直す。

クルリと振り返ってみれば先ほどの大穴は未だに健在であり、今にもマグノリアを呑み込もうとしていた。

俺はミストガンからあらかじめ預かっていたエクスポールという丸薬を懐から取り出し、無理やり喉に詰め込んで飲み込んだ。

これを飲めばエドラスでもアースランドと同様に魔法を使えるようになるらしい。もちろん、元々魔力を生成する能力を持たないエドラスの民が接種しても意味のない代物だ。

それにしても、こんなものどうやって開発したのだから……

いや、まあそんな事はどうだっていい。

今は目の前のデカ物をぶっ壊す事に集中しなくちやな……！

大きく息を吸い込む。

ニルヴァーナの時から使えるようになった特殊な回路を開き、莫大な魔力を練っていく。

「モード天斬竜……斬魔ノ太刀、天の型」

俺の体から白銀の光が迸るのが分かった。

奈落のような大穴を睨みつけ——咆える！

「天斬竜の咆哮オー——！！」

俺の口許から吐き出された銀色のブレスが大穴を呑み込み、ズタズタに斬り裂いていく。

キイインと甲高い音が響いて、バキリと渦が割れる——いや、斬れる。

ここまでは作戦通り……

「なんだ？」

と思っていたのだが、ミストガンが何かを発見したのか、不思議そうな声を上げた。

俺も気になってミストガンの視線の先を追いかけたのだが、確かに今さっきまで大渦のあった場所から一筋の線が走っており、何らかの飛翔体が迫っているのが分かった。

すわ敵兵かと目を凝らすと、予想は大いに外れ、そこに見えたのは

翼の生えた青いネコと、黒い服に身を包んだ目つきの悪い男だった。
「ハッピーと……ガジル!？」

▼ルーシー視点

「はぁーあ、雨止まないかなあ」

何だか憂鬱な気分だ。

強い雨がギルドの建物を叩きつける音だけが嫌に大きく聞こえてくる。

ギルドの面々は外の天気などお構いなしに普段通りのどんちゃん騒ぎだが、こここの連中には情緒つてものがないのよね……

でも、この暗い気持ちは決して天気だけの問題ではない。

少し前、こんな雨の中嫌に黒い格好をして出かけていこうとするミラさんとエルフマンを見かけて、その理由を聞いてしまったからだ。

2人には2年前まで妹さんがいたらしい。

いたって言うのは、その妹さんはもう……

それで、その命日が近づくと、ああやって2人揃って教会に通いだすんだそうだ。

妹さん——リサーナっていうらしいんだけど——の顔すら知らないあたしが悲しんだところで何の慰めにもなりはしないって分かっている、やはり気分は落ち込んでしまうものだ。

何か、気分転換をしたい。

些細でいいから面白い事が起きたり、それこそトウヤの顔が見られるだけで、少し幸せな気分になれるだろう——って、私ってばちよつと単純すぎない!？」

「はぁ……もう、どうして来ないの、トウヤあ……」

「あはは、ルーちゃんってば……」

「ルーシー、あんた心の声漏れてるよ……」

この後、あたしはさんざっぱらカナとレビイの2人に弄られ、ある意味望み通りに面白い事が起きて——というか面白い人にされて、いつの間にか憂鬱な気分は消え去ってしまった。

そんないつも通りの『妖精の尻尾』。
まさかこの後数日の間、トウヤがギルドに来なくなるなんて、この
時は思いもしなかった。

30話「リサーナ」

▼トウヤ視点

『お前らにいて、オレにネコがいないってのが気に入らねえ！』
『あい。そんな事言われてオイラも無理やり手伝わされてたんだ』

下らない事をしていたという自覚があったのか、それ以上何も言うとうとしないガジルに代わって説明をしてくれたハッピーの話では、マグノリア上空へと飛び立った俺達を見たガジルが野生の勘を発動させ、全速力についていく事をハッピーに提案したそうだ。

マグノリアでのあてのない喋るネコ探しに難航していたガジルは、ハッピーや俺のようなエクシード関係者から情報を得る方向にシフトしようとしていたらしく、そんな折に俺とウエンディが揃ってどこかに向かおうと言うのだから、即座に尾行を開始した、という経緯らしい。

呆れた行動力だと思うが、それ以上に性質タチが悪いのは、結果的にその勘が大正解である事だろう。

ある使命を帯びてエドラスからエクシードの卵が送り込まれたのは6年前だ。アルマやハッピー、シャルルが俺達のような保護者——俺とアルマの場合は立場が逆転している気もしなくはないが——と出会えたエクシードは勿論、他のネコ達もこの6年もの年月があればしっかりと生活基盤がたてられているはずだ。翼や知恵という武器があるにしても、狩りに特化した種という訳ではないから、定住しない生活ではそのうちに限界が来て野垂れ死んでしまっているのではないだろうか……

まあ兎も角、長くマグノリアで暮らしている俺達の中でもハッピー達に似たネコがいるなどと言う噂を聞いた事がないのだから、今更マグノリアでエクシードを探すのは無理があるのだ。

それに比べてエドラスは、それこそ彼らの本来の住処だ。ガジルがパートナーを見つけられる可能性は少なくはないだろう。

……こちらのエクシード達は人間に対して差別の意識が強いそうだから、絶対にうまくいくと太鼓判を押す訳にはいかないが。

こうして、俺、アルマ、ミストガンという当初予定していたメンバーに、ウエンディとシャルル、そしてガジルとハッピーを加えた4人＋3匹というメンバーでエドラスの地に降り立ったのだった。

あまり開けたところはまずいという事で、着地した場所は幻想的な植物が幾多も繁る森の中だ。森、といっても樹高はそう高くなく、太陽の光が地面まで差し込んでいて比較的明るい所である。時刻的にも夜にはまだ数時間ある為、今の内にここから少しは落ち着ける所へと移動する事にしたのだが……

「アレ何だろ……？　倉庫かな？」

と言って、冒険気分で少し前を歩いていたハッピーの足が止まった。指さした先を見れば確かに、人が棲んでいるというよりは、倉庫と言った方がしっくりくる——アースランドの常識が、この世界の建築にも当てはまるなら、だが——ような建物が1つ立っていた。

「丁度いい、あそこで変装用の道具を拝借していこうぜ。オレ達はまだしも、エクシード、だったか？……は気軽に顔を晒す訳にもいかねえだろ」

「そうだな。ついでに私たちの紋章を隠す道具もいただいておこう。持ち主には申し訳ない事だが……」

「私達に変装するのは分かりませんが、どうして紋章まで隠す必要が？」
「私も古い記憶だからな。確かな事が分かればまた報告すると約束しよう。今は厄介事を避けるおまじないくらいに思っていてくれ」

そうしてガジルの提案通り、その倉庫に忍び込む事にした俺達。

中に人がいない事は確認済みであり、簡単に侵入することができた。このメンバーで隠密能力が高いのはミストガンくらいだが、索敵においては滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーが3人も揃っているおかげで死角がないと言えるだろう。我々の鼻と耳を舐めてもらっては困るのである。

倉庫の中にはありとあらゆるものが雑に放置されており、衣類は勿論、医薬品の類いや、武器——流石に違法かつ貴重な魔法の武器は置かれていなかったが——まで置かれていた。

ひとまず、アルマには上はそのままにスカートを倉庫で手に入れた子ども用の物に変えてもらい、その中に無理やり尻尾をしまい込ませ

た。更に、深めに帽子を被らせて顔と耳が見えないようにすれば、まあ……なんとか……人間の子どもですよと言いつてもいい訳ではない程度の変装には……なる、かなあ？

少々苦しいだろうが、人前にでる場合はこうしてもらっていないと目立って仕方ないだろう。

俺の方は医薬品の方から適当に包帯を調達してきてアルマに頼んで首に巻いてもらっておいた。俺の紋章はうなじに付いているが、隠そうと思うと意外と難しい。パツと見て気づかれなくする、程度であれば襟の長い服を着ればいいのだが、完全に隠したい場合はそれでは隙間から見えてしまう可能性がある。そんな時に重宝したのが包帯を巻くという方法だ。こっちはこっちで目立つと言えれば目立つのだが、紋章自体は確実に見えなくなる。アースランドでも、正規ギルドの魔導士である事がバレない方が良さそうな場面ではこうして包帯を巻いていたので、慣れたものだ……いや、巻いてくれるのはいつもアルマだが。

周りを見てみれば、ガジルは左肩をしつかりと袖で隠せるタイプの黒い服を身に着け、ハッピーにすっぽりと耳まで覆うようなフードのついた服を着せていた。シャルルは踊り子のような衣装を身にまとい優雅に決めている。

そしてウエンディだが、上はカチツとした赤いジャケットにオレンジの大きいリボンを合わせており、下は一本白ラインの入ったフレアスカートだ。短いスカートから伸びた脚はニーソックスに守られつつ、絶対領域を展開している。極めつけには、髪型を高い位置のツインテールにするという、なんとも可愛らしいファッションとなっていた。

可愛い……妹にしたい。いや、もう妹なのでは？

ミストガンの方に視線をやって『俺達の妹は最高だな！』と念を送ってやると、非常に怪訝な顔をされたので、ちよつと悲しい。

おい、そんな目で見るなアルマさん。さっきのテレパシーはあなたに送ったものではありませんよ。

ちなみに、ミストガンは普段から殆ど肌の露出のない格好をしてい

るし、今更隠す所がないといった姿だ。というかそもそもアイツ、どこに紋章入れてんだ……？

そんな風に準備を整え終えようとしていたところで、不意に窓から外を見たウエンデイが驚きの声を上げた。

「み、みなさん！アレみてください!!」

手招きされて全員同様に窓辺まで近づいて、これまた全員同様に動揺してしまう羽目になったのだった。

「あのマーク……妖精の尻尾だよ!？」

ハッピーの言葉の通り、この倉庫から少し離れた所にある、樹木をくり抜いて作ったような建物の上部に『妖精の尻尾』のギルドマークが刻まれた旗が飾られていたのだ。

要するにこの世界の『妖精の尻尾』という事なのだろうが……まさか、こちらに来てから一番最初に見るのがコレ、というのは……

「まだ残っていたか……」

ぼそりとミストガンが呟いたその言葉に、ガジルが「どういう意味だ？」と食いつく。

「あれはこの世界の妖精の尻尾……そして、エドラスにおける数少ない魔導士ギルド。だが、それはつまり……」

なるほど、それが「紋章を隠しておくべき理由」というわけか。

この世界は魔法が有限であり、魔力の宿った物質——つまりは魔法水晶ラクリマなど——を道具に組み合わせる事でしか使用できない。そして、それらを扱う権利を王国が管理しているせいで、魔法を個人所有する事は犯罪に当たるはずだ。

「この世界では妖精の尻尾は闇ギルドって訳ね……」

「そんな……」

的確に真実を言い当てるシャルルの言葉にミストガンは黙って頷き、ウエンデイはショックを受けて声を漏らす。

だが俺は、逆にそんな逆境にあっても諦めずにつるんだなんて喜びの方が大きい気がする。

まあ、俺達はそんなこの世界の俺達——この世界でも俺が『妖精の尻尾』に所属しているかはわからないが——にトドメを刺すかの如

く、魔法そのものを奪おうとしている訳だが……まあこの話は後にしよう。

驚きながらもこっそりとギルドを観察していると、誰か女性の人影が玄関から出てくるのが見えた。

その人物は金色の髪をサイドで纏め、黒光りするライダーズーツを腹の部分だけ切り抜いたような露出の多い攻め攻めな格好をしている。眼光鋭く周囲の男達に何事か怒鳴りつけている様子から、かなり気の強い女性だと分かる。分かるのだが……

「アレ、どう見てもルーシーだよな？」

「だな。笑えるぜ、ギヒッ」

いやもうホント、こっちとあつちでは色々と違うらしいな……

ミストガンとジェラール……当然ゼレフに嵌つちまう前の方だが、この2人はこう思うと大分似ている方なのだろう。

その後も何やら和気藹々と、ご令嬢のような上品なカナや、以上に厚着のグレイ、色々と育ち切ったウエンデイと失笑を禁じ得ない面々が出てくる。

そして——時が止まった。

「なあ、アルマ、ハッピー……俺は夢を見てるのか？」

「いいえ、トウヤ……」

「そう、だね……あれ、リサーナだよ」

ミラやエルフマンにそっくりの綺麗な白髪を短く切り、周りを照らすような太陽の笑顔を振りまく少女……俺達の世界では既に死んでしまっている女の子、ミラとエルフマンの妹で、俺の恩人であるリサーナが俺の目に入った。

だが、当然ながらその名前には「エドラスの」という前提が付く。その事が無性に悲しくて、でももう一度顔を見られたという事が嬉しくて、気づけば俺は涙を流していた。

「トウヤさん……？大丈夫ですか？」

気遣ってくれるウエンデイの声も今は届かない。

無意識に手を伸ばして、呼びかけようとすらししてしまう。

今はここに盗みを働きにきていて、しかもいずれは彼らから魔法を奪おうとしているというのに……

「オイ、斬竜！奴らこの倉庫に向かっている！逃げるぞ!!」

ガジルにぐいと腕を引つ張られ、辛うじて嗚咽のような返事を漏らすも、俺は未だに心ココにあらずで、逃げる準備はアルマ頼みだ。

「いくぞトウヤ、しっかりしろー!」

ミストガンに叱咤されて倉庫を出て、走り出す。

すぐそこまで迫ってきていた『妖精の尻尾』の連中には気づかれてしまったが、駆け出した先でミストガンが姿を消す魔法をかけてくれて追跡を免れる事に成功する。

見つかったから魔法がかかるまでの数秒間、俺の瞳は相も変わらずリサーナを映していて、しかしながら、リサーナの瞳も俺を映していた。

つまる所、合ったのだ——目が。

そして、その目を染めた驚愕に、何となく泥棒と出会ってしまったという事以上の色を感じてしまったのだった。

▼???視点

「なんださっきの奴ら!?!」

「魔法使って逃げてったぞー!」

「泥棒か!?!」

「どこのやつだよー!」

喧騒が耳に入る。

しかし、その意味までは頭に到達しない。

頭の中に堰が作られて、今はある1つの事しか考えられないような……そんな感じ。

「大丈夫?」

「え?あ、うん!な、なにが?」

ミラ姉が明らかに様子のおかしい私を見て声を掛けてくれるが、口

くな返答すらできやしない。

先ほどからあの瞳が離れないのだ。

目つきが悪くて、小さい子には怖がられるくらいなのに、その奥の奥に宿る光はとつても優しくて家族思いの綺麗な瞳。

私が——よく知っている目。

その優しい眼差しが私を見て悲しみに染まっていた。

涙が煌めいていた。

——ダメだ、私……行かないや！

今まで全然気づいていなかったが、なにやら後ろでルーシーが話しているようだ。

「さっきの奴らには絶対に何かある！だから、あたしが追いかけて、洗いざらい吐かせてやる！」

それなら——

「それなら私も連れて行って！」

私のすぐ後ろに居た兄と姉が、優しげに、それでいて悲しそうにこちらを見つめている事に、私は終ぞ気づく事が出来なかった。

▼トウヤ視点

「落ち着いたか？」

無事に逃走に成功して、少し歩いたところでミストガンにそう聞かれる。目の部分しか見えていなくても、その声音から大分こちらを氣遣ってくれているのが分かる。

「ああ……悪かった」

俺がチンタラしていなかったら、あそこでコチラの『妖精の尻尾』に見られる事は無かったかもしれない。そう思うと申し訳なくて、つい俯いてしまう。

ミストガンはそんな俺の肩にポンと手を置いて「いや、いいんだ」と呟いて、少し前に出る。

「皆、聞いてくれ。我々はひとまずこのままルーエンの街へ向かい、そこで宿を取る事にしようと思う」

最終目的地は王都になるが、直接乗り込むには遠く、また、この世界の基礎的な情報も不足している。ミストガンが居るだけ遙かにマシだが、その知識だつて6年前のものだ。変わってしまった事も、忘れてしまった事もあるだろう。

幸いにも俺達は魔法を所持している訳でもないし、先ほどの『妖精の尻尾』にも俺達に似た人物はいなかった。紋章さえ見られなければ軍に怪しまれるという事もなく、ある程度自由に動く事が出来るはずだ。

体勢を整え、情報を集める。

これに反対する理由はないと言えるだろう。

……本音を言えば、自由時間というものが、実は凄く欲しかったのだ。

異世界だぞ？しかも都合よく言葉が通じて、文字まで読める！

探検したい！散策したい！遊びたい！買い物したい！

異世界の刀剣類の味や、ベストセラー本なんかも気になる。特に後者はルーシィやレビィにお土産として買っていけたら最高だろう。あの2人の狂気乱舞する様が目に浮かぶようだ……

「あの、トウヤさん……」

気づけば隣にやってきていたウエンデイが、おずおずと俺に話しかけてくる。

ガジルとハッピーは先頭に立って、あちこち植物や動物を見ながら歩いており、ミストガンはそれを眺められる位置でつかず離れずといった様子だ。そんな男達を呆れた目で見ながらアルマとシャルルが話している。

俺達は最後尾のようだ。

「さっきの人のことですけど……確かミラさんの妹さん、なんですよね？」

そんな風に聞いてくるから、リサーナとのエピソードをいくつか話してやった。ギルドに入るきっかけになった話や、ナツが何かやらか

して、何故かついでに俺も怒られた話、ミラ——当時はおっかなかった——に俺の気持ちの察し方を教えてくれた話や……色々と話した。

相変わらず話下手な俺は何度か詰まったり、説明を省いたりしてしまつて、聞きにくい事この上なかつただろうが、ウエンデイはうんうんと何度も相槌を打つてくれた。それだけではなく、気になった所をつつこんで聞いてきてくれたりもして、凄く話しやすかつた。だから、本当に色々な事を話した。

そのうちに、なぜかまた鼻の奥がツンとしてきて、目頭が熱くもなつてきていた事に気づく。

リサーナが死んで、みんなそれがショックで、ミラやエルフマンの前では何となく、彼女の話が出来なくなつた。そうするうちに、誰も彼女の名前を呼ばなくなつていった。決してタブーだとか、そんな訳じゃない。暗黙の了解というか、そういう事なのだろう。

だから、こんなにリサーナの名を呼べたのは本当に2年ぶり……そう、リサーナがいなくなつてしまった時以来の事だつた。

この涙はその事が嬉しかつたから流れ出たのだろうか。

不意にウエンデイが俺の手をそつと握つてくれる。

小さな手の平から伝わる体温に安らぎを感じた。

「トウヤさんにとつてのリサーナさんは、私にとつてのトウヤさんつて事なんです……妖精の尻尾に入るきつかけをくれて、家族をくれて、沢山の幸せをくれた人。私、トウヤさんにはとつても、とつても感謝してます。だから、トウヤさんがリサーナさんをどれだけ大事に思っているのかも、何となく分かる気がします」

こんな事言うの、おこがましいですよねと笑つて謝るウエンデイを見て、俺は凄く、凄く心の奥がじんと熱くなつていくのを感じた。

確かに、俺はリサーナに凄く感謝している。

こんな俺に、こんなにも大事な居場所をくれた。

人生でこんなに「ありがとう」と思う相手は、リサーナとアルマくらいだ。

ウエンデイにとつて、俺はそういう「ありがとう」と言いたい相手なのだという。

リサーナが俺にしてくれた事を、俺がウエンディにしてやれた。俺を通して、リサーナの優しさがウエンディに巡っているようだと感じた。

「あつ、じゃあ、私もリサーナさんに感謝しなきゃいけませんね。トウヤさんを妖精の尻尾に誘ってくれてありがとうって」

その事がどうしようもなく嬉しくて、言葉にできない事を悟った俺は、ウエンディの髪をかき回すように撫でつけた。

「わわっ、トウヤさん！髪がくずれちゃいますから！」

「おっと、それは悪いな」と思つて手を離した。

しかしウエンディは言葉とは裏腹に、少ししよんぼりしているように見えたので、もう一度、今度は優しく撫でてやる。

すると、「えへへ」と照れ臭そうに笑うので、こちらの口角もつり上がる。

「ありがとな……」

俺のそんな呟きを聞いたウエンディは、俺が元気になったと分かった事が嬉しかったようで、花が咲くような笑顔を見せてくれた。

本当にいい子だなあ、ウエンディは……

少し離れてしまっていた他の連中に追いつく為に、俺達はほんの少しだけ早足で歩き始めた。

▼三人称視点

エドラス王都、王城。

王に謁見室へと呼ばれた王国軍幹部たちが、目的地へと向かうまでの廊下で顔を合わせる。

その表情は皆一様に硬い。

普段おちやらけた雰囲気ばかりを醸す、第三魔戦部隊隊長ヒューズですら暗い顔をしていた。

その理由は明白だ。

「今回呼ばれたのは、あの超スゲエ……はずだったアニマの事だよね」ヒューズの疑問に答えるのは、金髪をリーゼントヘアにまとめた鎧

の男。第四魔戦部隊隊長、シユガーボーイである。

「まあ十中八九そうだろうねえ」

すると、後ろからぐしゅしゅという不気味な笑い声が響いた。

2人が振り向くと王国の幕僚長たるバイロがいやらしい笑みを浮かべて近づいてきているのが見えた。

「そうですねえ……いやはや、アニマ自体に不備はなかったというのに一体何が起きたのやら……」

しわくちやの老人顔を更にクチャクチャにして笑いながら、髭を触って興味深げに呟くバイロ。

更にその後ろから、もう2つ足音が聞こえてきたと思うと、バイロに向かって叱責の声が飛ぶ。

「危機感がないな、バイロ。今回の件は貴様の責任問題とも言えるんだぞ」

そんな風に凜とした声を響かせたのは緋色の髪の子。

第二魔戦部隊隊長、エルザ・ナイトウォーカーだ。

口論に発展するかに思われたが、しかしながら、それはエルザと共に現れた獣面の偉丈夫、第一魔戦部隊隊長、リリー・パンサーの興味なさげな一声に諫められてしまう。

「くだらん……それを決めるのは全て陛下の意味だ。直に謁見の間だ、無駄口はその辺にしておけ」

一行が謁見室の前の扉へと近づくと、そこには既にもう1人の幹部が到着していた。

彼は先ほどのやり取りを聞いていたようで、それでいてなお、ペラペラと軽薄そうに話し始める。

「いやいや、リリー。僕はこういう時、喋ってた方が落ち着くんだよねえ……だってこの中で首が飛ぶ可能性が一番高いのは僕だけ？ いやあ、ごめんね、爺様。あなたの孫は無職になってしまいかもしれません」

あは、と笑う灰色の髪の男。

目つきの悪い顔を酷薄に歪めた——祖父のバイロ譲りの凶悪な——笑みを見せた。

これに対し、一層うんざりしたような顔を見せたりリーが、心底嫌そうに声を上げる。

「喧しいと言っているだろう。お前の心情など知らん……陛下がお待ちだ、はやくその扉を開ける——トウヤ」

第一から第四の魔戦部隊隊長と幕僚長、そして王国軍に2人存在する幕僚長補佐の1人、バイロの孫である男、トウヤ——エドラスのトウヤの6人が揃って、王の元へと推参した。

形式的な挨拶を簡単に済ませた後、大仰な格好をしたエドラス国王ファウストが玉座から立ち上がり、跪く臣下たちに今回の本題を告げ始める。

「ワシは今、乾いている。

エドラスは今、乾いている

我がエドラスが有限であってはならぬのだ。

その為のアニマだった……

しかし、先の超巨大アニマは何者かの力によって阻止されてしまった

……ワシは今、乾いている

しかし、空を見上げれば、無限の魔力で空を泳ぐ畜生が我々を高めから見つめているではないか。

ワシが……エドラスが求める永遠を謳歌している。

なぜ我々はこんなにも近くにある “無限” に手が届かないのか
……」

大きく手を広げ、天を掲げるファウスト。

臣下たちはそれまでの不穏な言葉に動揺が隠せていない。

「支配され続ける時代は終わりだ。

全ては人類の未来の為。

豊かな魔法社会を構築する為」

王が1人、拳を握りしめ、目を血走らせる。

「今こそ天使どもを地へと墮とす時——コードETDの発動をここに宣言する!!」

31話「5つ目の約束」

▼トウヤ視点

俺達がエドラスへと降り立ってから数日が経った。

その間にも着々と歩みを進め、ルーエンからシツカの街、そこから海を渡ってトライアの街を過ぎて、つい先ほど王都へとたどり着いた、という訳だ。

アースランドの建築様式のどれにも当てはまらない奇妙な方法で建てられた王城を中心に、真円を描くように整備された街には、独裁国家と聞いて思い浮かぶようなくたびれた印象は無く、むしろ人々の活気に満ちているように感じた。

しかし、その理由は大変分かりやすいものだ。

街灯、案内板、店の看板に子ども遊び道具に至るまで、この街は魔法に溢れていた。

魔力というものが有限で、その使用権利を国が管理しているこの世界で、だ。

これまで訪れたどの街でも、ここまで派手に魔法を使っているという事は無かった。せいぜいが、見回りをする警邏が装備している武器程度のもものという質素な使い方だ。

「魔力の無駄遣いね……占領国やギルドから魔力を奪って、この王都だけに集中させてる」

宿の窓から王都の景色を見ていたシャルルがそう呟いた。

遊園地のようなこの景観も、要するに国民……それも王都に住めるような上級の国民から人気を得るための施策なのだろう。

……もつと穿って捉えるなら、この国の王は、目の届く範囲だけでも永遠で潤沢な魔力を感じたかった、とか。

それにしても、この街だけ妙に騒がしいように感じる。

それは先ほどから言っている、魔法が溢れていて活気づいているという話とは別の方向性の喧しきだ。なんと言うべきか……浮足立っている、とでも言うのが適切だろうか。

平常時のこの街を知らないから確かな事は言えないが、直感的に何

かあった、もしくはこれから何か起ころうとしているのではないかと考えてしまう。

気のせいならいいのだが……

それを確かめるためにも俺も少し王都を歩いてみようか。

今、宿に留まっているのは俺とアルマ、ウエンデイとシャルルだけだ。ガジルとハッピーは宿に荷物を置いて早々に散策に出ってしまったし、ミストガンも協力者に会うと言って出て行ってしまった。

正直、情報収集に関してはミストガンにおんぶにだっこという状態で申し訳ないのだが、どうやら昔の立場の問題か、色んな所にパイプを持っていろいろらしい事や、隠密行動の得意さから、どうにも頼らざるを得ない。

アイツに最後の手助けがしてやりたくて、こうしてついてきたと言うのに……

ミストガンは、『妖精の尻尾』フェアリーテイルがああ巨大アニマに飲み込まれないようにしてくれただけで十分だと言ってくれるが、それでは納得いかないうという事は分かっているだろうに。

ま、いい。

少しでも力になる為に、とりあえず今は行動あるべしだ。

そう思い立ち上がると、アルマが声を掛けてくる。

「トウヤ？……街を見て回るのですか？」

「あ、なら私もついて行っていいですか？」

俺としても、特に当てもなく歩いてみるだけのつもりだったし、断る理由は一つもない。黙って頷いて、ウエンデイが支度を済ませるのを待つ。

「私たちはあまり目立ちたくありませんから、ここで待っていますね……ハッピーは外を見に行ってしまったようですが……」

「あんだ、分かっているんでしょね？ウエンデイに何かあったらただじゃおかないわよ！」

三者三様——2匹だけ——の言葉で送り出されて、俺達2人は街に出た。

いくつか露店も出ていて、見物には困らない。

いくつかの街で手品と称して色んなものを切り刻むショーをコツソリやって小遣い稼ぎをしたり、元々持っていたものを売ったりして、少しだがこちらの金も持つてはいるので、ウエンディに何か強請られても問題はないはずだ。

ちなみに、金を稼ぐための手段としてのギャンブルは、何か言う前に全力でアルマに止められてしまった。アカネビーチでかなり擦った事を、まだ覚えていなかったらしい。

俺としても、周りの様子を見るという目的は忘れないようにしつつも、ギルドの面々に何かしら土産を買ってやらなければならぬと考えている。

これはエドラスに着てしばらく経ってから気づいたのだが、俺達は完全にギルドの皆に無断で数日行方をくらませている事になってしまふ。男性陣はともかく、エルザやカナ辺りは煩そうだ……

という訳で、何とかして姫様方の機嫌を取らねばならない。

レビイやルーシイには既に、この世界の歴史書やおとぎ話なんかの書籍を購入済みだ。カナはこっちの文化の酒を買って行ってやればいいだろう。

意外と困っているのはエルザだ。普段なら珍しい鎧や魔法剣の類いを買えばいいから迷う余地はないのだが、この世界ではそれらは違法な店でしか取り扱っていない。エルザの土産を買う為だけに王国軍に目をつけられるのは流石に勘弁願いたい。と、いう訳で割と迷っているのだが……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：？

なら、そっち方面で攻めてみるのも意外と喜ぶかもしれない。

あとは、ミラだ。

土産自体はこっちの世界の料理本とか、調理器具とか持って帰れば喜んでくれる、とは思う。

それより問題なのは土産話の方だろう。

「こっちの世界のリサーナは妖精の尻尾で楽しそうに過ごしてたよ」なんて、言うべきか、言わざるべきか。余計悲しませる事になると考えるべきなのか、別世界の別人でも、それでも喜んでくれると思うべきなのか。

俺のない頭では結論なんて出せそうもない。

アルマと少し話してみようか……

「トウヤさん？大丈夫ですか？」

下から俺の顔を覗き込むような体勢のウエンデイが、俺の袖を引っ張りながら聞いてくる。

いけない、いけない。

シャルルにあれだけ言われていたのに、目の前の事を蔑ろにして、思索にふけてしまった。

「すまん」と一言謝ってから、はぐれないようにと思つて、そのままウエンデイの手を取り、掴む。

「わわっ、トウヤさん!？」

突然手を繋がれて、ウエンデイは一瞬驚いたようだったが、すぐに収まりの良い握り方を探し始めて、ぎゅっと握り返してくれる。

「あ、トウヤさん！あれ美味しそうですよ！」

その指さす先を見ると、確かに食欲をそそられるソフトクリームが露店で売られている。

甘党かつ子ども舌の俺には、酒やそれに合うつまみなんかより、こういったものの方が嬉しい。結果として、ウエンデイと一緒に歩くと、まあまあ頻度で食の好みがあつてしまう。嬉しいような恥ずかしいような……

兎も角、俺はウエンデイの手を軽く引っ張つて、その屋台へと歩いていく。

遠慮するウエンデイを振り切つて屋台のおばちゃんに1つ注文した。すぐに白いとぐろを巻いたソフトクリームが出てきて、それをウエンデイに渡した。

ウエンデイは終始遠慮気味だったが、「俺も食べたかった」と言うのと、観念したようで大人しくなつて、一口食べ始めた。

「おいひいです、トウヤさん！こういうツボはこっちも向こうも変わらないんですね！」

そんな風にはしゃいでくれるウエンデイが可愛くて、今日もいい日だ。

空いた手で、軽くウエンデイの頭を撫でて、口をウエンデイの持っているソフトクリームに近づけて、ペロリと一口いただいてみる。

ふむ、濃厚なミルクにこの甘味は……向こうの世界では感じた事のない独特な風味の甘さだな。もしかしたらこちらでしか取れない素材が使われているのかもしれない。それでもアースランドでも受けるだろうと思える味で、とても美味しい。これならウエンデイが破顔するのも頷ける。

「と、トウヤさん……！」

美味しいなど言おうと思つて横を見てみると、なぜか頬を赤らめているウエンデイ。

何か粗相をしてしまったのだろうか……？

ウエンデイは手元のソフトクリームだけを強く見つめて俯いていたが、やがておずおずと顔を上げると……

「つて、トウヤさん！ふふっ、髭みたいになってますよ」

と笑い始めた。

どうやら、先ほど食べたソフトクリームが俺の口許に付いてしまつていたらしい。

しゃがんで下さいというウエンデイの言葉のままに少しかがむと、ポケットからハンカチを取り出して、俺の口を拭いてくれた。

「ありがとう……」

「トウヤさんにもこんな子どもっぽい所があるんですね！」

そんな風に言われるが、アルマに言わせれば「家ではいつもこんな感じですよ」と呆れられる事間違いない。今まで、アルマとミラには足を向けて寝られないと思つて生きてきたが、今後はそこにウエンデイも入ってしまうかもしれないと思うと、流石に恥ずかしくなってくる……

そこからの会話は終始和やかで、ウエンデイも美味しそうにソフトを頬張っていた。結局、赤面していた理由はよく分からなかったが、こういう場合は触れないのが吉であるというのは、過去の経験上なんとなく理解できるところだ。

会話が途切れたタイミングで、少し思っていた部分を聞いてみる。

「悪いな……ホントはミストガンと話したいだろうに」

そう言うと、ウエンディは驚いたような顔をして、すぐさま否定してくる。

「そ、そんな！トウヤさんとお話するのもとっても楽しいですから！……それに、ちよつとはジエ……ミストガンとも話してるんですよ？」

例えば、分かれた後のお互いの話。

例えば、ミストガンがエドラスに居た当時の話。

例えば、天空魔法の扱い方。

例えば、『妖精の尻尾』の皆の話。

そして、〝これから〟の話――

どれもとても楽しそうに、嬉しそうに話す。

でも、それが逆に俺には辛くて、話を遮るようにしてウエンディの頭を強く撫でてしまう。

この子は大切な兄貴分との別れを予感している。でも、それをきちんと良い思い出にしようともしてくれている。

「ミストガンは、トウヤさんの事、本当に頼りになる、有難い友達だつて、そう言っていました……あと、困った時は、私の代わりにトウヤを頼れって」

そうか……あいつ、そんな事言ってたのか。

思わず眼頭が熱くなる。

こちらの世界にきてからの俺は、こんなのばかりだな……

「任せろ……俺がミストガンの代わりにずっと一緒に居る。約束するよ」

この子は、この小さい体で何度も別れを経験してきた。

1度目は天竜グランディーネ。2度目はミストガン。3度目は『化猫ケットシエルタの宿』。

2度目の別れは、こうして再会して、無かったことのできたけれど、もうすぐ本当の別れになってしまう。

人は出会いと別れを繰り返して強くなるとは言うけれど、家族との別れなんて、そう多くなくていいんだ。

少なくとも俺は絶対に居なくなつてやらない。

もう大丈夫だと言われても、ウエンデイの帰ってこられる場所を守り続けてやりたい。

……こんな事思ってるって知られたら、シャルルに怒られそうだな。

「それは私の役目よっ」とか。

でも、家族なんて何人いてもいいじゃないか。

「ウエンデイ。俺もお前の兄貴分だ。絶対にお前の傍から離れたりしない……だから、2人で一緒に、アイツを送り出してやろう。な？」

軽くかがんで、ウエンデイと視線を合わせる。

精一杯の笑顔を作って、「約束だ」と小指を差し出した。

「……はいー」

少し涙を溜めながらも、一生懸命に作った笑顔を俺に向けて、小指を重ねるウエンデイ。

きつと、俺も同じような顔をしているのだろう。

ゆーびきーりげんまんと軽く腕を振って、約束を交わした俺達は、翳ってきた太陽を背にして宿へと戻る道を歩くのだった。

▼三人称視点

トウヤとウエンデイが宿を出てからしばらくの間、部屋の中には沈黙が降りていた。

とは言っても、重苦しいようなものではない。単純に話すことがないから、話さないだけ。お互いに本を読んだり、何やら書いて整理してみたりと、自分の事をしながら過ごしていたのである。

その静けさを破ったのは、書き物を終えてペンを置き、アルマの淹れていた紅茶を一口すすって一息ついたシャルルの方からだった。

「ねえ、アルマ……あんたはこの世界、どう思う？」

「別に、何とも」

興味なさげに返答するアルマに、これまた、アルマの返事自体には興味がないと言わんばかりに話を続けるシャルル。

「私はだいつ嫌いだわ」

人のものを奪っておいて悪びれない態度も、私たちにあんな使命を課した事も！

そう言い捨てるシャルル。

それでもアルマの態度は余裕を持ったまま崩れない。

「あんたは腹が立たない訳?! あんな命令をされて！ 一方的に送りこまれて！」

そう問われてようやく、シャルルの方を向くアルマ。

「滅竜魔導士を抹殺しろ、という使命についてですか？」

アースランドへと渡ったエクシードは皆、エクシードの国であるエクスタリアの上層部から、異世界の怪物である滅竜魔導士を抹殺する事を使命として刷り込まれていたのである。

普段その事を自覚する事はないが、その証拠にアルマもハッピーもシャルルも、全員が滅竜魔導士の元に辿り着いている。

アルマがミストガンに聞かされた説明はこのようなものだった。そして、シャルルは他の2匹とは些か事情が異なり、どうやら滅竜魔導士抹殺の使命を受けているという自覚を持ち、それに抗いながらウエンデイと過ごしてきたというのである。

「思うところが無いと言えばウソになります。でも、私ではトウヤは殺せませんから……トウヤを殺そうとした事と、トウヤにめぐり合わせてくれた事で、相殺ですかね」

我ながらおかしな事を言っている自覚はありますが、と苦笑するアルマ。

それを見て、シャルルは信じられないという顔をする。

「そんなの分からないでしょう?! 方法なんていくらでも——」
「死にません」

シャルルの抗議に、アルマが珍しく食い気味に否定した。

語気を荒げた訳ではないのに、妙な迫力を持つその言葉に、シャルルは思わずたじろいでしまう。

「トウヤは死にません。私を1人にしたりしません」

そう言って、なぜかシャルルに宿備え付けのガラス製の灰皿を渡す

アルマ。

高く投げてくださいと言われ、つい従ってしまう。

アルマは高く浮かんだ灰皿をそっと優しく受け止めて、再び机に置いた。

このやり取りに一体どんな意味があるのか、と些か毒気を抜かれつつも、シャルルは訝しんだ目をアルマに向ける。

「あの人は本当に馬鹿ですから……私にさっきのように投げさせた――あの時は確か金槌でしたが、まあとにかく、そういうものを頭突きで打ち返したんです」

「はあ!？」

「おかしいでしょう?……それで『ほら、アルマでは殺せない』って笑うんです。私は凄く怒りました。でも、そんなのどこ吹く風で、大丈夫だ、大丈夫だって、そればかり……」

ミストガンの話を聞いて、ショックを受けていた頃の事を思い出しながら、どこか満ち足りた笑顔でそう言うアルマを見て、何となくシャルルは羨ましさを感じてしまう。

「だから、きつとトウヤは殺しても死にません」

全く理屈になっていない言葉に宿る、よく分からない力から目を逸らすシャルル。

「私はトウヤを信じています」

見透かすようなアルマの目に、体をピクリと震わせる。

「何よそれ……それじゃ私がウエンデイの事、信じてないみたいじゃない!!結局、あんたもオスネコも一緒よ!危機感が足りないんだわ!!」

言いすぎてしまったか、と思いつつも、長年の付き合いがある友人についての再三の扱いの悪さに、つつい口を挟みたくなくなってしまったアルマ。

この際だから言ってしまうと、口を開いた。

「ハッピーもアレで色々と考えているんですよ?少なくとも、この世界に来てから……いいえ、その少し前からですね。あなたの事だけは真剣に考えて、心配してもいます。今も、少しでもシャルルの役に立つ

んだと言つて、外を見にいつているんですから」

そんなの…と納得しない様子のシャルルに、これ以上はハッピー自身の仕事かな、と最後に余計なお世話だけして、口を閉ざす事にした。「兎も角、シャルルはもう少しだけ周りを見た方がいいですね。自分だけで出来る事なんて、そう多くはありませんよ?」

▼トウヤ視点

俺達以外は既に宿に戻っていたようで、俺達が帰るとすぐにミストガンの号令の元、今後の動き方について話し合う事になった。

ちなみに、ウエンデイの目が赤くなっている事について、シャルルに強く突っ込まれたが、この件については、とりあえず置いておこうと思う。

「まず、私達の大指針を確認しておこう」

この世界に乗り込んできた最大の目的は、アースランドへのアニメ攻撃を止める事だ。

先の超巨大アニメからも分かる通り、このまま放置しては再び『妖精の尻尾』を狙った攻撃が行われるかもしれない。諦めるまで俺が叩つ斬つてもいいのだが、仕事でギルドを離れている時には対処できないという大問題が存在する時点で却下である。

その為の方法として、第一に王城に忍び込むなどした上での王との直談判。はつきり言って望み薄だし、いざ交渉という段になつても、こちらのカードは人情に訴えるか、武力に訴えるかしかない。これが一番平和裏に解決する方法ではあるが、最も可能性が低い案ということで、結局は頭の片隅に置いておく程度にしておこうという結論に至った。

「んで、次がアニメ発生装置の破壊、か……」

その次に思いつく案をガジルが口にする。

しかし、これも根本的な解決には至らないであろう。

確かに一時的にはアニメを生成する事が出来なくなり、『妖精の尻尾』の危険は減る。だが、装置は直してしまえばそれで済む訳であり、

そうなると、エドラスの魔力が無くなるのが先か、こちらが根負けするのが先かという消耗戦になってしまう。更に、そのような泥沼になるだけならまだいい方で、追いつめられたエドラス王が、より巨大な、それこそフィオーレ全土を覆うようなアニメマを展開しだすかもしれない。最悪は、エドラス王国軍がアニメマを通ってフィオーレに侵攻してくる可能性すらある。そうなれば、もう事態は俺達の手には負えない。

やはり、こちら側から能動的にエドラスに踏み込めるような技術が開発されない限り、向こうが自由に攻撃できる状況は圧倒的に不利だ。長期戦を選ぶ選択肢は考慮に入れるべきではない。

「従って、元を断つ……エドラスの魔力を根絶しようと思うのだ」

ミストガンの考えはこうだ。

先ほど話に出たアニメマ発生装置、その設定を弄って魔力の吸引方向を反対にする。

こうすれば、エドラスの魔力はアースランドに流れ出し、エドラスはアニメマを生成する方法を永遠に失う、という寸法だ。

アースランドの潤沢な魔力を考えれば、枯れかけのエドラスの全魔力など、大した問題にもならないだろう、というのがミストガンとその協力者である研究員の見解であるらしい。

だが、この方法にもやはり問題は存在する。

「協力者……いずれ皆にも会ってもらいたいのだが……その事はひとまず置いておくが、その男曰く、アニメマを逆展開すれば、魔力を持つ生物までもがアースランドに流入する事になるだろう、という話だった」

「なっ!? それってつまりエクシードがアースランドに入ってくるって事じゃない!!」

冗談じゃないわ!と憤慨するシャルル。

俺にもその気持ちは分かる。

俺は兎も角、ウエンディを殺そうとしている連中を招き入れるというリスクが気になる所だ。それに、エクシード達は人間に強い差別意識を持っているという。その事も考慮すべきだろう……と思うのだ

が、どうやらアルマの意見は違うようだ。

「その事に関しては、あまり問題ではないと思うんです、私」

「どういう意味よ!？」

噛みつくシャルルをウエンデイがなだめている間、ミストガンが視線でアルマに続きを促す。

「ずっと考えていたんです。私がどうすればトウヤを殺せるのか……どう考えても不可能です。私が100匹集まったところで、絶対に潤沢な魔力が空気に満ちているアースランドで育った私達ですら、この程度の力しかないというのに、この世界のエクシード達が本当に強いのか、と疑問に思うのです」

「王国軍の第一魔戦部隊隊長はエクシードだが、確かな武人だぞ？」

「でも、それこそ、その一人だけでしよう?それも、武人なんて言い方をするからには、しっかりと努力を怠らないようなタイプ。尚更、卵の状態でアースランドに送り込むという方法に疑問を感じます」

なるほど、つまり――

「私たちを本気で抹殺するつもりは無かった……?」

ウエンデイの呟きに頷くアルマ。

「エクスタリアは、人の生き死にすら操る強力無比な女王の力によって治められ、人間を従えている、と聞きますが、それも本当かどうか……」

エドラスにおいて、エクシードが畏れられ、崇められるのは、女王シャゴツトの存在が大きい。彼女には命を選別する力があり、実際に彼女が名前を口にした人間は近いうちに死んでしまうという。その神の如き力に、畏敬が集まっているのだ。

「その力とやらを真に受けてしまうより、命の選別に何らかの絡繰りがあると考えた方が納得がいく、というのが私の考えです」

と、そこまでアルマが語ると「ギヒッ」とガジルが笑う。

「つまり、弱い犬……いや、弱いネコ程よく吠えるって訳だ」

アルマもええと静かに頷いた。

何かの絡繰りで、強大な力を持っていると見せる事で、魔力を持つ以外は弱い種族であるエクシードを守っている、という訳か。

何かしつかりとした証拠がある訳ではないが、ありそうな話ではある、か……

「じゃあ、私のこの記憶はどうなってるのよ!!」

まとまりかけていた所で、シャルルが当然の疑問を吐き出す。

確かに、今までの説明ではシャルルに滅竜魔導士抹殺の使命を受けた記憶がある事の説明が付かない。

何と声を掛けるべきか皆が迷っている中、なんと一番最初に口を開いたのは、意外にもハッピーだった。

ちなみに、この世界に来て、数日間移動しているうちに、エクシードの使命含め、エドラスの説明は、パーティーメンバー全員に済ませている。

それにしたって、こういう場面で話し出すタイプだとは思っていなかった。

「シャルル……それはオイラ関係ないと思うんだ。オイラもアルマもそんな命令なんて知らないし、シャルルだって、命令に従うどころか、ウエンディを守ろうと頑張ってる。その気持ちは本物だって知ってるよ? だから、そうやって打ち破れるような、ちっぽけな使命なんだよ、きつと」

それでも、と続ける。

「もし、エクシードが本当に悪いヤツらだったとしても、その時はオイラが戦うよ! ナツやウエンディ、そしてシャルルを守るために!!」

そう言って立ち上がった姿はいつもより、大分立派に見えた。

シャルルもこの様子には何も言えなくなってしまったらしく、黙ってソファに座りこんでしまう。

さて、と一旦場を区切り、ミストガンが話の続きをし始める。

問題は何もエクシードの事だけではない。

魔法が無くなった後のこの国の事も頭に入れておかなければならないだろう。

俺達だって、完全に混沌とした状態でさようならとポイッと捨て置いて帰るといふのは寝覚めが悪いという物だし、ミストガンはコチラに戻って生活していくんだ、できるだけ混乱の少ない形になるように

努力はしたい。

「1番は国民全てに「魔力なんてなくてもやっていける」と思わせる事だろうが、それが簡単にできればアニメなどという物が開発される事はなかっただろう。」

流星に、この問題についての解決策を持っている人間は簡単には出てこず、宿の部屋に沈黙が降りる。

「やはり、ココは私が憎まれ役を……んぐう!？」

そんな状況が続く事に痺れを切らしたのか、ミストガンが何事か言いかけるが、俺が全力で足を踏みつけて止める。

あのアホ、エドラスに着て1日目の夜にコツソリ俺に打ち明けた秘策とやらを語るつもりだったらしい。

なんでも、自分が魔力を奪う悪の存在を演じ、この国の英雄がそれを討つという構図を作る事で国民の感情を良い方向に持つていこうという話だ。

アホか、と。

聞いた時もミストガンの頭を力いっぱい叩いてやった。

そんな事をさせるために、ここまで付いてきたんじゃない。

国の為なら処刑されてもいいなど、ミストガンの立場を知っている上でも自己犠牲が過ぎると突っ込まざるを得ないだろう。

しかも、この野郎はこの策が唯一の秘策だったらしく、俺に否定されてまあまあ落ち込んだというか、途方に暮れていた。実際、他にいい方法が思いつかず、こうして困っているのだから、俺達2人の計画性の無さには呆れる他ない。

しかし、まあ……

「お前、次にさっきの話をウエンデイの前でしようとしてみる？ 処刑される前に俺がぶった斬ってやるからな？」

と、ミストガンの肩を抱きながら、ボソツと呟いた。

「あ、ああ、すまなかった」

ミストガンの方も俺に合わせて小声で返すが、冷静に考えると、ガジルやウエンデイの聴覚なら、この距離での内緒話は余裕で聞こえてるんだよなあ……

32話 「エドラス戦記①」

▼トウヤ視点

「我こそは！エクスタリアの女王、シャゴットにより召喚された異世界の戦士、斬竜仮面セルバルジャー!!」

「そしてその仲間1号、グランディー！ですっ!!」

「……………2号、メタリカー」

エドラス王都、郊外へと続く道でパレードを行うエドラス軍を前にして高らかに声を上げる俺達。

珍しく大声を上げたせいで少し声が裏返った気がするが、気のせいだろう。

「なんだ貴様ら!」

「ふざけた仮面などつけおって!!」

アルマの翼^{エーラ}によって空中から——ハッピーとシャルルは別の所に居るので、ウエンディとガジルは地面に立っている——口々にコチラを罵倒するエドラス軍兵士を見下ろす。

先ほど露店で適当に調達してきたこの世界のキャラクターもののお面から見える狭い視界でも分かる程、兵士たちは激昂していた。

「我々はシャゴット陛下に代わり、魔力を独り占めにしようとする、不屈きな人間達に裁きを与えに来たのだ」

なんかすごいツツコんでくるな……

えーっと、こういう時は何ていうんだったか。

そんな風に少し詰まると、背中からアルマの助言が囁かれる。

「えー……私たちが人間ではない!斬竜仮面だ!!」

うん。

なかなか無理があるが、これで通さないと……

この世界にも「俺達」がいるかもしれないのなら、ここで顔が割れるのは、そいつらに申し訳ない。

「貴様らの魔法は没収だあ!!」

兵士たちの怒号を聞き流しながら、両腕に魔力を溜めていく。

アルマに声を掛け、前方に飛び込みながら広げた両腕を体の全面で

クロスさせる。

「斬竜の……剣翼!!」

衝撃が発生し、兵士達が吹き飛んで、手元にある魔法の道具がバラバラに砕かれた——いや、斬り刻まれた。

元の場所に戻るついでに、魔法の街灯や看板の類いを斬り捨てておく。

軍の前方に降り立ち、クイクイと手のひらを動かして挑発する。

「かかって来い……エクスタリアに行きたいなら、俺達を倒してからだ」

▼とある兵士視点

「かかって来い……エクスタリアに行きたいなら、俺達を倒してからだ」

そんな言葉が辺りに響く。

明らかな挑発に対し、手元の魔法が無事な者達が攻撃を仕掛けていくが、ある者は攻撃の出鼻を潰されるように掌底を打ち込まれ、ある者は魔法の武器を簡単に破壊されて戦意を喪失する。

敵はオレ達に魔法を使わせない。

使えたとしても、その攻撃ごと魔法の武器を斬り裂いて破壊してしま……

明らかに「アレ」はおかしい。

魔法の道具というのは、エドラスにおいて非常に貴重なモノだ。我々兵士という名誉のある職に就いたものであるから、このように一人ひとりに携行が許されているが、今の子ども達の中には、王都出身でも直接触れた事はないという者も居よう。王都でそうなのだ、地方に行けば更に魔法に触れる機会は少なくなる。

それほど重要なモノであるからには、ひとつひとつの強度だってそれなりのモノになっている。事故などで壊すなどという事があってはならないからだ。

それをあんな紙切れのように壊していくなど……神話に語られる

怪力乱神の類いではないか。

それだけではない。

あの仮面の男が腕を一振りすれば、銀色の光が漏れ出し、その線上のモノが斬り刻まれる、この光景。

これでは、あの男自身が魔法を使っているようだ……

やはり、エクシードに齒向かうなど、人間には過ぎた行いだっただろうか。

しかし、オレだってこの国の兵士だ。

目の前の明らかな敵対勢力を前に、疎んでいるだけという訳にはいかない。

持てる勇気の全てを振り絞って呐喊してやる。

手に持つ槍も勿論魔法の武器。

部隊に一律で配備される何の変哲もないモノだが、それでも魔法による噴射で勢いをつけたその一撃は岩をも砕く。マトモに当たれば、あんな男、無残な両断死体に早変わりだ！

そう思つて槍を振りかぶる。

破れかぶれな攻撃……こんな一撃が当たらない事など、先ほどまでの異常な身のこなしを見ていれば簡単に分かった。

しかし、オレの槍は見事に敵の体を捉えた。

当たり前だ。

相手は避ける事すらしなかったのだから。

それどころか、あろうことか、槍の刃先を頭突きで止めてみせたのだ。

止まった槍に軽く右手を添えるだけで、俺の得物は粉々に砕け散つてしまう。

それと同時に、俺に中の戦意や、矜持といったモノもパキリと音を立てて崩れ去り、粉となり果てた。

バケモノだ……

体から魔法を放ち、オレ達の磨いてきた武術をあざ笑う身のこなしを持ち——そして何より、魔法で傷一つ付けられず、逆に触れるだけで壊してしまう。

シャゴツト王女が、人間から魔法を没収する為に遣わした戦士……
正にその通りだ。

私たちは神に逆らった。

その結果、目の前のバケモノを呼び込む羽目になったのだ。

オレは、粉々になった槍の僅かに残った柄の部分だけをぎゅつと握りしめ、情けない声を上げながら逃げ出した。

▼ガジル視点

——おーおー、やってるやってる。

遠くの方で兵士どもの魔法武器や、街に設置された魔法装置をブチ壊して回る斬竜を眺める。

俺が斬竜に頼まれた仕事は、ヤツが斬り漏らした兵士の武器を破壊していく事だ。この王都から本気で魔法を無くすつもりらしいが、このままのペースなら実際やってしまえばいい。

オレとしては、こんな雑魚どもをどれだけやろうが、暇つぶしにもなりやしねえ。せつかく乱戦になってるんだ、少しくらい骨のある奴をやっちまいてえもんなんだがなア。

「んー、君たちだね？ オレ達の邪魔をしているというのはい、
すると、そこにピンク色の奇抜な鎧を纏い、リーゼントに割れ顎と
いう個性の洪水のような男が現れる。

見た目だけならギャグ要員かと鼻でわらつちまいたくなるような奴だが、周囲の兵士の反応や、本人が纏う空気から只者ではないというのが分かる。

やっと思しめそうな奴が登場し、腕がなるといふものだ。

「そうだと云ったら？」

「んー、排除するさ。オレ達は永遠の魔力を手に入れる……エ
クシードのラクリマ化はその第1歩となるのさ、これ以上邪魔はさせ
ないよ」

「ギヒッ——上等オ……！」

一撃目はオレから。

右手を鉄の剣へと変え、垂直に振り下ろした。

小手調べにと放った攻撃……避けるか受け止めるか、どう対応するかだけでもある程度、どんなタイプか分かるような一撃。

そして、まさに狙い通り、対応から相手の闘い方を把握する事ができたのだが……

「オレの腕が柔らかくなっただと……!?!」

鋭い刃を形成していた右腕が、敵の持つ剣に触れた瞬間にドロリと歪み、硬度を失ったのだ。これではヤツに当たった所で傷をつける事すらできない。

感覚的にもいきなり力が抜けるようで気味が悪かった。

「ふふ、驚いたかい？オレの剣、ロツサエスパードは触れたもの全てを柔らかくしてしまうのさ」

なるほど、通りで……

厄介な魔法だぜ。

「んーんー、しかし、驚いたのはコチラも同じだ。まさか体を鉄に変えるとはね……異世界の戦士、というのは本当のようだ」

問答を終えて、互いに間合いを測り直す。

ぐるりと円を描くように足をすり、相手の隙を伺っていく。

先に動いたのは、今度はあちらの方だった。

足元に剣の先を当て、地面を柔らかくしながら滑るようにコチラに飛び込んでくる。

予想外のスピードに面食らったものの、剣速自体は大したものではない。

袈裟懸け、逆袈裟、突き、右薙ぎと繰り出される連撃を簡単に避けていくが、それでも当たってはならないというのがそれなりのプレッシャーを与えてくる。

普通の剣士相手であれば剣が当たるタイミングに合わせて体の一部を硬化させカウンターを決めるのだが、硬くした体まで柔らかくされればどうなってしまうか分からない。よって避ける以外の選択肢を取れずにいた。

しかし、気をつかいないながら避け続けるというのは、想像するより集

中力を消耗する。このまま持久戦になれば、先に音を上げるのはコチラであろう。

それなら——と大きく息を吸い込む。

柔らかくできないものをぶつけてやればいいだけだっ！

「鉄竜の咆哮!!」

至近距離でブレスをお見舞いする。

これを防ぐ方法の無い相手は、せいぜい自分から後ろに飛んで衝撃を少しでも緩和する事くらいしかできない。

そうして、少し離れた間合になる——計算通りだぜ、ギヒッ。

「やるじゃないか……アイアンボーイ」

「変な名前付けんじゃねえ!!」

そう叫びながら、今度は両手を鉄剣へと変化させ振り回してやった。

「ふむ、その攻撃は通用しないと、先ほど見せてあげたはずだがね？」

相手は余裕綽々といった様子でオレの両手を柔らかくしていく。

——それがオレの狙い通りだとも知らずに。

「ギヒッ、それはどうだろうなあ!」

柔らかくなつた両腕の剣を鞭のように激しく振るう。

ヤツの剣はあくまでモノを柔らかくするだけ、その質量や性質までも変化させる事はできない。つまり、今あのアゴ野郎を襲っているのは鉄の重さを持ち、鉄ではあり得ないしなやかさを持つ強力な鞭。

先ほどまでの近接戦では思いのままに振り抜けなかったが、このアウトレンジなら話は別だ。

「これはっ……私の魔法をっ……利用してっ……!」

幾度となく襲い来る鉄の鞭の猛攻に対し、必死にロツサエスパードを振るっていなし続けるアゴ野郎。奇しくも先の焼きまわしとなる。

しかし、先ほどまでと異なり、受け手限界は早かった。

ただ避け続けたオレとは違い、そもそも最初から剣を振りつ放しである事、いなしているとはいえ、重い鞭の攻撃を受け止め続けている事。それらが重なり、ヤツの手に持った剣がとうとう跳ね上がり、決定的な隙が生まれた——

「鉄竜鞭!!」

そこをすかさず、2本の鞭で滅多打ちにしてやる。

ドゴン、ズドン、と重い音が響き、敵は地面に埋もれるように倒れ伏せてしまふのだった。

名前を聞くのは忘れていたが、恐らくあれがこの国の軍に4人いるという魔戦部隊隊長とやらの1人だろう。殆どは派手に動いている斬竜の方に行くと思っていたから、1人でもこちらにやってきたのはラッキーだったかもな、などと考えながら、辺りの様子を確認するが……

——ハッ、今日はツイてやがんぜ……!!

「そこまでしてもらおうか……オレは王国軍第一魔戦部隊隊長、パンサーリリー。陛下のおわすこの王都で、これ以上の狼藉は働かせられん」

振り返れば、身の丈よりも遥かに大きな大剣を携えた黒い獣面の戦士が立っていた。

背中から生やした翼^{エーラ}を羽ばたかせ、上空から勢いよく剣を振るうリリー。

オレは咄嗟に身を躲したが、その大剣の切っ先は止まる事を知らず、王都の地面へとブチ当たって亀裂を生じさせた。

その威力にゾツとしつつも、ゾクゾクと強敵との出会いに歓喜する。

——ああ、今日のオレは本当にラッキーだ。

先ほどのアゴ男とは比べ物にならない闘気を持つ野郎とやり合える。

しかも相手はネコときた。

この世界に来た当初の目的がやっとならなそうだ……

「ギヒッ」

▼トウヤ視点

ありとあらゆる魔法をぶった斬り、襲い掛かる兵士の意識を刈り取

り、街を駆けずり回っているうち、いつの間にか王城の方まで入り込んでいたようだ。

いくら入り組んだ迷路のような王都であっても、意図せず王城に入り込めるとは考えづらい……おびき寄せられたか？

「ウエ……グランディ、気を付けろ」

すぐ後ろを歩くウエンディに軽く注意喚起しておく。

ウエンディには支援魔法による後方支援を頼んでいる。闘えるようになったとはいえ、こんな戦争のど真ん中に放り込むのは流石に心配だが、本人の手伝いたいという意思を蔑ろにもしたくなく、このような形となった。しかし、実際ウエンディの支援は本当に効果的で、体が軽くなったり、細かい傷を治してもらえたりと至れり尽くせりだ。独りぼっちにしてきたガジルには悪い事をしたかもしれない……

「ト……セルバルジャーさん、あの……アレって」

そんな風に考えていると、ウエンディが不思議そうな声音で俺を呼びながら、前方を指さした。

その先、ウエンディが見つめる先にあったモノは……

「遊園地……？」

観覧車にメリーゴーランド、ジェットコースターにお化け屋敷。

どこからどう見ても遊園地な建物が、王城の中にズドンと建っていた。

しかも、そのエントランスの門の先には、ごく丁寧な事に大量の兵士キャストが待ち受けているではないか。

「チツ、やつぱ罨か……ウエンディ！アルマ！」

「ええー！」

「はいー天を駆ける瞬足なる風を……バーニア!!」

俺とウエンディ&アルマに分かれた後、ウエンディが短文を詠唱して俺に手を翳すと、一気に体が軽くなる。

天空魔法、バーニアは対象のスピードを強化する魔法だそうだ。

その強化された駿脚でもって敵陣ド真ん中へと、一息に飛び込み、脚をぐるりと回し、つむじ風起こす。

「斬竜の鎌尾!!」

予想していなかったであろう特攻と、突如巻き起こった斬撃の奔流に、敵兵達はなす術もなく倒れ、魔法の武器も粉々に崩れ去っていく。魔法を失った兵は後ろへと逃れ、新たに武装した兵が襲い掛かってくる。しかし、どれだけ兵士が増えたとして同じ事。何度も何度も武器を壊し、気を失わせ、少しずつ敵軍の力を殺いでいく。

しかし、消耗するのは俺とて同じではある。

今回は魔法を壊す事に重点を置いている為に、常に斬魔の魔力を身に纏っている。途中途中で、敵の落としていった刀剣類を食べて回復しているとはいえ、このままでは俺の体力と魔力が尽きるか、敵の魔法が尽きるか、どちらが先か分からない。

いいや、ネガティブな事を考えてちゃダメだ。

たった3人で戦争をしようだなんて馬鹿な案に乗ってくれたウエンデイは、今も果敢に闘ってくれているのだから。

ウエンデイを見れば、両腕から生じた風で兵士たちをなぎ倒しているところだ。

「天竜の翼撃」だそうだが、恐らく、俺やナツの技を真似してくれているのだろう。嬉しい事だ。

そんな風に一度和んで気合を入れ直すか、というところで、ウエンデイにジェットコースターが迫る――

「アルマ、ウエンデイ!!」

咄嗟に駆け出し、ウエンデイとアルマに飛びついてジェットコースターを避けさせる。

「助かりました!」

「ありがとうございます、トウヤさん!」

数メートル転がってから、顔を上げると再びこちらに激突しようとしているコースターが見えた。

――2度も通用するかよ!

「斬竜の槍拳!!」

俺の突き出した拳がコースターの車体に突き刺さって粉碎される。フツと1度息を吐いて、コレを操っていたのであろう男の方に目を

向けた。

青い髪に白いメツシユを入れた、軽薄そうな青年だ。

王都に貼られたポスターか何かで顔を見た覚えがある……確かアレは第三魔戦部隊隊長のヒューズだったか。

「あつはは、やるじゃん。流石は異世界の魔導士とどこか……やつぱ超スゲエんだろうなあ、その永遠の魔力つてやつはさあ……オレ達もそれを手に入れたいんだ、分かるだろ？だから、邪魔しなくてもらつていいかなあ？」

ヒューズは、手に持ったタクトを軽く振るう。

すると、メリーゴーランドの馬や、観覧車のゴンドラ、ありとあらゆるものが浮かび上がり、俺めがけて襲いかかってきた。

「ウエンデイ、下がってろ！」

「で、でも……！」

すぐに2人を後ろに押しつけ、ヒューズに気づかれないようにさりげなくアイコンタクトを送る。ウエンデイは最初、俺だけおいて下がるのを躊躇ったが、俺の意図に気づいたアルマがウエンデイに何か耳打ちすると納得した顔をして下がっていった。

2人が離れたのを確認した俺は腕をでたらめに振るって、幾筋もの銀色の斬撃を飛ばしていく。

「斬魔ノ太刀、纏の型・風牙——斬竜の刀牙、乱閃!!」

その殆どがヒューズの操る遊具に当たり、それらを真っ二つに斬り裂いてしまう。

しかし、圧倒的な物量相手には打ち漏らしも当然ながら発生する。それらを体で受け止めながら、無理やりにも前へ進む。

「ぐっ……！」

ヒューズの攻撃には1つたりとも斬撃は含まれておらず、休む暇もない俺は、苦悶の声を上げて、ひたすらに猛攻を耐え忍んだ。

時には躲し、時には斬り裂き、時には両腕で受け止めて——それでも着実にヒューズの方へ近づいていく。

確かにケガを負いながらも、それでも止まらない俺の足に、ヒューズも次第に焦りを覚えてきたのだろう。タクトを乱暴に振りながら、

不満を吐き出し始めた。

「そんなメチャクチャな魔法もつてて、どうしてオレ達の邪魔すんだよ！そんなにスゲエなら、魔力がどれだけ大事か分かんたら?！」

そりや分かるさ。

俺は魔法で飯食ってるような人間だ。魔法の重要さなんて嫌という程知ってる。

それに、そんな生活に直結した問題だけじゃなくたって、必要とする場面が多く存在するのも分かる。

魔法があるから家族を守れる。

魔法があるから友達を助けられる。

だが……

「それで家族奪われそうになってたまるかってんだよ!!」

今はミストガンの為にこうして、できる限り武器だけを狙って攻撃しているが、別にあの巨大アニマで『妖精の尻尾』フェアリーテイルを魔水晶ラクリマに変えようとした事を忘れた訳じゃねえんだ……！

俺があそこでアニマをぶった斬れたから向こうの『妖精の尻尾』が無事なだけで、あの時俺が間に合わなかつたら……そう考えるだけでは腸が煮えくり返りそうになる。

その上、こいつらはエクシードを自分勝手に滅ぼした後は、再び俺達の世界を狙って攻撃してくるつもりだという。

くそつたれ……！

「そうか……オマエ、アースランドの妖精の尻尾……！」

そんな気持ちを含めて、更に一步踏み出す。

あと一步飛び込めばヒューズに一撃くれてやれる……！

「でも、そんなの関係ねえ！オレ達は永遠の魔力を手に入れるんだ!!」俺が脚に力を入れたその時、ニヤリと笑ったヒューズが、今までで一際大きくタクトを振るう。遊園地のあらゆるモノを操るその魔法のステッキは、ヒューズの背後にあったオブジェの騎士を2体、生きた戦士のように動かして俺へと差し向けた。

——だけど、そりや悪手だぜ……！

オブジェの騎士の1体が振りかぶった剣に齧りつく。

もう1体は気にするまでもないだろう。

なんせ、その背中には先ほど別れた頼りになる相棒達が張り付いてるんだからな。

「ガンツと騎士鎧を蹴って勢いよく羽ばたくウエンデイとアルマ。」

その反動で俺を狙っていた2体目の騎士はあらぬ方向へと転がっていった。

ヒューズはと言えば、急に眼の前に現れた少女達に驚きを隠せず、防御の準備が間に合っていない。

ウエンデイ達を小さい子どもとネコだと視界から外した自分のミスを呪いやがれ！

「天竜の翼撃!!」

ウエンデイの小さな腕の動きに合わせて、その矮躯から産まれたとは思えぬ大きな風が巻き起こった。隙だらけのヒューズはそれを受けて、上空へと舞い上がっていく。

唸りながら落下してくるその様は無防備そのもの——

俺はその場で縦に1回転して、落ちてくるヒューズの体に踵を落とす。

「斬竜の鋭爪!!」

ガンと大きな音が辺りに響いて、遊園地の床に大きな亀裂が走る。

その中心に顔面を突っ込んだヒューズの意識は、当然のことながら刈り取られていた。

▼三人称視点

3頭の竜が兵士達を相手に大立ち回りをしている頃、王城の深部を忍び足で進む男が1人。男は慣れた様子で城内を歩く。頭に地図が入っているだけではなく、かつて何度も行き来した事があるかのような淀みない動きだ。

男の名はミストガン。

彼は今、城内の研究施設内に存在するアニマ発生装置へと向かっていた。指向性を反転させたアニマを展開し、エドラスの魔力をアース

ランドへと送るためだ。

多くの兵士が戦争へと出向こうとしていた上、城下で大騒動が起きている現在、城の内部は手薄そのもの。僅か数名の見張りなど、ミストガンの実力からすれば問題にもならなかった。

順調に歩を進めるミストガンだったが、目的地へとたどり着くための一本道、その半ばに腰の曲がった小さな影が立っているのに気づく。

「お久しぶりでしゆな、ジエラール様……ぐしゆしゆしゆ」

不気味な笑い方をする老人——エドラス軍幕僚長バイロが、ミストガンのもう1つの……否、本来の名を呼んだ。

この名には、ミストガンのエドラスにおける本当の名前という他に、もう1つ重大な意味を持っている。

それは——

「この先にはアニマ発生装置しかございませぬぞ。それよりも、7年ぶりのご帰還でしゆ、早く陛下にお顔をお見せになってください、王子」

7年前、突如として行方を眩ませた、エドラス唯一の王子。

それこそが、ここエドラスにおけるミストガンの肩書であった。

「用があるのは父上ではない。この先の装置だ……邪魔立てするのなら、力づくでも通してもらおうぞ」

そう言い放ち、杖を構えるジエラール。

王子としての顔の中に、『妖精の尻尾』のS級魔導士としての表情を覗かせて、先手必勝とばかりに魔法陣を生成した——

333話 「エドラス戦記②」

▼三人称視点

トウヤ達が王都で戦闘を開始する少し前、ハッピーとシャルルは連れ立ってエクスタリアへと降り立っていた。

『みんな聞いて!!エドラスが戦争を仕掛けてくるんだ!!女王様を呼んで!!』

突然現れた見覚えのないエクシードがそのような荒唐無稽な事を言う。

ハッピーの思惑通りに2匹の周りには人ばかり——ネコだからが出来ていたが、聴衆の思いは、ハッピー達の理想とは全く異なっていた。

「人間ごときがオレ達に逆らう訳ないだろ!」

「そんなの関係ねーよ!女王様の魔法にかかれば人間どもなんて瞬殺さー!」

「出ていけホラ吹きどもー!」

そんな心無い言葉を投げかけてくるエクシード達。

やはりダメかと沈むシャルルに対し、ハッピーは諦めなかった。

「エドラスがエクシードを魔水晶ラクリマに変える魔法を作り出した」

「今はオイラ達の仲間が必死に軍を止めてる」

「重要な話があるからどうか女王様と話させて欲しいんだ」

しかし、どれだけ心を尽くして語りかけたところで、エクシード達の心には響かなかった。

女王様がいれば全てなんとかなる、自分達には関係ない。

どこまでも他人事でしかないその態度に、だんだんシャルルのイライラが募ってくる。

こんな奴らの被害を少しでも抑える為にウエンデイが闘っているのか、と。

彼女はシャルルと別れて兵士達と闘いに行く直前、笑って言った。

『シャルルは好きになれないかもしれないけど、エクスタリアが無

かったら、私とシャルルが出会う事はなかったんだよ？だから、これはその恩返しに闘いでもあるの』

矢面に立つのがトウヤだったとしても、この場でクダを巻いているだけのエクシード達なんかには比べたら、ウエンデイは物凄く危険な場所にいる。

そんな思いがシャルルの心を締め付けていた。

「どうして……どうしてあんた達はそんなに他人事でいられるの!? あんた達の国の事でしょう!? 少しは自分達で守ろうとしなさいよ！自分の家族くらい、自分で守るための努力をしなさいよ!!」

そんな怒号がその場を支配し、一時、エクスタリアの広場に静寂が訪れる。

「何がエクシードよ!! 私を知ってる人間は全員、自分の事も、家族の事も自分の力で守ろうとしてたわ!! あんた達のどこが人間より優れた種だって言うの!?!」

シャルルの脳裏に浮かぶのは『化猫の宿』^{ケットシエルター}の皆、そして『妖精の尻尾』^{フェアリーテイル}の連中の背中だった。

いつだってうるさくて、バカな事ばかりしている奴ら。

私とはいつまで経っても気が合いそうにない連中もいる。

ウエンデイをいやらしい目で見える変態^{トウヤ}もいる。

でも、今、こうして必死に訴えかけているオスネコをバカにして笑うコイツらに比べたら何百倍もマシだ。

「女王の魔法だなんて、それも嘘っぱちよ!! ホントにそんな圧倒的な力があるなら、戦争なんて起こりっこないわ!! だから早く女王をここに呼んで!!」

シャルルの言葉に何か感じる部分のあった少数のネコ達は拳を握って黙り込んだ。

しかし、女王をバカにされた事で激昂するエクシードも決して少なくはなかった。

むしろ、比率にすれば後者の方が多いくらいで――

「女王様になんて事言うんだ!!」

そんな叫びと共に石を投げる聴衆まで現れてしまう。

石は綺麗な弧を描いてシャルルの頭部へと迫る。

今、ウエンデイが置かれている危険な状態に比べたら、こんなモノと目を瞑って耐えようとするシャルルだったが……

「シャルル！」

予想していた痛みが訪れる事は無かった。

代わりに、ゆつくりと地面に引き倒され、覆い被さられるような優しい感触がする。

目を開くと、至近距離に痛みを耐えて苦悶の表情を浮かべるハッピーの顔。

「ハッピー………」

何度も何度も執拗に投げつけられる石。

それらが当たる度にハッピーの体がブレるが、それでもシャルルを庇う位置を離れようとは決してしなかった。

思わずシャルルの瞳に涙が溜まる。

それが零れるかと思ったその時、広場に新たな怒号が響いた。

「おめえらー！いい加減にしやがれ!!」

その声の主は、白い毛に太い眉毛と濃い髭を生やしたオスのネコであつた。

ハッピー達は知る由もないが、彼は傍らの青い——どこかハッピーに似た雰囲気のもの——メスネコと共に普段は郊外で暮らしており、この日はちよつとした用事の為に数年ぶりにエクスタリア城下町へと訪れていたのだ。

そして今しがた、この騒ぎを聞きつけて広場へとやってきたのだつた。

「恥ずかしくねえのかおめえらー！こんな子ども相手に!!」

彼の怒声に、石を投げていたエクシード達も押し黙る。

単に声が大きいというだけではない迫力があつたからだ。

彼がこうして声を上げたのは、何も生来の気風の良い性格の問題だけではなかつた。

ハッピーを一目見た瞬間に、彼は気づいてしまったのだ。

——間違いねえ、ありやあ……

そうなのは、石を投げられているという状況を捨て置く事などできはしなかった。

「こんなになってまで訴えてる事がただのホラだなんて、本気で思ってたのか、おめえらはよお！かーっ、冗談じゃねえ!!女王に会わせる位、させてやりやいだろうが!!」

広場のエクシード達にざわざわと動揺が広がる。

可哀想だと嘆く声、信じてもいいのではないかと説得する声、だくだあいっらは女王様を侮辱したと怒る声——

それら全ての喧騒を切り裂いて、凜とした一つの声が響いた。

「そこまでです……皆に、話さなければならぬ事があります」

それは神とすら崇められるエクスタリアの女王、シャゴットのモノであった。

羽毛に包まれた派手な装束を身に纏い、どこか覚悟を決めたような顔でシャルルとハッピーを見つめていた。

その後ろには国の重鎮と思われる年老いたネコ達や、騎士団、大臣、そして、桃色の毛で柔和に笑うメスのネコが立っている。

桃色のネコは女王の秘書然とした毅然とした立ち姿でありながら、どこかほんわかとした呑気な雰囲気纏った不思議な姿で、それを見たシャルルは何となくアルマの事を思い出した。

よく見れば彼女はほんの少しだけ肩で息をしている。もしかしたら、彼女がシャゴットを呼んできたのかもしれないとシャルルは考えたものの、その答え合わせはされないままに場面が変化していく。

女王が、その豪華な衣装を脱ぎ捨て、片翼しか持たない華奢な身体を衆目に晒したのである。

これにはエクシード達の間にも大きな動揺が走った。

彼らにとって、シャゴットとは神であり、偉大で強大な、エクシードの力の象徴である。

その正体が自分たちと変わらない大きさの体で、それも翼が一枚しかないなど——今までの固定観念を崩し去るには十分な衝撃だったと言えよう。

「この国は……いいえ、この世界は滅びへと向かっています。人間達の欲望はやがてエドラスの全てを呑み込むでしょう……だから私は、1つの決断をしました。真実を話すという決断です」

それから語られた内容は、驚くべきことに、殆どアルマの話した通りであった。

シャゴツトの持つ力は予知のみであり、それを巧みに使って命の選別をしていると信じ込ませてきたという。シャゴツトには語られるような強大な力などはなく、全ては力で勝る人間に攻撃されないようにと捻り出した苦肉の策の結果だったのだ。

ドラゴンスレイヤー
滅竜魔導士殲滅の為に送り出した卵も、本当はこの世界の崩壊を予知した女王が、少しでも子どもたちを生かすためにと逃がすための方便だった。

それらの話を聞いて今まで信じてきたものの全てが崩れていく感覚を覚えるエクシード達とは対照的に、シャルルは肩がスツと軽くなっていくのを感じていた。今はただ、ウェンディとの出会いが、思いが仕組まれたものではないという喜びが彼女の胸を打っていたのだ。

その様子を見たハッピーも、シャルルに向かって良かったねと笑いかけた。心を見透かされたような居心地の悪さに、シャルルはつい「ふんっ」と顔を背けてしまいが、その様子にこれまでのようなトゲトゲしさは少しも感じられなかった。

そんなシャルルの前に、カシャンと短剣が置かれる。

何事かと、そちらを見ると、シャゴツトが跪いているではないか。「あなたには辛い思いをさせました……あなたには私を裁く権利があります。その短剣でどうか私を……」

悲壮な顔で告げるシャゴツト。

しかし、シャルルは何をバカな事と言わんばかりに溜息をついて、短剣を地面へと突き立てた。

「そんな風に思ってるなら、私たちとの交渉に乗りなさい……ここに
いる他のエクシード達もよ！」

シャゴットを含め、全てのエクシードがシャルルを見つめている。
その風格はまるで女王のようであった。

「二世一代の大芝居よ！嫌とは言わせないんだから!!」

△・△ △ △ △

オクトパスリキッドという魔法薬を飲み、巨大な蛸の化物と化した
バイロの巨体により、アニマ発生装置へと向かうための通路が埋め尽
くされている。

相対するミストガンは、余裕の表情を崩していないものの、じりじ
りと後退せざるを得ない状況に陥っていた。

生半可な魔法ではダメージを与えられないような姿に変化したと
ころで、それを正面から叩き伏せられる手段などミストガンはいくつ
も持っている。

軽く振るった触腕の一撃が、簡単に岩を砕くものであっても、容易
に避けられるし、何なら受け止める事すら可能だろう。

『妖精の尻尾』最強候補の力は伊達ではないのだ。

しかし、現在はその能力の高さ故にじり貧へと追い込まれていた。
バイロを倒す手段はいくらでも思いつくが、それらのどれも威力が
強すぎて使えそうにないのである。

通路を完全に埋めてしまっているバイロを吹き飛ばす程の大威力
の魔法を使ってしまえば、城にも大きなダメージがいつてしまう。そ
うなればアニマ発生装置も無事では済まないかもしれない。

バイロとて装置を破壊してしまうのは本望ではない。しかし、最悪
壊してしまっても、もう一度作り直すという手段を選ぶ余地はある。
それに対してミストガンは、作戦の為に今この時、アニマを反転展開
させる必要があるのだ、慎重にならざるを得なかった。

——地道にやっっていくしかないか。

バイロの繰り出す触手の1本に合わせるように三枚の魔法陣を描く。

三重魔法陣――

「鏡水！」

ガツンと魔法陣の壁にぶつかった触手だったが、その壁を割る事は出来ない。それどころか、加えた衝撃と同じ分だけの力が反射され、バイロの思惑とは裏腹に浮き上がってしまう。

その隙だらけの触腕に向けて、杖の先端から展開した魔力刃を振るったミストガン。

「ハアツ!!」

今も王都のどこかで闘っているはずの友の如く、一刀の下に斬り捨てる。

これでバイロの使える腕はあと7本……

脚を全て斬り落としてやったら少しは隙間が空くはず、そこから向こう側へ――などと考えているミストガンに対し、バイロは不気味にぐしゅしゅと笑う。

「残念でしたな……この触手はこうして再生させる事もできまじゅぞ！」

その言葉通りに先ほど落とした触手の切れ目から新しい腕が生えてくる。

いよいよどうしたものと、流石のミストガンも顔を歪めた。

一瞬訪れた戦闘の合間の静寂に、ミストガンのものでも、ましてやバイロの触手を引きずるような音でもない足音が響いてくる。

「おお、良い所に来たな……お前も王子を捉えるのを手伝うのじゃ、トウヤー！」

その正体は灰色の髪をぼさぼさに伸ばし、軽薄に笑みを浮かべるエドラスのトウヤであった。

「おやおや、こりゃいいタイミングに来たかな……悪いね、王子様♪」
バイロの言う通りに魔法薬の入った試験管を指に挟んで構えるトウヤ。

孫と祖父に挟まれたミストガンは、それでも不敵に笑みを浮かべ

た。

ヤケになったかと訝しみながらも、捕らえてしまえば同じ事と触手をミストガンへと伸ばすバイロ。

それに合わせるようにしてトウヤも試験管を投げつけた。

——バイロへと向かって。

「遅くなっちゃったね、ジエラール」

試験官がカシヤンと割れて、バイロの触手に紫色の魔法薬がかかる。

これはトウヤ特製のアンチマジックリキッドという代物であり、これを浴びた魔法の道具は一時的に魔法を発動できなくなってしまうのだ。

当然バイロのオクトパスリキッドの効果も失われてしまう。シユルシユルと肥大化していた体が縮んでいき、元の老人の姿に戻ってしまいうバイロ。

すかさずそこへ駆け込んで来たミストガンがバイロの背後に回って、絞め技を掛けた。

「いや、ベストタイミングだ」

王を父に持つミストガンと、幕僚長を祖父に持つトウヤは、幼いころから何度も会って話をした。おしゃべりと寡黙、一見正反対に見える2人だったが、周囲の心配など関係がないとばかりに仲を深めていった。

つまるところこの2人は、ミストガンがアースランドへと渡った7年前まで、無二の親友同士であったのだ。

当然、トウヤはミストガンの真意を知っていた。その上で、その志に協力するため、祖父のコネを頼って、アニマや魔法薬の研究に勤しみ若くして幕僚長補佐へと上り詰めたのである。

アニマの逆展開の詳細や、軍の動きなどをミストガンに伝えた協力者とはトウヤの事であった。

全ては自身の主の、そして友の為に。

「トウヤ、貴様……！」

鬼の形相で孫を睨みつける祖父を前にして、トウヤはいつも通りの

軽薄な笑みを消さずに言い放った。

「悪いね、爺様……僕が忠誠を捧げてきたのはファウスト陛下じゃない。僕の主はここに居るジェラールって事さ」

それを聞いたバイロは無念の表情を浮かべ、ミストガンに締め落とされて気を失ってしまったのだった。

「さあ、行こうかジェラール。魔法の時代の終焉だ！」

あくまで軽薄な笑みを消さないままに、明るい調子でそう言うトウヤの目を見るミストガン。

周囲からはいつも軽い男だと誤解されがちだが、彼の真意はその瞳に現れる。

その事を知っているミストガンは、彼が至って真剣に自分達とエドラスの今後を見据えて動いていると、7年前と変わらない聡明さを持っていると確信し、フツと笑った。

「ああ、行こう。トウヤ」

顔は同じでも、こうも雰囲気が違う2人の人間を同じ名前と呼ぶ奇妙さに少しおかしくなる。しかし、どちらも無二の友である事には変わりはない。

バイロをそつと床に寝かせたミストガンはゆっくりと立ち上がり、トウヤを伴ってアニマ発生装置のある部屋へと歩いていった。

▼トウヤ視点

シルファリオン
「音速の鎗!!」

くつそ、コイツ、完全に俺への対策を済ませてやがる……!

ただでさえエルザと同じ顔の女なんてやりにくいつたらありやしないというのに。

ヒューズを倒した後、付近に敵の気配がないのを確認した俺達は王城から抜けだし、王都の広場のようなところにまで戻ってきた。

するとそこには方が一の為にも壊しておきたいと考えていた、エクシードを魔水晶ラックリマへと変える装置がまとめて置いてあるではないか。

しめたものだとしてれらを壊す為に構えた瞬間、近くの建物の屋根か

ら緋色の髪の女が落下しながら突撃してきたのだ。

街の中には元々人の匂いが充満していたせいもあって、すぐに気づけなかった俺はその待ち伏せにまんまと一撃入れられてしまった。

すかさず繰り出される、屋根の上に残った兵士による投石攻撃は何とか避けられたものの、対策された上に待ち伏せされたという状況に舌打ちする。

「ウエンディ、アルマ、上を頼む……エルザは俺が！」

はい！と2人そろって返事をして飛び上がる。

エルザは妨害する事もなくこちらを睨むばかりだ。

つくづく俺との闘い方を心得ているらしい。

前情報では彼女の扱う槍は様々な形態に変化し、その状態に応じた特殊能力で苛烈に攻め立てるという話だったのだが、先ほど使われた超スピードを出すことができる形態を変化させる素振りはない。恐らく、魔法を無効化・破壊できる事は既に知られており、それなら触れられないスピードで攻め切ってしまうおうという腹積もりだろう。

更に、兵士達が矢ではなく石を投げてきた事や、エルザが突く・斬るといふ動きより打つ・叩くという行為を重視した立ち回っている事から、斬撃に対する耐性もバテてしまっていると考えられる。

先ほど、上の兵士達の元へ向かったウエンディ達を見送ったのも、その隙を俺に突かれて槍を破壊されると考えたからだろう。

敵に回すと本当に厄介だな……本人ではない訳だが。

「貴様には魔法が効かんらしいな……魔鎗テン・コマンドメンツの本領発揮とはいかんが、私達の邪魔をしようというなら、まずは貴様から魔水晶にしてやるとしよう」

見慣れた顔で、浴びた事のない殺気をぶつけてくるエルザ。

ポニーテールにまとめた髪が揺れたと思った瞬間、目の前にエルザ

左斜めから叩きつけるように振り下ろされた鎗に対し、必死に左手を突き出して受け止める。ガツンと腕に痛みが走り、たたらを踏むも、エルザの攻撃は終わらない。鎗を軸に体を回転させ、膝蹴りをかましてくる。反応できずに腹に一撃が入り、グボツと声を漏らしなが

ら、がむしやらに反撃の斬撃を放った。しかし、蹴りの反動と鎗の加速によって既にそこにエルザは存在しない。

広場の建物の壁を蹴って縦横無尽に移動しながらこちらの隙を伺うエルザ。

俺の目が追いつかず、一瞬の死角に入った瞬間にダンツと大きな踏み切って、目にも止まらぬ疾はやさで突っ込んでくる。

だが、こちとら竜の五感を持つ魔導士だ、目だけに頼ってる訳じゃない。

これだけ大きな音がしていれば飛んでくる場所は読み取れる――
！

エルザを見ることも無しにスツと上半身を避けて、驚いた声を出すエルザの方へと脚を突き出す。咄嗟に槍を庇ったエルザは自身の身を狙った攻撃にまでは反応しきれない。

俺の放った蹴りはエルザの脇腹を打ち抜いた。

勢いよく吹っ飛んだ先で綺麗に受け身を取るのは流石といったところだが、蹴られた腹部に大きな裂傷が走り、血がだらだらと流れている。

せめてウチのエルザのような鎧を着ていれば、それが壊れるだけで済んだというのに、どういう訳かコチラのエルザは露出狂の如き薄着をしていた。それが明暗を分けたとは言わないが、これだけ血を失えば、先ほどのような高速機動は厳しくなるだろう。相手がエルザという時点で油断するつもりは微塵もないが、限りなくコチラが有利になったと言えるだろう。

エルザへの視線を切らさないまま、チラリと屋根の上の様子を見れば、既に殆どの兵士がダウンしている。ウエンデイもケガはしているものの、行動に支障がでる程のものはなさそうでひと安心だ。

「アースランドの魔導士……これほどか」

しかし、その闘志は些かも衰えていないようだ。

そりゃあ、ここで俺を止められなかったら、永遠の魔力という夢が潰えると思っっているのだから当然か……

それにしても、エルザの顔でこうまで睨まれるというのは中々嫌な

気分だ。

そんな事を考えながら、再びにらみ合う俺達の上にヒュウウウと何か巨大で重いものが飛んできているような音が近づいてくる。

予想外の出来事に「なんだ？」と、エルザへの警戒も忘れて上空を見つめると、何か白いバケモノが落ちてきて――

轟と大きな音を響かせ、広場の床に亀裂を走らせながら、大質量のソレが着地する。

オオオオオオと叫んだバケモノの見た目は、翼こそないものの「機械の竜」と呼ぶに相応しい威容であった。

「ドロマ・アニメ……まさか、陛下!？」

焦るエルザの言葉の通りに、機械の竜――ドロマ・アニメというらしいが――の中からは老人の威厳ある、それでいてどこか狂気を孕んだ声が聞こえてくる。

『貴様、どうやらアースランドの滅竜魔導士らしいな?のこのこソチラからやってくるとは健気なものだ。まずは貴様を魔力タンクにしてやる!その次は忌々しいエクシード共!そして異世界の妖精共じゃ!!』

フハハハハと笑いながら、ドロマ・アニメの全身から大量のミサイルを射出するファウスト。

どうやらアレも魔法のウチらしいので、いくつかは斬り刻んでおくが、如何せん数が多くて全てを無力化するという訳にはいかない。

しかも、あの野郎、自分の国や兵士たちなど、どうなってもいいとばかりに考えなしに攻撃を放っている。全てを丸く収めるためにも、この戦いで誰かに死んでもらっては困ると言うのに……!

咄嗟に近くで呆けているエルザを突き飛ばし、爆発に巻き込まれないようにする。

「貴様ツ!何のつもりだ!？」

至近距離で起こる爆風に体を炙られ、苦悶の叫びを上げさせられる。

近くでエルザが何か言っているが、痛みでそれどころではない。

やっと収まったかと思った所に、今度はドロマ・アニメの尾が迫っ

ていた。

両腕でガードしながら、尾にぶつかる瞬間自分から同じ方向に跳んで衝撃を少しでも殺すが、それでも異常な重圧がかかり、王都の建物をいくつも倒壊させてようやく止まる事が出来た。

いやいや、このジジイ、自分の国の事なんだと思ってるんだよ……

34話 「魔法の時代が終わって」

▼三人称視点

王都の外れ、派手に殴り合ったガジルとパンサーリリーは、互いに満身創痍で大の字になって寝転がっていた。

この状態に至るまでの闘いは非常に苛烈なもので、リリーの装備はどれも碎け散り、ガジルも全身から血を吹いている。

だからこそ、お互いを認め合いどこか清々しい気分となっていた。

「なあ、オマエ、オレのネコになれよ」

「ふざけるな……オマエの事は認めているが、オレはこの国の兵士だ。この国をメチャクチャにしたヤツの下になどつくものか」

空を見ながら会話を交わす。

「そうか？」と悪い笑みを浮かべながらクイクイと親指で轟音が鳴り続けている街の中心部を指すガジル。

「無茶苦茶にしてんのはオマエらの王様の方じゃねえかヨ……この音はオタクの王サマとやらが暴れ回ってる音らしいぜ」

敏感な竜の聴覚で捉えた情報をリリーに伝えてやる。当然の事ながら、王が王都で暴れ回っているなどという事実は信じがたく、リリーは顔色を変えた。

「なんだと……う？」

「それだけじゃねえ、今回の戦いで死傷者は出てないはずだぜ、ギヒッ」

「本当か!？」

リリーは苦しそうに上半身を起こし、2人の独特の雰囲気に向かって遠巻きで見守っているしかなかった第一魔戦部隊の兵士を呼び寄せ、事実確認を行う。

「ハッ、負傷者多数、破壊された魔法も数え切れませんが、死傷者は1人もでておりません……そして、確かに、この轟音は陛下の乗ったドロマ・アニムによるものであります」

こうまで派手に戦闘を起こしている上、実力的に一般兵とガジル達とでは天地の差があるというのに、死者が1人も出ていない。これを

偶然で片づけるのは、あまりにも無理がありすぎる。意図的に誰も殺さないようにしているとしたか考えられないだろう。

しかし、どうしてそんな事を……訝しむリリーはガジルの方を振り向いて真意を問うた。

「どういう事だ……オマエ達の真意は一体……？」

ギヒツと笑って、種明かしをしてやろうとしたガジルを邪魔するようにならな声が響く。

「そこから先は私が説明しよう」

エドラスのトウヤと共にアニマの調整を終え、発動だけをトウヤに任せて先に王城から出てきたミストガンがそこに居た。

覆面を取った見目麗しい姿を見て、リリーはすぐにその正体に気が付く。

それもそのはずだ。

ミストガンはリリーにとって、自分がかつて命を救った少年であり、エクスタリアを飛び出る原因を作った存在であり、仕えるべき国の王子でもあるのだから。

「王子……?!? どうしてここに……？」

「全て、道すがら話すと約束しよう……ひとまず、広場へと向かうぞ」
ミストガンはリリーの傍で膝をつき、手を差し伸べた。

「君にも見届けて欲しい。この国の終わり、そして始まりを」

△・△ △ △ △

同じ頃、アニマ発生装置の前では1組の男女が仲睦まじく手を握り合って、来たるべき時を待っていた。

「もうすぐ終わっちゃうんだね……」

「終わるだけじゃない。始まる——いや、始めるのさ、新しい時代を。僕たちと、僕たちの陛下の手で、ね？」

モニターに映る街の争いを悲痛そうに眺めながら、どこか犬っぽい見た目の純朴そうな少女が呟いた。

「でも良いの？トウヤの大好きな魔法薬の研究もできなくなっちゃう

「なんだよ？」

「前から言ってるだろ、ココ？ 僕が研究してるのはジェラルドの為だって。それに、魔法が無くなったら、普通の薬の研究をすれば良いんだ……というか、実はもう始めちゃってるしね」

「やっぱり研究、好きなんじゃないかなと思いつつも、そんな前向きな言葉に自分も元気が出てくるココ。」

「——そうだよ、魔法が無くなっちゃうのは残念だけど、大好きな人と一緒に楽しく走り回る未来が無くなる訳じゃないんだもの。」

「それにしても……」

トウヤがモニターに映る自分とそっくりの青年を指さす。

「ファウストの騎乗するドロマ・アニメを相手に大立ち回りをしてる最中だ。」

「アースランドの僕は凄いな……研究畑の僕には絶対こんな事できないよ」

「あはは……でも私、トウヤともいっぱい走り回りたいから、もうちょっとだけ体力付けて欲しいよう」

「あー、うん……」と照れたように空いている手で頬を掻くトウヤ。

「お得意の笑みも消して、プイッとそっぽを向いて、照れ隠しのよう」

「ま、それにしたって、ここまでじゃなくてもいいでしょ？ こんな、まるで——ドラゴンみたいにまでならなくても、さ？」

▼トウヤ視点

ドロマ・アニメのミサイルをぶった斬り、口から放たれる極太の光線もついでにぶった斬り、時折来る腕や尻尾での攻撃に何とかカウンターを合わせつつ、一息つく間もなく襲い来るエルザを躲す。

「周りを囲んでいた兵士は既にウエンデイが全員倒してしまった。このまま寝かせておけば、ドロマ・アニメの攻撃に巻き込まれかねないので、増援に来た兵士と一時休戦という事にして安全な場所へと運び込んでもらっている。」

周囲の建物は既に倒壊しきっており、元の広場の大きさから3倍ほどに広がってしまっていた。

俺やウエンデイを捕らえれば、当分使いまわしの効く魔力タンクを手に入れられる。

きつと、ファウストの頭の中はそのような事でいっぱいなのだろう。その為の犠牲は何を払っても痛くない思っている節がある。それで巻き込まれる国民はたまったもんじゃないだろうに。

『無駄だア!!このドロマ・アニムに魔法は効かん!大人しくワシのモノとなれ、ドラゴン!!』

この王は「自分達の為なら他者がどうなるうが知った事ではないという苛烈な王」ではあっても、その結果として民に富みをもたらすのだと、最初はそんな風に思っていた。

しかし、いざ対面してみればどうだ?

これでは「自分の為ならだれがどうなってもいい、我儘なジジイ」じゃねえか……

永遠の魔力なんてモンにしがみついて、何が大事なのか何も見えなくなっちゃまってやがる。

そう思えば、ふつふつと怒りが湧いてくる。激しい感情は魔力へと変換されて、全身に力が入るが――

――流石に限界が近いな……

朝からずっと闘いっぱなしだ。

スタミナには自信があるといっても限度というものがある。ただの意地だけで立っているような現状では、それこそ、このジジイへの怒りを忘れた瞬間にぶつ倒れてもおかしくないだろう。

そんな風に少し気が逸れたからだろうか。

脚の力が抜け、数歩ふらついてしまう。

その瞬間――

『食らえ、竜騎拡散砲!!』

ドロマ・アニムの全身から、これでもかと言わんばかりの大量の魔力弾が広範囲に発射される。ここら辺一帯ごと俺に大ダメージを与えるつもりなのだろう。

魔力が足りないなどとほざきながら、こんな大盤振る舞いをしてくるんだから、呆れる他ない。王都以外の地域では魔法なんて殆ど使えないというのに……

さて、この攻撃をどう凌ぐか。

空中に飛び上がったても、飛行能力がないなら、タツパのある相手に後隙を晒すだけだ。

無難なのは自分の周囲に濃く斬魔の魔力を張ってバリアにすることだが――

しかし、その案は却下だ。

ドロマ・アニメの攻撃の迫るほんの短い時間の中で、その事に気づけたのは僥倖と言わざるを得ないだろう。

瓦礫に埋もれて逃げ遅れた子どもが1人――

「エルザア!!」

「私に命令するな!!」

即座にそう叫ぶ。

相手も意図を汲んでくれたようで、鎗さえ捨て置いてすぐに少年の方へ駆け出してくれた。

王だけでなく、兵士の方まで腐ってしまったら、どうなっていた事やら……

兎に角、これで自分だけ耐え忍ぶという道は無くなった。

なら、全部斬り落とすしかないだろ――

全身からありったけの魔力を放出する。

この後動けなくなるなんて知った事か、どうせ王を叩きのめしたら後はどうにかなるんだ、やってしまえ!

「滅竜奥義――」

ダンツと、ひびが入る程の強さで地を踏みしめた。

そこを起点にして、斬魔の魔力を爆発させる――!

「ざんぱはほうりゆうじん斬覇咆竜陣!!!」

銀色の魔力の奔流が広場中を駆け巡り、その中であつたあらゆるモ

ノに斬痕を与えていく。

元々亀裂だらけだった地面は更にボロボロになり、俺を討たんと迫っていた魔力弾は全てが斬り落とされた。それどころか、後ろのドロマ・アニメにまで全身に割れ目を生じさせていた。

あのダメージではもう動けないだろうと考えると、力が抜けてしまい、そのまま倒れ伏してしまう俺の体。

無理やり後ろの方を見てみればエルザと少年の無事な姿が確認できてホッとすする。

これ以後はミストガンに任せて——
そう思った時の事だ。

ドロマ・アニメの装甲が黒く染まっていたのは。

『まだだ……まだ終わらん!!ワシの覇道はまだ終わらんのだ!!』

ギギギと関節を軋ませて、最後の一撃を俺に叩き込まんと黒い爪を振り上げるドロマ・アニメ。

——万事休す、か。

目を閉じると、これまでの人生がフラッシュバックする。

皆、すまん。こんな誰も知らない場所で勝手に逝っちゃうなんてさ

……

ほら、聞き覚えのある声が俺を呼んでる。

「……ウヤ」

きつとりサーナが迎えに来てくれたんだろう。

浮遊感が体を包む。

ああ、きつと今俺は死んだんだ。

思いの外痛みは感じないんだな……

「トウヤー・トウヤってば!!」

お迎えの天使^{リサーナ}さま、今結構感傷に浸ってるので、そんな大声で呼ばないでくださいってば……

嫌にはつきりと聞こえる天の声に苦情を言ってやろうと目を開くと、そこは天国でもなんでもなくて、エドラスの上空だった。

そして、俺を飛ばしているのは腕を翼に変化させ、短い白髪を揺らす女の子。

太陽のような笑顔が眩しい――

「リサー……ナ？」

「うん、私だよ！でも、事情の説明は後!!今はアレにトドメを刺す事を考えて。私じゃアレに傷をつけるのは無理みたいだから」

俺は夢を見ているのだろうか。

でも、こんな夢なら、覚めなくても良い。

ずっと見ていたい……

リサーナとまたこうして話ができている。

そう思うと、枯れてしまったはずの力が沸き上がってきた。

俺達は最早死に体のドロマ・アニムに向けて滑降を始める。

やってやる！

やってやるさ、リサーナの頼みならなんだって！

機械の竜まであと少しと迫った所でリサーナが、俺を掴んでいた足を勢いよく離れた。俺の体は弾丸のように飛んでいく。

右手にあらん限りの力を込めて、激突と同時に――振りぬく！

「モード天斬竜――天斬竜の槍拳!!」

ドロマ・アニムの顔面に俺の拳が突き刺さり、そこを中心として亀裂が走る。

そのヒビはドンドンと広がって行って、終いには機械の竜は粉々に砕かれてしまった。

中に居た王様は、ドロマ・アニムが壊れた衝撃で気絶してしまっらしい。

そんな事より、と急いで振り返ってリサーナを探す。

しかし、どこにもその姿は見当たらない。

代わりに、なぜか見覚えのある連中が俺を取り囲んでいたのに気づかされた。

「リサーナとはどんな関係だとか、聞きたいことはあるが、ひとまずそれは置いておいてだな！おまえ、エドラスから魔法を奪おうとしているらしいじゃねーか！そんな事、妖精の尻尾の名に懸けてぜってー許さ

ねー!!」

そう啖呵を切ったのは、俺の知っているより大分と男前な雰囲気
ルーシイだった。

そーだそーだと口々に言い合い、魔法の武器を構えてコチラを睨ん
でいるのは、ドロイ、ジエツト、レビイ、ジュビアにグレイ、カナや
大きいウエンデイ……

俺の前に最後に立ちほだかったのが、コチラの世界の『妖精の尻尾』
とは、中々面白いじゃないか。

「はは……いいぜ、かかってこい!!」

俺はなけなしの魔力を振り絞って構えを取り、そう言い放ってやつ
た。

▼三人称視点

トウヤが『妖精の尻尾』の面々と喧嘩を始めて少し経った頃。

ドロマ・アニムから逃れようと避難していた王都の民達が集まった
別の広場の上空に、エクスタリアのエクシード達全員が飛び交ってい
た。

その光景を見ていた人間達は、エクシードと戦争をしようなどとし
た自分達に天罰を下してきたのだと、怯え、震え、涙を流し、ただ手
を合わせ祈っている。

そこに、立派な装束を纏った威厳ある白いネコが現れ、その凜とし
た声を響かせた。

「人間達よ、聞きなさい」

ただその一言だけで、人々はあらゆる活動を止め、エクシードの女
王を見つめ始める。

水を打ったような静寂に包まれる広場に、女王の言葉が染み渡る。

「あなた達は大きいなる罪を犯しました」

そんな言葉から始まった女王の演説に、人々は深い後悔を抱いた。
やはり、人の身で神に逆らうなど、あつてはならない事だったのだ。
永遠の魔力など、自分達には過ぎた理想だったのだ。

だからこそ、この先の言葉を予想していた者は誰もいなかった。

「その罪とは、私達に逆らった事——ではありません」

これを見なさい、と魔法で空中に映像を投影し始める女王。

実を言うと、この魔法はミストガンの持つていたアースランド製の
映写機なのだが、女王の力を信じ切っている人々は、女王の奇跡と捉
えて疑わない。

その映像の内容はと言えば、ファウストがドロマ・アニメによって
街を破壊していく様子や、逃げ遅れた子ども諸共トウヤを撃滅せんと
した姿だった。

「あなた達は、『永遠の魔力』などと言う幻想に拘泥し、本当に大切な
ものが何かを忘れてしまった……それが罪なのです」

そこで映像が切り替わる。

次に映ったのは、トウヤと『妖精の尻尾』の面々が殴り合う場面だっ
た。

もはや魔力がひとかけらも残っていないトウヤと、既にトウヤに魔
法を破壊し尽くされ、丸腰になってそれでもなお闘い続けている『妖
精の尻尾』。

よく見れば、体から血を流しているエルザもその中に加わって、ト
ウヤを追いつめようとしていた。

トウヤがルーシィを殴ろうとして、ナツが体を張ってそれを止め
る。トウヤがグレイを蹴ろうとして、ジュビアが厚着の裾を引っ張っ
て避けさせる。

全員が満身創痍で、泥仕合も良い所だ。

しかし、広場を集った人々はその様子から目を離せないでいた。

「彼らを見なさい。

彼らの誰も、もはや魔法など使っていません。それでも闘ってい
る、闘えているのです。

彼らの目を見なさい。

彼らは魔法を奪わせまいと闘っている。

しかし、もう気づいているのです。

なぜ魔法を大事だと思っているのか。

それは、彼らの絆の形が魔法だからです。

大事なのは魔法そのものではなく、仲間との絆だと、気づいているのです。

だから、たつた1人に負けそうになっても、笑っているのです。今回の鬪いで、家族を喪った者はいますか？

友を喪った者はいますか？

いるはありますがありません。

私がそのようにしたのですから。

今、良かったと思った者——その心を忘れてはいけません。

その心を忘れる事こそが罪なのです。

魔法は確かに、あなたの生活を豊かにします。

しかし、あなたの心までは豊かにしてくれません。

では何があなたの心を満たすのか。

自分の胸に問いかけなさい。

そして、今浮かんだものを大事にするために必要なのは何か考えなさい。

それは本当に魔法でしょうか？」

言われた通り、胸に手を押し当てて考える人々。

ある男の心に浮かんだのは、娘の笑顔だった。

魔法で出来た観覧車に乗って楽しそうにはしゃぐ我が子。

しかし、絵本を読んでやった時にも、同じように笑っていた事を思い出す。

「あなた達に与える罰は魔力の没収。

そして、それは私が人間に与える最後の罰です。

私たちの存在は人間を惑わせるだけなのだ、今回の件で考えるようになったのです。

だから、エクシードはエドラスの地を離れ、新天地へと赴きます。ですが、安心してください」

女王の周りに浮かぶ映像に再び変化が訪れる。

『妖精の尻尾』の面々の中に、蒼い髪の青年が駆け込んできたのだ。

その姿に見覚えのあった少数の民が叫んだ。

「王子だー!」と。

王子は灰色の髪の青年に殴りかかる。

互いにガードもせず、避けもせず、ひたすらに足を止めて殴り合う。

やがて、灰色の青年が「参った」と口の形を作って崩れ落ちた。

「ここにいるあなた達は今、本当に大事なものが何かを思い出しました。」

そして、そんなあなた達を正しい方向へと導く新たな王も、こうして現れたのです。

だからきつと、大丈夫……

人間の未来に幸多からん事を、ここより先の世界で祈っています」

そうして演説を締めた女王と、その後ろに控える全てのエクシード達の体が光り始めた。

殆どがトウヤに破壊されていたが、それでもなお残っていたほんの少しの魔力灯の光も消える。

魔力が無くなるろうとしているのだと、人間達は直観的に理解した。

しかし、そこに大きな混乱が生じる事はない。

ザザッと、今にも消えてしまいそうな投影映像の向こう側で、蒼髪の王子が右手を上げる。

そして、今まで繋がっていなかった音声が広場に響き渡った。

『魔力などなくても、我々人間は生きていける!』

闘っていける!

家族を、友を守っていけるんだ!!』

こうして、魔法の時代が終わりを告げた。

△・△ △ △ △

映像を映していた魔法が消える。

ふっと息を吐いてその場に座り込んだミストガンは、発光して浮かび上がるようにしているトウヤに話しかけた。

「本当にありがとう、トウヤ……」

「よせよ……大変なのはこれからだろ？」

そうだな、と笑うミストガン。

それに、とトウヤが続ける。

「いざとなったら、時空の壁でもなんでもぶった斬ってこつちまで来てやるよ……それより、ほら」

トウヤがクイツと顎を向けた先には、同じく光に包まれているウエンデイがいた。

「ジェラール!!」

満身創痍のトウヤと異なり、走り回る程度の元気が残っているウエンデイがミストガンの体に勢いよく抱き着いた。

「ウエンデイも、ありがとう……君は強くなったな」

「うん、うん……私、強くなったよ……シャルルやトウヤさん、ケットシエルター化猫の宿や妖精の尻尾の皆……それにジェラールのおかげで。だから……ジェラールと離れ離れになっても大丈夫!」

ウエンデイは大粒の涙を両目に湛えながらも、決してそれを流す事はなかった。

『化猫の宿』の皆と離れる時、トウヤに教わった通り、別れは笑顔で済ませたかったのだ。

「ああ、そうだな……今の君なら心配はいらない。互いの道が分かれば、私たちがきつと、道の先へと進んでいける。もし……不安になった時は、私の代わりにトウヤを頼るんだぞ」

うん、うんと無理やり作った笑顔で頷くウエンデイの頭を、ミストガンは自分の胸元へと押し付けた。その時に少し服が湿った感触を

覚えたが、それは気づかなかった事にして――

やがて、トウヤとウエンデイを包んでいた光が強くなり、天へと昇り始めた。

ミストガンは、ウエンデイの体を抱き寄せていた腕を優しく離して眩く。

「さようなら、2人とも」

ふわりふわりと浮かび上がりながら、大きく大きく手を振るウエンデイ。

「ジェラール!!元気でねー!!」

それとは対照的に、静かに右手を突き出したトウヤは「またな」

とだけ眩いて、空の彼方に消えるのだった。

▼トウヤ視点

後日談。

まずは俺自身の話から。

約1週間、誰にも何にも言わずに失踪していた俺達を待ち受けていたのは、ギルドの面々からの熱いお説教であった。

こういう時の為にと用意しておいたお土産類は、軒並み宿屋に置きっぱなしにしてしまっていた。あの苦労は何だったのかという悲しみと、機嫌を取るための方法を失った無力感に胸が張り裂けそうだ。

それだけ心配してくれていたのだと思うと嬉しくもあるが、これから少しの間、存分にこき使われる事になると思うと、面倒くさささうんざりしてしまう。

ちなみに、説教こそされなかった――そもそもキャラではないが――ものの一番憔悴していたのはナツだった。冷静に考えてみると、ハッピーが生まれてから、一週間も2人が離れ離れになった事などなかったような気がする。久しぶりに現れたハッピーを見ての第一声が『どうどう幻覚が見えるようになったのか……?』だったのは相当

だろう。

次に、エクシード達の話だ。

ミストガンに聞いていた通り、彼ら彼女らも逆アニマに飲みこまれアースランドにやってきている。

そして俺は現在、そんなエクシード達の居住場所や、食い扶持について頭を悩ませていた。

なぜそんな事を俺がやっているのかと言えば、俺が——実際に話したのはシャルルだが——エクシード達に持ち掛けた交渉の結果である。

王都にてシャゴツトに一芝居打ってもらい、人間達の感情をうまい事いい方向にもっていったら代わりに、俺はエクシード達のアースランドでの住居と生活を保証する、というものだ。

まあ、エドラスから勝手に退去させておいて持ち掛けるんだから、交渉としては最低な類いなのだが、そこはシャルルとハッピーの説得が効いたのだろう。

ネコ達の住処については、ウエンデイやマスター、地方ギルド連盟などと相談する必要があるが、今のところ『化猫の宿』の集落——というか、ニルビット族の廃墟を新たに立て直し、本当に化け猫たちの宿にしようか、と考えている。

エクシード達に会う為、ウエンデイがあそこに赴く事で、色々な事を思い出してもらえるとという意味でも、悪くない提案なのではないかと思っっている。

そして、エクシードの食い扶持についてだが、こちらはルーシイの親父さんを頼る事にした。今は、何度かの話合いの末、ルーシイパパの監督の元、エクシード達による宅配業者を設立しようという方向に進んでいる。翼という最高の移動手段を持ち、愛くるしい姿で、しかも頭が良い。その上、元が国だった事もあって、命令系統もしっかりしているときた。

フィオーレ全土にエクシードが飛び交う日も近いのではないかと思う。

それらの事とは関係ないが、アルマに何となく「お前の親はいない

のか？」と尋ねた所、さらりと「いましたよ？」と言われてしまった。しかし、同時に「少し話しただけです。私の家族はトウヤが居れば十分ですから」と嬉しいような、くすぐったいような事も言われたのだった。

それで、その時、大昔に交わした言葉を思い出した。

「俺はアルマの父親であり、息子であり、兄であり、弟であり、夫でもある」

「私はトウヤの娘であり、母親であり、妹であり、姉であり、妻でもあります」

2人ぼつちで旅をしていた時に決めた事だったし、今ではギルドの皆というかけがえのない家族ができたが、それでもこの関係は今も変わっていないと思う。

血のつながった親に出会った上で、それでも俺の事を家族だと言ってくれるなら、俺は改めて、アルマにとって父のような、息子のような、兄のような、弟のような、夫のような存在であり続ける事を約束しよう。

照れ臭いから、言葉にはしないがな。

お次はギルドのメンバーの事だ。

今回の件で、『妖精の尻尾』メンバーの数は1人減って、2人増えた。減ったのは勿論ミストガンだ。

マスターと師匠には事の顛末を一部始終告げたが、少し残念がったものの、すぐに気を取り直して、向こうで元気ならそれでいいと言ってくれた。

アイツのやっていた仕事などは俺が引き継ぐことにしたので、少し忙しくなりそうだ。

増えた1人目——というより1匹目はエドラス軍の師団長であった。パンサーリリーだ。

彼はガジルと激闘の末に打ち解け、またミストガンとも何やら関係があったらしく、「王子が居たというギルドには興味がある……ガジルも居るのなら尚更な」などと言って、すんなりと『妖精の尻尾』に加入してしまった。

これからはガジルの相棒として活動するようだ。

彼は向こうでは責任ある立場を任されていた事もあって、かなり大人——こちらの世界の空気が合わなかったらしく、体はハッピー達と同じサイズに縮んでいたが——だし、静かなタイプなので、俺ともうまくやっていけそうだ。

向こうとしても、俺やエルザは同僚として働いていた人物と見た目が同じで落ち着くらしい。何ならおしゃべりな向こうの俺より、コチラの俺の方が仲良くできそうだとまで言ってくれた。

そしてもう1人、それは——

「トウヤ、また考え事？ 難しそうな顔してたよ」

両指で自分の眉間をグーっと抑え、皺を作ってみせる少女。

ふふ、と笑ってミラに給仕を頼まれたのであろうオレンジジュースを俺の前に置いた。

「リサーナ」

そう。

リサーナが、こちらの世界に帰ってきたのだ。

俺達がエドラスにやってきて、向こうの『妖精の尻尾』に見つかったあの時、俺を見つけたリサーナは、他のメンバー数人と王都まで俺達を追っていたらしい。

そこであんな騒ぎが始まって、俺を懲らしめようと動いていた他の『妖精の尻尾』のメンバーの動きとは正反対に、俺の事を助けようとしてくれていたらしい。

その途中でミストガンと出会い、エクスポールを飲まされ、あの危機一髪の場合に駆けつけてくれたのだとか。

ちなみに『私は全然ミストガンの事分からなかったのに、ミストガンは私の事、アースランドの私だってすぐ分かっちゃったんだもん、びっくりしたよ』とのこと。

どうやら、こちらへ戻ってくる直前、向こうのエルフマンやミラとはしっかりと話せたようで、向こうの世界に思い残すことはないばかりに、こちらでの生活を謳歌している。

本当に嬉しそうに、楽しそうに話しているストラウス3きょうだい

を見てみると、俺も心がじんわり温かくなる思いがした。

ふと窓の外を見る。

俺達のいない1週間はずっと雨が降っていたらしいが、今見える空にはすっかり太陽が戻ってきている。

強い日差しがギルド酒場に差し込んで、誰も座っていない椅子を照らしていた。

天狼島編

35話「S級魔導士昇格試験……会議」

▼トウヤ視点

エドラスから帰還して1週間程が経過し、12月に入った。

とはいえ、雪が降ったり、凍えたりする程の寒さかと聞かれればそういう訳でもない。冬が本格化するのももう少し経ってからで、12月のマグノリアはせいぜい肌寒い程度だ。

しかし、それでも季節の移り目という事で人々の服装は変化している。何かと露出狂めいた肌色率を誇る『妖精の尻尾』フェアリーテイルのメンバーの服装も、例に漏れず殆どが厚着となっている。厚手の長袖を着たり、ジャケットを羽織ったりしている者が多いだろうか。

タートルネックの黒いセーターを着ているルーシーは普段程の谷間の露出が無くとも、ボディラインがはつきりと出ていて魅力的だし、カナなんかも上に一枚羽織っているだけだが、それでも肌面積が減ってより色気を感じさせる（ちなみに、一時期、俺の言葉で肌の露出が減った事もあったが、本当に一時期だけだった）。

『これは秋用だ』とか言って、素人には分からない程度の違いしかない、ほぼいつも通りの鎧を纏ったエルザ。

厚着はしているものの、結局すぐに脱いでしまっただけで全く意味がないグレイ。

言われなければ気づかない程度のマイナーチェンジが施されただけで、腹も胸元も晒しっ放しのナツ。

この辺からは全力で目を逸らしておこう。

「これが今回の試験の原案だ。お前はエドラスに行っていて相談できなかったからな……私とミラでとりあえずと組んだものだが……と、そういうばトウヤはこの会議に出るのは初めてだったな」

やはり何度見ても秋物と夏物の違いが分からない鎧に身を包んだエルザが、俺にびっしりと文字の敷き詰められた紙束を手渡してくる。

『妖精の尻尾』ギルドの奥の方にある一室。

今、この部屋には俺の他にマスターじいちゃん、師匠ギルダーツ、エルザ、ミラしかない。

この5人——つまりは『妖精の尻尾』の現S級魔導士+マスターで円卓を囲んで話し合っている内容はと言えば——

「そういえばそうね！トウヤが合格したのは去年だったし」

「……ま、オレも参加自体は久々だがな」

「大方の方針は既にワシとエルザで決めておる。この会議で話し合うのは実際のS級魔導士昇格試験の際の細かい部分を詰めるだけじゃから、そう肩肘を張る必要はないぞ」

あと2週間に迫った『S級魔導士昇格試験』についてだ。

内容はといえば——なんて詳しく説明する必要もない程に文字通り。

『妖精の尻尾』におけるS級クエストをこなせるか——S級魔導士の資格を背負うに足る魔導士かどうかを測る試験。

そもそも参加資格が与えられるかどうかは現役のS級魔導士とマスターが決め、参加したところで必ず誰かがS級になれるという訳でもない紛う事無き難関だ。

X778年にラクサス、1年飛んで80年にエルザ、81年にミラ、82年にミストガン、そして去年83年に俺が合格している。

近年でこそほぼ毎年合格者を出しているが、ラクサスの前は？となると今ギルドに残っているのはギルダーツしかない。この2人の間に合格者が居たかどうかは聞いた事がないが、今いないという事は死んでしまったか脱退したか……なんにせよ、俺達の世代程合格者が出ていたとは考えられないだろう。

「参加者候補1人目から整理していきましようか」

そう言つて進行役のミラが資料のページをめくる。

マスターがギルドの面々から選出した参加者候補の1年間の活動を振り返る事で、その者が試験に足るかどうかを俺達に判断させるといふ方針らしい……

のだが、意外と学が無い——いや、このギルドでは学がある奴の方

が圧倒的に少数派だが——エルザが用意した文章の読みにくい事と言ったら半端ではない。

仕方がないが、ルーシイと一緒に買いに行った『風詠みの眼鏡』という魔法アイテムを取り出す。

これは掛けている者の読むスピードを引き上げる魔法具だ。倍率次第では速読というよりも、もはや直接に脳に流し込んでいるという感覚になり、本を読む風情というものを完全に破壊してしまう代物だが、こういった資料を読み込むには便利なアイテムだと思う。

倍率や見た目のバリエーションが思っていたより多く、自分だけではどれを買えば良いか迷いそうだと思つた俺は、このギルドでは数少ない読書仲間であるルーシイとレヴィイに相談した。結果、優しいルーシイが——こう言うのとレヴィイが優しくないみたいになるが、彼女は仕事の予定があつたらしいのでノーカンである——売り場に着いて来てくれて、その結果、中々良いものが買えたのではないか、と思つている。

読んでいる感覚をギリギリ損ねない絶妙な速度倍率も使い心地が良く、目立ちすぎないシルバーの細身な金属フレームで見た目も知的だ。

俺の読書は暇つぶしの側面が大きい為に、それほど使う頻度が高い訳ではないが、かなり気に入っている。

まったくルーシイさままだな、と思いつながらスツと眼鏡をかける——と、なぜかエルザとミラの動きが止まった。

「おつ、トウヤ！眼鏡かけてる方が男前じゃねエか、おまえ！なんつか、目つきがマイルドになるし、普段より賢そうに見えるぞ。なあ、ミラもそう思わねえか？」

俺の眼鏡姿を褒めてくれる師匠が、硬直したままのミラに話を振る。

ミラも褒めてくれるだろうか、と少し調子に乗ってしまった俺の心は、真つ赤な顔をしたミラに粉々に砕かれてしまう事になる……

「そ、そうかしら……？ わ、私はそんな事無いと思うわ。眼鏡をかけるのは私達の前だけにした方がいいんじゃないかしら？ ねえ、エル

ザ？」

えっ、そうかな……

自分では割と似合ってるんだけどな……

「そ、そそそうだな。あまり見せびらかすようなものではないだろう。私と、まあ百歩譲ってミラの前くらいにしておけ、うん」

同じくなぜか顔が真っ赤のエルザにもそう否定される。

結構自信があつたので、ちよつとしよんぼりしてしまうな……

いいもん、ルーシイは似合うって言ってくれたし。

あつ、でもそういえば――

「買いに行った時、ルーシイも似たような事言ってたな……」

『私は好きだけど、好みが分かれるかもしれないから、私以外の女の子の前ではかけない方がいいかもねっ、私は好きだけどっ!!』みたいな。

ルーシイの言う通り、ミラやエルザの好みには合わなかったらしい。

「なに!?ルーシイと!？」

「2人つきりで!？」

と、当の2人は身を乗り出して問い詰めてくる……

なんで怒ってるの……怖い……助けてアルマ……

「羨ましい」とか「けしからん」とか、ミラもエルザ呟いているのだが、これは俺への陰口なのだろうか？

こういう時だけ自分の聴覚の鋭さが憎らしい。

それにしても、俺がルーシイと出かけたという事実に対して「羨ましい」って、2人もルーシイと一緒に遊びたかったのだろうか？

お詫びと言っては何だが、俺が場を整えた方がいいかなあ……

「……次は2人も（ルーシイと）一緒に遊ぶか?」

「も、もちろんだ!私も（トウヤと）一緒に行くぞ」

「ええ、今度は私を（トウヤとのデートへ）連れて行ってもらいたいわ!」

▽・▽▽

ここまでのやり取りで色々察したギルダーツと、分かってはいた

が見て見ぬ振りをしてきた胃の痛い現状に頭を抱えるマカロフは目を合わせて溜息を吐いた。

2人の目は、後日トウヤのセッティングで集合させられてしまう3人の乙女を幻視して、憐憫に塗れていたに違いない。

△・△ △ △ △

物凄く脱線してしまった会議は、マスターの咳払いによって元の路線に戻り、予定通りに進められていった。

流れとしては、まず候補者がこの1年で熟してきたクエストの具体的な内容がミラによって解説され、その後エルザが実力、その伸びについての所見を述べていくという形だ。

これらが終わった時点で試験参加に足るかの投票を行う。ここにいる5人の過半数（3人）が参加を認め、かつその中にマスターが含まれていれば無事参加決定というモノだ。

その後、一次試験で見るべき問題を全員ですり合わせていく。

今回の一次試験は——参加者の人数次第だが——現役S級魔導士と参加者が直接ぶつかる形式を含むそうだ。その際に、単に「俺達に勝ってみせろ」ではあまり意味がない。よって、実力的に俺達に及ばなかったとしても、最低限押さえておくべき点をクリアしたら合格とする、という取り決めとなった。

——だって「オレに勝ってみせろ」形式で試験を行っていたら、ラクスやミストガンも含め、最近の合格者全員がギルダーツに封殺されてS級になれずにいただろうし……

普段の試験はもう少し間接的な課題なのだが、今年は成長著しい魔導士が多い事から参加者も多くなると予想され、逆に試験官のS級魔導士も多いという事で、このような形式にしようという話が出たそうだ。

俺は去年の合格者だから、当然去年までの試験官にはなれないし、ミラもリサーナの死の影響から少し前まで現役を退いていた。ミストガンが参加するとは思えないし、ギルダーツはそもそもギルドに居

なかった。ラクサスは何故か去年の試験には参加していた——多分俺への嫌がらせだ——が、それだつて気紛れとしか言えないだろう。結果的に今年度はこうして試験官4人体勢で開催することができたが、何か1つ違えば、雑務はミラに頼めるとしても、実務はエルザ1人でこなす羽目になっていたかもしれない。さて。

次の候補者が最後の1人だ。

ここまでに参加が決まったのは7人——ナツ、グレイ、ジュビア、エルフマン、カナ、フリード、レヴィである。

ナツ・ドラグニル。

火の滅竜魔導士にして、恐らく現『妖精の尻尾』における最大の問題児。

最大の持ち味はいざという時の爆発力だろう。感情の昂ぶり次第でどんな格上相手でも勝利を収める火力はやはり魅力的だ。いずれも単独撃破という訳ではないが、聖十大魔道のジェラールや、『六魔将軍』のマスター・ゼロを打倒した実績は認めざるを得ない。

逆に問題点もその火力の強さと、感情が爆発しやすい所と言えるかもしれない。ナツと言えば、何といつてもクエストに出た先での器物破損、建築物破壊回数ナンバーワンという問題が大きい（これに関してはギルダーツも言えたモンではないが）。

あらゆる意味で熱しやすい性質にどう折り合いをつけ、成長しているかという点が一次試験の課題になってくるだろう。

グレイ・フルバスター。

氷の造形魔導士たる彼の長所は対応力の高さにあるだろう。

物質系の造形を得意とする分、同門のリオンに比べると攻撃力にやや劣る印象は抱くが、応用力に関してには光るものがある。それでいて突破力があるのだから、試験を受けさせるには十分だ。

彼のネットクはデリオラという善くも悪くも彼の方向性を決めてしまった存在に対する思い入れの強さだろうか。それらは簡単に測る事はできないし、今回は然程気にする必要はないかもしれない。

強いていうなら、氷というモノの性質による相性を打破する力は見

ておいた方がいいだろう。個人的にグレイには何か、ブレイクスルーのようなものがいずれ訪れるのではないかと思っている。

ジユビア・ロクサー。

彼女は実力、経験ともに申し分ないと言えよう。

自分の体を水に変化させられるという強力無比な魔法を持ち、グレイに關係しての問題なら普段の何十倍もの力を引き出す事が出来る。『幽鬼の支配者』ファンタムロード時代には向こうのS級魔導士にあたる地位にいた訳だし、俺なんかは「もう試験免除でもよくない？」と思ったり思わなかつたり。

とにかく、今回の試験で本命視されている魔導士の1人だ。

強いて欠点を上げるなら、彼女もナツと同じく長所を裏返した部分だろう。

魔法自体が強力なのに頼りきりでは相性の悪い相手に完封されかねない。現に『幽鬼』戦では水に対しての氷という相性差で敗れてしまっているし、楽園の塔の際にも水を吸い込んでしまう髪の毛の魔法を使う男に危うい所までもつていかれたとか。

グレイへの思いが力に変わるというのも、裏返せばグレイが絡めば冷静でいられないという事だ。そんな事にはならないだろうが、万一グレイが人質に取られたといった状況に追い込まれた時、どんな行動を取るのか、そういった点が彼女の評価を左右するだろう。

まあ、『妖精の尻尾』の魔導士が感情に左右されやすいというのは俺含めて今に始まった事ではないし、そこまで気にするようなことではないだろうが（何しろ、ナツに比べて被害が少ないので）。

エルフマン・ストラウス。

彼はこの1年で全身テイクオーバー接収キョウが使えるようになったという部分が大きく評価され、S級試験参加者に選ばれた。

リサーナが居なくなつてからの精神的な成長——痛ましいものもあつたが、漢気に拘る姿勢は素直に評価できる美德を含んでいる——もある上、当のリサーナも戻ってきた今、安定感と勢いを最も持っている参加者であると言えるだろう。

とはいえ、単純な能力で言うとし物足りない感じもする。本人の

性格的に真正面からのぶつかり合いを得意とする都合上、——もちろんアイツの最大の長所である根性を軽視するつもりはないが——重要になってくるのは吸収してきた魔物自体の強さという事になる。現状のラインナップではそれが些か弱いように感じる。少なくともミラのサタンソウル程の破壊力はないだろう。

勢いに乗って姉と同じ域へと達するか、地力不足を痛感する結果となるか注目である。

カナ・アルベローナ。

今回既に決まった参加者の中で、唯一この試験を複数回経験している古株だ。〃とある事情〃も含めて、もつともS級魔導士への思い入れが強いのが彼女である事は明白だろう。

俺自身も今年こそ彼女に合格して欲しいという思いがある。この1年、俺の戦闘訓練に必死に食らいついてきた姿を見てきた。その甲斐もあつてか、対応力、魔力量、そのどちらも伸びてきている。元々——こんな言い方をすれば怒るだろうが——血筋的にその潜在能力はかなり高い。その片鱗が見えてきている事を思えば、今回の試験合格も決して遠くない。

そんな彼女の長所といえば、グレイやジュビアとは逆に相性に左右されない多種多様な攻め手を持つ事だろう。しかし、だからこそ何かに特化した爆発力が無く、決め手に欠けるとというのが俺以外の3人の見立てである。

だが俺だけは知っている。

カナの魔力がこの1年で本当に多くなったという事を。確かに切り札のようなモノは持っていないが、それでも十分に他の面子とやり合えるだろう。

だから、今年こそ……今年こそ合格してくれよ、カナ！

——試験であたつたら全力で闘うけどなっ！

……というくらいの心持ちでいかないと、無条件で通してしまいうなので、今の内に自分へ言い聞かせておこう。

フリード・ジャステーン。

術式魔法を操る、雷神衆のリーダーにして、ジュビアと並ぶ今回の

試験の大本命だ。

事前の仕込みを何よりも大事とする術式使いでありながら、自身に“文字”を刻むことで、ある程度の高速戦闘にも対応可能という隙のない実力者。魔法の性質上、当日まで会場の明かされないS級試験との相性は然程良くないという点がネックとなるだろうが、それでもやはり、S級に最も近いのはこの男であると感じられる。

しかも、今年の試験参加者選考に置いて注目されたのは、その高い能力以上に精神性の変化であった。バトル・オブ・フェアリーテイルを経た彼は、ギルドの仲間達の為に、そしていつか帰ってくるラクサスの為にと、いくつものクエストをこなし、自身を鍛える一皮も二皮も剥けた男となった。

「ラクサスの後を継ぐ」と気合も十分である。

レヴィ・マクガーデン。

彼女は立ソリッド・スクリプト体文字という、文字の意味が持つ性質を具現化、立体化させる魔法を使う。例えば「FIRE」と文字を書けば、立体化されたその文字が炎によって構成されて現れる、といった具合だ。この魔法で具現化できるモノに恐らく——よっぽど複雑、あるいは強力なモノでない限りは——制限はなく、「FIRE」以外にも「IRON」「AIR」「SWORD」「THUNDER」などと様々な属性を操る事ができ、なんなら一人で『妖精の尻尾』所属の滅竜魔導士担当食糧庫ドラゴンスレイヤーをこなせるだろう。

カナと同じくオールラウンダーだが、魔力が多い訳ではないため、カナより更に決め手に欠けると言える。しかしその分明晰な頭脳を持っており、二次試験の内容が知力を試されるものだった場合、最も有利なのは彼女かもしれない。

ここまで語ったのが、無事参加者として認められた7人の現時点における評価だ。

去年の試験は俺とカナの2人しか参加していなかったのを思えば、かなりの大人数である。

本当に今年は現役S級が多くて助かった……欲を言えばラクサスにも手伝えたいところだが。

しかし、本当に問題なのは参加者の人数の多さでも、試験官の数でもなかった。

それはミラが資料の最後のページをめくり、読み上げた名前。

「最後の候補者はメストよ……去年も惜しい所まで行つたし、今年の活躍もそれなりだから、問題ないんじゃないかしら？」

「そうだな……こなしたクエスト自体にそれほど大きなものはないが、安定してこれだけの仕事がこなせるというのは評価に値するだろう。少し前に行つた模擬戦でも、かなり追いつめられてしまったものだ」

「そうじゃなあ……おまえたちもそれでよいかの、ギルダーツ、トウヤ」

「いいんじゃないの？昨日ギルドで見た時は大分強くなつた感じだったしなあ……確か、ミストガンが鍛えてやってたんだっけか？」

ええ……

なに言つてんだコイツら……

えつ、これもしかして俺がおかしい……？

いやいや、でもあいつアレだろ？

今も仕事の真つ最中のはずだし、去年の試験参加者は俺とカナだけだったし、少し前にエルザと模擬戦をしていたのはリリーだし、昨日ギルドにアイツの匂いなんて無かつたし、ミストガンが弟子なんか取る訳がない。

そんな疑問がつい口から漏れるが……

「……スパイの仕事はいいのか？」

「「「はあ？」」」」

ミラ、エルザ、じいちゃん、ギルダーツに、異口同音に聞き返される事となつてしまった。

あつ、コレ、あの野郎やりやがつたな……………？

俺は席を一旦立って、ポリポリと頬を搔きながらじいちゃんの方へと歩み寄って行った。

未だにきよとんとした顔をしているじいちゃんの肩に手を置き、斬魔の魔力を流し込む。

すると、怪訝そうな顔が段々と憤怒に塗れた真っ赤な修羅の顔となっていく——

「あんのアホタレが—————!!!」